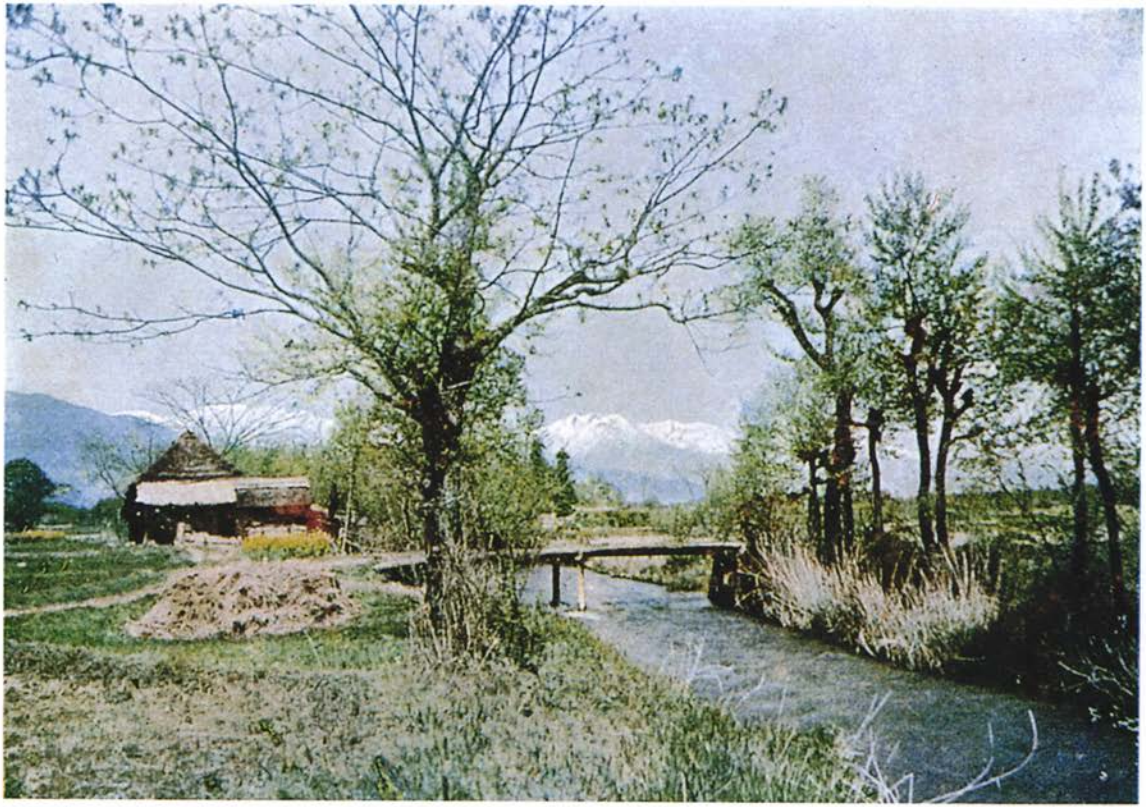


岳山

第七年
第一號



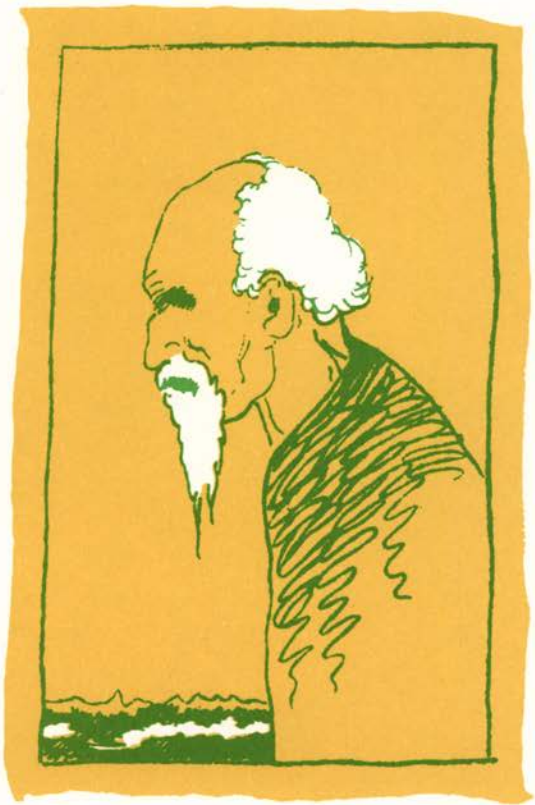
高野鷹蔵氏撮影

春の山（池田附近より祖父岳及鹿島槍ヶ岳を望む）
（オートクローム写真より複寫）

第七年

山岳

第一号



目次

（禁轉載、著作權所有）

表紙……中村清太郎氏筆
巻頭畵……春の山（池田附近より祖父岳鹿島槍ヶ岳を望む――オートクローム印畵より製版）……高野鷹藏氏撮影
タイトルページ……茨木猪之吉氏筆

挿畵

朝與岳より見たる駒ヶ岳……辻本滿丸氏撮影
烏帽子岳（以上コロタイプ）……辻村伊助氏撮影
袋澤頭より朝與岳を望む……辻本滿丸氏撮影
鳳凰山塊（仙丈岳より望む）……同上
北澤の小屋……濱名泰次郎氏撮影
北岳の頂巓と甲州駒ヶ岳……同上

北岳より望みし間の岳農鳥山及び赤石山　濱名泰次郎氏撮影

（以上寫眞銅版）

本欄

甲斐駒ヶ岳山脈縦斷記　工學士　辻本滿丸……一頁
地藏岳及鳳凰山　鵜殿正雄……一八
百十年前の富士登山記　笠間享……三三
僧ヶ岳登攀記　吉澤庄作……五三
祖母谷道　冠松次郎……六三
森林濫伐と山川の荒廢　南方熊楠……七一
燧ヶ岳に登る記　關口泰……八七

雜錄

白峰三山に就て（高頭式）〇「白峰三山に就て」の異議（烏水生）〇信州の甲駿境の一部（梅澤親光、山川默）〇甲斐駒山脈の鞍掛、烏帽子、鋸及其他二三の峰に就て（辻本）〇甲斐駒の新登路（辻本）〇仙丈岳のカールに就ての正誤（辻本）〇白峰及び仙丈岳登山談（濱名泰次郎）〇北アルプス瑣談（複谷徹藏）〇山の名稱に就て（吉澤庄作）〇四國山岳表（永田）〇四國の山名の一研究（笠井藍水）〇アルプス自動車の旅（鵜田九濱投）〇机上談山（蜘蛛生、蝸牛生）〇危險なる登山（蝶郎）

雜報

大島三原山の噴火○淺間山模型○火山觀測所○御嶽輕便鐵道○淺間御岳兩局の郵便○燒岳降灰と鹽嶺○戸隱北街道開通○諸高山の初雪○瑞西國ダボース高山療養所

會報

ウエストン氏日本アルプス講演會○第九回有志晩餐會記事○會員增田吾助君逝く○會員通信○新入會者

附錄

山岳第六年總目錄○會員名簿



辻本満丸氏撮影

朝興岳より見たる駒ケ岳

甲斐駒ヶ岳山脈縦断記

工學士　辻本滿丸

（一）駒ヶ岳絶巓より仙水峠まで

明治四十四年七月十八日甲州臺ヶ原を出發した自分等の一行は、尾白川の水源又はそれに近い峯々、即ち日向山、駒岩、鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳等に登山し、途中、前後大岩と烏帽子岳附近とに二泊を費して、二十日の午前十時を少し過る頃、目指す駒ヶ嶽の絶頂に到着した、此峯傳ひは、縦走とか、縦斷とか云ふ意味に於ては、高度が主峯に較べて、餘程劣るから、物足らない點もあるが、駒ヶ岳の一つの登路として考へる時は非常に趣があるやうに自分は思つた、此登山の詳細は本誌前號所載、星忠芳君の紀文に記されてある。

今日は前の二日にも勝つた快晴で、展望は開豁雄大を極めた、遠い加賀の白山の雪まで鮮かに見ることが出來た。自分等は此處で人夫の一人を臺ヶ原に放還し、殘る一行五人、頂上から山頸を南に下り、仙水峠から北澤（野呂川）へと下山にかゝつたのは十一時二十分であつた。

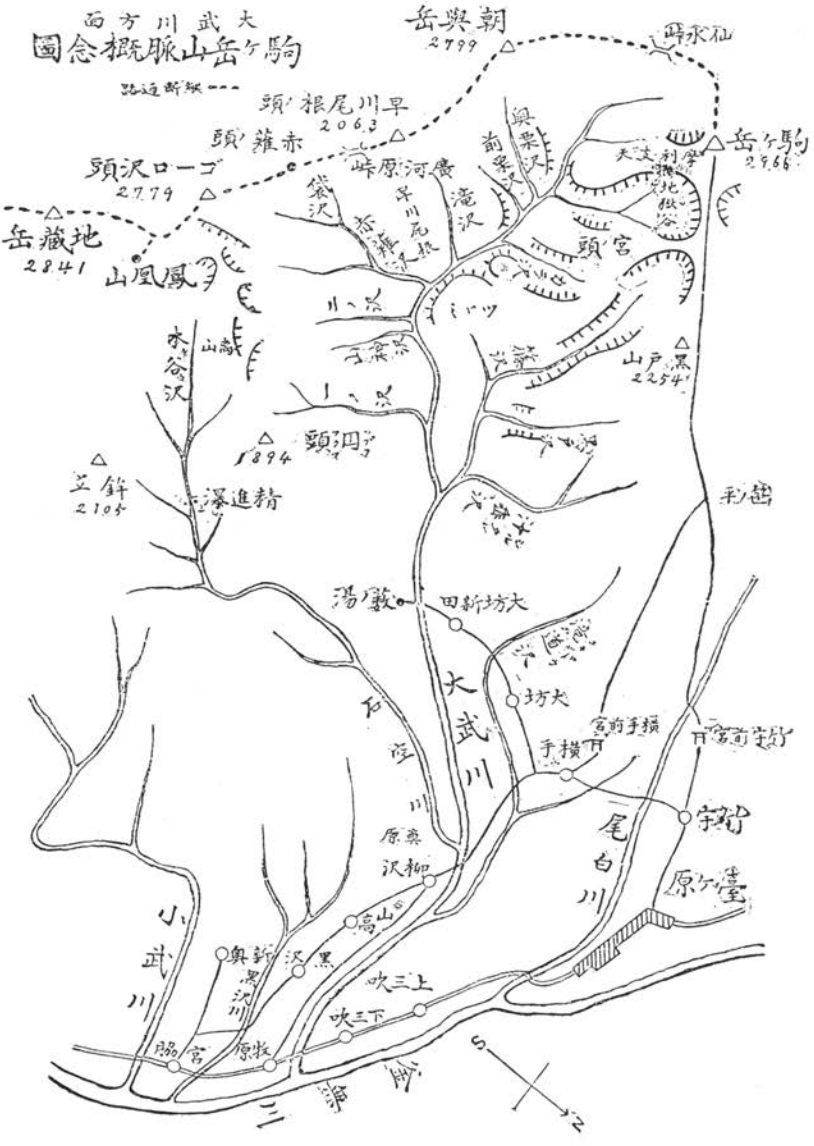
駒ヶ岳の絶巓から分れた嶮しい山頸は約そ三つある、東北に向ふものは大己貴命の峰（第二最高點）から、屏風岩、黒戸山、笹の平を經て、駒城、菅原、二村の方面に低下する、即ち尾白川と大武川とを分つ山脊がそれであつて、甲州から駒ヶ岳に登る表山の蹇路は、主に之を傳つて登つて行くのである。（此外、ハゲの岩小屋附近より分れて宮の頭を起す一大山脊がある、本誌雜錄欄參照）。西北に分れた山頸は今一行の登つて來たもので、其末は烏帽子岳の附近（星君の所謂不動山）から二つに分れて、一方は鋸岳に結び付き、一方は烏帽子岳、前後大岩を經て鞍掛山、駒岩等に連なる、此山脊の上部は

信州方面から白崩岳に登る山路を成してゐる。殘る第三の山頸は頂上から急に南の方に低下して此處に一つの鞍部を造り、それから少し高まつて一峰を起す、山脈は此峰から二つに分れる、西南の方、仙丈岳に連るものは更に低い一峰を越して、池の平（イケノタイラ）（甲信國界）に至つて俄然低下する、これから先は仙丈の領分であるが、池の平の處が餘り低いので、駒ヶ岳と仙丈岳とは峰續きであると云ふ感じが起らない、前の峰から一方東南に分れた山脈は仙水峠まで著しい下りとなり、それから再び急に高まつて朝與（アサヨ）岳を起し、ミヨシ澤頭、早川尾根の頭、ゴーロ澤頭（高嶺又は天狗山）を連ねて鳳凰山、地藏ヶ岳に連絡する。自分等は此最後の山頸を仙水峠の方へ、記錄を外に、辿り行かねばならないのである。

名にし負ふ白崩の絶巓、白妙の花崗岩が雪の樣に、崩れてゐる其中で、此名を間違なく表はしてゐるのは、我駒ヶ岳の南面である、山頸の傾斜も後の二つに較べては餘程嶮しい上に、普通の登山客の養路でないから、路と云ふ程の踏んだ跡は全く無い、都合の良い處を見計つて下つて行くと、砂の處は飛ぶにも樂であるが、大きい岩の積み重なつた處へ來ると、岩との間が、中々深いので跨ぐにしても、飛ぶにしても少なからず危險の感じがする、頂上から少し下つた處に可也困難な場處が一ヶ處あつた。星君は岳の神樣に御斷りをして、頂上にあつた地藏佛の石像をポケットに忍ばせたが、大分邪魔になつて來たのと、其泣面が今更緣起でもないと云ふので、此邊の岩の上に返納してしまつた。

下り切つて鞍部に達すると其處には大きな岩の鋭く尖つたのがある、此邊から花崗岩は俄然絶えてしまつて、鋸岳附近と同じであらうと思はれる、古生層の岩と變はる。上りとなつて偃松の中に附けられた、國界の切り明けを辿つて山脊を登つて行くと山脈の分岐點に當る峰の頭に出た。

天氣は引き續いて快晴である、駒ヶ岳の頂上は白裸々とも云ふべき山骨露出した形を以て、自分等を威嚇するやうに頭の上に聳えてゐる、恐ろしく崩壞して、偃松さへも少ない、此方面を見てゐると、



◎甲斐駒ヶ岳山脈縱斷記　辻本

一種淋しいやうな氣味がせられて、甲州方面の山容を見慣れた目には、どうしても「裏」であると云ふ心持がせられるのを禁じ得られない、駒ヶ岳の左に連つて鋸岳は其奇怪な峰を攅げ、烏帽子岳も頭を出してゐる、南の方には雄大な仙丈岳が擴がり其左には白峰の峻峰が聳え立つ、仙水峠を隔てた朝與岳は大きい斜面を此方に向けて、自分等との距離は餘程近くなつた。

此峰から山脈は、前に記した通り、二つに分れる、眞直に前方へ切り明けを頼つて行けば、池の平に下ることが出來る、自分等は左の方に分れた山脊に浴ふて、目の下に見える仙水峠を指して、ひた下りに下り始めた。

此方面には切り明けが無いから、適宜に下つて行くと、程無く偃松が始まる、豫て期したる處ではあるが、餘り好い心持はしない、人夫等は嵩高い荷を負ひながらも、どうやら巧に掻き分けて下りる、星君はと見ると、岩の間に足を踏み入れて痛めたとやらで皺面を作つて居られたが、やがて邪魔する偃松の枯枝目がけて、只一撃と打ち下した大事の富士金剛杖は中程からポキと折れてしまつた、駒の頂上で石像を荒した神罰は覿面一地藏の奴め、祟りよつて、今日は散々だ」と云ひながら、今は大童と云ふ見えで、當るを幸ひ、偃松の枝を引き摑んで、反筋斗打ちつゝ、荒れに荒れて下つて行く、自分は、とても、こんな離業は出來ぬから、丁寧に偃松の枝に宙乘して行くと、甲州邊の山では餘り役には立たぬ、蟲口が、枝に引き懸つて度々引き戻される、それでも下りであるだけに、甘く行くと案外樂に進めるが、一つ踏み外したら最後、中々容易ならぬ面倒さとなる。偃松の中の下りは兎に角、登りなどは、忘れてもやるべきものでないと、つくづく思つた。

偃松が盡ると、白檜などから成つた針葉樹林の斜面の中に入り込む、下枝が繁くないので歩行に、さしたる難澁はない、此木立の中を過ると、今度はゴロ〳〵した岩崩れの上に出る、紫がゝつた黝色の岩石で、此岩の斜面は脚下に見える仙水峠まで續ゐてゐる、峠を隔てた朝與岳にも、此處と向き合

つた山側に、丁度自分等が踏んでゐると同じやうな岩崩れが峠の方に雪崩れ落ちてゐるのが見える、亂石を踏占め下つて行くと、午後の日光に頭から、用捨もなく照りつけられて、咽喉は乾き附く樣になつてしまつた、僅か許りの距離と思つた仙水峠は、いくら下つても中々近づいて來ないで、此岩崩れの斜面の惡く遠いのには一行頗る弱り込んだのである。峠には小さい池があるが、連日の晴天に水がありそうと思はれないので、峠に近づいてから右に山側を繞つて北澤の方に下りることにした。

岩崩れを離れて仙水峠道の森林の中に入ると俄に凉しくなつて漸く蘇生の思があつた、それから峽間を南へ暫く下ると、北澤の水源が右手から、懷しい淙々の響を立てゝ冷い流を落して來るのに出會ふ（二時四十分）、此處で荷物を卸して中食を認め、飽迄水を飲んで今朝來の渴を癒した、駒ヶ岳の頂上から餘り長く休みもしないで三時餘を費した。

今日の仕事は先づ大體終つたのであるから、長時の休息をなしてから出發、左の方の山側にある路の痕跡らしいものを辿つて一里近くも下り、又た北澤の流に出ると材木を流した鐵砲がある（四時三十分）、振り返ると仙水續きの尾根を越えて眞白に輝く駒の絶頂が鮮かに望まれた。鐵砲から少し下つて對岸に止ると、小屋の遺跡のある處で、戸臺から來る路に出る、幅も廣く馬も通ふ、此路を三四町も下ると谷は稍や開けて其處に富士製紙の伐木の爲めに建てられた北澤會所の小屋がある、到着したのは四時五十分で、事務員樋川氏の好意に依つて此處に一泊することゝなつた。

（二一）仙水峠より朝與岳、早川尾根の頭を越えて廣河原峠まで

二十一日快晴、仙丈岳登山、池の平から國境について登り、大仙丈澤を下つて小仙丈澤のドウの處にある小屋（無人）に一泊、國境には切り明けがあつて極めて樂な登山であつた。二十二日晴、同上出發、

野呂川本流を下つてから、北澤を溯つて、朝の九時過ぎ、再び北澤の會所に戻つた。野呂川の谷には黑部川に見るやうな壯烈な景色はないが、只だ山深い落ついた感じがせられる。白峰に登るには野呂川の本谷から藪澤（ヤブサハ）と云ふのを登つて、北岳と小太郎岳との間に出るのが最も捷路であると聞いたが、元來自分の計劃は駒ヶ岳山脈を鳳凰、地藏まで縱走してから、廣河原に下つて、一擧に白峰三山を征して西山溫泉に出やうと云ふ、大分慾深いものであつたから、今日は見す〳〵白峰登山に最も便宜な地を棄てゝしまつた。

北澤の會所で、後の白峰登山の都合から米七升を二十五日迄に廣河原の小屋に届けて置いてもらふことを樋川氏に頼んで、午後一時三十五分再び仙水峠へと志して此處を出發した、今日は只だ峠の附近まで登つて野營して、明日早朝、朝與岳へかゝらうと云ふ豫定であるから、別に急ぎもせずに、ゆる〳〵と行く、昨日下つた時とは路を替えて河原の中を登つた、水源の近いのと、天氣續の爲め水は少ない、山側を行く路よりも遙に樂であつた。

三時頃、前日水を飲んだ溪流の處に着いた、之から上には水が無いので、水の遠くなる不便はあるが、何分此邊には平坦な處が索め得られないから、猶ほ二三町登つた林の中の、可也廣い平らな處に至つて野營することにした、樹木は栂、白檜等に白樺を交えた晝も薄暗い處で、腐植土は薄圍のやうに柔かで厚い、ゴセンタチバナ、クロクモサウ、カニカウモリ等の外には大した草もない、此處から少し行くと林は絶へて直ぐ仙水の岩原となり、峠の上まで三町に足らぬ程であらう。

仙水峠と云ふ名は少なからず自分の氣に入つた、峠は駒ヶ岳の南方の支峯と朝與岳との間にあつて、山脈は此處で著しく低くなつてゐる、一方から云ふと大武川と北澤（野呂川）の間の乘越で、北澤の方は左程でもないが、大武川の方は柳澤まで五里もあつて谷は中々惡いそうである、標高は二千米を少し下りはせぬかと思ふ、峠の上には其名の由つて起つたと思はれる直徑三間許の池がある、旱天に

は水が無いこともあるが、雨後には大分溜るやうである、自分等は之を仙水の池と呼んだ。

夕刻から立騒いだ雲は、夜に入つてから、烈しい雨となつて、焚火は全く消されてしまつた、駒ヶ岳方面から雷鳴が始まつて、青白い電火は木立の闇を透して閃く、天幕の油紙には不完全な處があつたと見えて、雨滴が度々顔の邊に落ちて來る、只だ地面が腐植土である爲め、水が小屋の内に流れて來るやうな虞はなかつた、十二時過、雨の小降りとなる迄は濕氣や寒さの爲めに、祿々眠ることが出來ずに過した。

二十三日朝早く、ウソ鳥の聲だとか云ふ笛の樣な奇聲が、何處からか聞えて、何時か梢の方は白くなつた、昨夜の神立で快晴は間違なからうと思ふた豫期全く外れて、岳を塞した霧は次第に集つて雨となつた、此天氣では朝與の縱走は、とても見込が無いので、止む得ず一日滯在と決定した、雨が止まないので近邊の散步さへ出來ない、朝餉を濟してから晝まで眠り、晝餐後は又た晩までゴロ〳〵横になつて半は眠つて過した、夕刻から大分天氣が回復しかゝつたのに、元氣づいて話もはづんだ、夜の空は全く霽れた。

二十四日、今朝もウソ鳥の寢ぼけた樣な聲を聞ゐて目が覺めた、勇ましい駒鳥の囀も聞えるが、天氣は又も豫期と違つて雲が多い、今日天氣が惡かつたら廣河原まで下つて、白峰は北岳だけに登り、南御室から地藏、鳳凰、朝與と初めの行程を逆にしやうと決めてゐたが、此天氣では何方とも定めることが出來ない、然し朝與を先にするのが勿論順路であるから、兎に角此方をやることにして、六時野營を撤して出發した。

林を離れて岩原の處に出て見ると仙丈や、白蜂の頂は灰色の雲の中に隱れ、朝與の裏からは頻に霧が昇つて來る。然し駒ヶ岳の方は晴れてゐる、十五分程で池の側まで來た、「國の方を見るづら」と云つて春吉等は峠の向ふ側を見下したが、大武川の谷には白雲が卷き起つてゐて何も見えそうにもな

◎甲斐駒ヶ岳山脈縦断記　辻本

い。池には今日大分水がある、縁にはテングルマが咲いてゐる、モウセンゴケでもないかと探したが見當らなかつた、池に近い岩の透間を、オコジョと云つて鼠にしては少し長い小獸が元氣良く驅け回つてゐるのを見た、これも高山動物の一種であらうか。

池の處から、成る可く岩の出て居る處を登つて行くやうに見當をつけて、朝與岳の登りにかゝつた、岩崩は前日經驗したやうに、隨分歩き惡いものではあるが、登りとなつては、之を偃松や、小ビソの林の中に較べると、猶ほ遙かに容易と思はれたから、進路を之に選んだのである。

岩崩れの斜面を少し登つて其極まつた處から、右に折れて霧藻の懸つた、小さい栂の木立の中をかき分けて、右斜めに登つて行くと、又た亂石の續いた處に出る、そこから今度は左斜めに岩を踏んで、ずん〳〵登つて行く、石南の花の美しく咲いたのがある。偃松が現はれて來るが、丈が高くないので踏み分けて行くに困難は無い、山脊に近い處で岩崩れの終りに達したのが七時五分であつた、大武川の谷から吹き上げて來る霧は此山脊を界として濛々と渦巻いてゐるが、駒ヶ岳は猶ほ晴れてゐる、頂上の右には、摩利支天の峯の大頭顱が、少し低く聳えて、其下は斷崖千仞、末は大武川の雲の中に消えてしまふ、此處から仰いだ駒ヶ岳の山容は如何にも豪壯なものであると自分は思つた、左の方へ向くと仙丈の頂は矢張り雲で見えないが、伊那の方には冴えた青空が現はれて、西駒の連山が、横に棚引いた朝雲の上に、雪の燦く頂を突き出してゐる、山稜に沿ふて著しい登りとなり、大きい岩の峙つたのを攀ぢ登りつゝ、八時二十分朝與の頂上の中で、最も西方にある峯の頂に到着した、此峰は岩石の兀々した小さい凸起に過ぎない、ミヤマダイコンサウ、コケモモ、ツマトリサウ等の花を付けたのが、あつた許りで、植物は至つて乏しい。

それから少し下つて、可也長い頂上の山稜を辿つて、又た登つて行くと、前の方に朝與の最高點が見え、其左に第二最高點かと思はれる峰が並んで見える、岳樺と偃松とが繁つて、歩き惡い處を過ぎ、

磊石を踏んで登つて行く、忙しい中から一寸振り向いた時、仙丈の頂が雲から少し出たが、間もなく又た隠れた、九時二十五分、朝興の絶頂に着く、岩塊の狼藉たる中に三等三角の標石がある、櫓は顚倒して其側に横はる。

朝興の頂上から白峰、仙丈、駒、鳳凰、地藏の諸峰を望んだ景色は定めて壯大なるものであらうと樂んで來た自分は、雲の爲めに大部分の眺望を奪はれて少なからず失望した、北の方は我駒ヶ岳山脈を界として一面雲に塞され、駒ヶ岳も今は形を隱し、只だ朝興附近の山脈が、活火山の噴烟を取り圍む火口壁の樣に彎曲してゐるのが見えるに過ぎない、南の方の白峰、仙丈の頂にも雲が執念く蔓つてゐるが、只だ其間にある野呂川の谷が極めて良く晴れてゐるのが、せめてもの心やりである。深い谷底を曲つて流れる川の兩岸には、針葉樹の衣で、黑い綠色に光つてゐる山襞が、組み合つて、其回には雲の中から引き降した澤々の線が、淡赭色に見える、其或者には殘雪の白く輝くのもあつて、隱れた頂上の消息を漏してゐるやうな心地がせられた、時々谷の中から小さい雲の塊りが、思ひ出したやうに、あはたゞしく立ち昇つて行く。

朝興の頂から大きな尾根が南に走つて北澤のドウあたりに低下するのが見える、此尾根と今自分等の歩いて來た山脊との間にある北澤の一つの澤を荒澤（アレサハ）又は荒谷と言ふそうである、又た大武川に向つた側には前栗澤、奥栗澤（宛字）など云ふ澤が、此岳から出てゐる筈であるが、雲の爲め其位置は分明しない、多分奥栗の頭が朝興に當ることゝ思ふ。

朝興岳は、駒ヶ岳と鳳凰山塊とを結び付けてゐる重要な、且つ高峻な山岳であるが、駒ヶ岳山脈の一員と云ふのは、其山脈が連がつてゐると云ふことだけであつて、岩石は後の二つに全く縁の無い古生層から成つてゐる、自分は甲府圖幅の地質圖を見て、多分此山脈は花崗岩から出來てゐるものであらうと思つてゐたが、夫は大きな間違で單に朝興許りでなく、西は前に記した樣に駒ヶ岳頂上南下の

鞍部から、東は鳳凰山附近の峰に至る迄（ゴーロ澤頭を含む）總て古生層の地質である、朝奥の頂上は標高が高いだけに、高山らしい景色はあるが、駒や鳳凰、地藏などは全く趣が異つてゐる。

自分は是迄、朝奥と云ふ名を自由に使つて來たが、此處で此山の名に就て一言記して置きたい、此山は高頭氏の『白峰山脈臆測圖』（『山岳』第五年第二號）に依ると、駒ヶ岳の南方に鳳凰山（二千七百九十九米）と記されてあるのが即ちそれである、自分は其當時此山の正當な名を知らなかつたが、鳳凰山は勿論別に著名なものがあつて、此山が鳳凰山で無いことだけは確かであると信じて居つたから、其事を『山岳』第五年第三號の雜錄欄に記して置いた、高頭氏が前記の地圖に此山を鳳凰山と記されたのは、參謀本部の陸地測量部の三角點の符號が、そのやうになつて居つたのを、忠實に書き寫されたからであつて、元來三角點の名稱なるものは、同部の方々が、單に符號として、一號二號などと云ふことの代りに、便宜上附けられたものだそうで、實地の山の名の如きは眼中に置かれないのが普通であるとか云ふ話であるから、此處で此山が鳳凰山でないことを論ずるのは問題にならないことと思ふ。其後、鵜殿正雄氏は南アルプス跋渉中、戸臺の小椋龜十、蘆安の森本與太郎等から聞き取られた處に依つて當分此山を荒澤山（アレサワサン）若くはアサヨザワサンと呼んで置くことを提言された（『山岳』第六年第二號九二頁參照）の自分は今度の登山に先つて豫め此山の名稱を調べて置かうと思つて、臺ヶ原の竹屋旅館に照會した處、山岸喜作が土地の古老から聞いたと云ふ話で朝日岳と返事して來た、又た駒城村役場に尋ねた返事は赤薙山とあつた、それから七月の中旬、自分は高頭氏と共に、近來東京に住つて居らるゝ、元の蘆安村長、名取運一氏を訪ねて、此山の名を質した處、同氏はアサヨ岳と教えられ、且つ通常「朝奥」の二字を宛て用ゐることを附け加えられた、斯樣な譯で自分は此山に就て朝日、赤薙、朝奥と云ふ三通りの名を用ゐた次第であるが、其內のどれが最も普通のものであるかを知ることが出來なかつた、然るに今度甲州に來て駒ヶ岳山脈に就ては、充分信用を置けると思はれる案內者の水石

春吉から、此山は朝日岳と云ふこともあるが、柳澤の鉄砲打ち等は專らアサヨと呼んでゐること、そして赤薙と云ふのは鳳凰寄りにある大武川の支流の名で、此山の名でないことを聞き、又た竹屋で逢つた山梨縣廳の林業技手内田氏の携へて居られた釜無川及大武川水源の地圖（四萬分一、縣廳で作つたものだそうで、餘程正しいものと思はれた）にも假名ではあるがアサヨ岳と記してあるのを見て、アサヨと云ふ名が、可也廣く用ゐられて居るのを知つた。

自分は以上記した處を綜合して、此山をアサヨ岳と呼ぶのが、最も適當であらうと考へ、名取氏の數へられた朝與の字を宛て用ゐることにしたのである。鞍殿氏の提出されたアサヨザワサンもザワの二字を除けば先づ一致することゝなる（此山の野呂川に向いた側に、アサヨ澤と云ふのがあるらしいが、自分は此旅行中、遂に此名を聞くことを得なかつた）、朝日岳と云ふ名は臺ケ原邊で呼ぶことがあるらしいから、之は一つの異名として置きたい、又た此山の北澤の側に荒澤又は荒谷といふ澤があるから、其頭は即ち朝與であつて、鞍殿氏の名づけられた荒澤山と云ふのは根據のないことでない、恐く信州の獵夫等は斯く呼んで居るかも知れぬと思はれるから、之を信州方面の別名とすることは差支ないかも知れぬ、最後に赤薙山と云ふ名は、駒城村役場の調査の誤と見做して、刪除することゝする。

暫く頂上に休んでから、前進を續けるべく下山についた、これから鳳凰山塊までの間は、山脈が著しく低くなつて、之と云ふ程の岳はない、ひた下りに偃松の中を下つて、鞍部を過て又た登ると一つの峰に出て、其處には岩が露はれて白樺や、偃松の枯た幹が白骨の樣に狼藉と横つてゐた、それから又偃松の中を押し分けて峰通りを傳つて行く、一寸した一つ二つの凸起を過ぎたやうに覺えるが、今は確と記憶して居らぬ、遂に大に下る處へ來て、針葉樹の中に這入つた、丁度十時三十五分である、これから偃松は餘りなくなつて、林の中を縫つて行くことゝなる、主に野呂川に面した方を辿つて歩

ゐた、此邊大武川の方は前栗澤、野呂川の方はミヨシ澤の上に當るのであらうが、何分山脈の北面は雲に蔽はれてゐるのと、林の中で展望がきかないのとで、澤の關係は全く分らない、山脈の一方の澤のひつくりかへしが他方では何と云ふ澤に當つてゐるのか、それを調べて見いたいと豫て思つてゐたが、此天氣と此樣な林では、とても見込がない、其上、林の中の同じやうな處許りを通つて行くので、後から記憶を辿つて見ても一向要領を得ないで、殆んど夢中で過ぎてしまつたも同然であつた。

此樣な處を大分歩ゐてから、粘板岩のやうな岩の露出した處を過る、其附近は少し平らになつてゐて、グンナイフウロや、シナノキンバイや、キバナノコマノツメ、ツマトリサウなどが咲いてゐた（十一時十分）、それから左の方にある大きい山脊について絡んでから、猶ほ山脊の上を歩ゐて少し登ると、林の繁つた、中を切り開けて建てた三角標（三等）のある處に着ゐた、櫓も其儘に殘つてゐる、それが早川尾根の頭の三角點であつた（十一時五十分）、『白峰山脈臆測圖』に鄕留澤（二千六十三米）と記してあるのがこれである、此鄕留澤が若し野呂川のゴーロ澤のことであるならば、勿論其名の示す澤とは何の關係もなく離れてゐる。三角標から少し南に下ると冷い水の湧き出る處がある、猶ほ行くと野營の出來る程な場處もあつて、小屋の遺跡もあると云ふ話である、自分等は水の處まで行つて中食をした。

柳澤から大武川を溯つて、此邊で此山脈を乘越して、野呂川ミヨシ澤に下る早川峠と云ふものがあるらしいが、其路は春吉に聞ゐても確には分らなかつた、多分此三角標の附近を通るのであらうが、路と云ふべき程の形のあるものでは無いらしい。

午後一時、此處を出掛けて又た林の中を東へと進んだ、餘り登り降りはなく、大して骨は折れない、一時間許りで、少し下つて山脊の幅の狹い鞍部に達した、それから先は又は登りとなつてゐる、此處は矢張り一つの乘越で、野呂川の方には廣河原澤があつて、廣河原は直ぐ下に當り、大武川側は赤薙

の澤の内で、尾無しの尾根と云ふ處の上になつてゐるそうである、春吉の提出に從つて廣河原峠（新稱）と云ふ名で呼ぶことにした。

折から白峰を包んだ雲の中から、遠雷の響が聞へて、夕立がバラ〳〵落ちかゝつて來た、今日は出來るだけ、鳳凰山の方に近づく心組であつたが、天氣が不安であるから、いつそ此邊に泊らうと思つて、附近に野營地を索めて見たが、尾根の上は風が強く、山側には全く平地がないから斷念して、方針を考へてゐる内に、不圖心に浮んだのは、此旅行の終りに白峰三山に登らうと云ふのは餘り慾深い計劃で、是迄費した時日を數へても休暇の制限されてゐる自分には到底出來難いことで、寧ろ今日廣河原に下つて明日白峰の北岳に登り、それから再び此處まで戻つて駒ヶ岳山脈の縱斷を完行するのが得策であらうと云ふことであつた、星君にも相談して同意を得て、二時二十分廣河原へと下山にかゝつた。

夕立は程なく止んで薄日も漏れて來た、野呂川は直ぐ下ではあるが、河の音が微に聞へる位であるから、餘り近いことはなからうと思つたが、急な針葉樹の森林中の斜面を、隨分急いで、河岸まで一時半許りを費した、麓には伐木を辷り落す樋のやうなものがある、對岸に見える瀧の樣な澤は、小太郎澤だそうで、左岸を少し溯ると、激流に架せられた危橋がある、それを渡ると、二間に二間半許りの丈夫な小屋がある、山人等が大分居るらしいが、此時は留守であつた、此内に合宿することは困難であらうと思はれたので、猶ほ二町程上に行つて河岸に近い處へ小屋掛をした。

夜になつて小屋を訪ねて見ると鷲安の村人が十人餘り居つた、目的は伐木にあるらしい、山の事を聞いて見たが詳しい話の分るものは一人も無かつた。

二十五日白峰北岳に向つた。夜の間は良く晴れてゐた空は、夜の明けかゝる頃になつて、不思議や俄然薄紗を張つたやうに曇つてしまつた、大カンバ澤から右の尾根にかゝつて大カンバの池に近い處

まで登つた頃には、雨がひどく降り出したので遺憾ながら遂に登山を放棄して十二時野營地に引き返した。歸て見ると丁度北澤から米を持つて來て呉れた人夫が來て居つた、蘆安の村人は、今日小太郎の方へ一里許りも登つてしまつて、當分歸つて來ないので、午後野營を引き拂つて小屋に移つた。

晝頃、小歇みとなつた雨は、午後になつてから、又た降り出して來た、小屋が本物であるから、餘り氣にも留めずに居ると、夕暮から降雨は益々勢を增して、夜に入つてからは風さへ加はつて、遂に純然たる暴風雨の有樣となつた、雨は盆を覆すやうに降り頻り、飛沫は風につれて小屋の中に吹き込み、野呂川は刻一刻其水聲を高めて、轟々たる響は耳を聾するやうになつて來て、とても安閑と寢てゐることは出來ない、眞夜中頃、風雨の最高潮に達した時分には、ドン〳〵と云ふ大砲を擊つやうな音が加はつて聞える、多分大石が押し流されて、ぶつかり合ふものらしかつた、此夜の暴れが東京では海嘯を起した事は、此時勿論自分等の知らう筈がない。

恐しい一夜を殆んど不眠で過して二十六日の朝近くなつた、人夫の一人は小屋の入口から川を覗いてゐたが、突然「橋が落てしまつたづら」と云ふ嘆聲を發した、見るとまだ薄暗い谿谷を眞白に泡立つて流れる野呂川は凄しい增水をして、一昨日自分等の渡つて來た危橋は中程から斷えて兩方の端が少し殘つてゐる許りである、渡る時には深くも考えなかつたが、今一行は野呂川の爲めに此山麓に封鎖せられてしまつたのであつて、後は白峰壹萬尺の峻嶺を越えて信濃、駿河の境まで人里と云ふべき程のものは全くない。

夜は明け放れて雨は漸々衰へて來たが、川を渡ることなどは思ひもよらぬ、前日から見ると少くも八尺の增水である、米は昨日北澤から持つて來て呉れたのを已に一部費したから五升の上に餘り多くはない、若し雨が幾日か續いて川が渡れぬならば食料の缺乏が第一に起る、最後の手段としては此處から北岳と小太郎岳の間を越えて、奥仙丈の方にあると聞いた富士製紙の伐木小屋に逃るのであるが、

雨中の山越は危險も伴ふし、且つ山脊を彼方に下つたとしても、野呂川の源流が渡れるか、どうか、それも分らない、「豪い事になつた」と流石の春吉も腕を組んだ時、一同見合した顔には元氣も何もなかつた。

幸ひ天氣模樣が追々良くなりそうに思はれるので、兎に角一日滯在と決して、成る可く米を殘すやうにと、今日は二食の約束で、粥をすゝつて心細い朝餉を濟した、話をする元氣がないので、皆な茫然と横になつてゐると、十時頃から雲が切れて青空が見え出して來た、水源に近い川は水の增すも早いが、減るもの又た早い、時々川岸へ行つて追々現はれて來る岩を見て、一寸、二寸と水の減るのを、唯一の樂みと眺めて暮した。

(三) 廣河原峠より赤薙の頭ゴーロ澤頭、鳳凰山、地藏ケ岳を越えて南御室より下山

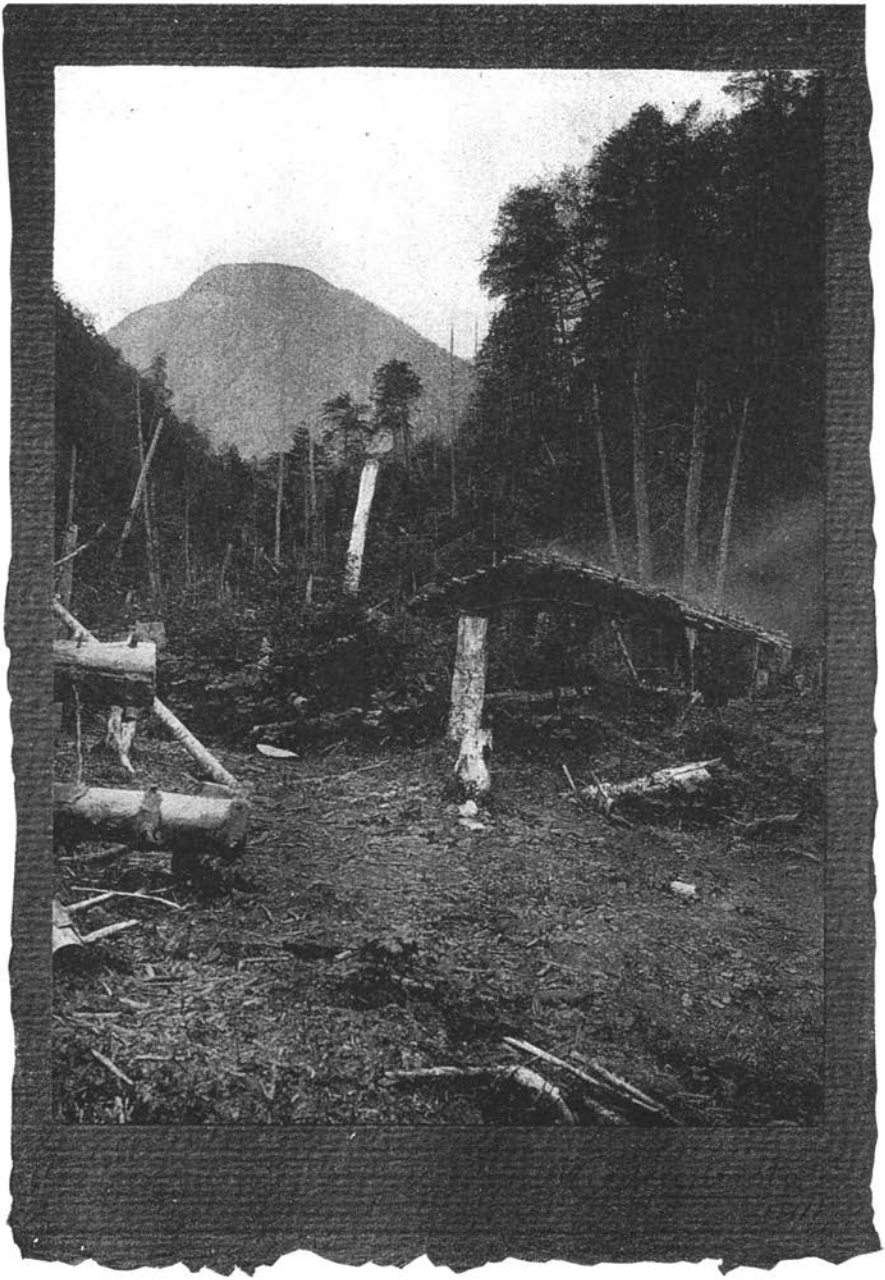
二十七日、昨日から雨が止んだので、水は非常に減つて澄んで來たが、まだ平水と云ふ處までは中々達しないので徒渉は出來ない、木を渡り掛けて渡ることに相談して、小屋から三町許り登つた川幅の比較的狹い處へ行つて、川岸に立つ高さ十間餘りの落葉松を川へ截り倒したが、向ふ岸へは四五間許り足りない、更に白樺と栂の可也太いのを截つて、春吉はそれを擔つて前の丸木を渡つて巧に不足の處に架し渡した、自分が非常に氣付かつた此架橋は殆んど春吉一人でやつてしまつたので、彼の手腕の平凡でないことを認めたのは嬉しかつた。

向岸との連絡が取れたので、安心して小屋に戻つて朝餐を認めてから、愈々此丸木橋を渡つて野呂川の重圍を脫したのは午前七時三十分であつた、渦卷く碧い奔湍の上に一條の活路を索めて渡つて來る人々の顏は、確に眞面目なものであつて、此景色は一種悲壯な感じを起させるものがあつた。

◎甲斐駒ケ岳山脈縦断記　辻本

前日下つたのと同じ處を登るのに二時間餘りを費して十時十分、廣河原峠の上に着いた、それから山脊について登ると、小ピソの林となつて石南、コケモヽ等が現はれ、岩石の露出した處となる、此處は大武川袋澤（宛字）の頭に當つてゐる、今日も山脈の北には雲が漲つてゐて野呂川の方へ襲つて來るのを、強い南風が吹き返してゐる、朝與岳は此雲に其右半を隠して高く聳え、山脈は廣河原峠までの間に一寸目に付く峰を三つ程起してゐる、白峰、仙丈は頭を雲に包ませて、獨り小太郎岳が雲から離れてゐた。それから少しづヽ登つて十一時三十分、偃松の蔓つた中に岩塊の兀立した頂に出た、此處は柳澤方面から此山脈を望むと、ゴーロ澤頭から右に大に下つて一鞍部を造り、更に高まつた處で山脈は、此處から緩く西に下つて廣河原峠の低處に連なつてゐる、別段名を持つた峰では無いらしいから、春吉の云ふ處に依つて赤薙の頭（新稱）と名けた。今迄見えなかつた東方の眺望は俄然開けて尨大なゴーロ澤頭は亂石と偃松から成立つた山頂を面前に抜き起し、其左にある花崗岩の白く崩れた峰に連なつて、鳳凰山の地藏佛は已に指呼の間に迫つて見える。

赤薙の頭から下つて一寸した林の中を通る處で、中食をして、猶ほ下つて山脈の鞍部に達し、ゴーロ澤頭への登りにかヽる、累々たる岩石は丁度仙水峠の附近と同じ樣で岩の色も良く似てゐる、亂石、偃松を踏み分け、頂上近い處で岳樺の中を右手にからみ、一時四十分絶頂に達した、三角標があつて櫓も存して居る、陸地測量部に據れば標高二千七百七十九米、鳳凰山塊中、薬師、觀音に亞ぐ高峰で、鳳凰山より少し高いことは確である、此山は蘆安では高嶺（タカネ）と呼ぶものらしく、名取氏は此名を云はれた、自分は先年登山した時、山上で逢つた蘆安の案内者から、テンゴウ山（天狗山）と聞いたので其時の記事（『山岳』第二年第三號、『鳳凰山第二回登山記』）には天狗山として置いたが、今回春吉に聞いて見ると天狗山と云ふものは無く、只だ天狗岩と云ふのが、坊主（ボウヅ）（鳳凰山の北方）の方にあるだけだとの話である、尤も蘆安と柳澤とで山名の違ふことは勿論あり得るであらうと思はれるが、兎に角天



辻本滴丸氏撮影

北澤の小屋

狗山と云ふ名に疑問を生じたから、之は暫く預ることにして、本文には柳澤で慣用されて居るゴーロ澤頭の名を用ゐることにした(『山岳』第六年第二號九三頁、鵜殿氏の記事參照)。

頂上は岩の間に偃松が一面に蔓つてゐる、東の方に地藏ケ岳は、脚下に深く刻まれたアカヌケ澤の窪みを隔てゝ花崗岩の美しい山頂を擡げ、其左には矢張り花崗岩の恐しく崩壞した峰があつて、自分等の方に連絡し、鳳凰山の地藏佛は近い峰の後から上部が少し見える、地藏ケ岳の右には藥師、觀音、砂拂(スナハラヒ)の連嶺が聳えて、南御室のあたりには白雲が立昇つてゐる、後を見ると朝與は先刻發澤頭から見たのと、同じやうな形をして、雲に半面を蔽はれ、其右には雲の中から駒ケ岳が切れ〳〵(カール)に見える、仙丈、白峰は大分雲の冠を脫ぎ、仙丈の頂にある二つの窪壁は面白い形を此方に向け、白峰北岳の左からは間ノ岳、農鳥山の大山塊が現はれて來た、自分等を苦めた野呂川の流は深い谷底に微に隱見するに過ぎない。

ゴーロ澤頭から山脊傳ひに偃松を押し分けて、それに連つた一つの低い峰の上に出ると、鳳凰山は全景を眼前に展開する、こゝから著しい下りとなり偃松が深い、幸ひ切り明けらしいものがあるので之を賴つて行くことが出來る、下り切つた、處から地質が變つて花崗岩となる、少し登ると花崗岩の崩れた處となつて、登るに從つて奇怪な岩塊の簇々峙つのがあつて、景色が急に面白くなる、岩砂の崩れた處にはDrabaや、ビランジなどが咲いてゐる、山脊通りに登り詰めた處は岩の最も烈しく露れた峰(名稱不明)の頭で、こゝから主脈は地藏ケ岳に連なり、支脈は北に走つて鳳凰山を起してゐる。

此峰から偃松の中を押し分けて直ぐ目の下にある賽の河原に出て、鳳凰山に登り着いたのは三時三十分であつた、雲の切れ間から鹽川の流が帶のやうに見えた、時間が遲れたので、ゆつくりする暇はなく、引き返して地藏ケ岳の登りにかゝる、是から先は前年通つた普通の裏路で、いくらか登山者もあると見えて、路は以前よりも良くついて居る。自分が始めて採集して、武田久吉氏に依つて新種で

◎甲斐駒ヶ岳山脈縦斷記　辻本

あることが發表されたホウワウシャジン Adenophora howozana Takeda を索ねて見たが、急いだ爲めか見當らなかつた、若し此處で絶種するやうなことがあつたならば、外にまだ産地の發見されない今日、惜むべきの至りであると思ふ。四時三十分地藏の頂に登つた時には、恐しい夕立雲が白峰、仙丈を呑み盡して、強い西南の風に送られて來る大滴の雨は横なぐりに一行の面を打つた、全速で下山に着いて藥師、觀音には立寄る暇もなく、砂拂に着いたのが五時、更に三十分を費して南御室に下つた、小屋は殆んど無くなつてしまつてゐた、雨は途中から止んで白峰方面の外は晴れて來た、夕靄は靜に遠い平原を包んで、端山の末には黄昏の色がかゝつてゐた、疲れ切つた足を引きずりつゝ木立の薄暗を青木湯に下り着いたのは、午後七時であつた。

南御室の附近は、以前草が繁つて色々の花が咲いてゐたが、今日來て見ると一面に砂地となつてゐて痛く光景が變つた、又た此處から青木湯に下る途中は、天日を漏さぬ、密林であつたが、人間の斧鉞は已に之を襲つて、小武川の流れを良く見下すことの出來る程、木の無くなつた場處が、いくらも出來て居つた。

二十八日晴、青木湯を出て小武川に沿つて一里餘り下つた處から右に折れ、青木峠を越えて清哲村青木に下り、韮崎に出て登山旅行を終つた。

（附記）歸京後、人夫の一人、入戸野作藏（臺ヶ原）からの通信に次の一節があつた。

「父上に聞き候處（中略）次に駒嶽山より仙水峠に下るをねは駒津峯と云ふ、其北峰をシャクジョガタケ（錫杖ヶ岳か）と云ふ、又仙水より上りつめし處を仙水嶺と云ふ、次に朝與岳へ行く途中の山を三ツ峯岳又は三方頭とも云ふ。」

文中にに仙水とあるは仙水の池のことゝ思はれる（池は山脊より少し低き處にあり）。自分は朝與岳を仙水峠から始まつて、ミヨシ澤の頭の邊までに至る可也大きい山塊の名としたのであつて頂上は

數峰から成つてゐる、三ツ峰岳と云ふのは此總稱に當るものではあるまいか、又た朝與から一山脊が野呂川に分岐して、絕頂は三山脈の合點と成つて居るから、三方頭と云ふのは、寧ろ朝與に適合するやうに考えられる。

附圖は主として山梨縣廳の山林圖に據る。

地藏岳及鳳凰山

鵜殿正雄

一、蘆安——清水權見

十月四日晴天

溪流の響きに曉きの夢は破れる。雲行きがあまりよくないが此位ならばと、急ぎ仕度をする。被服携帶行李等旅裝は、立ちどころに辯じたれども、肝要の兵糧が結まらない、どふ云ふものか主婦公、容易に間に合はせて呉れぬ。彼此二時間も遲れて、出發はつい八時頃となつた。

御勅使川の沿岸危石の間をひろふて行く。尺周り程に肥つた杉扁柏の小群が處々にあつて、床しい香を送つてくる。一本の丸木橋に危うくも身を托して左岸に渡る。若し此橋を渡らずに右岸に沿ふて登れば、入河原を經て奈良田嶺に達し得られる。曾根の小坂を越え沓澤區を右に見て、大豆蕎麥桑等の畝になつてをる、曾根平を西方に突つきると、大山祇の社脇に出る。畠はこゝでつき、行く手の左はショ澤の溪流、右は雜木林の山となる。小溪を二三回許り横ぎり、右に折れて登れば、北方に二三

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

十年生位な落葉松及び杉の林がある。是は白峯山道の開祖名取氏が經營せられた林であると聞く。雜草類のまばかに茂る野原の間に介まる、深か綠に染め出された此針葉樹の林は、際立ちて心地よく見えた。

吾等が一步々々天に近づけば、雲霧も亦次第に上昇して消えて行く。仙丈以來數日間妖雲に扁されてゐたのが、今日は存分日光に浴する事が出來たので、實に爽快を覺えた。茲から杖立迄は至つて嶮しい道である。此間を急進するのであるから、自然流汗も多い。夜叉神嶺に至る分岐點の處より少し登れば、路傍に傘形をなした樅の木があつて、其下には已に二人の山人が息ふてゐた。與太郎は汗を拭き乍ら一寸其仲間入りをする。私は觀測を控へてゐるので、何處でも大抵は休まずに通過する。

よ程登り尾嶺近くなつた頃、清水權現と刻せる石碑の側にある靈泉を掬びて一息きする。頭上の梢には數多の辨當箱が垂してある。是は芦安の人夫で木を負ひ出しに行くものが置いたのである、是より上の木場迄の間には、一個處も水の湧る處がないから、少し早いけれども茲で中ば平らげて行くそうである。

二、刈安——堀切

やがて刈安と云ふ所に出る。行手に當り大空を背景に肩を聳かし、大手を振つてぬくと突き立た巨人が、不意に出現した。しかも、七合目以上は白雪を冠してゐる。私は思わず「甲斐峰々々々」と……、身も魂も宙に躍ぶ。足許は野呂川流域と御勅使川流域との分水嶺である。聞きしに違はずカリヤスが澤山あつた。地名は是れに因んだものだそうである。南の方七八丁離れた處には、カレイ澤の頭と云ふのが吾よりも少し高くぬけ、峰に三角點を戴せてゐる。「白峰山脈臆測圖」にある高谷と云ふのは是であらう。其手前の低くい尾嶺を、夜叉神嶺が通てゐる。茲からは四五丁あるそうだ。

間もなく右側に山の神の小祠がある。有志の連名板も奉納の白旗赤旗も、まだ全く新しき匂ひがぬけきらないでゐる。小笹のある急坂を四五丁辿れば、堀切と云ふ處に出る。茲の東方の崖縁には、谷の方に斜めに突き出した大木の伐り株がある。是は芦安の連中が數年前、見晴しの良いようにと伐り飛したんだそうだ。私も夫によつて向ひを見る。芦安から甲府平原にかけて一目だ、鳥屋の三角點は足下に小さくなつてゐる。八田山ももうよ程低い、千頭星は吾よりまだ〳〵高い。一望が終りてふりかへる途端に、三人の娘が脚胖草鞋に身を固め、裳をからげ、白檜の板材を負ひ乍ら、てく〳〵下つてくるのに出會した。

「大層早かつたね——何處から……？」と訊ねる。

「オホコンバから……！」

「重くつて苛らいだろう—」

「何こればつかり」と。

威勢よく下つて行つた。奥太郎に訊くと十二三貫あると云つた。始終鍛へてゐるとは云ひ、山家育らのものは強健だ、都會近傍のものだと、空身を運ふでさい覺束ない處である。前の伐り株と同じ並びに、落葉松の大木があつて、其梢頭は四方に垂れさがつてゐる。是は昔し測量した時の標木だそうだ。此根元の處が幅六尺長さ二間許り開鑿せられた痕がある。堀切と云ふのは、是から因たのであらう。

昨日此邊を飛び下つた時は、折々路傍の小柴や垂板にすかれ、笠や合羽を曳かれた、其都度「八釜ましい奴がうせやがつて人の通る妨をしやがる」と毒ついた事もあつた。夫を今日は面白い枝がある、美しい葉であるなんて、賞めて行くのもおかしい。同じ枝葉であるのに、外界の境地によるとは云ひ人情はかくも急變するものだらうかと、我身ながら怪まるゝ。

「なけゝとて月やはものを思はする……」（西行）

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

とは、よく其奥底を穿つた言ではあるまいか。

三、杖立——大木場

笹深き小逕を越えて行けば、間踏み六尺もある廣い道となる。其處はもう笹はなくなつて針葉樹が路上を掩ふてゐる。村落近傍の道が狹く山奥に行く程廣くなるのは、ちと受とりにくい、のみならず其道が、二三間毎に無數の階段のあるには驚いた。丁度曾利と云たつような處を縮少したようなものだ。なぜこんなになつたのかと訊くと、木材を引き出すとき、此位な勾配で止めがないと、辷りだしたが最後止め度がなく、折々道でない處へ飛入んで行くのを恐れて、かく段階を設けたるのだと云ふ。是は果してそうであるかどうか疑はしい。彼等が無心で曳き出すうち、自然にそうなつたのだらうと思ふ。もし故意に作たものとすれば、甚だ幼稚の土修羅である、もう少し脫走せないで都合よく、辷り落ちるよう務めそうなものだ。

五六人の運材人夫に駈ついて通り過ぐる。中には婦人も居つた、そうして其婦人は、小布を絅し乍ら登て行く、それは脇見をせず無駄話をせず行けるから、道が樂で捗ぐると云ふことであつた。十一時に杖立について杖を横たへる。白樺、楓、栂、樅、白檜等交り立つて、眺望は遮ぎられる。吾々の立つた後ろには小祠がある。大枯頭に行くには、もう少し下から右にとつて行くのだそうだ。大枯とは大缺落の意ではあるまいか、中腹に大きく斜切落ちてゐる處があるようだから。

杖立から四丁餘り西北に下れば、セヱバヨコテとて、そこから道が二筋になる、左に行けば廣河原で、右すれば即ち地藏鳳凰山道で、漸次上りになる。大木場（宛字）に着いた時は十一時四十分であつた。樵夫が二人居つて白檜の木を連りに板にしておつた。此邊が芦安の湯場と鳳凰山との中途位なところで、小屋もあり水も頂戴できると云ふので、早速行李を開く。西南には白峰三山、南方には富

士の麗峰が藍色に光てゐる。

「本社（鳳凰山）に行つて此處迄戻れば、六時頃になるずら……」

と一人の樵夫が、吾等を目送する。

四、切明——辻——高嶺

道は割合に緩である。ぼつ〳〵花崗岩が現れてきた。是から上方は、芦安村と清哲村との爭ひ地點になつてゐて、解決のつく迄は双方共、手を入れぬ事に定めてあるから、降雨があつていかに道が壞れても、自然に委かせ、直して通るものがなく、踏み固められる事も少ないので、谷のよやうに堀れてゐるところが往々ある。そこも僅かの間にすぎて、切明（宛字）（「大日本地誌」第三卷八百六十頁に「霧燒と稱する木挽小舍……」とあるは此附近の小舍の總稱ではあるまいか、「山岳」四年三號十頁にはキリワケとあり、霧燒、切燒、切分何れも通ず、森林を伐拂らい荊蘇を燒き盡した跡に小舍を建てた所である）の小舍にでる。壹反歩餘り樹木が伐採され、其根株が亂抗のようになつて殘つてゐる。小舍は南に面して其方は明つ放しであるが、四五名は宿れそうだ、傍には大鋸屑が散亂してゐる。又四五丁登れば、土地の有樣が切明に似た辻に出る。此處にも以前は、小舍があつたそうであるが、今は全く潰滅に歸し、あはれ儚なき運命を嘆つてゐる。其側らには、境介査定の標抗があつた。南方の眺望は大コンバ切明に勝る。こゝの西方にある辻の三角點——「山岳」五年二號「白峰山脈臆測圓」にある——の直北にある峯を、奥太郎は高嶽と云ふた。夫は次のような理由があるからだそうだ、かの俗諺に。

「御室高嶺が高いと云ふても野呂川仙丈はなほたかい」

とある高嶺はこゝで、山が高いと云ふよりも、寧ろ良材を澤山産するから、名高いのであると、さも

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

あるべきか。こゝで御室と云ふのは、南御室の事であらう。

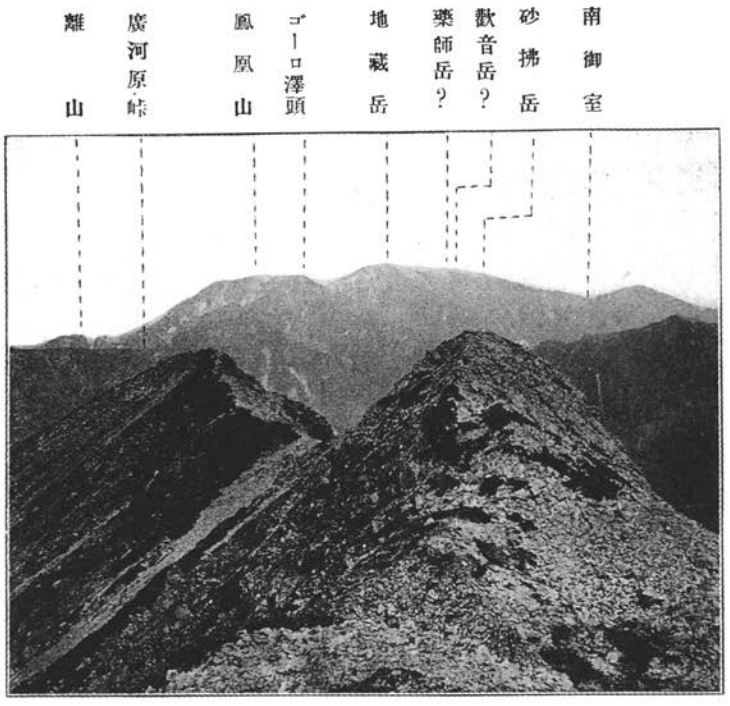
辻のすぐ脇からは、野呂川流域を去つて、正に小武川流域に踏み込むのである。大空からは袖を連ね合ふて來た水も、一毫との加減で一旦は西と東に分袂れて、互ひに反目の姿勢をとるも、末には皆、富士川と云ふ一つの大きな流れによりて、融け合ふのも妙だ。是から南御室迄は連嶺の東北面、主に日蔭許りの白檜樺類の良く茂つて居る中を通るので、日中でもそこ暗い、殊に霧が足許から吹上げてくる時は、何となく奈落の底へでも、曳き込まれやせぬかと、厭やらしい氣がした。落葉中をがさ〳〵と音をたて乍らゆき、少し下り目になると、樹冠の閉鎖が破れ、其間から砂拂の一角にたつ木々の梢頭が、風のまに〳〵動く影さへも、仰がるゝ程に近づいたかと思ふ間もなく、南小室に出た。

五　南御室——砂拂

此御室は、前に述べた高嶺と、砂拂との間にあつて、兩峯より凡そ二百米突も低くい處の小舍である。茲も爭論地の一部で、伐木者が四五年間も入山せぬから、小舍は大抵破れてゐる。大鋸屑は山のように堆積してゐる。小舍の南北には清き水がある。强風をうくる事も少なく、割合に暖かそうである。茲から東北に下れば、靑木湯を經て韮崎に出るべく、西南に向へば、地藏平を過ぎて野呂川に下る事が出來る。後者は、奥太郎のよく諳んずる處である。先づ本山中の小舍場としては、第一等の場所である。

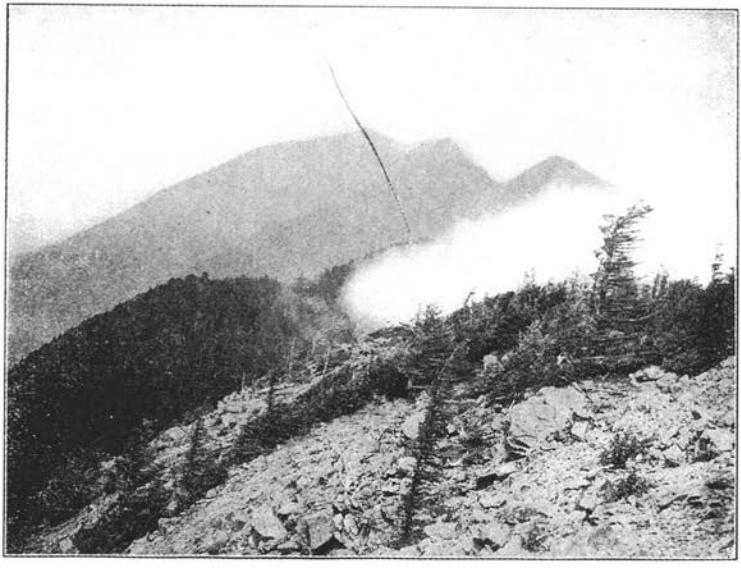
今日はもう降る氣支はなからうと、雨具を木場杭にかけて、向ひの急坂にかゝる。三十餘度の傾斜面を、樺の木の枝に縋り、栂の根を踏まへて二三丁登ると、そこには三四十年生の白檜がよく茂つてゐた。爪先上りの鮮苔布團の上を踏み乍ら、倒木を乘り越えて進む。

白檜の純林漸く盡き、タケカンバ、ミヤマハンノキ、石楠、ミヤマツヽジ等の間を、喘ぎ〳〵登れ



辻本滿丸氏撮影

鳳凰山塊（仙丈岳より望む）



辻本滿丸氏撮影

袋澤の頭より朝與岳を望む

ば、忽ち地藏岳の南角砂拂に出る。是から地藏岳の頂迄は、野呂川谷の青々とした森林を、眼下に瞰、白妙の白峰の連嶺を仰ぎ乍ら、偃松の斑にある、御影石の煌ら〳〵した爛砂の上を、ざく〳〵と音をたてゝ行く、鞋には氣の毒だが氣持がよい。砂拂とは、下界の俗塵を打ち拂い、始めて天境に踏み入るべき、關門の意味ではあるまいか。

六、藥師岳——觀音岳

深綠色に點々と綴く偃松は、御影砂の光澤を一層よくする。先鋒の副將藥師岳は、紫黑色に錆びかゝた岩石を、疊々と口の大きい大笊を伏たように、築き上げられてゐる。此の坤の麓に、四五升も容れ得る位な水石がある、弘大法大師の硯水は是であると云ふも合點のゆかぬ話である。細長い形をしておるので、そう云ふたものか。藥師の姿見としては、あまりに少さすぎる。

藥師岳の北に接して、觀音岳がある。峯が二つに岐れ、其間は凡そ半丁位もあらう、前なるものは少し低く、背後にあるもの〻支峯である。孰れも藥師岳よりか高く大きい。藥師觀音二峯は、都合上歸途に立ち寄る考なりしも、遂に之を逸してしまつたのは、かへす〴〵も殘念の極みである。

藥師と觀音岳との間には、鬼の相撲場と云ふ妙な名の凹地がある。其直徑凡そ三間餘、中央は鮮苔や芝草が粗らに、外緣りに行く程密生してゐる、又其周りは偃松で圍まれてゐる、大雨の時は小さき池が出來そうな處である。

七、地藏ケ岳

觀音岳から主峯（地藏岳）に至る尾嶺は、中央が舟底のようにたるみて緩かな空線を畫き、地藏に近づくに從ひ、石割玄翁や黑く錆びた、鯵切鉋丁のような花崗岩が、群がり立つてゐる。此尾嶺の前

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

面一帶の地は、鳥帽子形のようなの、鳥嘴形のようなの、或は猫の蹲んだような、牛の臥つたような、態々の容の岩石が爛砂の上に浮いとるのもあれば、踞はつたようのもある、黒ん坊もあれば、白い頭もある、綠の黒髪を梳づつたような偃松は、浮き上つて其間を、彩つてゐる。常に天風や荒雲に壓へつけられてゐる。岳樺ミヤマハンノキは、落ち殘つた黄葉をひら〳〵させてゐる。此場所を下るに伴ない、尖つた石塊が丸味を帶び、其數も減じ、終に偃松や岳樺の群の中に姿をかくす。そうして其下方は、綠色の針葉樹が野呂川谷迄、急斜をなして連線をうねらしてゐる。此原を逍遙し乍ら行くと、右手を延ばして一行を遮ぎるような形勢になる、其手にすがつて登れば、そこが地藏の頭である。

三等三角櫓の遺骸は、散り〳〵になつてゐる。時々火葬に付せられたと見え、燃え殘りの小片もあつた。丸つこい大きな岩は、不規則に重なつてゐる、其内の巨岩は、標柱より二三尺高かつた。東北から偃松は、御影の大岩の間を傳ふて、こゝ迄伸びてゐる。其方よりは又、霧が負けぬ氣になつて上昇してくるも、地藏菩薩の御威光か、忽ち中途で打ち消されてしまう。鳳凰山の地藏佛は、北方の空を抉つてゐる。白峰、仙丈、駒は申す迄もなく、西北の北アルプスは、屏風を連ねたように、雲海上に聳りたつ。北東には國師、金峯が、雲にゆられ乍ら微かに見える。南より稍東には、萬伜の芙蓉峯が蒼穹を後ろに、白砂の聖衣を纏ひ、悠然と御控へになる。

「本社はあそこに見えてゐるだけだ……」

と彼は暗に前進停止をほのめかす。

「馬鹿な、遅いつたつて二時と三十分だ……」

どうしてもあの地藏佛の雄々しい姿を見ては、登らずにゐられなかつた。そこで色々の荷物は茲に置き、觀測はあとまわしにし、案内者を促して鳳凰山に向ふ。

八、鳳凰山

時間が切迫して來たので、私は苛ら〳〵して眞つ先に進み、地藏の北の肩に沿ひ、偃松の梢頭を蹴つて鞍部を目ざして下りきる、そうして又向ひの山脊に登らうとした途端、後ろから「おーい〳〵……」と連りに呼び立てるゆえ、道が違がつたのかしらんと、ためらつてゐると、間もなく彼の姿は、右手の林の中に沒してしまつた。棄てられては一大事と、一生懸命後につゞく。ところが矢つ張り彼も間違へたと見え、道のない岳樺や偃松の中に陷つて、もがいてゐる。しかしもうちきだらうと、無性に偃松の中を游ぎまわり、漸く賽の河原にでた。茲には小供の頑弄物見たような石碑が無數に立つてゐる。

地藏佛は、眼前に壘々と築き上げられた花崗岩の眞正中に、仁王の如く突つ立ち、今にも一行を、踏み壓そうと云ふ氣勢を示してゐる。地藏岳の絶頂より俯瞰したときは、どうやら登れそうに見えしも、今親しく實檢すれば、そは案外であつた、いかな輕業師でも、素手では到底もよりつけない。先づ西方に登り、段々と北より東に周る。周圍は凡そ二十間位あらう、高さは古來五十五尺と云ひなせるよし、略ぼ正鵠を得たものゝように思ふ。此巨岩の概形は、丁度二ッの彈丸を合せて立てたようである。此南方には、鳳凰山天照大神等崇められた石碑があつた。

今迄朦々として東北方に漲つてゐた下層雲は、茲に來てより、何處に行くともなしに消えて行く。次第に現るゝ甲府平原

山あらし雪の白波吹き立てゝ

ねどり流るゝ笛吹の川　（夢窓國師歌集）

と詠まれたる笛吹川は辰の方より、荒川は北方御岳の峽より、釜無川は乾の方より七里岩を小盾に、

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

而して御敕使川は南の溪より、發し、各々蛇行して甲府盆地に會して富士川となり、遂に南山の麓に隱れてしまう。鳥雄機山の屯した舞鶴城も見える。韮崎驛を發した下り列車は、黑烟を惜氣もなく後方に殘して西北に向て快走する等、一々明瞭に見取られた。さり乍ら、鬱々たる流れの音も、轆々と軌る汽車の響も、啞者の寄合のように沈默を守つた儘、何の聲きも送らなかつた。

地藏岳に舞ひ戻つて火を點し、御室から供給に與かつた靈泉を沸かし、珈琲をこいて渴を醫したが、實に甘かつた。諸種の觀測を終り、四時三十分歸途に向ひ、前路を辿りて行を急ぐ。切開に出た時は、もう日は山の端に落ちかけて薄暗くなつて來た。そうして吾等は步每に森林に沈んで行くので、滅入るような氣がした。大木場に出た時は、先きに樵夫の云つた六時。

九、大木場の小舍

二人の木挽は今仕事を止めた。一人はすぐ米を洗ひ、鍋に入れて鍵にかける。一人は奥太郎と共に、燃木を採りに行つた。小舍は概ね白檜の皮で作られてある、屋根裏には、戸綠用の材を乾す爲めに、其割材が澤山載せてあつて、眞直にたてば頭をうたれる。ともかくとも、私は鞋を脫ひて這ひ込んだ。飯は熟する、炉上は汁鍋と代る。

點しかけの蠟燭をともし、大根と菜葉を刻み込んだ味噌汁にて夕食を攝る。晝食をこゝで濟した後、往復五里の間を急行し、地藏岳の頂上で、僅か一碗の珈琲を用ゐたるのみであるから、つひ數碗を平げた、後、世間話に時を更す。此少舍は定員三人と云ふわけで、奥太郎は、三丁許り下の五葉根の小舍に宿りに行つた。

十月五日晴天

六時に覺める。小芝の上を步むと、ざく〳〵と音がする程、大霜が結んでゐた。沸湯を檢べて見る

と、九二、五五を示した、是によると氣壓は、約五八五粍餘、高さは約二、二七六米と計られる。此數は何等の更正を經ない概數で、晴雨計のより約一五米高く現れた。

朝食を終り、荷をまとめて小舍の外に出る。白峰三山は昨日よりも鮮かに見えたが、白樺の梢が少し妨げをする。下の小屋の方がよく見えると、皆が云ふより、下つて見ると、白根は今、朝日をうけて明暗の工合がかつきりと、山の皺も雪の模樣も。農鳥山の鳥形と覺しき所は、頭を下方に尾を振ひたつた獵犬が、何物か見出して、將に飛びかゝらうとしてゐるように、輪廓をとつた初雪が薄すらと際たちて見えた、是が野尻氏の言はれた、農馬農牛かもしれぬ。農鳥山の左方に雪の高峰が顏を出す、多分惡澤岳であらう、「山岳」二年三號で辻本氏は、鳳凰山より赤石山を見しと云れたるも、ちと疑はしい、該峰は此連嶺中處々にて見ゆ。

十、蘆安——甲府

六時半小舍主に答禮してでかける。今日は甲府迄八里餘りの道で、下りではあるし、里に出るんだから急がない。道や峠の位置を探り乍ら、十一時十分に湯塲に下る。

晝食を喫ひ、源村新町迄送つて貰ふ事にして出かける。橋を渡り左岸に徙り、大曾利小曾利を行きすぎようとした時、奥太郎は自分の家に廻つて行くから、此下の磧で待つてゐろと、云はるゝ儘そこに行つて、路傍の石に憩ふてゐる。馬子が栗の材木を負ひ、馬にも澤山つけて下つて行つた。駒塲から下に下ると、柿の木がもう葉衣をぬぎ、黄熟した果を、重そうに垂してゐる。今迄數日間深山の客となつて、主に青いものと白いものを、見せつけられた目には、殊に奇麗に感じた。夫から下に行くと、所々で秋穫をしてゐた。新町迄行つたが、馬車はもう午前十時迄に、出きつてしまつたと云ふ。俥もない。仕方なし百々迄送つて貰ひ、案內者を慰勞つて返し。俥（龍王迄迄三十錢）を傭ひ、田の

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

◎地藏岳及鳳凰山　鵜殿

岡を經て釜無川を渡り、龍王より馬車（甲府迄九錢）を驅り、午後六時甲府の客となる。

十一、附錄

藥師岳の位置に就きては、人々により意見を異にしてゐるようである。○「山岳」二年三號五七頁鳳凰山第二回登山註記によれば、辻本氏は、觀音岳の北にある一峰を、藥師岳とせられ、砂拂と觀音岳との間にある一峰は、遂に名稱を與へられなかた。勿論觀音岳及び其北方にある峯より、低いには相違ないが奥太郎は之を藥師岳と云つた。其西南方には主文に記した如く水を湛へた石がある、是れ「ハンドブック、フオア、ジャパン」の記事と一致し、「山岳」四年三號六頁所載の、鳳凰山附近圖にある藥師岳の位置とも一致しおるゆゑ、余は之を藥師岳と信ずる。○「山岳」四年三號十頁には、砂拂岳なるものあるも、そは藥師岳の東南に突き出す、一つの尾嶺に過ぎざれば、岳なる名稱を附するには、甚だ小に失すると思ふ。觀音岳の北方の一峰は、藥師岳より著高なるも、位置の偏つておる點から、古人の注意をひかずして、自然名稱も附せられなかつた事だと思ふ。藥師觀音兩岳及び右無名山は、地藏岳と云ふ總括的名稱中に置き、其各角の名とするがよい。是等は地形學上獨立せしむべき價値あるや否や疑はしい、若し强ひて名稱を冠するならば、附近諸峰の佛名を犯せるに因みて、不動岳か大日岳と稱するがよいと思ふ。色々と古事を引いて考證すれば、鳳凰地藏の山名の起りをも討ねゝばならず、際限がなくなるから、此邊で切り上げる。

甲斐駒山脈の成立と野呂川の變遷○「山岳」三年三號百二頁木曾山脈附甲斐駒山脈記事中にて、小島烏水氏は、白峰山脈は、甲斐駒山脈より後れて出來はしまいかと、又野呂川の左岸の古世層で、右岸は主に花崗岩のように說かれてある、私の、野呂川上流から段々下つて、深澤邊迄來た間の所見によれば、少し夫と異ふように思ふ。即ち、右岸（下流に向つて云ふ）は、全部古世層から成り立つてゐ

るも、左岸は野呂川に入る溪流中に、往々花崗岩を見るのみ、其他は大抵右岸に同じく古世層で、殆んど甲斐駒山脈の中服迄及んでゐる。是は本山脈が後れて噴出した爲めで、其際御隣りの白峯山脈の一部分を、自分と共に、持ち扛けたものと思はれる。「大日本地誌」第三卷百五頁には「……白峰山脈の北部にある白崩山、仙丈岳の東方には、粗粒の閃雲花崗岩よりなる一山塊あり、古世層を破りて噴出せるものにして、駒ヶ岳、鳳凰山、地藏岳等の諸峰を隆起せり……」と、又「大日本地名辭書」二千三百六十一頁には「……新花崗岩の屹立せる層は、赤石連山の北部にある駒ヶ岳に於ける如く……」と、又「農商務省地質圖」には、古世層が野呂川の北岸一帶に亘つて、記してある。是等は本山脈が、白峰山脈よりは、後代に出來たよう記し、野呂川の北岸は、主に古世層である如く示しておる。若しそうであるとすれば甲斐駒山脈成立前の野呂川上流は、一旦今の甲府盆地の方に、朝したものであるまいかと思ふ。猶再考を要す。

例により次に、登路の巨離、標高、所用時間を表示す。

地名	月日	發着及び觀測時間	里程	温度	標高
芦安湯場	九月四日	午前八、〇〇	—	一四、四	七四三
夜叉神峠に至る分岐點	全	全九、五〇	一、〇〇	一八、〇	一、四三八
清水檻現	全	全一〇、〇〇	〇、〇八	一七、八	一、七七六
刈安	全	全一〇、二〇	〇、〇五	一七、八	一、八〇四
堀切	全	全一〇、三〇	〇、〇五	一六、一	一、九五九
杖立	全	全一一、〇〇	〇、一五	一三、九	二、一七〇
セバヨコテ	全	全一一、一五	〇、〇五	一三、九	二、一六四
大木場	全	全午後一一、二〇	〇、〇五	一四、五	二、二六一
切明ノ小舍	全	全一二、〇〇	〇、〇七	一五、五	二、三六二

◎地藏岳及鳳凰山　鷄殿

◎百拾年前の富士登山記　笠間

辻	全	全	全	〇、三〇	〇、〇九	三二	一五、〇	二、五三〇
ノ小舍	全	全	全	〇、五五	〇、一一		二二、八	二、四八一
南小室	全	全	全	一、三六	〇、一四		二一、一	二、七〇〇
砂拂	全	全	全	二、一五	〇、一八		一〇、〇	二、八四六
地藏岳	全	全	全	二、四〇	〇、一三		九、〇	二、六二七
鞍部	全	全	全	二、五五	〇、〇七		八、〇	二、六九七
賽ノ河原	全	全	全	三、〇〇	〇、〇二		七、八	二、七七〇
鳳凰山	全	全	全	七、〇〇	四、一六		—	—
計	—	—	全					

測定の要件は前例に同じ。登り七時間に下り約五時間を加ふれば十二時間で宮安より一日の登降は容易である。(完)

百拾年前の富士登山記

故　笠　間　亨

本書は曾祖父笠間亨、加賀國大聖寺藩主の命に依り、代參として今より殆んど百十年前、享和三癸亥年六月、富士山に登りたる記事なり、頃日家藏の舊記を整理するに際し、之を篋底に得たり、筆に任せて日記中に記載したるものと見え、文甚奇にして更に練句の形跡もなく、登山復命書の草按とも見るべきものなれば、文。書翰體に類する所もあり、文意明瞭ならざる所もあり、又重複の處もあり、加之の記事の體裁前後疎密一樣ならず、是れ蓋し後段東海道は、往來頻繁人の熟知する處なるのみならず、同年春季江の嶋代參の時、悉しく復命したる事もありしに由るものならん、兎に角百年前の登山記事、珍しき處もなきにあらざれば茲に抄錄す。

明治四十四年十月七日

笠間忠一郎識

富士登山之記

享和三年六月十日陰る、晴る、井上織衛來り、彌富士山御代參の儀申聞らる。

十一日晴る、富士山御代參道中着用、木綿單衣中形壹反相求、代十九匁七分、鷹匠股引甲懸等相求む。

十五日晴る、予明日發足に付、武州小佛御關所過書差紙案文、寺田氏より來り相調、寺田氏へ奥書に遣はし、夫より御留守居所へ爲持遣はす、文言左の通。

覺

一上下二人

右私儀當月十六日發足仕富士御代參罷越申候武州小佛御關過書御調渡可被下候　以上

亥六月十五日　　笠間　亨兩判

出淵忠左工門殿

內藤勝右工門殿

右御留守居へ遣候處、追而過書相持來る、文言左の通。

此上下二人從江戸駿州へ罷越候條、關所無異議御通可被下狀如件

享和三癸亥年六月十六日　　松平飛驒守內　內藤勝右工門印

武州小佛御關所御番衆中

明日發足に付、幸に御暇乞申上る、御最花金貳百疋御渡被遊、且又御鹽金子三兩頂戴被仰付。

十六日陰る七ッ半過出立、惣門外にて大野文八、御中屋敷より參候を待合せ、家來を呼に遣はし、六ッ過來候故、同道にて罷越す、內藤新宿追分にて休み、萩久保（追分より一里餘）茶屋にて休み、素麪を食し、下

◎百拾年前の富士登山記　笠間

高井戸宿、上高井戸宿、茶屋にて休み、小泉瓜を食す、此邊瓜多く有り、金子村宜しき茶屋あり、馬鶉籠等あり、此所にて飯を食し高井戸より一里半出處より日野歸り馬、有之、乘る、日野まで貳百五拾文、布田五宿下石原上石原等五宿代り〳〵馬次いたす、皆旅宿も有之、府中茶屋泊等宜し、大社も之有、賣女も有之位の町なり、茶屋にて休む、青柳村、昔は此處より日野まで直道あり、先年玉川洪水之節、道損じ、當時立川通り改まる、昔の道より少し遠し、立川村は玉川の川端にあり、茶屋等宜し、玉川洪水にて、往來歇候節は、泊も有之由、玉川舟渡なり、前後枝川橋あり、日野是より歩行いたす、茶屋にて休む、是迄折々雷鳴小雨、陰晴定なし、雨具用ゆるに至らず、日野出口小坂あり、坂の上は臺にて廣原平地なり、畑林等有之、臺の上平地の處、壹里餘、平坦にて道よろし、下り口少し、下り坂あり、此處にて小雨過る、樹下に立ち晴を待つ、坂下に大和村茶屋にて休む、是より八王寺迄、八丁河原なり、和田川歩渡り七ツ過頃、八王子へ着宿、新野與五右工門と云、當所本陣の由、則宿の世話にて此處より問屋帳申付る、附出に付酒代として貳百文遣はす、明日より輕尻一疋申付る、宿賃一人百五拾文、暮合雨降る、今日出立に付、家來一人召連れ、文庫爲持、富士山寒氣甚敷由に付、紬綿入壹ツもんば胴着壹ツ持參、其外髮月代道具一通り、小中折五帖計、湯上浴衣甲懸手掛簑足拭蠟燭氷砂糖一曲、山上水無之に付、渴を治する爲なり、今日着用の分は、帷子、襦袢、木綿單衣、薄絹羽織、縮緬腰帶、股引、甲懸、メリヤス、石筆、鼻紙、袋扇、大少引廣柄袋笠小佛御關所過書、上下貳人予、家來一人は麻疹一人は老人にて、道中無心元由に付高澤氏家來、南江村市右衛門と申者召連る。

十七日陰る。六ツ前頃發出、千人町に岐路あり、甲州は左へ行なり、川原宿八王子より此處より谷へ入る、駒木野宿川原より一里余四五丁問屋にて休む、御關所より手形指出す、昔は小佛に有之候處、其後駒木野へ引け候由、依之唯今にても小佛御關所と云、坂あり、小佛宿茶屋にて休む、宿はづれ右の方に小佛堂あり、

此山中より出でたる大日如來と云、小佛峠宿より絶頂茶屋迄廿六丁と云へども、廿丁斗と云ふ、是處武州相州の境なり、小原迄下壹里五丁と云ふ、峠茶屋にて休む、赤飯有之、下り坂道甚あしゝ、石高く嶮なり、板橋村小原宿十七丁坂あり、與瀬宿、此處少し廣き野あり、角屋と云茶屋にて温飩を食す、此茶屋の家の、横の細小路へ入れば、二た瀬起と云ふ近道あり、道細く川端へ下る、坂甚嶮なり、坂を下れば直に舟渡あり、渡守は川向に居る、此處へ來り迎ふ、舟賃一人四錢なり、川を越て數瀬村、此村を出はなれて又川原へ出る、右の川の上にて水灣の處なり、此處又々舟渡し賃四錢、舟より上り、坂あり、坂の上則吉野宿なり、此川は郡内川と云て富士裾野山中宿、湖水より流れて、甲州郡内の水不殘落合、相州馬入川と成海へ入る、與瀬より本道は右の方、山際を廻り、吉野へ出るなり、吉野茶屋にて休む、茶店の主人云、此處相州の内地狹少にして、郡にするに足らず、因て縣とす、此邊を津久井縣と云由語る、予往て宿の前後の表木を見るに、皆津久井縣と書し、次に宿の名を書す、主人の語據有り、此邊山々幾疊土地狹少田なし、米は八王子の方より來る、酒は信州松本より來る、麥作斗なり、桑田多し、絲を多く出す、郡内絹を出す、郡内川鮎名産なり、江戸八王子甲府へ出す甲府へ十八里江戸へ十八里と云、大鮎一尾四十錢斗、吉野宿出口より左の方坂を下り、郡内川の際へ下る、是は右の方の山より流れ出る小川有る故、郡内川へ落口の處に橋を架したるもの川際へ下るなり、橋を越れば又坂を上る、藤野宿出處左は郡内川、左切岸嶮ち深し、右は山なり。山と川の間少し畑あり、關野宿、是より馬に乘る、宿出口に坂あり、依て馬より下り歩行いたす、此坂も前のごとく、右の山より水流れ出る故、郡内川落口の處に橋を架したるものなり、川際へ下れば暫く平地あり、是より馬に乘る、此川を相州津久井と甲州の郡内との境とす、依て境川と云ふ、此橋を越ゆれば又坂なり、坂の上に關所あり、出入共に過書に及ばぬ、江戸の方斗に門あり、甲州の方には少の柵のみなり、此邊人家なし、番所一軒屋なり、郡内川の方に番所あり、是より二三丁隔て、諏訪と云村あり、依て諏訪

の御關所と云由、此境川の奥に、武甲相と云山あり、武州甲州相州の境の山なり、此關所の様子相知不申候に付、御關所前より下馬いたし、笠をぬぐ、指したる御關所とは見へず、張番にても無之、居役所と見へたり、上の原(カミノハラ)七ッ前、此宿に泊る、大和泉屋と云、此邊にては尤奇麗なりと云得共、甚廉なり、其餘はむさきことはかり知るべし、伊勢屋と云もよしと云、葉種屋の由なり。

十八日夜前甚雨、今朝雨歇、重陰冥々、六ッ半過比起五ッ過比發出、出口より坂を下り、川際へ下る、是鶴川なり、郡内川は上原の先にて既に別と成、此鶴川上原の邊にて、郡内川へ落合せ、鶴川假橋あり橋を越て直に鶴川宿なり、問屋泊りよし、上原より是迄馬に乘る、是より大野馬に乘る、此處にて鮎を食す、大聖寺にての八月時分の落鮎よりも大なり、價三十二錢、味大聖寺に比すれば淡し、江戸玉川の鮎に畧同し、此處より坂を上る、甚だ長し、山の脊通りを行、是を長峰と云、右の方は鶴川の岐川流る、左は谷或小山あり、其向に又山あり、其山の彼方を桂川流る、此邊より郡内川を桂川と云、源迄同名なり、此長峰の道の右に小池あり、長峰の濁池(ニゴリ)と云、土人云、此池甚深し、富士外八海の一なりと云、坂を右へ少し下れば野田尻宿なり、是より予馬に乘る、出口より又々坂なり、長峰に似たる處少々有、矢壺村、是より猶々上り坂なり、右の方は犬目山の高山にて、左りは深谷なり、此山の岨道なり、此處を座頭ころがしと云難所なり、此道より下は犬目山の尾、幾ツも岐と成、故に道を附がたし、強て道を附くれば、坂多く出來するなり、依て犬目山の岨道にすれば高く登るといへども、上り下りの損なく、道も近く勞も少き故、如此岨道に附たる物と見ゆ、予此處も馬上にて行きしかども、能く々思へば危き事かぎりなし、犬目宿予、是より歩行、大野氏のみ是より下り坂なり、坂の內下鳥澤村より出茶屋あり、此處にて休み、晝飯をいたし餅を乞、此處大野氏馬を譲る故予乘る、下鳥澤宿先の茶屋より是迄十丁計、皆下り坂にて、少も平地なし、予直ちに乘る、上鳥澤宿、昔は小西といへる由、下鳥澤と大方續きなり、此處より平地となる、田畑も少々有之、杜川の際へ出る郡内川

の上なり、此桂川の際通り、相州甲州境の諏訪村へ出る道あり、甚難所にて、馬駕籠不通、少しは近き由去共處の者より外往來なし、猿橋宿入口橋あり、桂川に架したるなり。此桂川前後皆谷川故、橋を架する處なし、馬入川より往來皆舟渡なり、此處初て橋あり、此處僅の間、川の兩方より岩壁指出、狹く相成候處に橋を架したり、水迄は甚深し、依て橋杭なし、橋長さ十六間計、水迄深さ三十三尋と云、橋を越れば直に猿橋町なり、猿橋は此邊にて繁華の地なり、八王子より是迄、町立の處なし、此町皆板屋なり、橋を不渡、直に行道あり、岩殿山への道なり、是より近く見ゆれども壹里有りと云、猿橋問屋より歩行いたす、駒橋宿問屋より馬に乘る、宿出口より岩殿山近く見ゆる、右の方にあり往還より桂川を隔て間近く見ゆる、岩殿山八分目計に大成岩あり、上は平地にて廣し、武田の臣小山田信重、此岩上に城を築き居す、池二つあり、清水涌出る、一つは小山田の飲水なり、一つは馬を洗所とす、其水溢れ流れて岩壁に添て下る、數丈の瀑布となる、駒橋の大道より細長く白く見ゆるなり、池は何れの山にも有物成共、八分目已上の處にて涌出、瀑布となる事は甚奇絶なり、大月宿問屋より歩行出口に岐路あり、右は甲府道なり、桂川橋を越谷へ入る、左は富士山道なり、桂川に傍し行くなり、此邊谷廣く稻田多し、田野倉村、大月より貳拾丁計、甲州海道にあらざる故、問屋なし、名主にて馬を次ぐなり、是より馬に乘る、四日市場村（田野倉より是より壹里計り）より予歩行、大野氏馬に乘る、尤名主にて馬を申付る、此より末は皆名主なり、問屋なし、井倉村茶屋あり谷村（ヤムラ）此所甲州の代官の手代居す、代官は甲府近邊石和（イサワ）と云所に居す、石和より此谷村へ手代五六人來居して、此邊郡內の仕置を申付るなり、役所もあり、萬事の仕置大半此所にて相濟由、町立甚美麗にして、繁花に見ゆる且大なり、町の中程に役所あり、是より入口の方を下谷村と云、町の後右の方に、古城山あり、但馬と云者居すと云、未詳、此地江戸より寒し、夜改帳を用ゆる事は極暑暫の由、夜ふとんを敷、ふとんを着するに熱にいたらず。

◎百拾年前の富士登山記　笠間

◎百拾年前の富士登山記　笠間

十九日晴天五つ頃發出、大野氏馬に乘る、予歩行、此間桂川橋を渡り、川の右を行くなり、十日市場村出口茶屋にて休む、酒肴等出す、此處名主にて馬申付候得共、百姓のみにて常に傳馬なき故、田へ出候馬を呼に遣すと云位故、おそく成候半と存じ、是より歩行いたす、谷村より是迄十八丁なりと云小沼村町なり、板屋にて谷村に次べき程によし、名主へより馬の事申付候得共、無之由、久敷相待候得共右の趣故、是より又々歩行いたす、富士山全形を見る、右の方に阿栖村道あり、此村に富士内八海等一の湖水あり、池は小なれども、甚深きよし、下吉田村の出茶屋あり、是にて休み、富士登山の様子委く承る、此邊岐路多し、能々尋ね行べし、下吉田村皆百姓家なり、四五丁を隔て上吉田村、是は町家なり、左右町家の間々に御師多し、皆板屋なり、入口に右の方に甲府並人穴道あり、人穴へ是より九里、富士の裾野を行、人家なし、人穴村善左工門と云者人穴を預りて、みだりに人を不入と云、扨上吉田村御師田邊十郎右工門と云へ參る、是迄の道中にて承合候處、十郎右工門は江戸の講中多く有之、人物も宜く、廉末成事なきよし、其上此方より御師は誰へ參ると云事を極めて行かざれば、入口の處へ多の御師より人を出し、參詣の人を留む、此時定りたる御師なければ、彼是と申聞け候て、殊の外手間を取る故、此方より誰方へ參る段、相斷候得ば、手間取なき由なり、又道にて參詣の人數並生國等委敷御尋、是は山あれ、怪我等是有る時尋る爲と云、八ッ比御師田邊氏へ着いたし、茶漬を食す、下吉田邊より小雨登山に付、入用の定書有之。

一登山所々入用役料〆　八十六銅　一登山御札　四十八銅
一案內壹人　三百　銅　一胎內案內　百　銅
一綿入損料　百　銅　一鈴原迄馬　二百　銅

右之外にも色々有之候得共、此方入用にもなき事共故略之、登山の節、山にて山役と云て、少々宛錢を取所々に有之、合て八十六銅なり、案內壹人參百銅なり、須走へ連れ行けば、二百文增なり、五百

銅なり、八ッ過比より胎内へ參る、吉田より壹里と云へども近し、裾野の内なり、吉田より少し上る、大堀と云所あり、大雨の節富士より流る雨水此堀を流る、此堀なき時は、吉田洪水と成と云、常は水なし、堀を越茶屋あり、此邊水なき所なり、人家もなし、廣原なり、是より胎内迄八丁なり、八丁の間燒岩大小稜々として歩行かたし、岩の間々に草木生ず、尤大成はなし、皆貳尺計より大成なし、胎内入口、岩少しく高く出る、東南向なり、横穴なり、入口は立て入べし、入口貳尺計の壇を下る、内平坦なり、入口石色黑く質滑かにして、陽起の筋あり、銅佛の衣のひだのごとし、奇成物なり、此横穴奥迄十間計も可有と見ゆる、穴直成故、奥迄明なり、此穴入口より五間計之所に下へ下る孔あり、入口甚狹し、案内の者蠟燭を點し、先へ入る、先足を下し、足がゝりの處をとくと足にて探りて下る、足五六尺下れば、又横へ行なり、平坦なり、奥迄七八間計も有之、大日如來石像を安置す、此横孔の入口に又一等、下へ下る孔あり、五六尺下る、又横穴と成、甚狹し、膝に鞋を着し、手と膝とにて這込事なり、下小石稜々として甚痛む、如此處四五間なり、天より漸廣くして、手と足とにて行べし、起立は成がたし、此横孔深さ十間餘もあるべしと覺ゆ、奥に至れば大に廣し、腰を屈すれば立行すべし、横も二三人は並ぶべし、水は更になし、濕ひあるのみなり、此奥に石の瘤のごとく上より下りたる物あり、予石を以て此石を打かきて持參いたす、裝束大小笠鼻紙袋迄孔の口にてぬぎ捨て、帷子じゆばん壹つに、手拭を以て帶とし、鞋を持つ計、其餘は都て孔の入口に置て、誰も盜者なし、御師より御酒を持參いたし、此孔へ備ふ事なり、代百文なり、其より歸り、淺間社に立より、暮合罷歸候、夜雨降る、淡路守樣御備の御最花貳百疋、御師田邊氏へ相渡、御札等請取る、明日の用意夫々申付る、明朝之節持參の品々、左之通富士山絶頂淺間宮御内陣への備餅、並山中食物無之に付、食用の常の餅、是れは外の食物にては、山氣に當はれて、味を損す、餅は一宿を經ても味變ずる事なし、上戸ならば酒も持べし、酒も味變せず、飯などは山上宿を經れば味變じ、食しがたしと云、且山上の室（ムロ）にて飯等

を炊ぐといへども、雪水を以炊故、飯に成かぬる、其上人により、雪水ゆへ腹痛或下痢泄瀉にいたる故、餅を持參するをよしとす、明日登山半腹迄にて、晝飯を食する故、飯一箱香の物笋の皮に包む、大鞋一人に貳足づゝ、是は下山の時走り下る時に用ゆ、常の鞋二足、是は山上の室にも常の鞋有之といへども、價甚貴し、此類皆旅宿の主人より世話いたし、先達の者に負するなり、旅宿の食事甚よし、家も甚美麗なり、夜蚊屋なし、蚊あり。

廿日晴天六つ時發出候筈の處、をそく相成、五ッ比發出、此時田邊氏家に安置したる神前にて、食行身祿（ミロク）の御符と云物を、水にて人々に飲ましむ、此身祿と云は、昔伊勢國之人、江戸へ出商賣人と成、其後須走に來り、富士山上に入定せん事を請しか共不許、因て吉田へ來り、此田邊氏を宿とし、右の趣を乞ふ、田邊氏之を許す、依之田邊氏の持分七合目の室にて入定す其上に小堂を安置す、近年江戸にて身祿講と云事、大に行れ、殊の外繁昌なり、依て此身祿講中は必田邊氏を旅宿とし、登山にも七合目に宿して、身祿堂を拜する事なりとぞ、扨發出之時、旅宿の主人田邊次郎右工門、同道にて淺間宮へ參詣いたす、此裏門より出る、此處にて田邊氏に暇乞いたす、裏門外より予大野氏兩人とも馬にて行、登山持參の品馬に附る、此邊淺間社中境內にて、三四丁程松林なり、松林出れば四方皆廣原なり、南に富士山全形顯然たり、東西は山なし、裾野曠々たり、北は甲府の高山打續たり、裾野の內、薄、桔梗、女郎花の類多し、木なし、左の方餘程遠方に松一本見ゆる、賴朝の旗かけ松と云、卷狩の節、旗を掛たる處と云、一里半程にて、中の茶屋と云て、茶屋一軒あり、甚荒果たり、又壹里半にて鈴原、茶屋道の左右四軒あり、此處馬返しと云、是よりは次第に嶮なる故、馬に乘がたし、是迄は次第に上り道なれども、馬に乘べし、吉田より鈴原迄三里といへども近し、是迄所謂裾野なり、是よりは坂なり、何れも鈴原の茶屋にて休む、是より富士山の麓林となり、雜木多、內にもみの木多し、林中道筋に諸堂あり、皆此堂中を通る樣に道を附けたり、是は錢を貪る、爲めなり北室（キタムロ）の淺間宮と云あり、吉

田より右の方に勝山と云所あり、此處の神主守之、此神體は胎内より出現にて、富士山最初の神體なりと、案内之者の咄なり、此案内の者の定は、登山人の四人分の入用の品を持つ定なり、其品は綿入、餅類、晝飯の箱、鞋、大小、雨具等なり、馬返しより案内の者背負にて登るなり、此案内の者を剛力とも云、役の小角の堂あり、二合目室にて休む、今朝は晴天、此山は雲氣起り、忽晴れ忽陰る、此所にて俄に夕立至る、此所にて登山の金剛杖を賣る、登山には必ず此杖を用ゆべし、次第に嶮になり下山の節走りの時にも入用なり、もみの木を八角に削る、持所計丸くする、長短の二様あり、短なる物は常の長さなり、長物をよしと云、予短なる物を買ふ、價三十二銅、夕立に付是より簑着用、次第に小雨となる、其後には陰り雨斗歟、他の山々は晴ると見えたり、富士山麓計の夕立なり、三合目四合目茶屋主人未不來住、五合目茶屋にて、休む、大抵此邊半腹と覺ゆ、此邊より中宮と云、春臺先生の記事に中室と書したる所なり、予中宮と書きたるは須走口に中宮淺間宮之額あり、依て中宮と書す、此中宮は五合目より以上、半腹の所を云、茶屋は猶林中にあり、是以上樹木なし、草は折々あり、石楠もあり、峠に成境、五合目の上に右の方に鳥居あり、小御嶽石尊大權現の道なり、是より社迄十二丁、西に堂あり、大鳥居の神主の持分なり、大鳥居神主は、上吉田淺間社の神主なり、富士神主とは不書、富士大宮司と云は駿州大宮の神主なり、富士半腹より樹木なし、然共山の形に依て、樹草の山へ高く生上りたる處と、又餘程卑迄雜草なき處あり、樹草のある處峠と犬牙相接するが如し、併し大山の麓の事なれば、人目に及がたき故、とくと山の形勢を知らざる者なり、林中の長き處を行けば、一山ことごとく林中、長しと覺ゆ、早く砂の所へ出たる者は、一山皆林中些少にして砂多しと覺ゆ、是大山なる故人目の不及なり、山麓はことごとく林しなくといへども少し上れば山の形ち高く、岩など起りて雪もずり落ざる處、樹木半腹迄も生ひ、又地形窪て、雪のずり落る處は半腹に及ばずして砂となる、山の全體摺鉢を覆たるごとしといへども、大山の事なれば、岩などの處は高く、砂の所

は卑し、谷と云程にはひくきもなし、此小御嶽道も、山の半腹を横に行なり、其道の間、折々峠にもなり、林中になる、是右に論ずる如き故なり、此小御嶽宮は山の少し高く起りて、瘤に成たる所にて、少の平地なり、尤林中なり、外よりの道なく、吉田口五合目より行斗なり、故に宮は富士の方に向ひて外の方を後とす、風烈敷處故、宮の傍ことごとく石にて疊み、屋上にも石を置く、外より見れば石室の如し、入口少し明るき斗なり、尤五合目より以上の室は、皆同様の製作なり、小御嶽より又本道へ歸り、五合目五勺へ出る、夫より六合七合各茶屋あり、室なり此茶屋一軒の處もあり、三四軒斗有之處もあり、間々にも室あり、五合目迄草木あり、此處より樹なし、草は折々にあり、六合七合より草もなし、燒石燒砂計なり、稜々として足を損す、砂と云も常の砂とは異なり、山上の石寒中にいてわれて砂となりたる物故、大さ大豆位なり、山上の石も其質皆燒たる物の如し、實密の石にてはなし、虛枯したる物なり、色も赤色にして、焦れたる色なり、山峯皆岩なり、此岩の質も右の通りなり、此岩寒中に凍り、いてわれて砂となり下りたる物なり、此石砂より外、他の物一つもなし、予絶頂に小白石を二ッ拾ふ、誠に此邊にては絶てなき物なり、予何ぞ持歸りて富士に禪定したる印を得んと心懸候故、少しにても奇なる物あるならば、拾はんと存じ、眼をくばり候處、此小白石を拾ふ、後に様子を考るに、富士山の神、此山の砂をおしみ給ふと云傳ふ故、此山へ禪定の者、山下より石砂を山の上の方へ投上る事なり、中には山下より石を袂にして、絶頂へ置く者も有よしなり、左すれば此白石も、山下より持參りし石にても有べしと思ふなり、故は他にてケ様の石の絶て無き故なり、此白石實稠の物にて、他に比類の石なき處なれば、此疑あり、七合目、身祿の堂あり、木像を石室に安ず、八合目に宿す、暮合なり、此處にて寒さ強き故、持參の綿入一つ、もんぱ胴着一つ、是迄着用の單物一つ且吉田御師にて借用の綿入一つ、都合四つ着用いたす、猶夜に入て下にふとんを敷、上にふとんを置くに寒し、吉田より是迄は單物一つに襦袢に薄絹羽織着用なり、夕立のする時さへ寒からざりしに、中宮

よりは少しは寒さを覺へたれども、猶八合の泊迄は其儘にして來りしが、泊りへ着と、其儘、右の服を着用するに猶寒し、爐によつて飯を炊く、火にあたる旅舍は地に莚を敷く、此邊水なし、飯を炊には雪を取り來つて、屋上に置き、日中に溶るを下に桶を置き、雪水を貯ふ、又雨降りに桶をば多く並べて、雨水を貯ふ、依て茶壹椀五錢なり、器物等を洗たる水を猶貯へ置き、登山者の鞋にしめす、此水壹椀價壹錢也、扨旅舍にて飯を炊き、食し汁を煮る、雪水にて炊きたる飯故、其味常の飯とは甚あしゝ、煮粽たる樣成る物なり、空腹といへども飽程は食しがたし、持參の餅を食す、六つ比より雨降る、雷鳴、其後歇雷鳴近く聞ゆ、平地にて聞たると異なる事なし、山上にては足下に鳴と云事有之候得共、常に足下に鳴計にても有まじ、今夕は山上に聞ゆ、唯常よりは近く覺ゆるのみ、異なりとす、八合目迄吉田領なり、是より上は須走領なり、八合室四軒あり大室（オホムロ）をよしとす、宿賃三人前飯汁粥布團等の代貳朱なり、直段ことゞく皆定めあり。

廿一日晴天、朝早く起出、室の戸口へ出、旭の初て海上へ出るを拜することなり、六ツ前と覺しき比、何くとは知らず、東方に赤く横雲たなびく、其處は海とも、山とも雲ともわかり兼る遠き故なり、尤此日出る方は、武州江戸の方にて、海の見ゆる處にあらず、此赤き横雲出てより、山上も明くなり、少々の物能く見へわかる程になりても、日輪は未出、山中宿の湖水（八海の内）も見ゆる程になりて後、餘程經て日輪出る、落日の時に異なるなし、東方赤雲初て催してより、日輪出顯迄は、短日の半時程もあり、旅舍主人に樣子を聞に、いつも如斯と答ふ、夫より支度をいたし、發出いたす、九合の室須走より來住す、絶頂は藥師ヶ岳と云處へ出る、是八葉の内の一峰にて、富岳の北峰なり、吉田口須口は走八合目より一筋と成て、藥師ヶ岳へ出るなり、此所に藥師如來を安置す、其堂は室と同じ、造作なり、此處室十軒計あり、是絶頂の室にて、戸口は皆外面を向き、淺間宮御内陣の大坎を後にして、町家の如く並び建つ、須走より來りて茶屋をするなり、八葉廻りと云は、是より左東の方へ行くなり、是は

一方は大坎一方は外面にて、東方に向ふ、此所の室を過て內の方大坎に臨む所あり、是を須走吉田口の御內陣拜所と云、是坎の東北より西南に臨む所なり、此大坎を富士の神淺間宮の御內陣と云て、此處にて吉田より持參の備餅を備へ、或は錢を投じて拜をすることなり、昔は皆此坎中へ錢等を投じたりしを、今は此案內の者へ遣すことになり、又扨此大坎より雲を吹出し、西風生ず、坎中慥に見えわかず、暫時晴る事もあり、此時に坎の樣子を見る、雲の薄き時もあり、雲の出るも此處斗にて、富岳の四面は晴れて日輪皓々たり、依之吾輩三四人の形坎中に寫る、我輩西に向ひて日輪を後に負ふて坎邊に立つ、西の方坎中に寫る、形うすき雲の中へうつる故、影虹の如く、紅白赤紫等の輪ありて中央に頭あり、其より下方に胴の形ありて、左ながら生身の彌陀如來のごとし、大サ六尺斗にも見ゆる虹の如し、是れは雪中に雨氣を帶たるを、日の照す故ならん歟、扨此頃は圓形にして、茶碗などの形のごとし、四方共に赤壁にして、甚だ嶮し、坎中へ入ることは成難からん、雲霽れて能く〳〵坎中を見るに、坎底に伏雪あり、雪上は砂を蒙る故、其雪潔白にはあらず、坎の大さ指亘し一丁に至らず、深さ十四五間もあるべし、餘程深く見ゆ、坎の形圓き故、大抵は四方ともに坎中を見るべし、坎中別に異なる事なし、西の方に一方砂の坎底へずり落たる處あり、是も甚嶮なりと雖ども、此處より坎中へ入る事なるべし、其餘はそぎたることくの切岸なり、往古は坎中より烟立のぼる由をいへども、今烟出ることなし、是必此坎中に又深坎ありて、夫より氣を吐出したるを、八葉の峰の岩、寒中にいてわれて、砂と成、此中へずり落て、深坎塞りたる物と見ゆる、此岳の外面は四方ともに峰の岩、いてわれて砂となり、下りたるものなれば、坎中とても同樣の事なり、併し奇なることは、四方皆切岸にて、砂のずり落たる樣に見ゆるは、西の方一方のみなり、又古書に坎中に虎の蹲る如き怪石ありと書す、今は何も異なる石もなし、底の傍は茶碗などの底のごとく圓にして、方ならず、且砂のみなり、此すの外八峰の形狀、峨々として外より來て內に臨み、此坎を繞り護する如し、甚奇なり、扨八葉の廻り道は、

此坎の縁を行くに、八葉の峰峙しき處ありて、峰の形勢によりて、或は峰の外を行きて坎をはなれ、或は坎の縁を通りて、峰を外にして行く處もあり、一定のことなし、峰は皆岩なり、赤黒色にして焦れたる物の如し、峰も高卑あり、西の方に劒(ケン)の峰と云あり、八峯中にて最高く最嶮なり、大なる崩れ岩を積上げたる様なる峰なり、南方に陶山口(スヤマ)と云て駿州陶山(スヤマ)よりの登山道あり、此處に金明水と云て水の出る處あり、絶頂なり、大さ一尺計岩の間に溜りあり、流れ出る處も見へざれ共、又盡くる事なしと云、此處にも室ありて、此水を人にあたへ、錢を貪る、絶頂八葉廻り道に室あり、或は一軒或は二軒、或は三四軒處々にあり、吉田口の室は其數尤多し、劒の峰邊より駿州一國こと〴〵く見ゆ、先正直山下にて沼津邊の海より、西の方原吉原の裾野、富士川、府中の邊、久能山三保の松原鮮明なり、遠州大井川遙かに見ゆる、其先は方角定かならず、西北方は連山幾重となく方角わからず、信州八ヶ峰と云物見ゆ、淺間も北に見ゆると、處の者いへども、遠山の頂に雲かゝりて、わかり兼たり、東北も同敷連山なり、東には相州大山、矢倉澤の山、箱根山、江の嶋、三浦岬、江戸の海、安房上總見ゆる、江戸はわからず、海と陸とは分明なる故に、海の形に依て、江戸在所をしる、目力及がたし、東南に伊豆の岬見ゆる、處の者は色々の附會の說を語る、却て信ずべからず、又西北の方に割れ岩と云峰あり、岩割れて甚危嶮なり、此所風烈しき時は通りがたし、此處にて一たび轉ずれば、吉田より西の方の裾野迄轉べしと覺ゆる程に急なり、四方皆如斯といへども、分て此所危く覺ゆ、扨此峰を下りて內に向ひ、坎の縁へ出る、坎を去ること五六間の處に、御山水(ナンスイ)とて清水の出る所あり、四方片石岩を疊て溜りとす、水僅に三升もあるべしと覺ゆ、絶頂の室此水を用ゆるに、何程汲ても盡る事なし。又不汲とても溢れ出る様子にてもなし、金明水よりは少し多く出ると見ゆ、此山の內金明水と此御山水との二水より外、裾野まで水絶てなし、因之九合より已下水甚大切なり、絶頂水澤山なり、奇と云べし、扨此水彼大坎を去る事漸五六間にて、且高き處にありて、甚だ淺少なり、大坎の深大に比すれば、幾萬倍と

◎百拾年前の富士登山記　笠間

云事も計りがたき大坎の傍にありて、大坎には却て水一滴もなく、焦枯したる處に、僅の處にて清水盡る事なき程に出る事、奇中の奇なり、此清水より吉田口の室前の處へ出る、此室にて暫く休む、八葉廻り壹里ありといへども、十丁も有べしと覺ゆ、扨山上より四方を見るに、南は海なり、山なき故此山の尾つゞきなし、東南に足高山あり、此岳の四合目に比すべし、此山に傍て出たる山なり、北は甲州の高山相重なりたれども、富士とは尾つゞきなし、四五里程此岳の裾野になりたる故、別になりたり、東に箱根金時山、矢倉澤の高山あるも、皆四五里程此岳の裾野に成りてはなれたり、唯東北の間、甲州山中と相州須走の國境に、かご坂と云あり、此處ばかりは少しつゞきたり、併ながら富士の高きに比すれば、十分にして一分にも及がたき程の山故、尾つゞきと云がたき程なり、四方に尾つゞきなき、此處少しづゝきたりと云のみ、他の連山多き山より見れば、此位の處は尾つゞきとは云はざる程の事なり、扨下山道は、此茶屋の前登る時の道より、少し東方より下るなり、是須走への下り道なり、此時吉田より持參の大鞋を着す、先常の鞋を着し、次に大鞋を重ね着するをよしとす、大鞋にあらざれば、彼燒砂の稜々たる内へ下る勢にて、足を踏込故、鞋の外へ足出れば、其處痛故、足の外へ出ざる樣に、大鞋を用ゆる事なり、此處を走りと云、一歩足を下せば、登る時の三歩程を行く、其勞甚だ少し、走り下るべし、徐歩すべからず、急なる砂の處を下る故、自然と其勢走るべし、此時金剛杖入用なり、大聖寺にて片野村、大池の西砂山の處より池の端へ下に同じ、夜前宿したる八合目茶屋へ立より、食事等いたし、右の下山の用意をいたす、絶頂より是迄は眞の走りにはあらず、此八合目より眞の走りとなる故、此處にて下山の用意をするなり、尤も夜前泊りに入用の品のみにて、他の用なき物は、今朝此宿に預け置き、此時持參するなり、是より須走口へわかれ下る、是より大走りなり、須走口六合目室に休む、夫より一合目茶屋に休む、是より須走迄三里八丁、馬返し迄一里八丁なり、一合目下に草木有り、林中となる、是より上は木なし、草計なり、吉田は五合目の如し、是前に

論ずる如く、山の形勢に依るなり、林中些少なり、林中多は雜木、折々は唐松も有之、林中宮社多し、茶屋にて休む、是より馬返し迄十八丁、馬返し茶屋にて、又休む、是より須走迄二里なり、此間燒砂原にして、草木偶有之、一合目より是迄は、林中なり、是より須走迄砂原なり、二里の間下り道にて、眞直なり、少しの屈曲なし、道の左右に、江戸町人よりの寄進なりとて、木を植る、近年の事と見えて甚小木なり、數年の後は並木となるべし、林中茶屋迄綿入等着用いたし下りしが、次第にあつくなりし故、此處より單物一ッと成に、猶あつき程なり、山上と山下とは、其樣子甚異なり、先夜前八合目にて泊りたる時、食事成りかぬる、山氣に醉たりと見えて、腹中の樣子、並に全身の樣子も何となく常に異にして、胸塞りたりと覺ゆ、頭痛の氣味も有之、人々顏色土の如し、麓より雲中を通りたる故ならん、山上にて雲氣下より揚る、忽晴忽陰る、山麓に至れば常のごとし、人々の顏色も常に復す、腹中も亦同じ、馬返し茶屋に休し時、夕立又歇、須走迄人家なし、茶屋は皆出茶屋にて、六月七月富士參りのあるとき計、茶屋をするなり、七ッ前須走着、桔梗屋に宿す、此處富士山の御師三十軒餘有之、皆旅屋なり、御師の家も町並にて、各表札を出す、吉田は前に各門あり、表札を掛、百軒の餘有之也、須走にて夜中蚊屋なし、富岳陰る。

廿二日重陰冥々、五ッ過時分發出予步行、大野氏馬に乘る、此邊燒砂にて田畑なし、松林のみなり、萬物皆他所より來る、みとの村、此邊より田畑少々有之、此邊も猶裾野にて、皆下り道、砂地なり、岐路あり、右の方は吉野より吉原道、又ぐみ澤より沼津道なり、又三嶋道なり、左は御殿場より三嶋道、又足柄道、氣賀道なり、予氣賀へ行なり、一杉お茶屋あり、發句原（ホックバラ）村御殿場（テンバ）村町立宜敷、茶屋多し、町中三辻あり、右は三嶋道、左は足柄道、氣賀道なり、須走より五十丁一里にして二里と云、常の二里拾五丁程ありと云、駿州駿東郡相澤庄（アイザワノシヤウ）と云、須走より此邊皆小田原領なり、此村元和二年大阪御陣後、神君江戸へ御下向の時、足柄通御通行に付、此村に御殿立たりと云由、此村より三嶋迄五十丁一

◎百拾年前の富士登山記　笠間　四八

里にして六里ありと云、三嶋は豆州なり、御殿場村問屋へ参り、傳馬の事申候得ば、此問屋は商人荷物問屋故、傳馬は名主へ参り候様、申聞候に付、名主へ参り、傳馬の事申付る、氣賀へは本道にあらざる故、賃錢定りなし、中勘にて帳面に記す、町中に小川橋あり、橋を渡り直に行けば、竹の下足柄道なり、右の方寺あり、眞經寺と云、此寺内へ入り、堂の前より右の方へ行き、小川の縁を行く、是より在郷道にてまぎれやすし、深澤村東山村新田、此邊迄須走より都て下り道、裾野の内なり、須走より此邊の川、都て相州酒匂川へ落る、相見たる所は南三嶋沼津の方は平原にして、海邊なれば沼津の方へ流るべきに、東北の方高山幾重もかさなりたる方へ流れ入り、谷川となり、屈曲して酒匂川となり、海に入る、此川端通りにも、相州への道あり、御關所もあり、皆小田原の預りなり、東山村より段々上り道なり、乙見坂と云、上り一里半、下り一里と云、上り口はなだらかなり、下りは甚急なり、上り、口八分目よりは、坂急なり、予御殿場より歩行いたす、大野氏馬に乘り候得共、峠の口より代りて予馬に乘る、八分目よりは急なる故、下馬いたす、坂絶頂より西は正面に英蓉峰あり、富士の四五合目の邊に、南方に足鷹山見ゆる、此峠の山續き南に箱根あり、北に金時山あり、其北は見柄峠あり、其北矢倉岳（ヤグラガタケ）あり、是則相州矢倉澤の山なり、其北は須走等より流るゝ川ありて、則酒匂川の上なり、乙見坂上より、箱根の湖水半見ゆる、東南にあり湖水の東の山を地獄ヶ岳と云、則此山の南方に箱根權現まします、此岳の内に、最秀たる峰あり、かもじの岳と云、地獄ヶ岳の北麓に大ヶ岳（ダイ）と云あり、大ヶ岳の東に小塚山と云あり、此二山は共に地獄ヶ岳の北麓の山にて、小塚山尤も小なり、地獄ヶ岳より湯涌出る事後に記す、乙見坂より東の方は相州仙石原村にて、谷口東に向ふ、箱根湖水の流れ、此谷へ流れ、仙石原より宮城野、堪澤、湯本、東海道三枚橋より小田原の南の方海へ入る、仙石原より海は東に當る、小田原も東に當りて、少し北へよる、此谷の奥は、此坂の東より南へ折れて、箱根の湖水なり此山の形勢詳なる事は知れざれども、打見る處は、豆州韮山よりつゞきにて、北の方へ長く走

りて。駿州の方は一面に南北へ長き山と見ゆれども、東相州の方にては、此南北に長き處より、東へ谷幾つも出たりと見へたり、尤も南北に走りたる山の處、則谷の奥にて、山も高く、段々相州へ尾つゞきに出たる山のひくゝ相成、小田原に至て山盡る、乙見坂は小田原よりは山谷を經る事、甚遠くして、深山なりといへども、駿州よりは谷もなく、直に坂へかゝりて、絶頂に至るなり、乙見坂の北に金時山あり、此邊にての高山にて、箱根山より高しと云、頼光の臣金時出生の山と云、甚危嶮にして登りがたし、所の者は祭禮の時、登るに生木にとり付て登ると云、此山西の方は竹の下の領、東は仙石原村の領なり、駿州相州の境なり、尤此山のつゞきの峰通り、都て駿州の境なり、金時山絶頂に、湯の花大權現の宮あり、甚壯麗なりと云、竹の下より建立、神主もなし、此邊の村々より寄附物にて建立、又山上に大石の盤有之、此石に窟あり、金時出生の所なり、仙石原よりは危嶮にして、不可登、祭禮は四月なりと云、乙見坂下り口、甚危嶮にして誠に屏風を立たるが如し、屈曲して下る、絶頂には茶屋もなく、草を敷て坐し、燒飯を出し食すといへども、可飲水もなし、今日の道中は茶屋等も無之處故、須走の宿、桔梗屋にて燒飯を申付、晝飯持參なり、此峠並此邊の山、都て樹木なし、薄茅斗なり、相州宮城野邊迄も、山野共にすゝきのみ、樹木は壹本も見へず、金時山の秀たる處には、林見ゆる、又地獄ヶ岳並大ヶ岳小塚山等、深林にして鬱々たり、是は箱根御關所と仙石原御關所との間の山故、人の通行ならざる様にとの事にて、此木伐こと、御停止の由、金時山の林は危嶮にて登りがたき故と見へたり、金時山も秀たる峰計、林にて、其餘は皆木なし、此峠を下りて、仙石原迄四五丁計薄原なり、村の近邊には畑あり、此谷南へ折れて、溜水あり、此坂の下より此溜水の流れ、東に向て流る、北は金時山より東へ段々出たる山なり、此溜水の縁を通りて箱根へ出ること、御停止にて、道もなし、仙石原村へ參り、此迄の様子を以て、村の名主を尋候處、此村は定りたる名主なし、村中月番にて相廻す由、依て月番の處に參り、馬のこと相頼む、且晝飯を食す、村の下出口に御關所あり、小田原より

◎百拾年前の富士登山記　笠間

一月代りに勤番に來る由、御關所前後兩方に門あり、門外橋あり、橋外より予馬に乘る、此邊都て前の如く茅原なり、右は神戸川にて則湖水のながれ、其向は大ヶ岳、小塚山、其南に地獄ヶ岳高く出る、深林鬱々たり、左の方は金時山よりつゞきの山にて、春まで都て茅原なり、田畑なし、馬方に尋ねしに、村より遠方にして作がたし、此茅を刈て灰となし、田畑の肥しに用ゆる由なり、十丁程行て谷あり、左の方谷の奥へ廻りて又向へ出るなり、此谷を矢落澤と云、仙石原と宮城野との領境なり、此邊の向ふ地獄ヶ岳八分目より、烟立ち上り、下神戸川迄草木生せず、細き谷水流る處、赤く見ゆる處有り、馬方に問之ば、則大地嶽とて、湯の涌出る處なりと云、湯の涌く處ごと〳〵と鳴る由なり、土やわらかにして、湯出る處、湯氣立ち上る、其湯の涌く孔へ、杖などを指込ば、又脇の方より涌出る由、此地狹少にして、家作成りがたし、依て仙石原より汲て、村にて入湯する由。（湯の涌く處は箱根の領分、仙石原より汲むには下の方にて汲むとのこと）仙石原より湯の涌く處迄壹里なりと云、此大地獄より東の方に又同樣の處見ゆる、則小地獄なり

宮城野領の由

と云、扨道筋に臼井と云坂あり、下りのみの坂にて餘程高し、尤も仙石原より都て下り道なり、坂を下り、川緣を行き一丁計にて宮城野村あり、茶屋あり、此村を出て橋を越へ、是よりは川を左にして、右手の山に就て行なり、橋より一丁餘行けば、岐路あり、右は直道にして、宮の下塔の澤の道なり、左の方川の方へ下れば、氣賀道なり、岐路より氣賀迄二丁計、岐路より道あしく馬に乘りがたし、七ッ前時分氣賀村へ着、龜屋と云に泊、此氣賀は宮城野村の內の由、仙石屋、柏屋、龜屋の三軒各家二三軒計持分有之、湯も二壺持たるも有之由、尤地狹少にして家並不揃、其上大家には作りがたき故、幾軒にも作りたる物と見ゆ湯壺の樣子は、岨（ソバダチ）たる山の岸と浴室を立て、山上より流れ下る湯を竹の樋にて、浴室の屋根の處より落し、飛泉となし、病人の痛所を打たす樣に作る、高さ七八尺計なり、常は竹筒を飛泉にあてゝ、其內より流れて壺へ落つる樣にする事なり、常に飛泉としては、喧しく、其上湯もぬるくなり、とばしる掛る故なり。湯は温にして不熱不冷、甚だ人身に適す、氣味薄し、壺は

木の箱を地に埋む、大さ六尺に五尺計、深さ一尺五寸斗、二方に上り屋あり、地面に板を敷たり、其外は土間なり、四方は板屏なり、飛泉の處一身を容るゝ程、板を以て境をなし、湯打たす時、他の人々へとばしるの掛らざる様にするなり、浴室山代に比すれば甚だ麁末なり、仙石原より宮城野迄一里半と云氣賀は宮城野の領内にて六七丁程谷の下なり、氣賀にて夜蚊屋なし。

廿三日小雨五ッ過發出、坂を上り本道へ出る、此間に箱根道、小地獄道、芦の湯道、右にあり、芦の湯へ是より一里計、此山を越て行くなり、箱根へ二里と云、坂を下り半里計にて、底倉湯なり、夫より家つゞきにて宮の下湯、夫より少しはなれ、左の方川の方へ坂を下り、堂が嶋湯あり、道よりは見へず、此邊地狭少にして、山に付て上下屈曲して通る、故に指し亘しは近しといへども、道は甚遠し、大平臺(オホヒラダイ)村茶屋に休む、氣賀より一里なり、是より塔の澤迄、又一里、都て下り坂なり、四ッ過比塔の澤へ着、本湯(モトユ)彌五兵衛に宿す、座敷甚好し、湯は屋の下にあり、坂を下り入るなり、湯壺の様子山代に類す、少し小さゝ、湯の氣味も、氣賀に似て少々香あり、氣味甚淡なり、功能も何に宜しと云事もなく、養生の湯と云、總身温まるによしと云、塔の澤湯のある家四軒元湯(モトユ)一の湯田村藤屋なり、其外に總湯あり、去年洪水の時流れたる由にて、當時なし、其餘町家少々有之、去年洪水にて人家も流れ候由、夫故か餘り廣くなく、全體は山代程に普請も宜しからず、多は茅屋なり、併土地狭少なれども、水灣屈曲の地にて、町の間に橋もあり、左右高山にて、岩壁深樹、或は谿水へ掛作りも有之、風景は殊に宜し、今曉より雨天にて、谿水俄に出候故、處の者網を持出、うぐひを捕る、甚興あり、又此元湯に江戸の者等來り居て、心安く相成、七ッ比より同道にて、橋向ふの楊弓座中村屋と云へ行く、暮合歸る、夜蚊甚まれなり、蚊屋はつる。

廿四日夜來甚雨、今未歇、谿に水出づ、因て今日も逗留、八ッ時分より牛込の研屋左助前に伊三郎と申者、並大野氏同道にて矢場中村屋へ參る、興に依て酒肴を出す、座敷甚好し、伊三郎の舅の隱居

坊主も同じく酒をのむ、夜に入歸る、雨降る。

廿五日小雨、四つ時分發出、左助同道にて歸る、元湯宿賃三人三日の逗留總勘定壹貫四百貳拾四文なり、昨日中村屋にて酒肴代金百疋遣はす、小田原迄人足壹人召連れる、百五十文なり、湯本へ廻れば貳百文なり、小雨に付蓑着用なり、塔の澤の山に塔の峰と云あり、岩窟の由なり、遊行派の寺も有之、塔の澤村の內に橋あり、此橋を渡り谿水を右にして行事拾四五丁、右の方川へ下る道あり、是湯本道なり、直道も湯本村の內三枚橋へ出る、是より東海道なり、扨湯本村は川を越ゆれば、湯の出る村なり、湯出る山は則塔の澤の山と一ッの山にて、東の方なり、塔の澤より湯本迄、道程は半道に近しと云へども、指亘しは四五丁なり、湯の出る山、仙石原より湯本に至つて、皆地獄ヶ嶽のつゞきの山にて、湯本に至て、此山盡る、此山則箱根街道と仙石原街道の間の山にて、兩谷の谿水此湯本村の下にて落合、一水となり、三枚橋へ流れ、海に入る、湯本の湯村は此兩水の內にあり、湯本の湯は、內湯もあり、總湯もあり、塔の澤より家居もむさし、此處見物いたし、彼箱根街道より流るゝ水の橋を越、少しの坂を上り、早雲寺を見物する、北條家五代の石塔あり、昔は湯本村の山にありしを、此地に移せしなりと云、依て此寺を金湯山と云、夫より箱根街道へ出、三枚橋を通り、小田原迄下り道なり、外郎頂沈香一包相求め、出口茶屋にて食事等いたす、是より馬に乘る、酒匂川、川越、役所にて、川越人足賃相渡す、連臺にて越たるに付、別に錢を遣はす、梅澤邊より歩行、馬は大野氏へ譲る、大磯鳴立澤見物、此宿にて泊る、夜雨降る。

廿六日陰る、小雨五ッ比發出、馬無之に付、人足に荷もたする、平塚より馬に乘る、間の宿にて茶屋に休み、西瓜を食す、小田原邊より此邊、西瓜澤山なり、價賤し、五七拾文位なり、此處より予歩行、藤澤茶屋にて休み、是より江の嶋へ參るに付、相對馬に乘る、片瀬村迄宿引來り、江の嶋龜屋へよる、一人貳匁宛なり、料理申付る、江の嶋の前の川舟なし、肩車にて越す、壹人卅六文宛なり、歸りにも

同然なり、當春予江の嶋參詣の時とは川の樣子大に違たり、其時も論じたる通り、此川は砂地の川故、時々變ずるものと見えたり、江の嶋龜屋にて荷物等預け、料理申付置、參詣いたす、岩窟へも參り、獵師町へ下り、龜屋へ參り、食事いたし、夫より發出、片瀨村より三人一緒に馬に乘り、腰越村より七里ヶ濱通り、鎌倉へ參り、雪の下茶屋にて休み、鶴岡八幡宮へ參詣いたし、朝比奈切道より金澤、町屋村、升田屋四郎兵衛に泊る、途中折々小雨、明日舟にて品川迄參り候儀、宿へ相賴む。

廿七日小雨に付、舟の儀相見合せたれども、次第に歇みしに付、五つ半過比發出、舟賃貳貫貳百文の約束、尤も仕立舟なり「似たり」と云舟、五六人乘なり、野嶋村より乘り出す九つ半頃品川へ着く、境橋の詰茶屋へ上り、飯等食し、髮月代いたし、鎌倉屋に宿す。

廿八日甚雨四ツ頃發出、赤羽橋通り西久保邊にて左助に別る、九ツ半頃着蓑笠の儘にて入る。(完)

僧ヶ岳登攀記

吉澤庄作

一、

大波小波の湧き返るが如き、越中下新川郡東南一帶の連山中、南々東の前面にありて、獨り郡山を拔いて見ゆるものは僧ヶ岳（ソウガタケ）である。海拔實に四千八百尺。近く有磯海の碧波と相對して、郡內景色の主題となりて居る

霞棚引く春の晨、霧立ち籠むる秋の夕、さては變化極まりなき雲の姿、あるは滿目蕩然たる雪の

◎僧ヶ岳登攀記　吉澤

裝。其日本海より立ち騰る水蒸氣は、此山によりて四季折々の美觀を呈して居るのである。

梢の若葉も次第に茂りゆきて、野邊の麥も、漸く色附く頃、殘雪の班々たる其頂を眺めると、白雪の間に黑衣の老僧の、頭陀囊を胸に垂れ、手を拱いで立てる樣が、あり〳〵とあらはれて來る。『おゝ僧岳へ坊樣が御座つた。麥の秋となつたぞい』毎年一度は聞く言葉である。

夫れが暑さが增す毎に、頭がボケル、足が太こる。かくて土用ともなれば消えゆく雪と共にいつの間にか姿も見えなくなる。

僧岳の名は是れから來たのである。

二、

僧岳に登るには內山村を經て、黑部川方面より、直に其背面（東南方面）に登るものと、福平村より布施川を溯りて、其前面より登るものと、又片貝谷方面なる東藏村より其側面（西方）に登るものとある。內山方面よりするものは、過半は路が無い。余の二十年以前に登攀したのは此方面よりであつた。ブノよりツヽミガハラに出で、長谷を過ぎて其背面に達し、歸路は同方面なる駒ヶ岳の麓に下り、オノヌマ谷より十二貫野用水に浴ふて內山村に出たので、其間山中にて二泊したのである。此路は遠くて而かも容易で無い。

福平方面よりせば其日の中に福平まで歸る事が出來る。或は頂上より片貝谷の東藏村に下るも宜い。

余等今回の登攀も福平よりして福平に歸つたのである。魚津より福平までは三里、福平より頂上までは約四里、頂上には測量の三角標がある。

三、

時は梅雨の候、朝夕に仰ぐ僧岳は、白雲のかつぎに被はれ勝で、其名殘りなく露れたる美容を望む事が甚だ稀である。此梅雨の頃に於て山地旅行を企つる事の無理なるは承知して居乍らも、早くより一度は僧岳の植物を調べて見たいと思つて、折ある毎に山上なる植物の花季を尋ねて居た、先づ六月の末か七月の初め頃との事を確めた我は、よし少し位は風雨の妨があるにもせよ、其目的たる植物の花季を失すると云ふ事は、忍ばれぬので、先づ運を天に任する事として、いよ〳〵出發は六月二十八日よりと定めた。

前日までは、よい工合に晴れて居たのに、其日になりて降り出したが、今更仕方が無い。是れより先き、同行を約して在つた魚津小學校の植木伊三郎君、同野村小次野君、加積小學校の谷斯文君と共に雨を衝いて、我魚津中學を出たのは、午後の二時過であつた。途中田家小學校に立寄りて、小野外吉君をも收容して一行都て五名と爲つたのである。

一帶の丘陵を左に、布施川を右にして、東布施の片山路を福平村へと進んだ。雨は中々止みさうにも見えぬ。地質や植物などにつき話しつゝ池尻村に着いた頃より、雨は全く晴れ上つた。此處にて布施川を左岸に越え、路の傍なる桂や、葉の白斑面白きマタヽビの花などを愛でつゝ福平村に着いた。

村は高低參差たる山地で、點々せる茅屋は坂地の一部を切り開いて建てられてある。かくて余の知れる福澤氏方に着いたのは五時過であつた。空は名殘なく晴れ渡て、入相の日影が、ぱつと庭前なる杉の木の間より射込んで、こげ茶色に煤けた障子に映て居る。宿の人々、口々に明日の晴天を言ひはやして、余等一行の運強きを賞めた。此夕榮は慥に余等が前途に對する、一道の光明であつた。

一同裝を解き打ちくつろいで、圍爐裡を取り卷いた。福澤氏は村での大家で、室は廣く、建築は頗

丈である。方五尺もあるべき圍爐裡には、これにふさはしい大鍋がかけられてある。爐側に堆く積み上げられたる薪は、遠慮なく投げ込まれて、煌々として燃え上るも凄じい。太繩もて爐の上に吊されたる吊天井樣の「火あま」は眞黒に煤け切つて居る。流しの水樋に落ち込む樋の音は、栗の梢に鳴く蜩の聲と調和して居る。若し夫れ大雪は庭前を壓して擔よりも高く、隣同志の行きかひすら出來ぬ時、一家爐邊に團欒して榾火をつゝきつゝ、栗なり芋なりをあぶり乍らの雜談、或は老翁の熊狩談もあるであらふ、老媼が過ぎ來し方の閱歷談も出る事であらふ。誠に此大やかなる圍爐裡は、家庭敎育の敎室である。又家族會議の會場である、時としては村政會議の議場ともなるのである。

此趣味多き圍爐裡に於て、吾等は明日の日程につき人夫の事や、登山の總てを取り定めたのである。夜食を終へて寢に就いたのは、十時過であつた。嗟吁明日の天候は果して霽か將た雨か、知らず今宵は如何なる夢を結ぶであらふか。

蜩の聲は擔端なる栗の梢より落ちて、朝まだきに眠は覺めた。雨戸を押せば紺碧の空は快晴を示して居る。黑く眠れる一帶の山の端は、今や明けんとすらく、蕩黃色を以てボカされて居る。勇氣滿身の一行は口々に幸運を祝した。朝餉も急ぎしたゝめ、裝も整ふた。導者二人、一人は福澤某、甚だ山に熟せる者、一人は樂山（ラクヤマ）某とて、日露戰役の際工兵として出征せし壯漢、强力豪勇を以て近鄕に響けるものである。

宿を出たのは午前五時、足下輕く行く程に、村を離れて布施川の谷に出た、草葉の露を吹く風も身に凉しく、溪間に橫はれる集塊岩に、溪水の激越して、其飛沫が時々衣袂を襲ふので、思はず胴震ひをする。夫婦岩（メトイハ）を過ぎ、倉（クラ）が下（シタ）にて右に折れて、稍打ち開けたる田間を分け、小谷（コタニ）の橋を渡りて川の右岸に沿ひ、片山路を辿るのである。山麓の叢原、いやが上に茂りあひて、芒、葛、草藤、ヒヨドリ花など、身を沒する計りである。露吹き拂ふ朝風は、谷から谷へ波を送つて居る、鶯は面白き音にさへづりて、下行く水の響と自ら相和して居る。

ゲンドロ、水出（ミヅデ）、ヨガマ、などゝ名付くる處もいつしか過ぎて、魚止（ウヲドメ）に着いた。溪水碧潭をなして居る。此よりは川と云ふよりは寧ろ瀧である。もう途と云ふべきものは無い。岩角を飛び交はし、或は岩壁を攀ぢる。飛沫の爲めに全身屢々水浸しと爲つた。

此かる間にありて最も愉快に感じたのはシラヰアフヒ（毛茛科）の到る處に咲き匂へる事である。徑二寸以上に及ぶ薄紫色の花の、艶麗にして閑雅なる風姿は、誠に譬へ様が無い。それが沸白萬石の水の、岩に激し。石に怒り、しぶき四散して苔滑らかなる壁上にありて、豐富なる葉の間に、稍小頸を傾けて咲いて居るのである。激越せる溪水との對照を得て此植物の天眞の風姿を、遺憾なく發揮して居る。「幽谷の佳人」とは眞に此植物の又の名であらふ。

夫婦竈（メナトガマ）、二又（フタマタ）などゝ名付くる處を過ぎて、行く程に、殘雪の溪間に横はれるを見る。タニウツギは今を盛と咲き揃つて居る。此あたりよりは愛らしき山荷葉や、二輪草、三輪草や、大葉黄菫々菜、ミヤマカタバミなどの群芳が春榮を競ふて居る。胴亂も次第に重くなつた。進んで大殘雪を以て埋められたる大サビ谷（オホダン）に向ふ。約三十町の大氷田、厚さ數十尺に及べる處もあるそうである。

兩側の雪の消え際には、岩鏡の小紅花が咲き競ひ、蒼白い芽を發きかけたバイケイ草や、ハナウドや、一二尺に及べる夏雪草や、メタカラカウ、トリカブトなどの、春綠を競ふて居る様は、正に平地に於ける陽春三月の光景である。

此大雪溪は殆んど絶頂近くまで續いて居る、絶頂を距る事二町計りの處に至り、急に傾斜の度を加へて三四十度となつた。もはや立ちて行くのでは無く、全く攀ぢ登るのである。而かも堅硬鐵の如き雪であるから、殆んど足場が無い。植物採集用のヘラと木鋏とをつき立てゝ、一足づゝ歩を運ぶのである。此時一人の導者過ちて足を失した、あはやと思ふ間に、荷物を脊にしたるまゝ急轉直下、七八間の下にありし谷君を拂ひし時は皆色を失つた。幸に二十間餘の側の崖に行き當り、事無く停まるを

得たのは天幸であつた。かくて多くの時を費して、漸く絶頂近くに達したのである。

是よりは根曲竹、樺、ミヂカヘデ、ナヽカマド等の鬱茂せる密叢に出會ひ、且つ排し且つ行き、辛うじて頂上に出たのである。時計を案ずれば既に一時過ぎ、コケモヽ、シャクナゲ、コメツヽジ、ミヤマホツヽジ、クロウスゴ等の石南科植物は、矮小なる發育をなし、悉く剪定した庭を見る樣である。甚の如く地上に布けるハナゴケの上に、疲れたる體を横へて、暫し展眸に餘念が無かつた。團飯を平げて、直ちに採集に從事した、一叢林を排して、行く〳〵クルマバックバヂサウ、絹笠草、ツバメオモト、ミヤマシキミ、ツマトリサウ、舞鶴草、御前橘、三葉黄蓮、など踏みしだきつヽ、所謂寺屋敷へ出た。廣さは五六町歩もあらふ。斯う云ふ談がある、昔は此處に大寺があつた、それが上杉氏の爲めに落されたと云ふ事である。勿論一笑話に過ぎぬ。其一隅に地を堀りて、側に石を積みたるがあり、是れ嘗て人の骸骨を見附けられた處で、四五年前、我校探險隊の爲めに其髑髏が持ち歸へられて、今は我校に保存せられてあるのである。そも此髑髏は如何なる人の、なれの果てゞあらふか。其遺留品とも云ふべきものは一挺の山刀（ナタ）と、一個の鋏とであつた。或は泥棒であつたと云ふもあれば、諸國巡禮の道者だつたと云ふものもある。斃れて居たのを初めて見た時には、其傍に、尠なからぬ金があつたと云ふ話もある。ゼンテイクワ、タカヂバラ、ナンキンコザクラなどが此あたりに咲き揃つて居る。

＊　＊　＊　＊

既にして穩かならぬ一陣の雲は、我中越の平野を包み、下界より倒に吹き來つて、冷かに雨の頰を舐つて去るのである。導者の一人は叫んだ『いやな雲が出て來た、雨だ、雨だ』果然粉糠を篩ひ掛ける樣に、小雨が降つて來た。横しぶきに降りつける雨は、次第に猛烈となる。篠つくばかりの雨は、さながら、矢ぶすま作つて射かける銀箭か。雨具の用意を怠りし我等は防ぎ樣が無い。暫し白檜（シラベ）の枝

陰に停んで見た、雨風は狂ひに狂ふて來る、山上益鬼氣を帶びて來るばかりである。

嗟吁故剎の靈、忌む處あつて、人の其墟を窺ふ事を欲せざるか。抑も髑髏の靈、心あつて、其靈場を穢せしを怒りしか。意外、意外、實に意外であつた此雨は、あはれ我等が歸途に於ける悲劇の序幕であつた。

四

多寡の知れた一日の旅程。如何に梅雨の中とは云へ、今朝の空模樣にて、まさか今日雨になるとは夢にも思はなんだ、雨具の用意は殆んど無い。只一二枚つゝの桐油合羽を持て居るばかり、それも路すがら根こぎにしたる、シラネアフヒやコケモゝや大櫻草などを包んで居たのである。是等は一纏めとして、合羽は夫れ〳〵身に着る事とした。先きに登りたる雪溪は、迚も下れさうにも無いから、西北に走れる一帶の脊梁を傳ふて高倉（ダカクラ）に出で、大熊谷（オホクマダニ）より歸る事とした。時に午後三時。降り連る雨は、晴れさうにも無い。紙の如き合羽は、早くも雨を通してチョッキを濕して居る。暗雲は四山を沒して、天地只晦瞑。衣袂漸く濕りて、心も自ら沮むばかり。頂絕より一里位は灌木帶で、丈に餘る雜木は、兩側を覆ふて、さらでだに小暗き空が一層陰鬱である。凡そ一時間で、三角標の立てる地點に下つた。是れからは片具谷に向ふ途があるので、兩側の雜木が伐られてある。十丁程もゆきて右に岐れた。是れからは殆んど途が無い、僧岳の喬木帶と見るべき喬木林で、ブナ、ヒトツバカヘデ、チドリノキ、樺コシアブラ、ウリハダカヘデ、等の濶葉樹の上に、降り注ぐ雨の音もすさまじい。リャウブ、シナノキ、クロモジ、ウラジロヤウラク、など押し分け、踏みしだきつゝ行くのである。草葉の上を踏み滑ると、帽子は雜木の枝に跳ねられ、合羽は破れる。樹々の滴は、頭から降り注いで、體はしつぽり濡れてしまつた。途のある方まで遠きかと問へば、導者は云ふ、今までは兎も角路あとは有つたものゝ、

是れから高倉までは全く路が無い。雜木を踏み分けて行かねばならぬ、けれども半里はあるまい。それからは大杉を伐り出した時の、結構な路があると云ひ棄てゝ、がさ〳〵歩き出した。

雜木林に身を投じた我等は、何處と云ふ目當もなく、方角も分らぬ。只導者の呼ぶ聲を便りに、辿り行くので、はては一行散らばらになつた。雪の爲めに曲り屈ねつて、倒れさまに生えて居る、ウリカヘデや、ウハミヅザクラや、シナノキやマンサクなどの、幹から梢へ、梢から次の幹へ、踏み越え、跳ね移るので、まるで猿の藝當である。而かも此方法によらねば此密林中、一歩も分け進む事が出來ぬのである。八千尺內外の高山に於て、偃松帶の密林中へ、迷ひ込んだ人ならでは、斯かる經驗はあるまいと思ふ。雨は稍小止みになつたかと思ふと、又思ひ出した樣に降り注ぐ。互に呼べば、直ぐ一二間の處に聲はすれども、影は見えぬ。おい何處だと問へば、此處だと云ふ。此處では分らぬ、何處かと云へば、直ぐ此處だ、眞直に來いと云ふ。眞直とは何處へ眞直か、それが分らぬ。右か左かと問ふた處で、所詮其居處が分らぬから、何とも答へ樣が無い。人の聽覺も音の方向を知ると云ふ事は比較的不正確の者である。

右へ一歩、左へ一歩、手足は疲れる、雨は頭から釣瓶放しに注いで來る。草は滑る、木は跳ねる。思はず木の根に尻餅突いて、急に起き上らふともせぬ。互に相呼び、相勵して、漸く高倉まで辿りついた。もはや六時である。先に聽いた結構な道はと見ると、殆んど眞立の絕壁で、只足を置くべきだけの段があるばかりで、而かも雨の爲めに、半ば瀧の樣である。

漸く困憊せる一行に取りては甚だ危險である。是より先一行中、膝關節の自由を缺いた者が出來た爲め、殆んど動けなくなつた。是れからは甚だ氣遣はしい。日は漸く暮れんとして路遠く、雨は降りしきりても而も立寄るべき小屋も無い。匐ふが如くにして相扶け互に勵ましつゝ、絕壁を下りて大熊谷に向ふ。一丁許りも下つたが路は益險を加へて進みが中々遲い。暫し木陰に立上つて休らへば、蕭々

たる雨はダンカウバイの梢に注いで、其葉滴がぼんの頸に傳ひ込んで來る、友が煙草探れば、濡れにぞ濡れしポツケットとて、誰れのも用に立つべきは一本も無い、一行相顧みて憮然たる計りである。時は次第に移る、山谷は寥々として四圍暗憺、此有様で大熊谷を下る途中に於て、日が暮れたら一歩も動く事が出來ぬ。衆議一決導者の一人樂山を家に急がしめて、炬火の用意を爲さしめる事とした。

* * * * *

暮色は蒼然として次第に押し寄せて來る。腹は次第に空を告げて、雨は肌を洗ふて居る。氣此に至りて徒らに急がれ、互に鼓舞しつゝ歩を運べども中々に遲い。既にして日は暮暗に迫りて足下漸く覺束ない。岩に躓く友を扶け、後るゝ友を勵ましつゝ行く程に、世は全く夜の幕に包まれて四圍暗黑。又路を探るに術が無い、此くて一歩も動けなくなつた。

此に至りては策の施す様が無いから、葉陰に打集ひ一先休みて炬火の來るのを待つ事とした。既に九時過ぎであらふ、用に立つマッチが一つも無ければ、火の起し様が無い。身神俄に疲れて來る。樂山の來るまでには如何に慾目に積つても尙優に三時間は待たねばならぬ、三時間の我慢だ。雨中、暗黑、寒冷、空腹、思へば萬感が胸に迫つて來んでも無い。されど此塲合決して弱い音を吐いて居るべき時では無い。一同を勵まし、大決心を以て勇氣の鼓舞に努めた。手足の運動を爲して居るものもある。大聲で詩も吟じて見た、唱歌も出る、面白き雜談もあれば、をかしき滑稽談もあつたが、それも一しきりで、後の沈默を破るものは、闇を縫ふ溪川の音のみであつた。三十分……一時間……嗟吁悶えある、身に取りては、闇中の三時間、亦辛い哉。

忽ち一友は叫んだ、遙かの前面に火光を認めたと、沈みはてた一座は俄かに沸き返つた。聲を合せて齊一に呼んだ。一回……二回……三回……山彦は徒らに谷から谷へ消え去るのみで、亦應ふるものは無い。時を隔てゝ呼ぶこと數回、山河は依然として寂漠たるのみ。折しもけたゝましき蚊母鳥

は數鳴聲き棄てゝ、谷から谷へ消えた。さながら惡魔のをたけびか、或はのろひの聲かとも聞かれた。

時を隔てゝ呼ぶこと又數回、復數回……沈寂を破るものは依然として溪川の音のみ。

＊　＊　＊

時を案ずれば既に三時間に近いであらふ。樂山の豪健を以てせば、もはや來るべき時である。……彼は果して滿足に家に達したであらうふか。夜陰の爲めに路を失せし如き事は無かつたか、深壑中或は不慮の災を招いたではあるまいか。……腦神が亂れて來る。寒冷の氣は次第に迫りて來る。友の一人は烈しき惡寒と戰慄を起して來た、此儘に落附いて居る譯には行かぬ。

雨は次第に霽れて二十日過ぎの月あかりの爲めに幾分薄明るくなつて來た。此上は突進だ。一同は勇を振ふて起つた、互に相呼び相警めて下るのである。約三十分も進んだと思ふ時先きなる導者は滿腔の喜びを以て呼んだ。

樂山外二人の壯漢は、提灯を揭げて來たのである。吾等一行の喜びは如何ばかりであつたらふか。かくて膝關節に不自由の在つた一友は、彼等の肩に扶けられる事と爲つて、半里程も下つたのは夢の間であつた。此處には彦三郎の炭燒小屋がある。火は盛んに燃やされて、暫く休む事とした。疲憊漸く加はりて覺えず睡眠を催さうとする、是れではならぬと思つたから、是非一夜を此處に明すべく主張した友もあつたが、强て宿まで歸る事として、矩火を揭げて歩を運んだ。雁又谷（カリマタダニ）より小谷の橋を渡り、夫婦岩のあたりへ來た頃には、雨は全く霽れて月もさやかに照して居た。宿の人々に勞はられて、家に倒れ込んだのは既に午前三時頃で、山の端はそろ〳〵白みかけて居たのである。

濡衣を拔ぎ棄てゝ湯に入つた。直ちに食膳に向ふたが一粒も、飲み込む事が出來ぬ。梅干を乞ひ、熱湯に投じて數椀を仰ぎ、其儘爐邊に打倒れてしまつたのである。

嗟呼大熊谷の一夜……雨中の十二時間……忘れぬ記念。盡きせぬ思出。當時を追想する毎に、慘たる光景は腦裡に髣髴して、慄然たらざるを得ないのである。而かも我等一行の受けたる、其偉大なる敎訓は、僧岳の動かぬ限り、大熊谷より流るゝ布施川の水の絶えぬ限り、長へに忘れぬであらふ。

祖母谷道

冠　松次郎

前號所載、高野氏の白馬山より祖母谷温泉へ降られた紀行文に因みて、鹽頭平より祖母谷温泉へ行く。順路に近きもの概略を、杜撰な日記を土臺として書かうと思ふ、白馬から鹽頭平迄は氏と同一の經路を採つたのだからこゝに略す。

鑓ヶ岳の峰頭に立つて西北を望むときに、少しく注視すれば、朝日岳の尾根續きの、遙か凸端に、二つの三角標を見出し、その手前に偃松で蔽はれた尾根の隆起にはさまれて居る、狹小なれども幽靜なる一小平地のあるのに氣づくであらう、これが鹽頭平で、白馬頂上の小屋から朝日岳の左側面を迂回してその裏面へ出て、それより尙西微北に山稜を攀んで行けば、三時間程で達することが出來る、この丸い盆を置いた樣な靜な水平地は、朝暮、山雲徂徠して斷えず濕氣を帶び、偃松の美、山草の麗は、正に雲の平若くは天狗の小屋場とでも稱すべき所である。

もう此邊へ來ると。白馬よりも土地が可なり下つてゐる爲に、四顧の山岳は益々高大して、展望の面白さは遙に蓮華の群峰を凌ぐ、加ふるに越中平原及日本海は益々近く、立山連峰の崇嚴は、到底白

◎祖母谷道　冠

馬山上の比でない、曾て扁平に見えたる、雄山、大汝、富士の折立は一團となつて、劍ヶ岳以上に尖頂を露はし、劍ヶ岳はその大さを數倍して、萬岳を壓仆せん勢を示して居る、鹿島の槍と立山の間には、穗高山、槍ヶ岳より、黑部五郎岳に到る諸高岳が、雪の縞、岩の襞を見せて、矗々と折れ重なつて、しづまり返つた旦の雲は、これ等萬岳の裾を浸して靜々と沸動してゐる、朝日は妙高山の少し右から昇つて、夕日は遙に三角標のあるスロープの後に沈む、朝も夕も我を睨視してゐるものは矢張立山連峯である、越中方面より見たる白馬は、何等の奇勝も壯嚴もなく、なめくじがはつてる樣で、僅に鑓が鈍頂を拔んでゝ居るのである。

八月十八日　晴朗（明治四十四年）

今しがた運動を開始した雲海の一部は、黑部の谷を奔騰して、鹿島槍や五龍を目がけて信州の方へと落込んで行く、その中から、時々、ゆら〳〵と全容を現す鹿島槍の尨大さは、恰も怒濤を蹴つて行く長鯨のように見える、もう立山連峯の頂上が赤兀になつて、その大雪溪は燦爛たる光を放つた、劍ヶ嶽の中腹に白雲が一筋たゞなはつてゐるのが、湛然として動きさうにも見えない。

高野氏一行の遭難にかんがみ、朝五時十五分、鹽頭平の傾きかけた偃松小屋を出發した、同行者は案內兼荷持の丸山廣太郎、同德十、の二人、偃松の切り明けを通りぬけ、三角標のある處まで行かずに、小屋より第二の凹んだ所から左へ迂回して、あるかなきかの細徑をひろひ、尾根を縫ふて西に南に進路を取つた、丁度一時間も歩いた頃に、梅の倭木が處々に集團して居る、水溜の多い平地を出た、こゝから明かに小川溫泉へ行く尾根も見えるし、遙か右下に、浩蕩たる黑部の川原が大きくゝねつて、小川が紐のようにそれに注いでゐる、川の先は杳渺として水天の界も見えないが、注視してる內に二三と思つた白帆が十幾つかに殖える、其間を縫ふて直江津通の汽船が走つて居る、こゝはもう少し早ければ、所々に殘雪があるに違ひないが、今は全く沮洳地を殘すのみに過ぎない。

左直下から急峻な空澤がなぎ落ちて、遙かの下に殘雪が見える、溪聲も大分強く聞えるようになつた、この澤は祖母谷川の一源流で、谿の行末に白煙濛々と立ち登つてゐるのが、祖母谷温泉の少しく上流にあたる、噴湯のであることが後に分つた、(高野氏一行は此平地より尚尾根を續行して、數時間行かれたと云ふことだ、)澤の急峻なのと人通りの少い爲、全く人跡を認めることが出來ない。のみならず、却つて尾根には明に細徑を通して居る故、どうしても北澤を降る氣にはなれない、廣太郎はしばらく尾根を往復して道を尋ねて居たが、漸く半信半疑で、澤を殘雪を目標にしてひたおりにおりた、降り切つた頃には左から來る本流—鹽頭平より發源する—に合して水勢も非常に強くなつて、大きな雪のとんねるの下を流れて行く、一行はこのとんねるの下をくゞつて身振をした。私はつい三四日前大町で、氷をほしがつた事を思ひ出して、今更ながら生活の變化したのに驚ろいた、廣太郎はしきりにタキがないかを心配して居たが、よい案配になさそうだ。

この近所の全谿を蔽ふて密生してる、大イタドリは實に見事なものであつた、一時間足らずの樂な谷渡を續けて、河原の左の可なり廣い處へ出る、こゝでハンの木や樺の枝で編んだ小屋を二つ見出した、一つは全く頽廢して、その傍に生新らしいのが建てある、漸く人跡を確めて安堵した、後に温泉で獵師佐々木仁次郎に聞いたら、七月下旬越中の人が三人で、祖母谷から小川温泉へ通つた時に造つたのだらうと云ふた、午前八時三十分右より一源流の落合ふ堂に到る、(高野氏一行は先の尾根を續行して、この溪より降つて來られたこゝと思ふ、)「もうこんな處へ來たづら!」と廣太郎が獨言を云ふて居る、この溪水を合せて、祖母谷川は俄にその水量と溪幅を增大して、これから約一里の間、懸崖絶壁を以てかこまれたる。險惡にして豪壯なるセトを形造つてゐる。

これから暫の間は谷の中をのみ下るので、一行は狂奔してる激流と闘かつた、そうして間斷なく櫓の如き大岩巨石の上を匐い登つては飛び降りた、然しいつまでも盡きそうもない絶崖、深淵、奔潭に

◎祖母谷道　冠

驚かされる。

谷が深いからまだ日は當分身體に當りさうもない。いくら運動しても汗ごころではなく、仰ぐと細長い青空には雲の一朶も見えないで、遙か尾根上の新綠は鮮かに日光を浴びて、春先の如き麗かな感じを與へたが、谿谷の動搖はさすがにすさまじいものだ、さつきから劍ヶ岳が鼻先に見える、この大岳は始終一行の當面を壓して。祖母谷を俯瞰して居る、もう裾の雲は動き始めて斷えずその雄姿を變幻させてゐる、この威容に接して恍惚として居た私は、更に谿谷を願みて、磊々たる巨岩を蹴つて飛瀑の如く急轉直下し來る峻流を仰いて、名狀し難い壯美を感じた。

午前九時四十分、漸く祖母谷川と硫黄澤との落合へたどりつき、谷の中へ突き出て居る一巨岩の上で荷物を解いた。岩の上には枯木の燃えかけがちよんぼりと殘つて、空罐が狼藉としてころがつてる、こゝで高野氏一行が暴雨中に一夜を過されたのだと、廣太郎が云ふた、私は四顧して悵然たらざるを得なかつた。それは我々の一行の樣に、道も略ぼ分り。早朝出發したのみならず。好晴の日であつたなら、假令如何程困憊しても要するにたかが知れてるが、今よりも水嵩の多い、七月中旬、風雨の中を未知の深谷で道を失せられて、奔湍で四圍をかこまれてる、此一つ岩の上へ露營をされた、高野氏一行の困苦は察するに餘りありである。

朝早かつたのと間斷なき勞働で、しきりに空腹と疲勞を覺えたから、早いけれども晝食を濟し、約一時間程岩を枕にして谷川の音樂に都會の夢をむさぼつた。

目をさましたのが午前十時四十五分、出發しようとしたが、祖母谷川は直下で硫黄澤の凄流を合せて、渦巻き立つて流れてゐる、最早徒渉どころではないから、左岸へうつることは中々むづかしい。右岸を仰くと十餘丈の懸崖は、碧潭からそゝり立つて、恰も大屏風を立て廻した樣な大きなヒシとなつて、命をからむ蔦かつらは、ぶる〳〵と谷風におのゝいて居る。

このヒシの危險で且迷路であることを知つてる我々は、どうしても奔流を横ぎつて左岸へ出なければならなかつた、然し近所には橋に供する様な木は全くない、止むを得ず廣太郎と德十で、ヒシを攀ぢて木を切りに行つた、私は一人茫然として岩に腰を下ろして、深谷の鳴動に耳を傾けて居た、幾度か流されては直しゝて、丸一時間もかゝつて、ハンの木二本で急造の橋が出來、それを渡つて漸く左岸につくことを得た、やがて溪側へ入ると、ヒシこそないが四五十度もある急斜面の、土がぼと〳〵して足を下す度にずる〳〵とすべる、全身の力を手にこめて、熊笹やハンの若木を命の綱に横にへヅゝた、最早足は手の二分の一の用にも足りない。杖と雜囊が邪魔になる事は非常なものだ、廣太郎に姿內をさせて德十に後から氣を付けさせ、懸命に此難所を熊笹や灌木の逆茂木を押し分けて、可なり高い處まで匐い上つて、又匐い降りた、最後に熊笹も何もなくなつて、萱やよもぎのくちてごろ〳〵になつてる所へ出て、戰慄しながらすべり落ちる様にして。一先づ河原へ下りた。この大ヘヅリは祖母谷中での最難關であつた、天氣だつたからまだしもいゝが、雨でも降つて居ようものなら、尙幾倍の危險と辛勞を感たことか知れない、谿側のごろ〳〵した急な崖、私はそれを一番恐ろしいものに思つて居る。殊に手がゝりでもなくならうものなら、實に懸崖に手を放つ様な思ひがする、河原を少し行つて小さな瀧の上で左の密林へ入つて。小ヘヅリをやり。谷に添ふて可なり歩いて、廣い河原へでゝ、深淵につき當つて又左谿側へ入り、かくして大なる徒涉をすること五六回、小なるヘヅリを二三回、依然左谿側の密林を行くと、午後一時三十分に、二丈餘の絕壁の上で路らしきものが盡きた、細引で荷物を河原へ卸し、交互に警めながら崖側をはい降りて、河原へ出た。こゝで徒涉して始めて右岸に移り、欝々とした森林のとんねるの下に、しだらなく轉がつて居る、苔むす石の上をひろつて三四丁行くと、路らしきものを發見した、やがて行く事又三四丁で立派な林道へ出て、韓々の聲に振り返ると高野氏の紀行にあつた、樋の様な岩壁の內を落下してる、壯大な瀧があつた。それを右に見てその

◎祖母谷道　冠

下の危い橋を渡つて、坦々たる林道を温泉へと急いた、温泉から十二三町手前で、對岸の平地に噴湯が十餘筋盛んに湧き出てゐる。白煙が濛々として夥しい出湯はおしげもなく谷川へ流れ落ちてしまう。

今朝見た噴煙はこれだなと思つた。そして遙かに源流の方を顧みたが、もう山岳重疊して何處をそれとも見分けがつかなかつた。

霞の様な釣橋を渡つて、對岸の温泉場へ着いたのは午後二時三十分、取敢ず數日間待ちこがれて居た浴槽へ入つて、徐ろに今日一日の旅行を回想した、非常に愉快だつたが又非常に苦しかつた、何だか二三日の分を一度に歩いた様な心地がした。

＊　＊　＊

山岳第五年第一號、吉澤氏の大蓮華登山録にある略圖參省。但し同圖中、清水平（鹽頭平）續きの尾根から祖母谷への降路に當る谿流に、左より（略圖にて）出合ふものが祖母谷川の本流で、それより下流で左から落合ふ谿流は。同一支流。此間に小舍があつて、この落合からセトを形成して居る。それから下流に當つて左より會する長流は硫黄澤で、源を鑓ヶ岳、朝日岳に發する、朝日岳は白馬山と杓子岳を結ぶ國境の線から、少しく越中に寄つた處に聳えてゐるもので、鹽頭の頭、或は裏蓮華と呼んで居る。祖母谷温泉の裏で右から出合ふ大きな澤が、祖父谷川で、不歸岳、唐松岳等から發源する、その南の長き尾根が餓鬼岳の尾根で、この尾根の南側に大黒鑛山道が通じて居る。

私が安全に、且比較的迅速に祖母谷温泉へ降ることが出來たのは、全く高野氏一行が前回困苦せられた賚であるから、謹んで同氏一行の人々に厚く感謝する。

私たちが信州から大蓮華を越えて、祖母谷へ來たと云ふことを聞いて、湯宿に居た越中人が、案内者の室へ押かけて、話をして聞かせろと云ふて承知しなかつたのには、廣太郎も驚いたと云ふ。翌朝

温泉を發つて大黒鑛山の道へ行くときも、皆出口まで來て、怪訝な顏をして一行を見送つて居た。

秋十月頃、富山から愛本へ出て、黒部川へ沿ふて黒薙、鐘釣の温泉から、祖母谷へ來て見ると。谿山紅葉の景色は實に美しいさうだ、「秋おいでになれば方々よい處を御案内する」。と獵師仁次郎がしきりに來遊を勸めてた、冬は温泉宿は皆引拂つて、仁次郎が獵をしながら留守番をして居ると云ふ、熊や羚羊や猿はこの谷で大分獲れるさうだ、仁次郎は小黒部の谷を溯つて、劍へ確に登れると云ふて居た。

祖母谷温泉は祖父谷川と祖母谷川との落合の、直ぐ下の平地に建てられてある、湯は少し熱すぎるが、無盡藏で、清爽なる客室は祖母谷川の清瀬に望んで、湯宿の四面は滴たる如き翠巒にかこまれて居る。山中としては食物は中々上等だし、登山家を非常に優遇するから、三四日ぐらい滯在しても、決して失望する樣な處ではない、信州北安曇のまづい飯や味噌の半煮に、數日を暮して居た私は、越中の米や味噌や蟹の鑵詰の美味に舌打した。

蛇足だが、これも祖母谷道の一つだから、序に祖母谷温泉から大黒鑛山を經て四ッ屋へ出る、道筋の概略を少しばかり書き加へる。

温泉の脊後の道を四五町登ると祖父谷川の一支流に出遇ふ、この澤を水と逆行してあえぎ〳〵二時間程上ると、澤は漸く水が細り、遂に栂の欝葱とした餓鬼岳の尾根續きに出る、その尾根について澤を後ろにして、斜右へ迂回して行くこと數丁で、立派な路が兩側の堤の樣になつてる林の間を通じて居る、こゝで道を捨てゝ、向つて右の榛莽をかき分けて、二三丁程行くと餓鬼の平と云ふ一名所がある、可なり廣い處で、池が二つ程あり、平を一面にかやの如きものがはびこつて、周圍の森林が如何にも美くしい。柚人の小舍が一つあるから、中食をするには上等だが、生憎近所に水がない樣だ。曇てつ居た爲とんと分らなかつたが、眺望は中々佳いさうで、立山から後立山脈の高岳が、この平を圍繞している森林の間から、續々と見えると云ふ、一遊の價値はあると思ふ、又元來た道へ戻つて、續行

◎祖母谷道　冠

すると、これから大黒鑛山迄は、餓鬼岳の中腹を通して立派な鑛山道がついてゐる、その路の下に大黒澤五龍澤の下流にあたる深谿が、遙に音をたてゝ流れて行く、南望すると亂雲の間には、右から岩小屋澤岳、赤澤岳、鳴澤岳、針木岳、一段奥に赤牛岳、それから立山連峯と云ふ順に、大岳の眺望を恣にすることが出來る、朝八時に温泉を出發すれば、餓鬼の平で晝食を濟せ、午後四時頃には樂に鑛山の飯場へ到達する、大黒鑛山には大きな飯場が建てられて、爐が幾つも切つてあるから、安樂に宿泊することが出來る。

飯場から一二丁の西の丘へ登ると、唐松岳、牛首岳、大黒岳、五龍岳が手にとる樣に見える、西南の方黒部の深谷を隔て、挺聳してゐる劍ヶ岳は、殊にその夕陽を負ふた時、恰も大鋸を横たえたようで、惡魔の如きその形相は、寧ろ凄慘の感を與へる、私は飯場へ二泊した、其間、暇さへあればこの丘へ登つて、立山連峯を眺めては喜んで居た。

鷲や駒鳥や山鳩なぞが朝早くから四方の山裾で囀つて谷川の音さはやかに聞える、この鑛山飯場が温泉であつたなら、嘸よいことだらうとつく〳〵そう思つた。

五龍岳、唐松岳、大黒岳は頂上迄なら三時間もあれば達せられる。鑛山から北城の四ッ屋へ出るのには、大黒越をして平川を降るか、唐松岳を越えて八方岳の尾根を行くかの二つだが、鑛山の休みのときは人通りがないから、大黒越はその雪渓が危險で、且八方尾根に比してあまり趣味がないと云ふことだ、飯場から唐松岳の頂上までは三時間だが、八方の尾根は非常に長いから七時間もかゝつた、この尾根は、前には四ヶ城平を俯瞰し、南に後立山脈、北には白馬連峯を縱觀して、眺望は實に壯大絶美を極めてるのみならず、山草も可なり豐富な處で。高根菫々菜や、蟲取菫々菜が繁殖して、雪割小櫻なぞは叢を爲して所々に集團してゐる、八方池と云ふ大きな池の外、小さな美くしい池や沮洳地が所々にある、比較的低い尾根としては、その尾根の美觀、及寰繞の展望は確に第一位を占むべき處だと思つた。

朝七時に飯場を出發すれば、唐松岳の頂上で十時頃、それから八方岳を極めてその尾根を降つて四ツ屋へ、午後四時過には着けると思ふ。

上野を夜行で發てば、明科えは翌日（第一日）の朝九時頃に着く、それから馬車で飛ばせば、其日の內に四ツ屋へ着くことが出來る。四ツ屋の山木旅舘で一泊して、翌日（第二日）白馬の頂上へ宿り、第三日には杓子岳。槍ヶ岳、朝日岳を極めて鹽頭平に一泊して、第四日は祖母谷を下つて温泉に宿り、もし滯在しないとすれば、第五日には祖父谷川を溯り大黑鑛山へ宿り、第六日は五龍岳等を極めて鑛山に滯在し。第七日に唐松岳、八方岳を越えて山木へ歸る。たか〳〵十日も費せば、隨分愉快な旅行が出來ることだと思ふ。

附記（高野鷹蔵）本誌前號「白馬岳より祖母谷温泉へ」の紀文中月日誤植甚しく、世を誤るの恐あり、左の如く訂正す。

二二頁三行—七行　八月は七月の誤り
二四頁一四—一五行　八月は七月の誤り
二八頁二行　八月は七月の誤り

森林の濫伐と山川の荒廢

南方熊楠

拜呈　一昨夜柳田氏を經て貴下へ一書差上候、右は長文にて小生は文字を習ひしことなき故甚だ御難讀の御事と恐縮に候、扨其節の長文大意は、御了解相成候事と存候へ共、なほ遺憾なき樣左に增補申上候。

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

明治二十九年原敬氏が内務大臣たり、水野練太郎氏（小生と大學豫備門にて同級なりし）が神社局長たりしとき、出されたる合祀の訓令には、國史延喜式に載たる神社勅祭、準勅祭諸社、皇室の御崇敬ありし諸社（行幸御幸奉幣祈願殿社造營神封神領神寶等御寄進ありしもの）武門武將國造國司藩主領主の崇敬有りし神社（寄進等上に同じ）祭神其地方に功績あり、又緣故ありし諸社は、必ず合祀す可らず、又勝景地勢土俗に關係重きものも然りとのことにて、つまり八兵衛稻荷とか高尾（遊女）大明神とか、助六天神とか、埒もなき後世一私人又凡俗象が一時の迷信から立てた淫祠小社を驅除するにつとめたものなり。

那智山に實加賀（ジッカ）行者とて巫蠱を以て民を亂迷せしめ、明治十四五年の頃、瀧より飛降て自殺せるものを、大なるしかけにて、今に香花不絕、かゝるもの到處多く、又寺の中に天狗、蛇魅、妖狐等をまつるもの多し、在來の舊社の信仰を奪ふのみならず、甚だ淫猥の風を增す、かゝるものは新しくて履歷正しからぬは、悉く驅除され度事なり。

故に此原氏が出せし合祀令は、實に至當なるのみならず、小生は其勵行を尤も望みたる一人なり、然るに原氏內閣を去り、平田氏內相となるに及び、例の二宮尊德の「しみたれ宗」を尊拜の餘り、件の原氏の訓令を改修し、務めて神社を潰すことに訓令を定め、金錢を標準として神社を淘汰するに及び、且其處分は一に縣知事に一任し、縣知事は又之を無學無識の郡長に一任せしより、歷史も由緒も勝景も問はず、況んや植物又殊に小生が專務とする微細植物などのことは、問ふ筈なく、殊に當縣は官公吏無識無學なる上、土地に關係なき他國よりの出稼ぎ吏員多きことゝて、各々得たり賢しと神狩りを始め、いつのまにやら五千圓と云ふ大金を基本財産と定め、五千圓積むこと能はざる神社を一切掃蕩に及ぶ故に、いかなる神社も五千圓の基本金は出來ぬ故、止を得ず、いや〳〵ながら泣きの涙で、縣廳のいふがまゝに、一村一社の制を用ひ、指定一社外の諸社を悉く伐木し、地處を公賣して、指定

の一社の財産とし、神官神職の俸給を出すことゝなる、之れが爲め人民の一番淳撲なる有田郡は、一村に一社の外の諸社は悉く掃蕩され、日高郡之に次ぎ、只今一村一社の外に、のこりあるは三社のみと聞及ぶ。

此邊は平原低地で、昔より田園早く開けた地故、土地の植物を視察するは神社の林地の外に見様なく、扨其神社つぶされ、神林悉く伐られたる故、有田日高乃ち三好教授の云れし如く東西牟婁を本州特有の半熱帶として、其半熱帶と他の本州の諸温帶植物境の、境界線たる所で、從來小生見る所に據れば蔟藜(ヘクソカヅラ)などは日高郡和田村迄生ずるが、それより南には決して無く、ケンポナシの自生も日高郡以南に丸で見ざると同時に、有田日高の神社に比較的寒地生の樹木（熊野には決して見ざる）サハラの木頂に、熱地植物たるマツバランが叢生する等の珍觀ありし神森、濫伐の爲めかゝることは、今日夢にも目撃し得ず。

序に申す和歌浦邊にノグルミの林ありし、甚希なるものなり、又小生十一年前歸國のとき迄は、和歌浦にハマボウ（黄槿）なほ自生ありし、今日そんな原産物は全く絶え、代りにカウヤウサンなど外國のもので土地形勝不似合のものを多く栽ゑ、植物學上の分界を亂すこと甚し。

御存知の通り日高郡は、さまで廣からざるも、日高川は屈曲甚き爲め、四十八里の長さありと稱す、其傍らに有名なる愛岩(アタギ)の大神林を始め、何れも上述亞熱帶と温帶と、又事により寒地植物の交錯點にて、研究考覩に中々便利多き地なり、然るに此郡は人民おとなしく、郡吏等をおそるゝこと鬼の如く、唯命是從ふで、愛岩の神林も和歌山の南Kと云豪富（成り金）が、神職に賄賂して村の者と公事を起し、村民費用に任へず、遂に大部分濫伐され了り、其他の諸神林も或は濫伐され、或は濫伐中の者多く、社殿荒廢諸人が古へ家が絶るとも、これ計りは還れとて寄進寄附せし田地石鳥居石の礎破毀移有され、丸でタメルラ● アッチラに制伏されし印度羅馬領の史乘を現前するが如く、人民寧處せず、人

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

氣凋落して小生などは二度と往き見るを望まぬなり、東西牟婁郡は小生の抗議尤も務めたる故、今も多少は神林の殘るあるも、明日を聊せず、水滸傳は官を賊となし、賊を官とせる書なりと申奇代千萬な事と存せしに、豈料らんや當縣は目下其如く、一私人たる小生の力の及ぶ處は（たとえば當田邊町如き）一文の基本金なしに、諸社維持し行き、湯淺日高には位階儼然たる大社にして、其基礎をすら認めぬ迄潰されたるもの多し、日高郡上山路（カミザンガ）村如きは、大小七十二社を東と云所の社に合祀し、其神寶古文書を一切集め、社殿に展覽なせし夜、合祀を好まざる狂人ありて火を放ち、七十二社の諸神像神寶古文書悉く咸陽の一炬となる、惜むべきの甚しき也。

昔し水戸の義公は日本の諸古文書を寫させ、之を一所に置かず、火災を防がん爲、諸所に分置されしと申す、只今東京邊で考古々々と云ふて、京傳や種彥が書たものをひねくり、得色ある人多し、隅田川の梅若塚は德川中世の石出帶刀の築し所にして、其神像は大工棟梁溝口九兵衛の彫る所、鴫立庵は三千風より名高くなり、其大磯の虎の像は、元祿中吉原の遊人入性軒自得の作といふ、そんなものすら、それ〳〵古雅優美なる點もありて、馬琴京傳已に其事を追考し、立派に考古學の材料となり居る、然るに西澤一鳳が論ぜし如く（傳奇作書又皇都午睡）東國の古物は、其の源晩く、京畿近方には古きものなか〳〵數に於ても、物に於ても、東國の比に非るに、彼を重んじ之を逸するは歎くべし、只今國寶調査といふことありて、千年近きもの、又特に美術品として外國にほこるべきものを調ぶ、それすら年々見出すこと不止、況んやたとひ千年以後なりとも、又さ迄の美術品に非ずとも數百年前の本朝の文明文化の程を觀風俗人心の大趣を察すべきものは、當縣なごに甚多きなり、件の上山路にて燒失はれし中に、神像數百年のもの多く、何れも足利織豐頃の風俗を見るに足る人形なり、又金幣（キンペイ）といふもの多かりし、これも今日中々作らうにも資本のかゝることなり、土地の者は見馴れて何とも思はぬが、學術上は大に參考となるべきものなりし、無學無識何の益なき俗神職

の俸給を急に作り上んとて、かゝるもの彼地此地に失ふは惜むべし、たとひ之を賣り又燒くにしても、徐かに學者の査定を待て、後に行ふべきことに候はずや、神職の俸給上りて、何の政教に益なきは、今日神社合祀すればするほど、土地の人惡くなり、日本第一の多數の官公吏犯罪を當縣より出し、又合祀尤も勵行されて、神武帝の社をすら公賣して悔ざりし新宮町に、大多數の大逆徒を出せしにて知るべし、戰國策に甘龍といひし人の語に、聖人は民を易へずして敎へ、智者は俗を變せずして治むるといへり、又古法に因て治むれば、吏習ふて民は之に安んずといへり、人のさらふことをして、學術上の材料を滅却混雜せしめて、何の成蹟有らんや。

當縣風土誌編纂總裁內村義城といふ老人は、身官吏にてありながら、昨年冬より今春始に至る間、長文を牟婁新報其他に投じ、自ら海草郡有田郡にて見し所を報告し、かくの如く舊蹟を滅し、神體を掠め去り、神殿を毀ち神林を根から抜かれては、大火跡を見るに等しく、何の鄉土誌何の地史を論じ得んやと公論せり、之に對し辯明とては一つも出し得ず。

神職の俸給は、樹林を切たりとて、必ず堅固に出來るものに非ず、已に有田郡などは、多くの神社を潰し、神林を伐りて、金の行衛知れぬ所多く、客年三月十五日の紀南新聞（日置郡御坊町發行）に、いつそ神林神社の合祀の取調べを比較的確實なる警察に一任すべしとの議を出せり、同郡には三千圓計りの神樹伐採の上り高の行衛知れぬ所さへあるなり。

故に今度原敬氏が內相に復せしを幸ひ、何卒神社は最初原敬氏內相たりしときの訓令に復し、乃ち當縣の如き過度慘酷に、已に合祀を行ひし地は、神林を伐り去らずにある神社址地なり共、當分Status quo 維持現狀のまゝ從前通り衆庶に「神林の竹木鳥獸一切不可採、學者等特別の理由有て之をなさんとするものは特別に手續を要する事」とされ度事なり、もし已に合祀されたからされた分は伐木すべし、滅却すべしといはゝ到底今後薄資且日數少なき大學生など、夏休みに來縣されたりとて、

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

學術上何の獲る所無らん。

當國の山は大塔峯（ダイカウノミネ）（東西牟婁郡界に連亙す）三千八百尺計りを最高とす、次は大雲取（三千二百尺）大甲（ダイカウ）（三千三百尺計り？）又小生が毎に往く安堵峯（三千四百尺？）等なり、然るにこれ等は何れも北國に比してつまらぬもので、頂上は茅原（カヤハラ）リンドウ、ウメバチサウ、コトヂサウ、マルバイチヤクサウ等有りふれたものを散在するのみ、それより下にブナの林あり。

ブナは伐つたらすぐ挽かねば腐つて粉碎す、故に濫伐の日には實に濫伐を急ぐなり、此半熱帶地にブナ林あるも一寸珍らしけば、少々はのこされ度事なり、然るに目下そんな制度少しもなく、郡長などいふもの何んとかして、之を富豪に拂ひ下げ、コンミションを得て安樂に退職せんと民を苦しめ、入りもせぬ道路開鑿をつとめること大はやり也、村民之を知らず、道さへ開かば村民にくれることゝ思ひ、必死と成り道を開く、其後郡長忽ち辭職して、大豪富を他府縣より伴ひ來り、色々と訴訟して其山を他縣人に渡し、濫伐せしめ、村民は他縣より入來る人足工夫に妻を犯され、娘を拐帶され借金を倒され、土風瓦解し、淳朴の俗忽ち羅刹に變じて、土地衰微し、大水荐りに至るなり。扨それより下の山麓近き密林に、色々と珍らしものあり、もしそれ半熱帶の特有珍品に至りては、山麓又は谷間又は低原の神社の神森にのみ、生を聊するもの多し。

當地近き稻成村の稻荷社の神林如きは、幸ひに今日迄大に伐取られずヤウラクラン、カヤラン、ミヤマムギラン、シンバウリクサ、ホングウシダ、シャクジャウサウ等多きのみならず、小生圖する所の帽菌凡そ四百程あり、粘菌中、Enteridium 屬と Lindbladia 屬は、實に別屬に非ずして、同一屬たるを證し得べき標品なども此處にて取れり、これも例の俗吏が神林掃除せよと毎々命ずるので、腐葉土なくなり行き、毎年樟柯（クスシヒ）が枯れ行く。

こんなこと故、もし愛國心とか古風俗を觀察するとか、地誌鄉土誌とかのことは、閣下等に關係なし

とするも、なほ三好教授が云れし如く、備前とか伊賀とかいふ國とかはり、當國は海產も、山產も、野產も、生物が半熱帶と温帶との交錯點なれば、其の考究は實に學者に必要なり、故に何分にも神官の俸給は、漸を以て西洋の如く社領稅をかけて徐々に積ましめ、又神主をも漸次其人を養成するやうにし、當分は神社跡地の神森神地等を、從來の如く保存する樣、御運動被下度事にて、只今かく認め居る中にも、神林の滅却を逼り、神殿の破壞を逼り居る處斷えず、何卒巧遲よりも、拙速で、何とか早く御運動被下度事なり。

封入の寫眞（甲）は小生が故リスター氏（英國學士會員）に贈りしものにして、小生神社合祀反對を三年前申し出せし發端の動機を示すものなり、（大阪毎日新聞昨年二月十二日？のに出）（イ）は前狀申上し粘菌夥く生ずる糸田猿神社の小神林にてケヤキ、ムク、ミヽヅバイ、ハヒノキ、タブ、ルリミノキ、ジユヅ子ノキ、ヒヨンノキ（當町より三丁計りの地に中々見られぬ大木のみを擧ぐ）其他より成り、其タブノキにマツバランの大窠株付けり、岡村周諦氏査定の從來本邦になしと思居たるアストム、シユブラツムもあり、アーシリア、グラウカは世界中此邊にのみ連年見出せる新種なり、然るに四年前嚴命して之を圖中に（ニ）なる稻成村の稻荷社へ合祠し、跡木一切アリトホシノキ如き小灌木迄も引拔しむ、明治八年とかにも、一度合祠したるに、今度は必ず神が歸り得ぬ樣にと、かく迄濫伐し、且ツ石段を滅壞せしめ、石燈籠其他を放棄せしむ、故に此地點のみ回々數の婦女の前陰を見る如く、全く無毛となり、風景を害する甚しきのみならず、土壤崩壞してジンバナ井と申し、近傍切ての名高き清淨井水を濁し、夏日は他村の無賴漢、穢多見など此處に上り、村中の娘の行水を眺め下し、村民迷惑一方ならず、因て交通を遮斷し、今に畑にもなんにもならず弱り居る（ニ）は前述植物多き稻荷社の柯林（シヒノキ）なり、これも何とかせずば、今に又事由を附し切らるゝこと受合ひなり（ハ）は弘法大師が臨んで影を留めたといふ弘法の淵なり、後鳥羽上皇熊野御幸記に見え

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

たる河に臨んで大淵ありとは、此處の外になし、此椋も三年計り前に伐んといひしを、小生等抗議して止む、扨其伐んといひしものは今春即死、又件の糸田の神森を伐り、酒にして飲でしまひし神主も、大に悔居しが、數月前へんな病にて死す。

崇(タヽリ)などいふこと小生は信せぬが、昨今英獨の不思議研究者等、專ら其存在をいひ、小生も神社合祀勵行神社亂伐に伴ひ、到る處に其事實あるを認む、思ふに不正姦邪の輩、不識不知の間に其惡行も悔ひ、悔念重疊して自心惱亂することゝ存候、かゝることを當國官公吏、又神職等は迷信といひて笑ふこと夥し、然るに何れの國にも犯神罪あり Sacrilege 基督敎國にも之を犯して神罰で死すること多きは小生毎に見たり、萬也一系の國體を論究して皇室を仰ぐも　天子を見つむれば目潰るゝとて、小兒に不敬を戒むるも、實際敎へに於て大差なし、小生は迷信を排除して、なにか世間に顯著なる效益を擧たほどのことを、一つも聞かざる神職等が、神體を拉し去り、神社を潰し、神森を公賣濫伐して、千古より此方僅かに神林に因て生を聊し、種族を傳へ來れる諸生物を濫滅し、扨之を惜みかなしむ者を、迷信々々と指嘲するほどの人に、果して敬神敬皇敬愛國の眞念ありやを疑ふものなり、況んやかゝることに心を責られて、樹から落て死だり、發狂して死するほどの腰拔輩に於ておや。

（ロ）は龍神山とて、上り路三十丁あり、古へは櫻樹の名所なりしに、濫伐打つゞき、土砂崩壞して小川を埋め毎年洪水絶えず、然して頂上（ロ）と書きし處に闇龗(クラオカミ)の神祠あり、目今日本にあまり多からぬ神にて、日本紀などに見えたれば、尤も崇敬すべし、此頂上に神池あり、清泉涌出す、その傍に此山頂を絶海の孤島の如くにしてカキノハグサ、ウリハカヘデ、メグスリノキ、フデリンドウ、マメツタラン（東牟婁郡にもあるが多くは開花せず此處のは必ず開花す）それから小生發見の



圖の如き反

橋形の大珪藻オホルリサウ又淡水藻シリントロカプサの一種、又皺藻の熱帶産なる珍品トリプロケロス



又奇體なるミクラステリアス、トランカタ、の變種圖の如くつゞけるあり



又ヤブカウジより小さき小灌木赤花なるあり、牧野氏に見てもらひしにベニドウダンの由、ベニドウダンは丈餘に至るものゝ由なるに、此處のは數寸（三寸を過ず）にして花あるも奇なり、又 Lycoperdon の新種あり、加ふるに四方眺望絶佳にして、山川溝港灣岬丘巒等の地理を小兒に示すに屈強の處なり、然るにこれも村人が否むを、むりに（カキミセ）柿店等出で大に賑ひ、村民及近町のもの利となり、又小兒なども健足の便りとなり、四望して氣象を養成すによし、村民は此祭日をあてこみ、無賃で總出（ソウデ）となり、道路を修め、山林を整へしなり、然るに神社むりに合祀されし爲め、隣村此山の小き林木を爭ふこと絶えず、アカメヤナギ、ノグルミ吳榮萸等此近傍には此處にしかなきものも、追々滅跡し行きて、神流にありし無數の皺藻バトラコスペルマムの異品も絶え失はれ、洪水多くなり、山は荒れ土はくづれ行く、此小山の一方に杉林を作り、防崩林を營むに、一方には樹木濫伐土壤崩壞に任ずるを見るは、實に行政上の大矛盾一奇事なり、一昨春末此上に上る路上スズメノオゴケ樣のもので、花色黃なるを多く見出し、牧野氏におくりし、頗る珍品と有て、今年とりに行くに、土砂崩壞の爲め見當らず、小生手許に僅かに二本しかなく困り居る、山林を伐てあとへ柴を植付るとか、羊を畜ふとか、そんなことは少しもなく、たゞ〳〵濫伐し行くなり、流下の諸村は、なに故か近年大水ひどく成たといふ

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

のみ、是又似た物同士で、山頂の樹を伐る故、水が驟に至ると云ふことに氣付かず、官公吏はたゞ〳〵神社を一つも多く潰し、自治制のよく行はるゝ徴候と、自慢し神がなるべく舊址へ復らぬ樣と、色々盡力して樹を伐らせ、其金は伐木賃を差引けば、どうなつたか分らぬなり、件の龍神山を合祀して俸給增せし神主は、牛肉食ひしことなきを、之れで牛肉食ひ得るとて大悅びの由、こんな例は五十計り集めあり（東西牟婁郡乃ち小生の抗議の强く及し所のみで）小生聞見の及ばぬ他郡は、一層多しと知られたし。

（乙）圖は前狀述し奇絶峽とて、田邊を去ること二里計り耶馬溪そこのけと云絶景の地なり、稀植物多し、これも何のわけもなく、道路作るとて破壞甚しく、又石を伐り出す故、地質學考古學上の參考たるべき大足跡石など將に亡びんとす（毛蕨料のタニモダマも他所に少く此邊に多し、ホウライカヅラも此邊のみありて開花すチヤボホトヽギス、デヨロウホトヽギス等あり。

（丙）圖は當國南部邊の社趾より出しといふ珍き小土器なり、裏に捺印あり、ちやんをかけ、横に蓋あり、それを鉦にて打付たり、口を白粉如き細き白粉でつめあり、羅馬の淚壺の如し、小生隨分歐米の博物館でかゝるもの扱ひしが、こんなものを見ず、然るに五個出で皆な小生手に入れり（一個五錢で買へり）出たる所を推問し、其塚等を寫さんとするに賣しもの一同、後難をおそれ、口を箝みて一切言はず、こまつたものなり、珍物といふのみで、何處から出たか、何んの由來か、さつぱり分らず、M君は貴息なりと、今度始て柳田氏より承はる、もし考古學上珍なものもなら、御申越さへあらば、經て以て人類學會へなり、又大學へなり寶物を寄附致さん、備前國邑久郡朝日村にオカウベ（御首）樣といふ社あり、（飯盛神社）ピラミツト如き塚にて、その內部構造中央に巨魁、ぐるりに、子分の遺骸を收めたるなり、決して新らしきものに非ず、神軍の傳話あり、又石鏃を此邊より出すを見れば、古きものたること知るべし、舊藩のときは、池田侯より年始に

大なるシメナハを寄進あり、崇敬他に異なりしに、例の合祀にてつぶされ、只今は寥凉の光景かなしむべし、傳話によれば此は平經盛の塚なりといふ、何の國にも古いことは、其人の姓さへなき世のこと故失はれ易く。

チュンベルグ日本へ來りし紀行に、日本の天子の御名を人民何れも知らず、之を聞出すに甚苦みしことをいへり、昔は君上のみか大酋長大土豪の名さへ言はぬこと多かりしより、自然に其傳を失ひ、後に大已貴命とか、天照太神とかを勸請して、維持せしと見ゆ、又只今にても小生の祖先の出し村などは、南方熊といふ姓名多く、現に當町にも南方熊太郎といふ人あり、毎に郵便配達のまちがひにこまる也（一昨年の大阪毎日に攝州に同姓名六十人とかある村のことを記せり）近來でもカンボヂヤなど全國男女同名多く、姓氏なき故證文を斷ずるに甚だ苦む由 Moura の其國誌に見えたり、故に邊部に同名の諸神の異傳多く（日本紀已に異傳の神話多し）學者之を記傳になければとて片はしから虛談とするは、反つて甚だ實情に遠きものなり、又犬養部（イヌカヒベ）鳥取部（トトリベ）などの部族、各國に分れ住ければ、其祖先の傳も同名の人多きと共に、益々同名の神に異傳を多くしたることゝ知らる、近くゴム氏（今年正月古俗使話學上多年の功勞により授爵せられたり）古話俚傳悉く有書史前の史實なりといへるも、大分道理あることなり。

回々敎國には偉大の跡は悉く回祖、アレキサンドル王に歸し、日本にも大力の跡は辨慶、風景の處は金岡、靈の驗跡は役小角弘法大師に歸するが習なれど、かゝる一人一人に關する古跡は、實證あるに非れば、左迄大騒をして保存するの要なしと思はる、件の飯盛塚が、實に經盛の葬處たりし處か、此經盛といふ人、敦盛の父といふ計りで何の益もなく、たゞ歌集に有ても無くてもよきやうな歌が三四傳はれるのみなれば、遺跡を滅却して畑と爲し、平經盛之碑と一本塔婆を立ばすむことなり、然るに上述の如き塚の結構とありては、とても經盛頃のものでなく、全く古へ酋長を中とし、殉死又は戰死

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

の臣下の死尸を周圍に埋むる風ありしを實證するもので、書史の不足を補ひ、吾朝には吾朝固有の風俗ありしを證する大益あるものなれば、たとひ其塚が、何の誰れと人の名を指して知れずとも、少しもかまはず、吾國文化開進の履歷を證するもとして、尤も保護を加へたきことに候はずや。

白井權八の死んだ目黒も古跡也、村井長庵が刑されし小塚原も古跡也、上州には巨盜國定忠次の古跡あり、當國根來には石川五右衛門の古跡あり、古跡々々と云て、古人が一擧手一投足せし處を、榜標せんに、其限りなきこと美術々々と云ふて、坊間流布せる春畫を集めるよりも甚しからん、されば今日何の實際の關係もなきに、飯田町へ馬琴の像を立たり、不忍池畔へ季吟の碑を立たり、目黒へ小紫、三ッ又へ高尾、泉州堺に曾呂利新左衛門、九度山へ眞田左衛門佐、樫井へ塙團右衛門、若江堤へ木村重成、八尾へ長曾我部盛親、穢多が崎へ薄田隼人と、丸で大阪の軍評定の如く、それ〳〵へ紀念碑を差し立られんも、益々後日眞を攪り古を失ふの基となりなん、それよりは人の名は知れずとも（又上古のことは帝家の舊記たる記紀の外に、其書物なければ分る筈なし、但し八百萬神の內には、吾れ〳〵下民土人の祖神も無論あり、其祖神の傳話も、無論色々と土俗俚諺となり、古神社に附屬して存し居るなり、アビシニヤ人は日本皇室より、其國王メネリクの系統はるかに古しとて自慢し、魯西亞人は其國に隷屬の諸王室、世界中で古きものゝみを集めたりと自負す、然れども吾國の　皇室權貴のみかは、土民非人迄も、各々神の末にして其神祇それ〳〵其社を傳へ、其俚傳あるに下ること萬々なり）俚諺古俗又發掘の古器物、四邊の地勢、地層の變遷等に照し合せて、吾人祖先の古くより日本に存し、日本固有の風俗德化ありしを證すべきもの多ければ、何分にも入らぬ碑石など新たに立ることを止めて、現存の古神社を一つも多く保存し、無智無識の神職を神林、神殿迄滅却して增置するに及ばず、最寄りの小學敎師にでも、神職を兼攝せしめ、以て後日徐々に神職其人を得、俸給も社領稅を積立てゝ、支辨し得るの日を待しめられ度事也。

長寛中勅〆伊勢熊野の神の優劣を問ひ玉ひしことあり、今も其傳を失したれど、此邊に春日神社の神森を有する者多きを見て、藤原氏權門の人々が、いかに熊野を尊信し、其近所に庄園を有したるかを知るべし、然るに肝心の本宮社司、相攻伐することと甚く、那智亦山徒二に分れ、相鬪ひ、新宮も騒亂絶ざりし爲、社傳などいふもの多く失はれ、本宮如きは元祿頃已に何の傳なく、天野信景如き他州の人に其傳記を作りもらひに行し由、鹽尻に見えたり、況んや維新後、我利我慾の者の巢窟たりければ、伊勢に並んで舊儀を見るべきものとては、三山に甚少し、然るに三山を離れては、多少舊を考ふべきものあり、たとへば那智村濱の宮の王子の社殿如きは、五彩を以て畫き、幸ひに兩部神道の社殿は、いかなるものたるや知るに由あり（小生知人中村田代などいふ村人の抗議甚く、今日迄合祀を免れ居る）又日高郡丹生川といふ山村の丹生明神社如き、其社殿は本宮番匠鳥居某が本宮の成規通りに建しものにして、大に他の神社に異なり、（今は往復山路五里有る遠地へ合祀され了り、神體は焚失はれしが、小生村人に訊へて、社殿は保存させあり、此神殿前に古きこま犬二あり、異樣の製して、一枚木の木塊より成る、何れも木の理條が整然として虎の紋を爲し居るなり、村の者は何とも思はぬが、かゝる奇珍のもの、僻地の社には多し、此れ等を徐々に取調べて、學術、史學上に益せずに、或は川へ流させ、燒失はしめたるは、實に無恥無惰の事と存候）

當地に近き御子濱（ミコノ）といふ所に、神樂神社といふあり、小生土傳を考へて必ず此近地に古塚あるべしといふ、二年前に之を聞て、其地を買收し、夜分ひそかに發掘してインベ十一を得、私藏する人あり、それより小生はかゝる事を話すは、反つて科學上有益の古蹟の滅却を早くするものと思ひ、そんなことを一向言はずに居る、此他考古上、小生氣つきし塚など多し、昨今も一二見出し、盛んに掘り居り、警察署へ届けよといふに、届くるも受付ずとのことで、つまり發堀品は散亂さるゝの外なし、前年和歌浦で、貴人の塚と覺しきもの、七八箇ならんで發掘せしを見る、小生少慾な男、

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

且つ後難を恐れ、何一つ貰ひ置ざりしは遺憾也、堀出物は全く散亂せり、定めて由緒ありしものならん、又無くとも學術上の參考品たること無論也、又當國第一の官幣大社、日前宮の横を拾年前に歩みしに、田畑の中そこにもこゝにも古塚だらけなりし、然るに昨夏往見しになし、此大社の宮司は、神社濫滅の總發頭人だけありて、錢にさへなれば、何んでもよしと、何の氣も付かず開拓破却せしなり、古土器など地下に置きたりとて、何の功もなきものなれば、之を堀出して世に彰はす、は埋めし人の面目ともなることならんも、今日の如く胡論に、堀り次第採り次第賣り次第といふは、甚だ、學術上に損害ありと思はる。

松村三好兩教授中邊路（ナカベチ）を御通行の際は、まだ多少の樹林ありしなり、然るに今回の神社合祀にて、熊野街道の樹林は絶滅せるなり、其中高原（タカハラ）の王子（源平盛衰記によれば今日西藏のラッサに上る如く、熊野を死神の樂土とし、一同上りしにて、此高原王子を下品下乘の最初階樂土とせしなり）に八百歳計りといふ大樟樹あり、此木を削りて棒とし、之を神體とす、此樟を伐り、利を營まん爲め、合祀を逼ること甚だ切なりしに、田舍人にしては大豪傑なる宮本といふ男。

政府の力にて神社を合祀せんとならば、宜しく警察吏を派して片ばしから處分すること、流行病を扱ふ如くなるべし、然るに毎度々々來りて、或は慰喩し、或は脅迫して、合祀請願書を作り、むりに調印を勸むること、心得られず、是れ必竟政府の意にも、内相の意にも非るべく、全く卑陋なる縣郡當局吏の私曲なるべしと。

氣付き、基本金五千金を一人して出すべしと諾す、故に宮を潰すことも成らず、扨五千金の催促に來る毎に、近傍栗栖川の料理屋へつれゆき、飲食遊宴せしむ、官吏酒に醉ひ遊ぶ内に、日程盡き、自分の旅費日當足らずなり、閉口して去る、斯の如くして永延く内、縣當局五千圓の基本金を中止し、神職に俸給を給すべしといふ條件のみ殘りし故、今に神職に何もやらずに、高原王子は立派に殘る、

次ぎの十丈峠の王子は、一昨年迄ありしを村役場より村の惡黨二人に誨えて、汝等十丈王子の神社に由緒あるものゝ子孫と名乘り、合祀を請願せよ、然る上は合祀後神林の幾分を汝等に與ふべしとのことで、二人由緒あるものゝ後裔と僞稱し、合祀を濟す、扨約束通りくれたものと思ひ、右の神林を濫伐賣木せしを、役場より盜伐として訴へ、一人は牢死、一人は一年近く入監、今に罪名定らぬ由、かく官公吏が人民を脅迫敎唆して、惡を爲さしめたる例甚多し、土風壞亂の原は、官公吏と神職之を爲すなり、又小生今回亂伐を止めにゆくべき野中近露王子の老樹は、左に大さを揭げ候、何れも寫眞にとれぬほど、大きなものにて、古帝皇將相が奉幣し、祈念し、其下を通り恭禮せられし樹なり、此等は既に二千八百圓で落札したる者あり、幸に金は未だ全く村へ受取居らぬ故、何とか亂伐を止めんと、小生出向ふ筈也。

近露村上宮には絶大の杉ありしも伐られ了んぬ

下宮のは周圍曲尺一丈八尺三寸、一丈九尺一寸、二丈五寸、各一本。

野中の一方杉（イッポウスギ）　小廣峠より風烈しきを受け杉の枝西南に向ひはへおる也。

周圍二丈五尺一寸、二丈二尺、一丈八尺三寸、外に一丈三尺以上のもの五本あり。

地勢峻烈に傾斜甚き爲め寫眞をとること不成。

此等の木を伐んが爲、九十九王子中尤も名高き野中と近露王子を、何の由緒も樹木もなき禿山へ新社を作り移し、扨件の木を伐んと言ひ來る、只今の制度惡く、何村第何號林何號木といふ書きやう故、名木やら凡木やら、一寸分らず、小生前に心がけ居りし故、之を抗議せしに、村長なるもの、然らば下木（シタギ）を伐らせくれといふ、小生の代人曰く、下た木をきれば腐葉土無くなる故、つまり老大木を枯らす、下た木は斷じて伐るを禁ずべしと、村長耻ぢて曰く、その下た木（大杉叢の直下に雜生せるヒサカキ、マサキ、サカキ、ドングリ等の雜小木）をいふに非ず、一方杉の生せる所より、ずつと數町下

◎森林の濫伐と山川の荒廢　南方

の谷底に生へた木を、下た木(シキ)といふとごまかし去り、一笑にてすめり、然るに此邊の公吏は、郡長も町長も、晝夜木を切て上(カミ)は前(マエ)をはつることのみを內職餘課とする曲者どもにて、只今又亂滅せんとかゝり居る也。

此狀又長くなり、盡る所を知らず、故にこれにて擱筆、何分にも小生一人と、何の心得なき新聞かきなど、其他は無智無識の農夫漁民のみで、今日迄抗爭し來りたることにて、今小生身を引かば、忽ち後日學者間に大物議を惹起さんこと疑ひなく、さりとて人間精力資金にも限りあれば此上一年も小生は自家の學事、家內の生計を放棄して迄も、盡力すること不能、神社復舊、神職俸給供助法等の事は來るべき國會へ中村啓次郎氏、其他を賴み出し可申も、森林伐採は實に目睫下に迫り居る大事なれば（かく申し居る內に、既に朝來(アッソ)村のぬか塚、其他當郡にも多く伐盡されたり、況んや兩牟婁郡以外の諸郡に於てをや）何んとか小生の志を愍れみ御運動の儀偏へに奉願上る所也。再拜

昨年十月十五日大阪每日に、大垣公園に腹白き老狐現出、兒童に苦しめられ居るを、佐久間仁左衛門なる者、柵を以て圍ひ、食物を與へ、一百餘圓の經費にて、稻荷大明神と崇し奉ると電報あり。又昨年二月頃の大阪每日に、東京帝國座で河上貞奴等、天照太神に扮し、岩戶神樂の演劇されりとあり（英國に在りしとき、故アーヴィング男耶蘇に扮し、芝居せしを、諸新聞之を神聖を汚すとし、難論やかましく、其芝居改題せしことあり）。

自ら侮つて人之を侮る、一方には狐を神とし、天照太神の芝居して、天照太神は別嬪だとか、愛敬が足らぬとか、鰐足(ワニアシ)で歩くとか、ホクロが多いとか、評笑せしめ、而して一方には神林と無數の生物種を滅族せしめて迄も、庸劣無智の神職を存立し、以て風敎德義を奬成せんとするは、一向小生にわけ分り不申。

小生實驗によるに、當縣到る處神社合祀を敎唆するものは學識なき神職にして、實に無義不道の徒

なり、多年それが爲に、衣食し來り乍ら、自ら先に立ち神社をつぶし、神木を伐り、小祠を燒き、又川へ流す、こんなものは敵軍強き日は、忽ち內通して露探となるべき輩なり、之に反し到る處の小學敎員校長は、皆な口に出して言はざれども、內心神社合祀を嫌惡し昨年小生此事で入監のときも、公吏村吏に惡まれ、職を奪はるゝを厭はず、多く內々小生の家族に慰問し、甚しきは未決監へ慰問書を出され候、此輩何れも多少今日の學術を知り、又多分は村々の鄕土誌編纂の主任となり、神社を潰しては、到底風化も、德化、智育も、土地の人をして土地を愛し、安住せしむる事も得可らざるを知悉するを見るに足れり、(小生は平生孤獨なる性質にて、小學敎員などゝ交りしことなし)日高郡比井崎は、應神天皇誕生の地にて、其時產湯たきし火を保存し、每戶其火を分ち用る古俗あり、此社を劣等の社へ合祀せんとする村長を憤り、小學校長津村といふ者騷動を起し、双方入監、校長勝ち出監せり。

明治四十四年八月二十一日　　南方熊楠拜

○○○○先生　御座右

燧ケ嶽に登る記

關口泰

一

燧ケ嶽は福島縣南會津郡の南端、群馬新潟栃木の三縣が手を擊ぎ合つてゐる邊にある。赤城や日光

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

から眺めると、萬波重疊した南會津から、越後境の山々の、眞只中に双峯の姿勇しく立つてゐる。武尊山が穗高の様にドッシリとしてゐる、北に燧嶽は槍ヶ岳の様にヌックと聳えてゐる。

磐梯の前の猪苗代湖の様に、然しあんなに廣く打開いてはゐないが、尾瀬沼は燧嶽の前に湛えてゐる、沼は東西一里十二町、南北十八丁、周回三里、水面は千三百八十米突の高さにあるといへば、嶽は汀から數町の平を置いて、千米突衝立つてゐるわけになる。

上州方面から、沼田街道を會津へ越す人は、戸倉の村を離れて國境迄五里十町の間、小屋二つの外人には恐らく遇ふまい、そして更に此先四里卅四丁を行かねば、檜枝岐の村へは出ないのである、縣道といつても、日に一人の旅人があるや無し、道は辿るに難くは無いが、決して沼田道の様なものでは無い。こういふ道を獨り來た旅の人が、尾瀬の峠から、此靜かな沼と山とに對したなら、いひ知れぬ感情に、涙は眼瞼に熱きを覺えやう、山岳を愛する人は、登らずには過ぎ難いであらう。

國境の標木は、沼へ注ぐ澤の際に立つてゐる、峠を降りきつて、半里、沼に沿ふて北し更に一里を西すれば、燧岳の登り口に出る、北處の湖岸に一つの小屋がある。然しなほ西北に、燧嶽の裾を檜樅の喬木林の暗き下、根まがり笹の深きを分けて、二里ゆけば、かの尾瀬の平の一端へ出るのである、此に魚の釣小屋が三つばかり、燧岳を背にして建つてゐる。

原は東西三里南北四里と云はれてゐるが、果してそれ丈あるや否やを知らない、燧、至佛、笠嶽、等七千尺の高峯に圍まれたる、世にも妖凄なる此高原、戰場ヶ原より猶廣い、そしてもつと暗い——高原といふ言葉が齊す如き開いた爽かな感じの無い尾瀬ヶ平は此小屋の前に限りも知れずつゞいてゐる。原は林によりつていくつにも劃られて、林は一町程の幅を以て帶の様に徑廿町乃至卅丁の水苔の平を圍んでゐる、その林帶には、薄の類もはへてゐる。見える限りの原をつゝきつて、その點葉樹林の所迄ゆく、その林を越へると、又同じ様な平が眼前に開ける、又ゆきつくせば、林の向ふに又同じ

様な平が現れる、かくて尾瀬ヶ平の限りは無いのでは無いかといふ様な氣がする。平の中を、只見川が貫流してゐる、水苔のジメ〳〵した原を流れるとも無き、然し清冷の水が、溝を深く堀つてゆく、處々に水田の跡といはれてゐる水潦があつて、その周りには、長葉のモウセンゴケが、葉面の手を擴げて、餌となる蟲を待つてゐる、遠く望めば、その古血の様に赤い色が、此平に住む妖精が、月の曇つた夜遊ぶ莚ではないかと思はせる。沼の楊が綠に煙る初夏の頃には、原一面に朧夜の星の様な、カンゾの花が黄に咲いて、夢の國の景色になるといふ、然し八月も中葉といへば、尾瀬の奥には、秋風が渡つて、原の沙草は、皆白く枯れるのである。

私が此に來たのは四十四年の秋の初であつた、若松の方から、南會津の街道を田島山口と經て、檜枝岐へ宿つたのは九月二日、其翌日午後五時頃に此漁小屋に辿り付いたのである。

二

南會津郡は、東京府よりも大なる面積を有し乍ら、總人口が若松一市にも及ばないといふ位な地で、オホ川、伊南川（只見川は伊南川と合する迄は一個の村をも持たない）の流域を除いては、山又山、街道さへもオホ川伊南川（皆阿賀川の上流）に沿ふた外は田島と山口を連ねた、針生峠の道があるばかりである。檜枝岐は、其の南會津の一番奥の村で、若松から十二里にして田島町（同郡役所々在地）に來り、更に十二里餘にして達する、其間針生峠（七四三米）がある位（之も馬は勿論車も通ふ）で道は平といつてもよい。その外日光方面から鬼怒川の上流、川俣へ出て川俣から七里程の山越をしても行かれる、然し東京からゆくならば、前橋から田沼（此間九里馬車あり）へ出で、戸倉（田沼より十里）から尾瀬峠を越えてゆくのを普通とする。

檜枝岐（九四一米）は思つた程の寒村では無かつた、伊南川の上流、檜枝岐川を挾んで、村は二つ

に分れてゐる、街道は川の西側の方について、昔の空氣に漲つた茅葺の厚い屋根の下を通つてゐる、戸數は七八十戸もあらう、小學校は數年前に建つた、郵便局は五里計北の内川にあり、四ヶ村の聯合村役場も、外の村にある、大桃迄四里の間には人家がない、道は川に沿うて、山間に狹いが惡くはない、然しマムシがゐるといふ注意を受けた、宿屋は丸屋といつて街道に沿つて（會津から來て南の端に近く左側）ゐる、山間の宿としては、立派で居心地もいゝ、宿賃は卅五錢かと覺へてゐる、名物の蕎麥は戸倉でも「檜枝岐の外には出來ぬ」と推賞してゐた故、眞の名物なのであらう。

駒ヶ嶽（二、一三〇米）は、村の西北に位し、頂上迄一里半、半日で往復し得るといふ、「五峯あり南北に綿延する事八里」と案内記に書いてある位で、峯は土坡の樣に長くつゞいて、漠として捕へ所のない樣な山である、頂には一等三角點がある、四時雪あり殘雪の形馬の如し故に名く」とあるが、雪は見えなかつた。此峯は村からは見えない。

序に書くが、燧と駒と併て、南會津の三山といはれる朝日岳（一、七一六米）は、こちら側からは行けない、伊南川について下る事十四里許の、伊北の黒谷村から登るので、村から一里廿四丁と書いてある。

私が檜枝岐へ宿つた日も、上州から二人の旅商人が越えてきた、その人々は、六時に戸倉を出て、三時に此に着いたといふし、道もちやんとついて迷ふ所は無いとの事故、案内は連れずに、一日分の米を背負つて一人で行く事にした。

三

第一日　晴　（檜枝岐より尾瀬平）

八時半家を出て、十町許で川の合流點へ出る、右手の山から來る川を渡つて、も一つの方の川原を

一二丁傳り、右の岸へ上ると道がある、(此道は檜枝岐から、さつきの右の澤の上を渡つてるのであらう、が川原道の方が近い)道について山畑の間を暫く行き、二里程山の狹間を小しづゝ上ると、沼澤峠へかゝる、上る事一里で頂へ出る、頂近くへきた時には、秩父の村山郷から、仙元峠を越へたのを思出した故、どこか似てゐたと見える、峠の北側には、道を蔽ふて樹が茂つてゐた、卅分許はかなり急な上りである。

峠から右に燧岳の三角標が、秋の空に聳へてゐる、沼は黒い林に遮られて、一部分しか見えない、然しその水の色の美しさ、溯の向ふは、尾瀬峠である。峠を下りかけた處で、下から木の皮を背負つた白髪の老爺が來た、三四日山で皮をとつて今日村へ返る所である「沼の小屋にはゐないが、原の小屋には魚釣りが、まだ一人殘つてる」と聞いて、まあよかつたと思ふ、沼の際に滿園着て寢たる姿の笹山が二つ重つてゐる、その間に道があると敎へられ、喜び謝して別れて下つてゆく。下る事數町は、急坂であるが、それからはまだらに沼の際までおりてゐる。顧れば老爺の背負つた木皮のみがみえる、笹の葉の白綠と、秋立てば草は黄ばんだその色と、峠は柔い曲線美しく、秋の澄んだ空に接してゐる、あゝ其色の美しさ。色彩と其時の心少しく、客觀性に乏しいが、沼澤峠!戸倉から來て戸倉へ歸る人も、檜枝岐迄とはいはないが、兎に角、此迄は來給へと勸め度いと思つた。

峠を下つて十町程沙草の原が續く、人の通ふ道と、兎の走る道とが、錯綜してゐる、沼へ注ぐ流は、清澗にして深い、其沿に腰を下したのは十二時に近かつた、日の光を浴びて、只一人寢轉んでゐると、筋肉の疲れがいゝ心地で。血液がエーテルの樣に輕く動いてゐる。ボンヤリと何を思つてるでも、何を眺めてるでも無くゐる、わきの草叢に音がして兎が飛出した、原始的な衝動に、思はず跳起きて、追ひかけた、兎はあと二尺と思ふ所で、川へ落ちた、そして向の岸へ跳上つた。あとは又獨りボッチである、又もとの處へかへつて辯當を開いた。

一時頃、先に敎つた笹山を登つた、壞れた屋根板が散亂した廢屋の跡を左へ（右へ行けば正しい道）林の中へ分け入る、いつか道らしいものも無くなつて、行手はわからなくなつた、笹をわけ、木をくゞつてゆくが、三十分の奮鬪に辟易して、兎に角沼へと志す、湖へ出て淺い水をボチャ〳〵とゆく、岸には楊が――初夏綠を吹く頃は、萠黃色が美しいといふが、今は黑ずんだ葉が水に蔽ひ覆つて、其暗い陰には、サンショ魚でも、ジッと動かずにゐそうな氣がする。岩や朽木を傳つて、岬を二つ程まわると、向ふに小屋が見える、水は時折膝を越して、氣持が惡いので、又林へ入り、わからなくなつて又水へ出た。

小屋へあと、十町位と思はれる處で、やつと汀に道らしきを見た、（魚釣る人が通ふ道である）。ジメ〳〵した處を、小屋のわきへ出たのは、三時であつた。小屋は只見川の落口にある、錠がおりて猥に入る可らずと書いてある、癪にさわつたから、碌にあらためもせずに、道の導くまゝに、再び落口に架した一本橋を渡つて、原から林に入つた。栂の林の間の道を廿分程登り加減にゆくと、一寸した平地へ出る、此處にも所謂水田の跡があつて、長葉のモウセン苔が、はえてゐる、又林に入る、熊笹はだん〳〵深くなつて、斜面を莖にすべつたり、燧から出る小流の泥に膝を沒したりしてゆく、いつの間にか、川とも離れて、水音が遙に左の下の方に聞える、ゆけど〳〵、原らしい樣子がなく、林の奥へ〳〵と行く樣だ、心細くなつて、時計を見ると、四時半、も少しいつて、宛が無くば急いで、沼の小屋へ戻らうと決めた、暫くすると少し行手が開いてきて、焚火の跡や樹幹の刀跡に大に力を得て（此間とにかく道は開いてあつて、人の足あとらしきが、無いではなかつた）ゆくと、原へ出た、五時である。成程三つほど小屋がある、その人のゐさうな一つをのぞくと、主人はまだ歸らぬと見える、その前へ荷を下して原の方へゆく。

小屋の前に立つて、西南望すると右に至佛嶽（二、一八五米）が尖つて立ち、それから笠嶽（二、

一八四米)(參謀本部のには笠科嶽)が笠嶽らしくつゞいてゐる、そして尾瀬嶺の方へまわつて尾瀬平を圍んでゐる、平はそれ等の山の裾まで、枯葉色に眼を遮る何物も無く、つゞいてゐる。原を南へ十五町位と思はれる處に、林が連つてゐる、あそこ迄と思つて、例のジメ〳〵した水苔の上をゆく、徐歩して卅分位で林に入る、うら枯れた尾花が亂れて、林の下には青い夏草も見えた、林の向ふを透して見ると、又今きた原よりも廣いのがある、此原が一番廣いのだといふ、徑廿餘町位はあらうと思はれる、向ふの原を見て引かへす、少しゆくと、白樺のヒョロッと二本立つたのを目あてにして、燧嶽の裾にある小屋へかへる、夕日が至佛の嶺(大きな黝い岩が頂に近くある)を染めた、それも消えて、笠の嶺を輕い雲が、茜もうすく過つていた。

途中迄來たら、小屋の方でオーイと呼んだ、オーイと應へる、聲は廣い空間に吸ひ込まれて、消え去つて、其儘前の寂靜、夕の色は迫つてきた。カンゾの花は葉も枯れて、黑い烏干玉の様な實をもつてゐる、道の様なものが二筋三筋、小屋の前から流れてくる小河についてゆく、水田の様な水潦が、凄い銚色に空をうつしてゐる。

小屋の主人が歸つてゐる、宿を賴んで荷物を入れる、小屋へはいると、中は四疊敷位、低い乍も床が張つてある、入口から突當りの方は、爐になつて、そこで毎夜とつてきた魚を燻製にするのである、今迄何日かの獲物が燻されて、百連ばかりつるさがつてる、魚籠には一ぱい岩魚がはいつてゐる、飯を焚き、岩魚の鹽燒で夕食をおはる。主人は檜枝岐の住人立花彌四郎とて、四十位の人、日露戰爭へもいつてきて、話もわかる、豫め賴めば案內もして呉れやう、川でぬれた衣袴を乾し乍ら、種々話をきく、岩魚や、も少しすれば鰍、いくらでもゐる木の陰の澤山ゐる處は、どうしてもゆけないから、取つても〳〵へりはしない此只見川は漁樵も獵師も通らぬといふ、川を此處から一里半程ゆくと、三條滝といふ直下卅丈の瀑があるといふ事である。平を通つて、山をすぐ戶倉へ越へれば、四里程しか

無いが、案内なくては、とても行けぬといふ、燧嶽へ登つても行けぬ事はないが、獨りでは無理だ、すぐゆくならば、東小川迄は行けやうとの事も、此時聞いた。

一寸外へ出てみると、十二三日の月は、もう中天にかゝつて、燧嶽が八千尺の峯頭を照して寒い、尾瀬ヶ平は霧も無く、冴えきつた夜は水の様な月光を、胸の底迄浸み込ませる、今朝は霜がおりたといへば、又今夜も霜であらう、夜ははや十一時にもなつたらう、五里四方に家も無い、山の中に一人月を見てゐる自分が不思議な様にもある。

寒くなつたので、小屋へ歸つて、火のわきへ管で作つた蓑をかぶつてねた。

四

第二日　晴　（前八時半發後十一時着）

起きたのは五時頃であらう、原には霧が這つてゐて、霜は置かなかつた。前の小流に口漱ぎ、鍋で米を洗つてゐるうちに、霧ははれて空は青く、朝日が至佛と笠嶽に輝く、日の光は嬉しい、陰沈な原の景色も、朝日が出れば多少華やぐ。

八時半に出發して、昨日の道を沼の小屋に出る、小屋は二間と三間位で、新しく嚴丈さうに、出來てゐる、園に薪が積んである、西洋錠をかけた戸に、片品村土出の某なる所有主の名が、筆太に書いてある、眞夏の頃は、其人が來てゐたといふ、その外は使用出來ぬ様にしてある。此處は湖に臨んで少し小高くなつてゐる、湖は際が淺くて底は白い砂でも、黒い岩でもなく、幾千年か生へては朽ちる眞薦の泥は深さうで、足を入れゝば、數丈の底へ吸ひ込まれさう、水は清いが湖面に綾織る漣も、山の湖に見る趣が無い。

小屋から今來た只見川の落口を渡りかへすと、一町許で登山口の杭が立つてゐる、燧嶽へ參詣する

者は、沐浴して體を淨めてゆけ、そうしないと、罰が當ると書いてある、その傍に御神田の植物を採取すべからずとの制札、人の心の醜きを二重にも三重にも考へさせて苦々しい。こゝへ荷物は皆置いて、二丁ばかり原をゆくと、道は林の中へ入つてやゝ上る。

道は黒い土で、雜木の間に朽木がたほれてゐる、いつか道がなくなる、沼から見た處ではと、ひた上りに上つたが、愈々木は密に山は急、もう十一時も過ぎたれば、下つて戸倉へ急がうとメチャ〳〵にかけをりる、十五分計で道を見出した、出て見ると之なり歸るも物足らず、又熊笹の間を左に登る、ゆく事廿分にして空澤に出る、澤は熊笹が兩方から蔽さつてゐるが、樹についた鉈形に導かれてゆけば、よい、石ころをふんで一時間登攀すれば、眺望が開けつゝ、滿目只笹原、その下に湖が見えて、その上に尾瀨嶺の峯つゞきの山、その先は雲漠々としてゐる、雲は東から西に飛ぶ、雲の騷ぎに、何となく心が落付かぬ。

こゝから一草一木なき火山礫、樣な急傾斜を上つて、廿分位で峯の一角に出る、暫く平で、小松ヶ原の樣な矮い雜木の間をゆく、右へ百五十米突位の處へ、三角點のある峯が見えて。左の方百米突位の處に、第二の高峯がある、後にも一つの小尖峯つまり不規則に三峯が鼎立しつゝその中が、黝い火山性の巖の間に、徑三十米突、深十米突位の窪穴がある、此磊々とした巖の上を渡つて、半すがれた薊が一ぱいはへた斜面を横につゝきる。薄い夏衣の股や腰や手や所嫌はず刺す。右手は一ぱい密樹に覆れた急斜で、沼澤峠の方へつゞいてゐる、此處をすぎて、岩の間に這松のはえた急峻なとこを、十五分程上ると、頂は十間に十五間位の廣さで、岩が凸凹した間に、石のお宮がある、銅の小鳥居など上つてゐる。

南は雲がムク〳〵と湧いて、富士も赤城も見えない、東によつて鬼怒沼山の向ふに、男體山かと思はれる樣な山の一部が見える、雲はしきりに、そつちから飛んで、笠嶽の方へ來る、尾瀨ヶ平は、黒

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

い林の帶によつて、四つか五つにくぎられてゐる。平から、かなり廣い林を距てゝ、近く眼下に沼が見へる。北は幸に晴れて、駒ヶ嶽が長く土手の樣に高低も無く、續いてゐる、その左に少し高いのは、朝日嶽であらう、あとは六千尺位の山が、波の樣にうねつて、幾重にも幾重にも重なる、大鳥とか當場とかの山々が見えるのだらうが、之といつて格別注意をひく峯はなく、會津と越後の山は、限り無く展開してゐるのである。

頂を辭したのが、二時頃、もとの道を下りる。登りがけに迷つた處は、登り口から、じきのとこで、右へ〳〵と笹の間を來れば、よかつかつたのを、左の山の方へ行つて、間違つたのであつた。主待ち顏に、日にあたつてゐる菅笠と、着吳座の傍へ腰をおろしたのは、三時半である。

成程わからぬ樣な道ではない、暫く汀について、それから林にはいる、この林は雜木も雜つて、笹の丈が低い、道幅も廣い、やがて廢屋の橫に出る（四時廿分）そこから三町ばかり、沙草地をゆくと、又林に入る、今度のは小さい、之を越すと本道へ出る、道は湖の際をゆく、こちらの岸は、細砂である、少しゆくと、赤安山の方から落る澤を渡る、此處に國境の標が立つてゐる、こゝから湖を越して、燧嶽を眺めた景色はいゝ湖の感じも馬鹿によくなる。

日はもう至佛の陰にかくれた、五時である、沼の小屋から四里位に思つてた戶倉が、此處から五里十丁とあつては、宿へつくのは、夜も遲くなつてしまふ、幸、月もあり、提灯もあれど、こりや急がにやなるまいと尾瀨峠にかゝる、登りは長くも急でもない、登りきると、廣い高原風な景色、例の笹原で落葉松の矮樹の立木「卷白乃檜原」といふ樣な感じがする、下り口からは、富士山の方まで見える由なれど、雲が夕の色に染つてゐる丈、右は尾瀨平の方に緩漫な山がつゞいてゐる。左の山に月が柔い光を放つ、まだ空は明るい。少し下つて又登る、その次の下りは、可成り急で、下りきると、一寸大きい澤へ出る、右手の岸の小高い中腹に、新しい小屋があつて、尾瀨金鑛何とか書いてあつた。此

處から少しいつた處で、日はトップリ暮れて、月の領する世となつた。

月は左手の嶺を、即いたり、離れたりして走る、溪がその山の下に流れる、山は月の陰になる爲か、きつたつて見える。右手の山は、月光に線が柔げられて、奈良の三笠山の樣、こゝらは茅原で、水楢や、山毛欅や、栃の大樹が處々に月を浴びて立つてゐる。道は時折溪の方へ下りる、楓の大木が溪の暗きを、なほ暗くしてゐる、こういふ處では、提灯をつけるが、あとは月に大方は、緩かな下り氣味な茅原を辿るのである。

七時になり、八時になり、九時になる、茅が刈られて積んであつたり、馬頭觀音の石や、黑い森の鳥居やで、村の近付いたのを喜んだが、中々村の燈はみえぬ。燒畑の小屋の灯を懷しく、薄霧の中に認めてからも、なほ三つも四つもの山の鼻をまわつた。やつとの事で、空いた腹と疲れた足に、戸倉の宿の戸を敲いたのは、十一時であつた。宿は尾瀨から來て村のとつきの右側にある、檜枝岐の丸屋位の家で、宿賃四十五錢也。翌朝宿帳を見ると、會員大平氏の名刺がある、聞けばやはり晩くなつて着かれたとの事、尾瀨と戸倉の間は、思つたより遠いのである、氏は檜枝岐から、燧へ登り、東小川の方へゆかれた由である。

五

第三日　晴　（戸倉より赤城山大洞）

赤城山大洞迄は十二里程ある。戸倉から土出越本の村々をすぎて（土出から峠越で、東小川へ行ける）三里ゆけば須賀川へ出る。こゝを眞直に南にゆけば、追貝大原新町を通つて、沼田へゆく（八里）西へゆけば花咲峠を越して、川原湯場から沼田へ出る（六里）東は東小川から金精峠を、日光湯本へゆく（七里）赤城山へは、此南を片品川について、ゆけばよいのである。

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

一寸此機會を以て、一昨年菅沼から、日光白根へいつた道を紹介する。須賀川から東小川迄は一里許、村から十數町小川（川の名）の流を下にみて、崖の腹をゆくと東小川の温泉宿、東郷館といふのがある、此宿は狹いが湯は無色透明、無味無臭何にも利きそうにないが、川原の上に廣々と石で疊んだ浴槽に、奇麗な湯が、ごん〳〵湧いて流れるのが氣持よい。こゝから溪流を下瞰してゆくと、二軒の温泉宿が各數町の距離を保つてある、一時間程で一ノ瀨の獵師の家へ來る、此獵師が此邊の山に明るいので、我々は菅沼から、直接白根の頂上にゆけるや否やを聞いた。

獵師小屋から三十分登ると、小川の源なる大尻沼へ出る、向ふ岸迄五六丁の沼だが、水清く氣澄んで、心が爽快乍ら嚴肅になる様な景色だ、四周の山は樹が繁つて、然も皆紅葉する樹故、秋は嚠かし美しからう、然しそれにも增して、周りの水際に姿をうつす赤石楠花の咲く夏の初めが思はれる。池には鮒と鱒が多い、列をなして游泛してゐるのがよく見える、鴨がゐる、かけすが鳴く、すつかり氣に入つてしまつた。沼の北岸について十數町ゆくと、瓢箪沼のくびれた處に、七間の橋がかゝつてゐる、道は昨年出來たといふ、笹の葉の上に土が敷いてあるので、歩く度に足に彈力を覺えて快い。岸の右手の笹山から來る清い澤邊に、栃と楓と椿と柱が、一つ株から出てゐる大樹がある。

此橋を渡つて、新道に從つてゆけば、金精峠へ出られる、途中に上州方面から、白根山への登り口なる、鳥居が立つてゐるといふ。橋から左の小さい沼は、地圖には丸沼と書いて、別になつてゐるが、一つの湖水で、名も別に無い様である、此東北の岸に、千明氏の養魚場がある。此處から一氣には苦しい程な、急な上りが卅分で、菅沼へ出る、橋の所から見えるが、菅沼から八丁の瀧といふのが落ちてる、その水音を足下に聞きつゝ、上るのである。上りきつて、十五分、林をくゞると、さきの新道にぶつかる、一時間半の幅を保つて、矗々と立つたリュウセンの林を眞直に貫いてる直線美、いゝ氣持だ、樹間にチラチラと菅沼が見える、光線の工合で、或はエメラルド、グリーンに、或はウルトラ

マリン、ブルシャン、ブリュー中學校の繪具函で覺えた丈の、青い色の名では、足りない色の様々。此新道を十數町で沼の向端に出る、沼は大尻沼より廣い、十町四方の沙草地があつて、金精峠から茂山、それから右に白根の頭が見える、湯本へゆくには、此沙草地をつゝきるのである、新道はこの時こゝ迄出來てゐた、道の極る處に、日本一の水と稱へられたる清水がある。

白根の裏山を登るには、こゝから林をくゞるのである、枯葉朽葉に濕つた木下道を空谷や、小丘の様な所を上り下りして、ゆくうちにも、漸々と高くなつてゆく、樹も密ならず、下草も生へてゐない故、樂な道である、(無論、路はない)林に入つて二時間たゝぬうちに、眺望が北に開けて、菅沼が鏡の様に見える、こゝらは唐檜や羅漢柏で、大木の臥れたのが入り亂れてゐる。此處から急に上りになる、數町にして、高い所に白根が見える、少しゆくと、前に大穴が現れる、幅數十米突、深さ百米突以上であらう、之は明治六年の大爆裂の際出來た、火口で御釜と稱するといふ。

御釜を右にまわつて、上ること廿分許で、尾根へ出る、上州方面からの登路と合する、少し平なとこへ、杜松が毛氈の様にはえてゐる。峨々と聳えた奥白根、燒岳の頂より、岩がかたくて登りいゝが、あれより急な傾斜である、上の方には一ぱい苦桃がはえて、九月の始には紫色に熟してゐる、此登りが二十分で頂上の三角點の傍に立つ、僕のいつた時には、生憎の雲で、眺望は無かつたが、日光諸山の内では、一番いゝとかいふ。

火口壁を走せ下ると、十分ならずして、前白根へかゝる、顧ると火口を挾んで、奥白根が、巖の肩を聳やかしてゐる、火口原には、五色沼が凄い様に美しい色をして、湛えてゐる、三十分登ると、頂へ出る、峯は禿て海鼠形に長く横はつてゐる、湯本へはこゝから一時間半で下れる、途中のナギは、湯本からの登山が、裏山越よりも困難なるを思はせる。此時の案内者は、東小川村の星野千代松といふ。

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

さて須賀川へ戻つて、そこから追貝迄三里ある、追貝の吹割瀧といふ奇勝がある、街道から二三丁はいると、赤松のはえた丘から、片品川が見える。辨天島といふのをまわつて、三百米突位の處から、朱泥色した一枚岩がかなりの傾斜で、その上に淺く急ではあるが、岩もなければ激しもせずに、平に、何と形容しやうか、頗拙いが、硝子板の様に流れてくる、川幅は一丁程で、向側は巉岩の峯である、その淺く擴がつた清流が、一方此方側から、少し下流の方へまわつて、川を斜に切つた、一枚岩の裂目へ、兩方から落込むのである、といつても見ぬ人には分らない説明だが、兎に角中々面白い、此流は更に下で大瀧となり、淵と淀み、湍と激して、千歳橋の下では、碧潭深さ十丈をなす。

道へ歸つて、此橋を渡る、少し街道からまわりになるが、一里、程ゆくと、老神の湯がある、湯は片品川の川原、道からは二百米突も下にある、小屋が此年の洪水に流れて、浴客は炎天の下で、女は洋傘をさして漬つてゐる。

大原、新町、菌原をすぎて、菌原橋で片品川を渡つて、日向南郷へ出る、此邊の溪流は、非常に美しい、日向南郷から山になつて、砂川を通つて、三里で赤城山の五輪峠の上に出る、五輪峠は赤城山の北の登路で、尾花、刈萱、女郎花、桔梗、我亦紅、藤袴が咲き亂れる頃は、實に優美な景色になる、此處らから北望すると、山の裾が七重にも八重にも、緋の袴の官女がきる十二一重の襟の様に、左からも右からも、重なりあつて、その間から向ふに遠く、武尊の方の山々が見える、二本榕の牧場邊から、小黒檜裏の暗い溪の景色も、中々いゝ。五輪峠の上へ出ると、湖から涼しい風が、スーッとくる、峠から廿丁で大沼のふちなる大洞の宿の、爐傍に草鞋を解いて、此紀行は終りとなる。

參考書は地圖では、農商務省の地形圖、日光圖幅（地質圖もあり）檜枝岐と駒ヶ嶽は、會津圖幅にある。陸地測量部の輯製圖日光は非常に間違つてる、殆用をなさない、赤城山は二十萬は宇都宮、五萬分は沼田の部になる。山岳の第一年第一號に、武田久吉氏の尾瀬紀行がある、之は日光湯本から、

金精峠を、東小川から戸倉へ出て、戸倉から直接、笠嶽（笠科嶽）至佛山（守佛嶽）の下を、尾瀬平に出で、歸路はネバ澤から、野營一泊菅沼へ出てをられる、同號に白井光太郎氏の湯本から檜枝岐へ越えられた記事がある、赤城山に就ては、第二年第二號と、第四年第二號とに記事がある。

震災豫防調査會報告の第十八に、赤城火山、第廿七に日光火山彙、共に齋藤讓氏の報告である。

附錄

一

會津風土記（寛文六年保科正之編）には、郡村之條には、伊南郷（イナ）　莊未審。民業射獵火耕。として、その中に檜枝岐（俣）とあるのみであるが、山川の條下に

朝日山　伊北山中屢後見日惟此山詰朝見日故名之自半腹至頂山岩磊魂草木不生四時雪

赤安山　陸奥上野下野三州之界

至佛山　四時有雪陸奥上野二州之界

七森嶽　有七峯遥一名荒倉山

駒　嶽　五峯綿延五十里許殘雪成駒樣

小瀬峠　陸奥上野二州之界

只見川　源出會津郡小瀬沼北流過山間數十里東轉至田子倉村

小瀬沼　在會津郡伊南郷縦八里横三里

道路の條下徑路として

檜枝岐至小瀬峠、廿四里、此間駄馬不通、自此而南、經上野國荒井、通沼田。

之等の里數は、若松田島間を五十八里餘とし山王峠と高原峠との間を、四十六里としてゐるのを見れば、五里を以て今の一里と換算してよい。新編會津風土記（文化六年會津藩編）には、檜枝岐につき、詳しき記事があり、家數七十五、若松より廿四里廿二町、そして此に關があつて「里民之を守り、往來を察す、此より沼に通ずる小路あり。」又沼越峠として「村より申の方二里餘、沼田へ通ず」

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

「戸倉まで八里許、山谷間人家なし、戸倉村より此沼の東岸に、小屋二軒をかけ置き、往來に便す。」とある。

然して「小瀬平（チセガ）は村の西五里、小瀬沼は四里餘、東西一里十二町、南北十八丁半は、利根郡に屬す、大江澤（赤安山の西の峯を上野にては大江山といふ）釜堀澤之に注ぎ、大巖あり鵜鳥飛び鰌岩魚を産す、此邊にては、土人手と舟とを云ふ事を忌む、此を犯せば怪異ありて、漁獵するにも、筏を用ゐて、舟を用ゐず」又「只見川は又アカソ川といひ、沼より北流二里の間を、沼尻川ともいふ、不動瀧は三條瀧ともいひ、直下二十丈餘、檜枝岐村より六里申酉にあり」とある。燧嶽神社は、大山祇神を祭り「燧嶽は村の未申の方二里餘、頂上迄一里餘、半腹より上は巖石重疊、草木不生、絕頂に四時雪を絕たず」此邊「一帶四山皆勢緩く、栂樅柳の外生ぜず、燧嶽のみは、上は岩石、下は雜木簇叢たり」又「至佛山は數峯の奥にあり、山勢はげしく、創り成すが如く、殘雪奇狀を爲す」。然して小瀬平は、小瀬大納言の遺跡なる由が、書いてある。

之に反して、上野の記錄は、此邊に對して、甚冷淡である、山も駒ヶ嶽が却つて地圖などに出てゐて、燧嶽の名は殆んど見ない、只武尊山名所として、火打嶽を擧げてある位である、そして尾瀬沼に就ても、僅に國志に「利根郡大山多し」として駒ヶ嶽（越後界にあり越後にて白澤嶽と云）の名をあげ、沼峠の下に「駒ヶ嶽の東にあり、三國の界なり、山上に沼あり、尾瀬沼と云、沼の中央國界なり」とあり、名跡考にも尾瀬沼が駒ヶ嶽の東にあり、三國の境なる由を書いてある。

國境は先年も爭があつたとか、原の小屋で聞いたが、之等によつても明でない、然るに新編會津風土記の白峯の所に、檜枝岐村の西にあり、寛永の頃、銀坑あり、小屋千軒に及ひしが、寛永三年廢坑となる、寛永十九年高田領と境を爭ひ、正保三年大島嶽より南、小瀬只見の中央を境とし、利根と魚沼の支配となりし由を、書いてある。

又上野國志に、尾瀬沼の水西北に流る、大瀧川と云ふ、川の西は越後、東は陸奥なり、但大瀧川、越後にては不動瀧と云とある。此邊の事に就ては、上野私記に惡勢名所といふ中に、駒ヶ嶽、沼（魚鳥あり）原（唐松あり）四佛山、笠木の嶽などをあげてゐる。それから戸倉に番所のあつた事は明で、古い地圖には、門形が附してある、國志にも「戸倉番所。會津へ越る道なり」とある。又東小川村の條下に、沼峠を越へて、會津檜枝岐へゆく峠に、三里の沼ありとある。

地圖には今の菅沼の邊と思はれる處に、ツウラ沼と書いてある、國志には、津婦萬沼として、片品川の源、白根の峯、二十五淺ヶ嶽の下とある。も一つの地圖には、道は大江山を通つて、駒ヶ嶽の下に、長沼といふ沼があり、そして土出より奥州檜枝村へ八里卅町と、書き入れてある。

少し離れてはゐるが、老神湯については、國志に「老神村。片品川の傍に溫泉湧出す。人家なく、浴者は岩室に居る」とある外は私記に永祿年中、沼田顯泰の内室御前、入湯として其時の歌に（侍女の歌も混つてゐる）

谷深みたへぬ松風波の音唯さむしきは老が身ぞかし。
若からばまた見ん事も片品の老がみの湯は今ばかりこそ。
ながらへてまた見ん事も片品の淵の汀の老がみの湯哉。

沼田、戸鹿野、については、先代舊事本紀に、大口鳥臣利根海を治めた事が書いてあるが略す。

二

尾瀬は、會津の記錄には、小瀦とあり（昨秋檜枝岐で聞いた時も小瀦）上野の方では、皆尾瀬とある。此尾瀦に就ての傳說は、三つある。

尾瀦大納言說　野崎氏の名勝誌其他に取られてゐるのは、此說で、一般に廣く行はれてゐる樣だが、上野の舊記には、少しも書いてない、會津風土記には、尾瀦大納言の名も見えないが、新編會津風土記に「以仁王に供奉し來りし、小瀦大納言、藤原賴國といふ人の住せし地なり、今沼の東に、小瀦殿、的場の跡あり、又原の處々に、水田の形のこれり」とある。

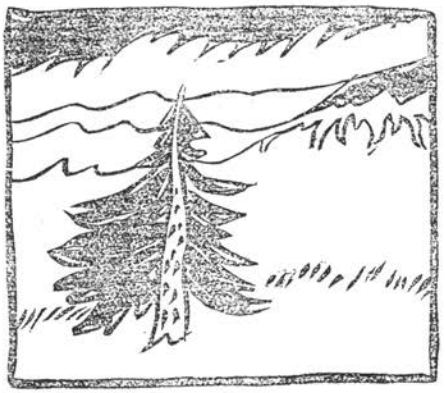
安倍餘黨說　檜枝岐でも、安倍貞任が、どうとかいふ事の外、知らないと云つてゐた、上野國志に利根郡後閑村八掬脛（ヤツカハギ）社の處に、玉泉寺々記を援き「天喜平廉間源賴義、於奥州、與安倍貞任挑戰中略貞任（或云惟任）籠居、上野尾瀦谷窟矣。欲誅之、其路危險、而其城固牢也、平廉四年辛丑賴義（或曰義家）於利根郡、勤請八幡大菩薩、誓願退敵、軍神甚見奇瑞、而後陷尾瀦城也。云々」此寺記は長享二年の書である。（此安倍餘党が、三峰山の岩窟にねて、劫掠したのを、村人が此懸崖の岩窟から下りる藤繩を切つた爲、餓死した後に八掬の脛を見出して、之を奇とし祀つた。八掬脛の事に就ては、他に三つの傳說がある、又安倍の餘党の關係に付、歷史的の記錄もあるが、之等は凡て略す）

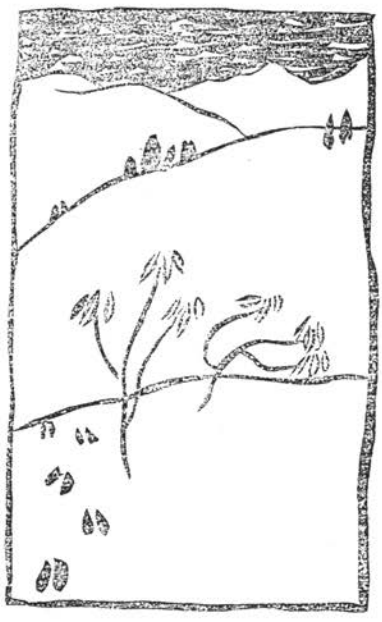
惡勢說　前の說は、どれにも據いてあるが、此說は、只私記丈に載つてゐる、「往古惡勢なる者が、王法に背き、深山に住んで、四邊を劫掠し、民を苦しめた、日本武尊が下向されるに及び、惡勢は保濃嶽に陣し、通力を以て、雪を降らせて、尊の軍を惱ました、此に於て尊は、火打嶽から神火をあげ給ふて、之に對した、そうすると湯の花島から、神風烈しく、火の雨をふいたので、遂に惡勢は通力を失つて、燒死んで了つた、其妻も土出まで落ちたが、難所に惱み、大同村にて死し、娘は此山麓で、死んだ、介添の老女が悲しんで、其處を去らず、遂に石となつた、今の花咲石である。そうして最後に「惡勢は凡夫に非ず、燧ヶ嶽の盤石に馬を立てたる蹄の跡、尿したる跡、今にあり」と書いてる、惡勢は即尾瀦である。

◎燧ヶ嶽に登る記　關口

◎越ヶ岳に登る記　關口

序に武尊山の事をいふが、皆保麿の字を用ふる上野國志に「保麿山は、花咲村の奥、鈴ヶ嶽を云ふ、會津界に近き高山なり、參詣する者絶てなし、邂逅に登るものも、三年を不出して、死すと云傳ふ」又「花咲村觀音堂の傍に、花咲石あり、往古石に花咲しといふ」此花咲石を私記に「村老曰く、日本武尊の神恩を仰で、崩御の事を悲しみ、此石に花咲とも、尊を見奉る時なしといひしに、自ら石に花咲ぬ」と。





雜錄

白峰三山に就いて

白峰三山といふ文字は、私の見た書物の中では、有名な甲斐國志が一番はじめである、其後出版になつた地圖や、地理書には、白峰三山を北岳、荒川岳、農鳥山、間の岳、南岳、別當代と、いろ〳〵に記載してあつて、一定してゐない、山岳第三年第三號百八頁に、小島兄の御調査になつた、三山の表が揭げてあつて、同百十頁には、兄の斷定表が載つてゐる、成程今日我等山狂の白峰三山といつてゐるのは、北岳、間の岳、農鳥山と決定してゐるし、實際其地を踏んで見たり、よく見通の利く處から觀望しても、白峰三山は、農鳥の出る證據のある山から、北の方へ數へて、明に三大岳が聳立してゐるから、何人と雖も異論がない事と思ふ、併し私は今日の白峰三山と、往昔少くとも甲斐國志時代の白峰三山とは、別物であるといふ事を陳べて、聊甲斐國志の爲に、其冤を(小島兄が誤謬と考へられた)濯がうと思ふのである、先づ順序として甲斐國志山川部の白峰の全文を擧げて置く。

◎雜錄　白峰三山に就いて

◎雜錄　白峰三山に就いて

(白峰)此山本州第一の高山にして、西方の鎭たり、國風に所詠の甲斐が根是にして、白根夕照は八景の一なり、南北へ連りて三峯あり、其北方最も高き者を指して、今專ら白峯と稱す、中間嶺を隔てゝ武川筋靑倉村に屬せり、本村より絕頂に至る凡そ十里許、正しく西に當れり、若し其絕嶺に攀登せんと欲する者は、必ず盛暑の時を以て候とす、再宿して應に還るべし、相傳ふ、山上に日の神を祀る、其像黃金を以て鑄る、長七寸許、容るに銅室を以てす、高二尺二寸、廣方八寸、其四隅に鈴を掛く、風吹けば聲あり、峯下一里半許に、瓢池と云あり、長百五十步、一說に大加牟婆(オホカムバ)池二十八步許と云、是と異なるや、否や、未詳登拜の者、米を其中に投するに、淸淨の人なれば、其米底に沈み、不淨の人なれば、浮みて沈まずと云、中峯を間の嶽或は中嶽と稱す、此峯下に、五月に至りて雪漸く融けて鳥の形をなす所あり、土人見て農候とす、故に農鳥山とも呼ぶ、其南を別當代と云、皆一脈の別峯にして、總て白峯なり、奈良田、湯島諸村の西へ連亘して、信州伊奈郡に界せり、又駿、遠の間に出づる大井川も、此山の西南より發すと云、峽中紀行に曰、農鳥、農牛、鳳凰、地藏、駒嶽、次第遞列、其巖然二農之上者、謂之白嶺、望之稜々乎可畏、竦髮之頃、每冬時先雪、以其皎々乎莫有草木點虧之歟、是所以最籍甚乎風人之口歟○(千丈ヶ嶽)白峯の西北に在りて、能呂川、北澤を隔つ、是亦伊奈郡に界する高山なり。

之に據ると、白峰は、今日の白峰山脈の總稱であつて、最北最高のものを專ら白峰といつて、中

峰が間の岳とも、中の岳とも、農鳥山ともいつて、南が別當代といふことになる、さうして氣のせゐか知らないが、別當代の記事が、他の二山に比して、著く輕蔑して書いてあるやうに思はれる、私は田舍に住むでゐて、碌々參考書を持たないから、よくは解らないが、甲斐國志以後、明治三十年頃までの間に、白峰三山の形を、何處から望むで、圓いとか、三角だとか云ふ樣に明記した、書籍や、繪畫を觀たことがない、隨て昨年までは、往昔の白峰三山は、矢張り今の白峰三山だと思つてゐた、殊に峽中紀行の稜々乎可畏は、三山中で、北岳を除いて、圓い間の岳や、肩幅の廣い農鳥山を形容したものとは、どうしても想はれないのであつた、處かだん〳〵調べて見ると、甲斐國志の白峰三山には、北岳が漏れてゐることが識れて來た、甲府から白峰三山を仰ぐと、北岳は前山に隱れて見へない、最北最高が間の岳、甲斐國志の所謂白峰で、次が農鳥山、甲斐國志の所謂中峰で、次が私が白河內岳と名づけたもの、甲斐國志の所謂別當代である、併し甲斐國志には、望見した山

(間の岳)と、實際登つた山(北岳)とを混同して書いてある、中間嶺を隔てゝから、沈まずと云までは、專ら北岳の記事であるが、蘆倉から正しく西に當るのは、北岳ではなくつて間の岳である、當時の人は甲府から見へぬ北岳へ登つて居て、甲府から見へる間の岳へ登つたものと信じてゐたらしい、享保中勅許八景の一白根夕照、「この夕殘る日影もはれて今、むかふしらねの雪にくまなき」(中山大納言篤親卿)の如きも、甲府から見へない北岳を省いてあることは分明であらう、其次が稜々乎可畏になるが、小島兄は、「おそらく笹子嶺普近から見られたのであらう、白峰三山の全容を、東方の平地から仰ぐのは、笹子附近が近くて、明白で、一番宜いやうに思はれる」と記されたが、失禮ながら、全文を御覽にならなかつたからの間違ひだらうと思ふ、これは徂徠先生が、甲府の天主臺に立たれて、銃兵の頭目の清水某が、四圍の山川を說明する處を記されたのである、念の爲め少しく長文だが、其處を拔章する。

飯畢り、城中最も高き處に上る、所謂天守臺なり、垣ありて之を繚る、眺むべからず、唯垣外二尺の地、唇出する若き者の、之を四周し、下は則石壁百尺、亦眩發久しく立つべからず、人をして今に至るまで之を思ふて、病悸せしむるなり、銃兵の頭目清水某なる者、是より先き、命を奉じて、荊棘を剪り、木を刊り、道を四縣の地に通ず、人頗る稱して、州中の山川の處所を識る者と稱せり、邦大夫其をして來り陪せしむ、則其手を擧げて、歷指して相語る、纚々然たり、曰く、北の山、其最も遠く最も峻く、而して岸嶨天を刺す者は、金峰なり、藏王之に宮す、皆黃金の地、神の甚だ愛惜する所、故を以て人の往く者、還れば必ず其鞋を山中に棄てゝ跣足して出づ、其一塊石を拾ふを得ず、此に近き一層なる者を、龢陀となし、王子となし、冢原となし、積翠となし、峰巒倚疊、鮮淡畫くがごとし、更に近く而して一二森、又近く而して躑躅ヶ崎、右は即藩主の壽藏の處、又益々近く而して夢山、大泉寺、夢山は、僧疎石の啄するところ、蝴蝶の家山に栩々乎たるためなり、後泰雲使君、一日凱旋由る所、山上に假寐す、則曾五郎夢に托して其子となる、是を機山となす、(式云ふ、泰雲使君は武田信虎なり、凱旋の途上夢山に假寐し、曾我時致が己の子となると夢み、機山即信玄を生む、意味少しく不明なるが如き觀あり、故に婆心にて之を註す、)土人游ぶ者、石もしくば草木葉を採り、歸りて諸を枕に寘く、亦往々佳夢を獲ると云ふ、蓋し石和の後を以て、世々五郎を以て字となせり、(式いふ、武田氏は、石禾五郎信光の後裔なるをいふ)故に其說を傳會するのみ、大泉寺は、富士川の濫觴、池あり亦富士と名づく、即機山生時、洗浴する所の水なり、

◎雜　錄　白峰三山に就いて

◎雜　錄　白峰三山に就いて

其右愛宕、荒神の山あり、嶺を踰ゆれば則版牆山、之を遠くして篠籠山、即東より來る道の由る所なり、益々之を右すれば、驪駒山、神坐山、三阪嶺大石嶺、迦葉阪、弓卓嶺、櫻嶺、環匝以て南に至る、其迦葉の上、皤然觀るべき者、芙蓉峰小く、昨日覩る所に殊なり、則載籍來、諸を駿に隸する者、蓋し海驛常時貫視する所に取るなり、其實州其半を抱き、而して拱の合はざる所の者、駿、相と廼之を共にす、是寃と謂はざるべけんや、又其右に身山綿絡數里、而して七面嶺、覗乎として人を視る、皆法華僧の窟宅する所となる、稍低き者、鰍澤口の在る所、衆山左右より富士川を束ねて而して此を過ぎ益々張り、遂に灝澣汪湊をなす、兩州の人其山を鑄し、海を煮るの利を通ずるを得るもの、此あるを以てなり、又右に楢田山、益々ゆきて右すれば、則農鳥、農牛、鳳凰、地藏、駒嶽、次第遞列、以て北の方金峰と相接する者、州殆ど壺中に在つて天を觀るなり、其二農の上に巖然たる者、之を白嶺と謂ふ、之を望めば稜々乎として畏るべし、窮髮の顛、冬時毎に先づ雪ふる、其皎々乎として草木之を醫虧するある莫きか、是最も風人の口に藉甚する所以か、その其前に皚然たるもの、之を三勅使の川と謂ふ、川流甚だ漲らずと雖も、獨り長皐の彌望、白砂銀を湧かし、夕陽之に映じ、明月之を借る、此れ其奇觀、或は云ふ地藏嶽の靈を發するため、皇華蓋し三たび之に臨むといふ、(式いふ甲斐國志に「口碑に云、古昔洪水に因りて、勅使を下し、堤防を修せらるゝこと三次、遂に成績ありて、西郡諸村を開く事を得たり、民其德を不朽にせんとて、御勅使川と稱す」とあり)此に左するもの、山谷の間、林木蔚然として黑きを、市川の莊となす、州の最も饒邑なり、之を要するに一目千里、四嶺層々、良田中に闢け、皆膏腴たり、之を遠くして、鶴駒其東西に縣し、(式いふ、都留、巨摩の二郡、東西にあるをいふ)代棠子午に接壤す、(式いふ、八代、山梨の二郡、南北にあるをいふ)之を近くして、水青龍を左になし、而して信、駿の驛、右を白虎と稱す、(式いふ、左に流水あるを青龍といひ、右に長道あるを白虎といふ、古は四神相應とて、貴き地となせり)國史に謂ふ所の兜巖の邦といふもの、豈に信に然らずや、予省吾と、耳其口を提げ、目隨ひ指移り、一々應酬の暇あらざるなり、然りと雖も、風塵の勞、一洗快となす、而して眩して遂に發せず、(原漢文)

これで稜々乎も間の岳と同一となる譯だ、農鳥山は中峰と牴觸しないから省いて、農牛山は何山を指したのだといふ疑問が起る、甲斐叢記第七卷白峰の條に、「中峰を間の岳或は中ヶ岳といふ、此峰の半腹に、五月に至れば、雪漸く融けて、鳥及牛の如き形を生ず處あり、土俗これを見て農候となす、故に農鳥山又農牛山(ノウウシ)とも稱へり」とある、此書は明治以前に、甲斐の大森快奄といふ人の著作であつて、快庵が中途で歿せられたので、松井、小野の兩氏が、快庵の弟賴周氏に依賴されて、刪補撰定されたものである、中ヶ岳は、私には初耳

で、中の岳が正しいやうに想はれるが、兎に角中峰を農鳥とも、農牛とも云つたことが解る、次が荒川岳であるが、荒川岳は甲斐國志にも明記してあつて、往昔も現今も、白峯三山には加はつてゐない、間の岳と荒川岳を混同したのは、無論最初の測量者の見當違ひから出たもので、荒川が間の岳から出てゐるし、土地の人から荒川岳といふ名を聞いたのから、想ひ誤つたのであらう、荒川岳の位置は、小島兄は、北岳と間の岳の間の低い支山だと云はれたが、荒川岳が農鳥山の東へ出た支脈の一峰であることは、山岳第四年第三號に、野尻氏の北岳紀行に揭げられてある、芦安の舊家名取運一氏の書簡にもあるし、新倉から湯島へ越へる峠から見ても分明である、別當代と白河内岳の同山なることも、名取氏の書簡と一致する、然らば今日の白峰三山の名は、何處から出たのであらうか、私の臆測に據ると、最初の白峰三山は、甲斐國志のものが夫であつて、白峰三山の名が甲斐人に知れ亘つたし、一方では芦安方面の人が、だん〳〵登山して見ると、三峰が北から南へ連つて

◎雜　錄　白峰三山に就いて

居るから、最北を北の岳、中間が本物の白峰で、農鳥の出る山を、北の岳に對して南の岳と呼んだのであらう、さうして北岳が一番高く、一番尖り、一番目に付くところから、甲斐國志などから思ひ合せて、本物の白峰の名前を持つて行つて、北岳に冠して、白峰に名稱が無くなつたので、位置から推して、これも甲斐國志から附會して、中の岳又は間の岳といふ樣な、變な名を付けたらしく、農鳥の殘雪から農鳥山といふ名が勢力を得て、南の岳なる名が棄てられたので、別當代の白河内岳は、北岳の見へぬ時はまだしも、苟も北岳の顯はれた以上は、低くて、小さくて、三山の仲間入りは出來ないのである、到底角力にならないから、幕尻か幕下へ蹴落されて、其名さへ忘れられて仕舞つたのであるまいか、これも前記名取氏の書簡を視ると、幾分か合點の行くこと丶考へらるゝ、湯島の獵夫が間の岳を白峰と呼んでゐたのは、たま〳〵以て甲斐國志時代の俤を存してゐたことが知れる、瓢池の材料は皆無だから、沈默の外はない、便だから私が別當代に、白河内なる新名稱を

下した理由と、參謀本部、農商務省其他の地圖にある、白峰山脈の南岳に就いて一言する、白河内岳といふ名は、湯島の獵師大村晃平が、西山溫泉新湯の裏（嚴格に云へば表）から見へる、殘雪の少しある山を、白河内の岳（即白河内といふ溪流の出る山といふ意）といつた文字が氣に入つたから、當時別當代が果して何れの山に當るか明瞭でなかつたから、農鳥山の南の三角形の山に、私が勝手に命名したのである、今日では、新澤峠の東南の二、二一五米突の小山を、重に別當白と呼んでゐる、別當白といふ溪流が出るから名付けたらしい、甲斐國志の別當代は如何なる意味であるか、詳でないから、私田引水主義かは知らないが、別當代の名は、別當白に讓つて、白河内岳と稱して貰ひたい、併し新湯の裏から見へる山は、農鳥山の本山であつて、私の名付けた白河内岳でないことは、後で判然した、南岳は笊ヶ岳を云つたので、笊ヶ岳は甲斐國志に淘籮（イザルガ）岳と明記してある、最初の測量者が、北の岳を北岳として、南の岳そのものに農鳥山と名付て、白峰山脈の最南の高峰笊ヶ岳に、北岳に對して南岳と記名したのであらう、だから此岳は全く白峰三山に無關係なのである、今度は白峰の文字に移る、名取氏は何故か白峰を白根、間の岳を相の岳と記され、氏の案内からでもあらうが、參謀本部の網圖にも、白根岳、相の岳と認めてある、白峰も間の岳も、甲斐國志以來立派に出處のある文字であるし、特に白峰は鴨長明の「北に遠ざかりて雪白き山あり、とへば甲斐の白峰といふ」云々（此歌は諸書に散見して、各作者を異にすれば、何人の詠なるを知らざれども、今甲斐國志の古蹟部に從ふ）からの白峰であつて、山名としては誠に、代表的絶好な名稱だと確信してゐる、それを白根なんて、俗つぽい名に改めたなんか、私は大々的不平である、第一草津白根、日光白根とまぎらはしい、間の岳も可厭な名だが、事實といふ點から澁々我慢も出來る、相の岳とは如何なる出處があつて、甲斐國志のを否定する程の理由があるか、承りたいものである、いくら測量者でも、日本人であるからは、算盤許り勘定してゐないで、少しは舊名を存すると云ふやうな事

を、頭腦に入れて置いて欲しいと、文句が云ひたくなつて來る、以上を結論すると、私の白峰三山は左の通りである。

甲斐國志時代の白峰三山

現今の白峰三山

つて、白峰連嶺に與へたものらしく想はれる。（高頭式）

小島兄が白峰紀行御執筆の時は、私も可なり愚見を陳べましたから、兄の御書きになつた中には、私の謬見も含まれて居ります、だから只今私が否定しました多くは、私の謬見を訂正しました意ですが、兄を引合に出しまして、妄言しましたことは、謹むで兄に謝します。

古歌の甲斐が根は、普通白峰山脈を指したものとしてあるが、甲斐名勝志（萩原元克氏編輯天保年間刊行）第四卷には「一說にかひかねは一山の名にあらず、すべて甲斐の高山をいふ」とあるし、富士山の別名であるといふ人もあるが、甲斐國志以來は、專ら白峰山脈（殊に甲府邊から見ゆる部分）を呼んでゐる樣である、さうして甲斐が根は單に北岳とか、間の岳（白峰）を呼んだのでなく

◎雜　錄　白峰三山に就いての異議

「白峰三山に就いて」の異議

前記「白峰三山に就いて」の一文で、高頭兄は、白峰三山の名が、書籍に見えたのは「甲斐國志」が

山岳

一番はじめで「國志」に所謂白峰三山は、私が本誌第三卷第三號「白峰山脈の記」(後に拙著「日本アルプス」第一卷に收む)で、考定したやうに北岳、間の岳、農鳥山ではなくて、間の岳、農鳥山、白河內岳であるといふ事を、種々の方面から、論定せられた、さうして聊か「甲斐國志」のために、冤を雪がれると言はれてゐるが、元來白峰三山とは、北岳、間の岳、農鳥山の一鏈を擧ぐべきであることは、地位上、標高上、觀望上、最も穩當で、今日では恐らく誰も異論の無いところであるにも拘はらず、その頃「國志」をはじめ、他の地理書が、皆誤謬もしくは不穩當なる山名を、區々に掲げてゐたから、私はそれを統一限定する目的で、嚮に三山の調査表を作つたわけで白峰三山を北岳、間の岳、農鳥山と判定して、當時一般に三山の一であるかのやうに記載された荒川岳、南岳を蹴出した次第である。

およそ一山脈に列座する個々の山岳名稱に、區々の異同混淆があつた場合には、之を統一する、正確なる標準は、山といふ實在の目的格に依つて、律するより外は無いのであるから、語を換へて言へば、山は主であるが名は從であるに過ぎない、山は實であるのに名は賓であるのに止まるから、白峰三山も、實際の踏査から來た必然の結果として、上記の斷定に達したのである、もし「國志」が高頭兄のいふやうに、果して三山を以て、間の岳、農鳥山、白河內岳を意味してゐたものとするならば、それは「國志」のために、雪冤どころか、誤謬の追訴狀を提起したことになつて「國志」のために、都合は益す惡るくなるが、私が三山の斷定は、依然として、鞏固なものであることを、第一に斷はつて置きたい。

併し高頭兄は勿論、私の三山斷定に對しては、贊成されて居られるので、私が「國志」に所謂三山を以て、今日一般に認定せられてゐる三山と、混同して引き當てゝ居る點だけを、敎へられるにあるが、此點に就いても、私は高頭兄の御說に服從し兼ぬるから、以下順を逐うて卑見を述べる。

第一に私が言ひたいのは、何々三山といふ類の稱呼である、甲斐の山岳には、一寸調べたところ

で、數字に關係のある山岳が多い、私の知つてるだけで言つても、信甲境の有名な火山八ヶ岳、これは峰頭が八岐してゐるといふところから、名けられたといふし、南都留郡大石村の十二ヶ岳、これも峯頂が十二に分れ、櫛の齒のやうに並んでゐるからだと傳へられてゐる、それから同郡の三峰山（又の名三峠山）も、峯頂が三分してゐるからの名であるさうだ、尤も有名の七面山のやうに、山形が七面であるといふ意味からでなく、山頂に七面天女を祀つてゐるところから、さういふ名を獲たのもあるが、要するに峰頭の分岐から、數字名をつけたのが多く、それ等は一個の山として、峰頭がいくつに分れてゐやうとも、之を綜合して、一山に括つたところに、有機的統一（やゝ不妥當な用語であるが）を見出してゐるからである、又やゝ異なつたところで、三山といふ名は、一鎖の山脈として、山が幾座に岐れてゐやうとも、之を一貫して、一山脈に連鎖したところに、有機的統一を見てゐるからである、その例は、甲州では前記白峰の三山の外に、私どものいふ鳳凰山塊を、鳳、凰の三岳と言つてゐる、高頭兄が引かれた荻原元克編の「甲斐名勝志」天明版には、「地藏岳藥師岳といふ山ありて、鳳凰山に連れり、これを三嶽といふ」と見えてゐる、それは言ふ迄もなく、鳳凰山塊が一と塊まりに纏まつてゐるからで、白峰の三山とても、同じく北岳、間の岳、農鳥山と、北から順に言つて三座峻立して（こゝで斷絶してゐないにもせよ）一大段落をつけてゐるから「國志」の著者も、明白に白峰を「南北へ連りて三峰あり」北方最も高き者を指して今專ら白峰と稱すとして、北岳の記載が、割合の詳しくしてあるのである、「國志」は決して北岳を、三山からは省いては居らないのである、又「國志」の記載で見ると、その以前から、北岳には日の神を祀つてあつて、登拜者もあつたくらゐであるから、北岳の存在は、立派に其頃とても、知られてゐる筈である。

それほど高く、それほど顯著なる山貌を呈し、それほど登山者のある山を、人間普通の眞理狀態から言つて、三山の中に加へないことは（始めから三山なる名稱を作らないのなら、ともかくも）

有り得べきことではなからう、三山なる稱呼を作るに至つた意志の撰擇作用と、その撰擇を經た決意作用とは、對象なる三山が、主觀の方面では、それだけの感性（センシビリチイ）を動かし、客觀の方面では、それだけの觀念を呈したからで、かういふことは、割合に普遍的に「言ひ合はさねどみな同じ」ものを、人心に與へて、誰が作るともなく、出來るものである、さうして存外、この作用は、率直に、瞬間に、印象的で、且つ正確なものである、もし三山から、北岳を削去するとすれば、この稱呼を決定した心理作用の說明は、頗る困難なものとなる、高頭兄は「今日の白峰三山と、往昔少なくとも、甲斐國志時代の白峰三山とは、別物である」と言はれたが、「國志」の筆者は、人の言ふことを取次して書いたのらしいから、或は記載を混同したかも知れないが「國志」時代の白峰三山は、同上の場合に、人の心理作用が割合に普遍的で、暗合的である限り、今日の白峰三山と、やはり同じものに見てゐたに違ひない、誰か三山より「本州第一の高山」なる北岳を切り棄て、山とは言はれぬほどの小隆起なる白河內岳（少なくとも遠望の場合に於て、北岳や、間の岳に比較すれば）を、採用するほどの物好きがあらう、私は書いたものなどより、かういふ心の證券に重きを置いて、自然を觀察し、考定したいのである、即ち私は高頭兄とは反對に「今日の白峰三山と、往昔少くとも、甲斐國志時代に呼ばれたる白峰三山とは、同じ物にして別物にあらず」と主張したい。

第二に然らば「國志」に記載されたる三山は、單に記載そのものだけに就いて言へば、今日私どものいふ三山と、同じ物に解釋しては惡るいか、即ち高頭兄のいふやうに解釋すべきものであるか否かといふと、これも私は全く反對である。

高頭兄は「國志」の「北方最も高き者を指して今專ら白峰と稱す」（即ち北岳）の記事が、芦倉村を出立點として書かれてゐるにも拘はらず、甲府からの觀望上から言つて「北岳は前山に隱れて見えない、最北最高が間の岳甲斐國志の所謂白峰で」あると、無造作に斷定せられてゐる、さうして「國志」ナの原文オーカムバ池や、日の神や、北岳に專

屬する記載は、凡べて沒却されて、只だ高頭説に最も都合のいゝ「本村（芦倉）より正しく西に當れり」の一句だけを、前後を斬罪に處した途中から救助して、「芦倉から正しく西に當るのは、北岳ではなくて、間の岳である」と今度はいつの間にか、芦倉村の出立點に逆戻りをして、斷定されてゐる、「正しく西」と言つても、今日のやうな嚴密なる、方位觀測の結果から測定して、科學的に書いたものでない以上、それだけで間の岳を、意味するといふ斷定に達するほど、力強いものではあるまい、甲州では白峰一體を「西山」と呼んでゐる、私は第三卷第三號にも、揭げたが、芦安（舊芦倉）村役場からの返書に「白峰は西に當る故、西の岳といふ」とあり、又白峰山麓の舊村名、湯島、奈良田、兩村を併合して、今は西山村といつてゐるほどであるから、汎稱的の方位である、その西山の上に「正しく」がつけば「間の岳」が名乘り出るといふ解釋方は、私の贊成出來兼ねるところである。

たとひ、さう解釋が出來得るとしても、この記事は純然たる北岳の記事で、間の岳のそれでは無いから「正しく西」といふ方位が、北岳に當らないとすれば、そこだけ訂正を要するものとして、見るのが最も適當の解釋法であると思ふ。

又「國志」の記事に、中峰を「間の岳或は中岳と稱す」とあることに就いて、高頭兄は、峰下の農鳥といふ點から、今日の農鳥山、即ちその頃の間の岳と斷定せられてゐる、これは私が山岳なる實在物と、名稱の詮衡の上から、誤謬と斷定するところで、高頭兄が「國志」時代には、農鳥山を間の岳と呼んでゐたと肯定する證據にしてゐるところであるが、元來「間」とか「中」とかいふ言語には、それを介んで兩方に對稱的に存在する物體（この場合で言へば大山岳）のあるべきことが、豫定されるのが、自明の理である、北岳と農鳥山の中間にあればこそ、「間の岳」とも呼ばれるのであるが、もし高頭説に從へば、この「間の岳」は、現今の間の岳と別當代なる小隆起（もし別當代を白河內岳とすれば）との中間のものとなつて、いかに中間の性質が、左右の大小比倫を失するため

◎雜　錄　白峰三山に就いての異議

に、換言すれば齊對の中間性を失つたゝめに、無意義に近いものになるであらうか。

第三に尤も高頭君の意は、三山は、あの時代の人と雖も、今日のやうに白峰（北岳）、間の岳、農鳥山を意味したものであるが、只だ甲府から遠望するときに、北岳が見えないため、間違つて間の岳を白峰（北岳）農鳥山を間の岳と、一枚づゝづり下りに誤認して「國志」の作者や、徂徠先生は、それを取り次いで書かれたものである、隨つて「國志」の記事も、高頭君の如くに斟酌して、解釋するのが、妥當だといふにあるらしい、同君の文中「甲斐國志には望見した山（間の岳）と、實際登つた山（北岳）とを混同して書いてある、當時の人は、甲府から見えぬ北岳へ登つて居て、甲府から見える間の岳へ登つたものと信じてゐたらしい」とある如く、同君の御説の中樞なり、根抵なりは、「北岳が甲府から見えない」といふ事に、その所謂錯誤の原因を置いてあるらしいから、こゝを詳論してみたい。

白峰は、白峰又は甲斐が根の名で、古歌に早くから見え、徂徠の文章にも「風人の口に藉甚」とあるほどで、それらの文人は、無論白峰を觀望するに、都合のいゝ土地を歷遊もしたであらう、決して甲府にばかり、蟄居しては居なかつたらうから、甲府から北岳が見えないからと言つて、白峰即ち今日の「間の岳」と決めてしまふとは限らぬし、又今日でこそ、甲府に行くには、不必要な土地は、汽車で知らぬ間に通過してしまうが、「國志」時代などでは、甲府に入るには、江戸からは、笹子峠、駿河からは御阪峠（勝沼酒折附近で三山はよく見える）右左口峠、信州からは富士見峠などを通行しなくてはならない、これ等の峠、もしくはその沿道から白峰三山もしくは問題の北岳は、鮮明に見える筈であるから、今日我々が、汽車で「甲府」へ下りて、初めて白峰連山に眼をつけるやうな氣で、當時の人間對山岳の關係を覗ふのは「談何ぞ容易なる」と言はざるを得ない、高頭兄の錯認説は「國志」の本文丈けでは、立證が出來ないこと前述の如くであるが、高頭君は徂徠が甲府の天守臺から、甲州アルプスを觀望したときの全文を引用

して「農鳥、農牛、鳳凰、地藏、駒岳次第遞列、其二農の上に巖然たる者、之を白嶺と謂ふ、之を望めば稜々乎として畏るべし」だけで、甲府から北岳が見えないといふ前提の下に「稜々乎(白峰)も間の岳と同一となるわけだ」と手早く結論されたが、徂徠が天守臺から見た一文(これを笹子附近から見たものゝやうに、私が解釋したのは、高頭兄の御推察の如く、全文を見なかつた誤りで、兄の高敎を謝する次第である)は、如何にも間の岳を白嶺と呼んでゐるが、併し、かるが故に、間の岳を北岳と混同してゐると解釋し得る根據が、何處にあらう、成るほど「國志」では、北岳を指さして「專ら白峰と稱す」とあるから、徂徠が間の岳を白嶺と呼んでゐるのは、一面に於て、北岳のつもりでゐるとやうにも解されるが「國志」は今日の所謂白峰三山を、總稱して、白峰と稱してゐることは、同書荒川岳の條に「早川の西に在りて白峰の枝山なり、奈良田に屬す」と書いてゐるのでも知れる、この荒川岳は、高頭兄に依れば、農鳥山の東に出た支脈の一峰であるさうだが(私が荒川岳を北岳と間の岳間の、低い支山としたのは、少し考へがあつてやつたことだが、要するに、それは踏査地域以外の、臆測說だから、再遊を期した上のことにする)もしその時代に北岳をのみ、專ら白峰と呼んでゐたとすれば、如何にして農鳥山の東にある山を、白峰の支山と書くことが出來やうや、白峰の支山と書いてあるのは、即ち農鳥山までを含めて、三山を當時既に、白峰と汎稱してゐた證據であると、解するより外に途が無からう、然らば徂徠は同じ白峰の一なる農鳥山を、何故特にさう書いて、間の岳をのみ、白嶺と言つたかと言へば、それは私の考へでは、後文に述べる農牛山と並べて、文章技工上の對(ツイ)を取つて、その上に天守臺から見たうちの、最高なる間の岳を、白嶺の代表山として、冠らせたのであらうと思ふ、假に高頭說の如く、徂徠が間の岳を北岳と考へ違ひをしてゐたものと強ひて解釋することが出來得るとしても、徂徠の一文が間違へてゐたから、甲斐國志の著者も、國志時代の人々も、凡べて皆間違へてゐたといふ結論に、どうしたら達せられる

◎雜錄　白峰三山に就いての異議

のであらうか、況んや甲府の天守臺から見えないでも、今日の甲府市の、少し外れの太田公園あたりで、既に北岳の頂邊の輪廓は、見え初めるをやである、又況んや當時の城守柳澤侯の顧問學者たる徂徠に、家老から選拔されて、說明係になつたほどの山川通、淸水某が、形態の似ても似つかない北岳と、間の岳とを間違へるやうな、粗忽はしなかつたらうと思はれるをやである。併し最後の人物のことなどは、どうでもいゝ。高頭兄は、湯島獵師が、間の岳を白峰と稱したのを、古稱の俤が殘つてゐるかのやうに言はれたが、この獵師は白河內岳以南に對して、間の岳だの、農鳥山だのと、いゝ加減な名をつけてゐたから、間の岳を白峰と呼んだのは、偶ま無識の結果で、敢えて同君が買ひ冠られたやうに古代の俤が殘存してゐるのでは、なからうと、私は思つてゐる。

序に言ふが高頭君は「二農」（農鳥農牛二山）を「甲斐叢記」に依つて、共に農鳥山のことと解釋して居られるが、私は農牛山は、鳳凰山塊の或一角で、農鳥山とは全然別山であらうと思ふ、その理由は、農鳥農牛、ともに殘雪が融解して、さういふ形を現はすものであるとすれば、同時に出なければならぬ、然るに農鳥といふ同一山に、略ぼ同時に、甲府方面に向いた位置に、農鳥以外に農牛が現出するといふことは、敢えて有り得ないことでは無いが、私は未だに聞いたことはない。

そこで鳳凰山の一角、觀音岳邊に、殘雪が農牛狀に出現することは、友人野尻氏が去る四十二年五月下旬、氏自身が認（みと）めたるものとして、私に他の富士山の殘雪豆蒔小僧と共に、寫生して送附せられたことがある、そつくり違はない、寢牛の像である、その後高頭兄所藏の「山梨鑑」（廿七年版）を借覽して見ると、鳳凰山の條に「是より東南に方り、地藏ヶ岳、觀音岳、藥師岳等あり、皆一脈の連山なり、又此山の表面に暮春の交より、雪の消えたる痕跡、自然に牛の形をなす所あり、之を農牛山と稱す」とある、私は目擊者なる野尻氏の寫生圖と、比較的新らしい智識を與へる「山梨鑑」の言ふところと對照して、農牛山は鳳凰山塊の南端、即ち藥師觀音附近の別名と斷定する、又石和

の蘭醫辻守瓶といふ人の書いた「甲陽記錄」といふ寫本（これも四年前、野尻氏が謄寫して小生に送られしもの）は、白峰山と鳳凰山のことが、混同して書いてあるが、その混同記事の中に「野牛が岳（鳥水生いふ、農牛岳と同じならむ）といふ、牛の角に似たる形に、雪の消ゆるゆへに云ふならん、此所に野牛島といふ村あり」として、村名と山名を、關係のあるかのやうに言つてゐる、野牛島といふ舊村は、上高砂、六科などいふ舊村と合併して、今は御影といふ村になつてゐるが、甲府元標から、約三里、藥師岳の東麓に當る村で、農鳥山とは、丸ッ切り緣の無いところである。

祖徠が白嶺を叙して「二農の上に巖然」といつた上にの文字に、注意してもらひたい、山岳の觀望からいふ「何々の上に」といふのは、略ぼ同高度の隣りに列なつてゐる場合などにいふよりも、それに跨がる位に、壓し冠さつて出てゐる場合を言ひはしまひか、祖徠は農鳥山と鳳凰山塊の觀音藥師を兩腋に挾んで、跨がるやうに、その上に拔け上がつた間の岳を觀たればこそア、書いたのではないか、同じ祖徠の文中に「迦葉（三坂山脈の迦葉坂）の上に皚然（白きかたち）觀るべき者芙蓉峰（富士山）」とあるのも、同一筆法である。

高頭兄は又、享保中勅許八景の一、白根夕照なる中山大納言篤親の「この夕殘る日影もはれて今むかふしらねの雪にくまなき」を甲府から見えない北岳を、省いてあることは分明であらうと、言はれたが、白峰は三山の總稱である限り、北岳が省かれてゐやうと、ゐまいとかまはない、況んやこの歌は、甲斐八景の一で、今日で謂ふところの、甲府市に限られて、詠じた歌ではないのである。この勅許歌なるものは、柳澤甲斐守吉里の時代となつて、享保年中、甲州に八景を定め、奏請までして、勅許を賜はり、八景を確定議として、八人の公卿に歌を作らせた中の一首で、寫生の歌か、それとも「坐ながらにして名所を知る」的の歌か、そこまでは私もよく知らないが、要するに北岳間の岳錯誤說に有力になる證據品ではない。

その他高頭兄の御說に、南岳は笊ケ岳のこと、笊ケ岳と淘籮岳（イサルガタケ）と同一物なること、白根よりは白

◎雜錄　白峰三山に就いての異議

峰、相の岳よりは間の岳が然るべきこと等は、私に於ても全然異存が無いし、且つ三山の名稱問題からは、遠ざかつて居ることであるからどうでもいゝが、高頭兄が白峰の證歌に鴨長明の「北に遠ざかりて雪白き山ありとへば甲斐の白峰といふ」云々を擧げたのは、どうかと思ふ、古人の歌などは、假名を後人が、漢字で塡めたのが多く「たかね」も高根、高嶺、高峰、など、人に依つて種々塡められて居るから、果して長明の原歌原本に「白峰」と書かれてあつたのか、それが明白に解らぬ以上は、證歌として、持ち出すのは、早過ぎるとおもふ。

之を要するに「國志」に記載の三山は、ヤハリ北岳間の岳を第一第二と數へてゐることは、明白で、間の岳と農鳥を混同したのは、間の岳の山形が、北岳に似てゐるよりも、寧ろ農鳥山の方に、より多く似てゐることゝ、それから所謂農鳥の表現は、融雪期に入つて、短期の現象であるから、常住的に注意を拂はれなかつたゝめであることで、第三の山は別當代、別當白を假に同物と見做しても、三山中に入る資格の無いのは、素よりで、高頭兄の白河內岳も、原文の別當代とは、殆んど無緣のものである以上、(幾分か白河內岳に距離が近いと言ひ條)私も無緣の便宜を借用して、且つは地理上必然の約束を信じて、今日の農鳥山に、當て嵌めたいのである。(烏水生)

一體辯解文は、次號でするのが禮儀であるかも知れぬが、高頭兄と小生とは、同じ編輯の席に列なるばかりか讀む方から言つても、兩方を對照する便利は、同時に出した方に、あらうし、又私も、興味が失せると困るから、すぐ思ひ立つて書いたわけである。

信州の甲駿境の一部

縣分けと云ふ區分法は、行政上の便宜等と云ふ事は一寸考へ外におく事にすると、甚人爲的に境がきめてあつて、どうも自分等の様な天ノ邪鬼には氣に入らない、やつぱり主として天然の地形に從て境が出來て居る國分けの方が面白く思へる、でその國境は昔は領分によつて支配者が違つたの

故、明確になつて居る筈だが、實際は山地の様に、通常の人の生活から離れて居て、どちらに屬すとしても大差のない様な地方では、境が分らぬ様な處も少くあるまいと思ふ、然しこれも、全國の地形測量が完成したならば、はつきりする事と樂みに待つて居るわけだ、偖茲に以下書かうとする事は鋸岳から荒川岳に至る、國境山脈の主として信州側の事で、一二述る次第なので、それを便宜上表題の如く括つたから、一寸何も縁りと以上の言を並べて、聊解題の辭に代へる事とする次第だ。

一鋸岳

甲信の國境が釜無川に沿ふて居る事には、何の疑もないが、それからどの尾根へ行つて居るかは、ちと分りにくい點がある、然し國境と云ふものは、特別な理由の無い限りは、天然の地形に從ふべき筈のものであるから、釜無川が中ノ川と分流する處の間に突出て居る、鋸岳の最主なる脈へ登つて進むものと考へるのを至當とする、でこの鋸岳は最近の測定では海拔二六〇七米と云ふ事になつて居るが、それは恐らく三角標點の高さであるに相違ない、同山の三角點は最高點ではなくそこより大分北へよつた峰にあるのだとの事故、最高點は尙高いものであらう、方々から此岳を見た感じから打算すると、最高點は二千七百米附近だらうと思はれるのである。この山は即甲信境をなすもので、幾つかの峰から成り、別に一脈を派して所謂釜無山から佛平峠の方へ行つて居る、その脈の方の様子は一向知らぬが、可なり穩かな山勢らしいが、主脈は見た處、その名に相應なゴツ〳〵した山で、全山古生層から成つて、甚崩れやすく、其各峯間には大分ひどい斷崖がある處も多いらしい、全體として妙に赤黑い岩片の積重りの様に見えて、薙が山の斜面を形成して居る様な信州の黑川に向つた側は勿論、樹が茂つて居る甲州方面でも、甚凄い感じがして、頗近づき難い様に思はれる、實際に於ても岩が大變崩れ易いので、登るのには危險が多いとか云ふ事で、確かにその最高點を踏だと云ふ人はまだ聞き及ばない、然し戸臺邊の獵師は其頂上まで行くと云ふ話しを聞た事も

◎雜錄　信州の甲駿境の一部

◎雜錄　信州の甲駿境の一部

あるし、さして大きくもない山であるから、どの方面から行くとしても、登つて登れぬ事はあるまい、たゞ勞に値するほどの功は恐らくあるまいと思ふ、最高點の東南の一座即第二の高所には會員星忠芳氏が登られた、その記事が山岳第六年四二九頁にあるから參照されたい、その峯の東南にやゝ細長い頭の峯があつて、尙脈を傳つて東南へ行くと、駒岳へ行く尾根と烏帽子岳への尾根とで三叉になる地點がある、そこまでが鋸岳の領分であると見うると思ふ、この三叉點の處から南へ信州黑川の方へ、不動澤と呼ぶ澤があつて、その下に不動瀧と稱する瀧があるとの事であるが、信州で七丈瀧（甲州で七丈瀧と云ふのは大武川の篠澤へ落ちるもので、勿論これとは別物だ）と呼ぶものと同一のものらしい、不動と云ふ名は信州の方では聞かなかつたが、七丈瀧の下の河原に近く威力不動尊を祭つた處があるとか云ふ由故、信州にもこの名はあるのかも知れぬ、山岳第三年第一號六二頁の紀行を參照されたい、その內に白崩山の登路の左手に頂から崩れたと書たものは鋸岳の主峯ではなく、不動山か或はその西北の峯なのであらうと思へる、で七丈瀧は不動山と刀利權現との間にあるのらしく思ふ。

二　刀利權現

鋸岳から甲信の國境はどう行つて居るかと云ふと、參謀本部の輯製廿萬は、輯製圖の事故參考する事はやめにして、農商務省の地形二十萬によると、鋸岳から、すつと脈などには頓着なしに前岳へ向つて、殆直線的の國境がある樣になつて居る、この二座を結ぶ山脈がないとか、又はあつても出鱒目に迂回をして居るとか云ふなら格別だが、同圖に依ても、甚しく、迂回をせずに、それをつなぐ脈があるのであるから、この國境の付け方は甚亂暴なものだと云はざるを得ない、國と云ふものは八角とか十五角とか何も規則張た形を持たねばならぬわけのものではなく、その境の線は出來るだけ短い事が必要だなぞと云ふ理屈もないので、主として天然の地形に依るのであつて、天然に依て交通が妨げられるが爲に自ら國が分れる事とな

るのであらうから、川に沿ふ塲合には、いくら流れが蛇行してもそれを離れずに曲りくねつて行くべきで、山脈に沿ふ時は人間の歩く途などは眼中におかずに、その稜に沿ふて走らねばならぬ、でなければ國境の眞義に外れると思ふ、參謀本部の網圖のは、この意味に於て正當で、又實際土地に行はれて居る區分と同じなので、鋸岳から脈を傳つて刀利權現へと行て居るのである、前に云た三又の點を少しく烏帽子岳の方へ進むと花崗岩の山になる、この烏帽子岳は前後大岩、鞍掛山等の脈の主座で、遠くから見ても駒岳と鋸岳との間にその存在を認め得るので、二千六百米位にあらうと思はれる、偖又三又を刀利權現の方へ、可なり進むとやはり花崗岩になる、刀利權現は信州戸台から駒岳へ登る途にあるので、その六合目に當るとか云ふ事だ、(黒川の前宮から數へての事であらう)其黒川の方へ向ふ尾根を少し進むと、古生層になるが、刀利權現から駒岳の頂上へかけて全山花崗岩で、信州方面が白くザレ落ちて居る狀を伊那から高遠への途上で見ると、一見その別名白崩山である事を直覺し得るのである、刀利權現の植物帶の有樣は仲々面白い、こゝから以前御中道と稱して、直接に奥ノ院——甲州方面で藏利支天と稱ぶ絶頂の南の一支峰——へ行く道があつたとの事であるが、今はその跡も全く無いので頂上の右をからむのか、左を行くのかさへも全く分らない。

◎雜錄　信州の甲駿境の一部

三　駒　岳

山稜に沿ひ同時に國境に沿つて駒岳の絶頂へ出る、その間に一二岩壁の足塲のあまりよくない處もあるが、大して困難はない、途の左右は非常な傾斜である、最高點は一丈程の花崗の大岩で、その南に三角點の標石がある、二九六六米と測られて居るのだが、その絶對値はさに角、附近の前岳、農鳥山、荒川岳等の標高に比べて、この高さにちと低過ると思ふ、前岳との差は雙方から互に見、且外の處から見比べた處二十米とはあるまいと思はれるのである、一等三角櫓は今は全く壞れて居る由だ、こゝに多くの石牌や馬頭觀音の像がある、こゝを甲州のものは奥ノ院と稱で居るので、

頂上と云ふのはこゝの東北のつい近くに、大貴己命の像のある一地點を指しての名である、そこは又大貴己とも稱んで居て、頂上の一角とも見られやうが、絕頂よりは低く、數分の距離にある、ずるい案內は、こゝで御免を蒙つて絕頂へ行かぬものもあるとかの話しもきいた、絕頂の南遙か眼下に白く禿げた峯頭が見える、これを甲州の方では摩利支天と呼でおる、恐らくその祭神にちなんでゞあらう、麓から見てもこれは著しく眼につく、信州ではこれを奧ノ院と呼で絕頂を頂上と云て居る、即駒岳として云へば絕頂が奧ノ院で大貴己が頂上になるので、白崩山として考へれば絕頂が頂上になつて、此峯が奧ノ院になるのだ、この峯を又南坊主と呼んだものもある由だが、南坊主は北坊主とならんで、尾白川の上流へ出て居る小さな峯の名であつて、此峯の名には用ひられて居らぬ、絕頂から摩利支天へは降るのに約三十分位かゝる、甲州から登つた人は、殆こゝへ立寄る事をしないので、案內者も大抵何とかごまかして、此峯へは行かない、算談をする由である、此峯から下は、傾斜が頗急で、御座間など〻名がついて居る處があり、又茸岩とか傘石とか云ふ、その狀をなした花崗の大きな一枚岩があるとかきいた、尙ずつと下るとサデの大岩と云て大武川の本谷と地獄谷の下に在る赤河原との間に、百二十尋の綱を用ひても中途までしか下れない程の岩があるとかの由である、摩利支天と頂上から黑戶山の方への脈即甲州方面からの登路の脈との間の谷は、即地獄谷で、花崗が崩れて、仲々危い處が多くある、が此山で高山植物が多くあるのは、殆此谷に限ると云ていゝ位である、駒岳と云ふと、ちよつと駒草がありさうにも思へるが、その名義考は知らないがとに角此山には同草は少しも無い、此谷の下を赤河原と呼ぶと云ふ事だ、偖雜誌「旅行」第二卷第一號九〇頁に小島烏水氏が汽車中から見える山岳を書かれた內に「……日野春から小淵澤までの間では、大高原を次第に登りとなつて、花崗岩の大王、甲斐駒ヶ岳は、鐘狀をなした、鞍掛山から、長大にして銳利刀を橫たへたやうな屛風岩の絕壁となり、烏帽子岳の峻峰に擊がつて、最高點摩利支天から、

頓に低くなつて、古生層の朝奥岳に續く間に、標高富士山に次げる日本アルプス中の第一高座三千百九十二米突の白峰北岳が、鋭錐形の首をちよいと出す……」と誌されたのがある、自分等の乏しい觀察によるに鞍掛山から烏帽子岳までの間には、又の様な絶壁と云ふほどのものはなく、たゞ八丁尾根が細長く引張ては居るが、これもうしろの、鋸岳にひつゝいて、大した特徴を示して居らぬ様に思はれる、而してその邊に屏風岩と云ふ名があるのは全く初耳であるので、その岩はどの邊にあつて、どの地方でこの名を呼ぶのかの御示教を仰ぎたく思はれる、更に最高點摩利支天と書かれたのは、その間に及びと云ふ字が略されたのだと思へば分るが、同氏が中學世界の新年號に同じ處の叙景をされたのに用ひられた句等を參照して、どうも即と云ふ字を入れるのが適當であると思はれるのである、絶頂は頂上とか奥ノ院とか云ふ名の外に特別な名を持て居らぬが、これを摩利支天と稱ぶ事は自分等は決してないと思ふ、然しこれもその各を呼ぶ地方があるのかも知れぬ故、同時に御示教が願ひたいのである、勿論汽車から見えるのが絶頂であるか、又はその一角であるのかは自分等には確かではないが、摩利支天よりは更に高い處が見えて居る事は確かで、恐らく絶頂が見えて居るのだと云ひ切り得ると思ふ、尚次に摩利支天と朝奥岳との間に北岳が見えると云ふ事は自分等には全く考へられない、日野春、小淵澤間で、朝奥岳と鳳凰山との間の、後者へ寄つた處へ、北岳が頭を出すのは自分等も見た、これは小淵澤でも尚見えて居る、而して駒岳の絶頂から、朝奥岳の眞上に北岳が見える事から推しても、光線が直進するものであつて、幾何學の證明する處に疑がない以上、駒朝奥間に北岳が見える事は、あり得ない筈だ、實際、駒岳と朝奥岳との間は、何等の峯も顔はおろか頭も出す事が出來ないほど狹いものである。

◎雜錄　信州の甲駿境の一部

四　白崩山

甲信境は駒岳の絶頂から西に向つて分派された尾根へと進んで居る、絶頂から急な花崗岩の斜面

を、それへ向つて降ると、ちき古生層になつて、山稜には切り當てがある。小峯を越えると朝與岳へと續く脈が分派されて三又になつて居る地點がある、即朝與岳から駒岳へは、こゝを經てつながつて居るのだ、その脈の方にも切り當てがあるとかだ、偖國境の切り當てを尙進んで（國境は山稜に沿ふて行く、途は必ずしも、それに從はないかも知れぬが大體に於ての事だ）行くと、登り降はあるが、大體はドン〳〵降つて、その下りきつた處は黑川から野呂川へと越す峠の頂きである、こゝを池ノ平と呼んで居るので自分等が山岳第二年第三號七八頁に書た峠の頂上はこゝである、偖日本山岳志二一三頁に載て居る高橋白山先生の白崩山に登る記行を見ると「……經非持、溝口二村、出三峰川東岸、二里二十四丁、至黑河內村、路爲兩岐、右通鹿塩、左達白崩、傍小黑河而東、有一小村、倚坂架椽十有八戶、名曰黑河、又行二十八町至戶臺……左折入東溪、有二家、曰藤戶袋……（因宿）……六日晨起、大霧不辨咫尺、出屋日已高、行五六町、有白岩螺岩、對峙路傍、白岩至三石、數百步間、河水入地……溯流一里三十町、過雄勝、地藏二嶽間、拜白崩麓、山皆白砂、松皆五葉、景色甚奇、至是河水見二派、東流者、爲甲斐早川、西流者即小黑河也、源窮而山如削、危石壓頭、勢將墜下、步々砂崩石轉、愈上愈險、矮松着地、如蔓草、至山腹不復見寸木、萬岩飛起指天、未至頂上七八町、有平處就憩、西北望鵜湖、榮々如小星、東南姑射、白峯、鳳凰諸嶽、遙連駿遠國界、子剛曰、頂上極高、過午必陰、即鼓氣而上、達即雲既合、迅風拂衣力極健、置脚不安、謁嶽神廟而下山……」と云た樣な記載がある、この小黑河と書てあるのは、今の黑川の事である事は、黑河內を經た處で三峰川に分れて東流するので分る、今小黑川と云ふのは黑川の一支流で、戶臺邊からまづ北へ入る流れの事だ、藤戶袋と云ふのは、どこか知らぬが、戶臺から遠くない處であらう、河水入地と云ふ事は今はない樣だが、何しろ昔とは瀨が違つて今は三石が埋もれた樣な次第で萬事大分變つた樣だし、殊に年は分らぬが昔の九月五日の事故秋の水涸れで、そんな現象があつた

のだと考へて差支へはない、偖それからの道は、自分等が嘗つて登つた如くに刀利權現へ出て登つたものであらうか、ヤブ川の合流點から池ノ平へ登つて、國境に沿ふて登つて行たのであらうか、がどうも判然しないので、河水見二派云々の文句は池ノ平（そこからは黒川も野呂川（即早川）もまるで見えない樣だが）へ出たものとするのが好都合だが、山皆白砂は刀利權現でなくては云へない、即早川とあるのは尾白川を誤認したのだとすればそれで濟むわけだ、然し未至頂上七八町云々の處で、鳳凰山が見えるとあるのは、刀利權現からのではとても行はれない事だ、駒岳の頂上からは鳳凰山は手にとる程近く眼下に見えるが、絶頂へ出ない內は信州からの登路では少しも見えない、池ノ平からの路ならその點は差支へない、姑麻とあるのは駒で、まだ頂上へ行つかない內故、頂上そのものを指したのであらう、たゞ池ノ平の途で諏訪湖が見えるか否かは一寸分らぬが、恐らく見えると考へられる、それ故山皆白砂の形容をのぞけば池ノ平を經て登つたらしくも考へられる、この黒川と藪河とが分れる間に突出て居る峯を不動岳とか呼ぶとの事だ、勿論小さなものではあるが一寸書ておく、偖この記行の登路はよく分らぬが、少くとも四五十年前からは白崩山の登路は刀利權現を經て登る樣に知られて居て、池ノ平からのは一向知られて居らぬ樣である。

五　前岳

池ノ平は駒岳と前岳——多く仙丈岳の名で呼で居る、然し自分等は其名を副名とし前岳を正名とする、其理由は山岳第五年二四五頁以下に書てあるから參照されたい——を結ぶ線よりはやゝ北に寄つて居る、これから國境は前岳の尾根へ登つて行く、それにも切り當てがあつて、それに沿ふて前岳へ登る事が出來る、山岳第六年五三九頁に小島烏水氏は「……日本アルプスを通じて、サアカスが東面即信州方面に多いのは、そこが風下に當るからで、風上の雪を或る程度まで拂拭して、風下に堆積し、そこには山脊に依つて、風を遮斷するからであらう、併し風下といつても、峽谷の

間か西山脈の結節點、V字形をなせるところに、位する山は、最多くその衝に當るのでは無いかと思はれる……南アルプスでは、白峯赤石兩山脈を結束する點の、仙丈岳（前岳）に、著しく發達してゐる。」と書かれたが、白峯赤石の兩山脈を結束して居る點が、もしありと考へるとすればそれは今間ノ岳と呼ばれる白峯の一座で、前岳はそれから北に派出された一脈の主峯であるだけだ、決して兩山脈を結ぶ事などをしては居ないのである、傳に云ふがこの邊でも冬は恐らく主に北風が吹く事と思ふが、此山の所謂サアカスは二つの方面にあるので、風上風下の論では說明しがたいと思ふ、自分等はよくは知らぬがサアカスと云ふのは地形の名であつて、其成因は種々であるとの事だ、前岳にある樣な地形がそのサアカスに該當するか否かもちとあやしいが、假りに該當するとしても、あまり雪の多くないらしい此山のサアカスを、雪の作用で說明するのは大に早計だと思ふ、ましてやこれを氷河的地形に數へるなどは、自分等には頗同意しがたいのである、日本の山の形が、アルプスのそれらの樣に、心地の惡いほどドギツイ感じのないのは、氷河的作用がなかつた爲で、標高は可なり高いに係らず、氷河が存在しない事が、かへつて我國の山岳のほこりなのであるまいかと思ふ、サアカスを雪や氷で說明する事は、歐洲では流行るかも知れないが、日本人がそれに盲從をせねばならぬ理由はない、サアカス、堆石などと云ふものが氷河の產物として生じ得ると云ふ證據はあつても、それ以外の理由から出來る事は決してないと云ふ證明はまだ無い今日では、山崩で此地形が出來たと云ふ樣な說も、大に一考すべき値のあるものであらうと思ふ、前岳は古生層の山で三角點の標石はその頂上にあり三〇三三米との事だ、槍はやはり今は無い、頂上の北にあるサアカスはヘイエモン谷へ向つて開いて居るらしいが、ヤブ川へ向つて居ないと云ふ事は確言し兼ねる、その二つの澤の間の尾根は可なり高いので、その上に一つ三角點があり、馬ノ脊と銘打たれて二七一六米ある由だ、伊那や高遠の方から見ると、此山が一番近く前にあつて、如何にも名は體を現は

して簡單明瞭で前岳の名が面白い、前の漢文記行に雄勝地藏二岳とあつた、その後者は、どれだか見當もつかぬが、雄勝はこの山の別名、オガチ岳と云ふ故、それを指したものであらうと思へる、頂上から尚多くの尾根が出て居るので、鹽平の方へ出て居るのや、三峰川の間へ出て居る所謂中山のや、又間ノ岳へ向つて走る、國境の脈やは、其主なるものである、その國境の尾根は、切り當ての有無は知らぬが、甚低くなつて居る點と、木が非常に茂つて居る處から考へて、その稜を歩くのは隨分困難であらうと思ふ。

六　東俣山

國境の尾根は東南に向つて、間ノ岳へと行く、山岳第六年一四九頁に自分等は、三峰川の一支流が間ノ岳に向ふと書たが、それは恐らく大横川であると思ふ、熊澤かとも思つたが、それは黑檜山の裾で食留められて、あまり深く入り得まいと思ふからだ、で甲駿信三國の境については山岳第六年五四四頁の高頭式氏の記事を參照されたいが、その境の地點は三國山にならうが、それは殆一座をなす程のものでなく間ノ岳の一角であるから、間ノ岳自身が即三國の境になるのだと云て可だと思ふ、偖日本山岳志五七三頁に東俣山と云ふ一座の名があつて、それに「駿河國安倍郡、信濃國下伊那郡、甲斐國南巨摩郡に誇がる。安倍郡井川村大字田代より十里三十四町にして其山頂に達す、全山秩父古生層より成るもの丶如し。標高凡一萬二百十二尺」と云ふ記載がついて居る、田代からの里程の事は分らぬが、その三國に跨がる處はどうもこの間ノ岳に該當する、殊に間ノ岳に井川の東俣の上にあるの故、田代の方等では此山を東俣山と呼んで居るのであらうと思ふ、間ノ岳と云ふ、殆無法な屈從的な名をやめて、自分等は今後此山を東俣と呼ぶ事とする、而して尚諸君の御同意を願ふ次第である、偖同書二一六頁の白峯山の記載には「甲斐國南巨摩郡、駿河國安部郡に跨る、中巨摩部芦安村字芦倉より凡十里、阿部郡井川村大字田代より十里三十四町にして其山頂〔最高點即北岳〕に達す、標高一萬三百九十八尺」とある、こ

◎雛　錄　信州の甲駿境の一部

の山は何物を指すのであらうか、國籍からこれを判斷すると農鳥山か尙その南のものになるが、同書五七四頁に高頭氏も書かれた如く、田代からの遠頂里程の等しい處から推して〔〕內の挿入句は誤りであつて此白峯山は即前記東俣山、即今の間ノ岳の事ではあるまいか、殊に井川の上流に白峯澤があり、湯島で此山を白峯と呼ぶ事、更には間ノ岳の古名が白峯である事より推して、然く判斷して差支へはないと思ふ、即白峯即間ノ岳即東俣山となるわけだ、然しこの白峯と云ふ宜い名を脈の最高座でない、此岳に與へるのはちと、はゞかられるわけである、然し北岳に白峯の名を獨專させる事は尙更賛成し難いので、現今ある地方では白峯と云へば直ちに其岳を指す處もある由だが、すぐ隣りに歷とした白峯と云ふ古名を持た山がある以上、其名を横取りするわけには行かぬ、然し北岳なる名は甚平凡で、小細工で面白くないから、これに甲斐ヶ根の名を附したいと思ふ、甲斐ヶ根と云ふのは別に定まつた一座の名でないとも云ふし、富士山の事だとも云はれる、殊に後者は昔から大分有力な説である、然し大部分が駿河にある富士は甲斐の代表的の山とは思ひにくい、高さは富士にこそ及ばぬが、本州では富士に亞ぐ高點で、少しも他國の領に入つて居らずに、純粹に甲州のみにある、この岳を甲州の代表的名山に擧げずして他に、何物もあり得ない、即甲斐ヶ根の名を北岳に附して今後然く呼びたいと思ふ、而して、甲斐ヶ根、東俣山、農鳥山、白河內岳等を引括つて白峯と呼ぶ事とすれば、古名も存せられていゝ様に思ふ、偖其甲斐ヶ根を信州の方では大横川ノ岳と呼んで居る、これは大横川の上に當つて居て、甚高いので呼ぶらしいが、正しく云へば大横川は東俣山から出るのであかるら、大横川岳は東俣山の別名と考へるのを正當とする、たゞ荒川岳あたりでは、甲斐ヶ根の峻秀に壓伏されて東俣山は殆その臣下の如くに見えるので、大王を大横川岳と呼ぶのらしく、正確にその何れを指すのかと云ふ事には、多くの智識を土地のものは持て居ないらしい、そんな事までを彼此云ふとなると、白峯と云ふ名も、大井川附近から北に遠ざかりて見える

雪白き山は、恐らく赤石山又は尚南の諸山や、笊岳の南の脈や等であらうと云ふ様な詮義がはじまつて、白峯を南へ取られたり何かすると、いけないから大體の處で獨斷を加へる事にして、大横川岳を東俣山の異名に數へる事としたいと思ふ。

七　荒川岳

三國の境東俣山で、甲信の國境は終りになる、あと信駿の國境は、東俣山から西南、荒川岳へと向つた尾根を行く、こゝも切り當ての有無は知らぬが、木が多くて山稜行は、面倒だらうと思ふ、前岳東俣山のつゞき及び東俣山荒川岳のつながりは、共に甚低くなつて居て、脈があるとの名計りで、縱走をやるとなれば、殆一度降りて更に登り直す覺悟が入用だと思ふ、荒川岳の頂上は離れて見ては一寸分らぬが、行て見ると二峯に分れ居て、殆等しい高さだが、その內やゝ低いと思はれる方に三角標石がある、櫓はやはり壞れてしまつて無い、こゝが三〇四七米となつて居るが、どうもそれはちつと高すぎる樣に思ふ、方々から見た打算では前岳より荒川岳の方が、十米餘低いらしく感じられる、多分前岳、駒岳、荒川岳、農鳥山と云ふ高さの順になつて居るらしく思ふ、この荒川岳の別名を鹽見岳と云て居る、この附近に鹽平、鹿鹽などゝ云ふ地名のある事と考へ合せて何か理由がありさうに思ふが、別に考へ付きはない、駒岳の絶頂から見ると、甲斐ヶ根が朝與岳の眞上に聳えて、その右が東俣山で、農鳥山は見えない、東俣山と前岳との間がずつと開いて、そこに此荒川岳が出る、山岳第三年第一號六九頁に自分等がのせたスケッチは、大分脈を書き損じてあつて、まことに濟まぬから一寸申添て置く、殊に荒川岳の見える邊は大分寫しちがへて居る、偖荒川岳の頭は甚よく注意しないと分れては見えない、その東俣山と荒川岳との間に、惡澤岳と魚無河內岳及び西河內岳が見える、山岳第五年一六八頁に面して揷まれた、赤石山頂よりのスケッチに依ると、赤石山から魚無河內岳の頭を越えて駒岳が見えて居る筈故、駒岳からは魚無河內岳の上に赤石山が見える筈だが、どうも判然と區別して認め得ない

◎雜　錄　信州の甲駿境の一部

様である。

八　小河内岳

國境は荒川岳から西に向ふ山稜を、黑川と銘された二六五八米の三角標點の方へ行く、山岳第四年三一九頁に「……一寸小高い峯の頭に、三角測量標のあるところ……」と書たその三角標が或はこれなのかとも思へるが、その地點は土地のものが「イヘイザハの頭」と呼んで居る處よりも、尙荒川岳に近かつた樣にも思はれるので、どうとも確言は出來ない、そこまでは切り當てがあつて、三角櫓の處から南の方へも切り當てはあつたが、水を汲みに降りた道らしく思へた、とに角その邊は再考に讓る事として、黑川の標石から國境は急に南に向つて折れて、山稜を二八〇二米と標された小河内岳を經て尙南へと行くわけである、この小河内岳は何と讀むのか知らぬが前岳の別名ォガチ岳に小河内の字を當てると、此岳とまぎれ易いと思ふから、傳に一言を加へる、駒岳から見て荒川岳の右に見えるのが此岳であらうと思ふ、がこの邊の事は一向判然しないので、國境はまだ長いが、此岳の處で打切て、先へは行かぬ事とする。此岳へは同人間に登つた人は無い樣である。

九　餘談

山岳第四年第二號の附錄の中村新太郎先生の講演筆記の中に挿まれたスケッチに於て、一二違ふと考へられる點に就て述べる事とすると、其四頁に唐松峠から見た圖がある、自分等はその實境を踏まないからよくは分らぬが、乏しい智識で判斷をして見ると、左からはじめて、鋸岳、駒岳、仙丈岳、までは疑もないが、三峯川岳、荒川岳の二つは前岳と東俣山とを續ける脈の一峯でもあらうかと思はれるので、その名はとに角不適當だと思ふ、北岳とあるは正しいそのもので次は東俣山であらう、その次の頭の割れた山は荒川岳で、頂上の二峯は一つに固まつて見えて、それと前荒川とで二つの峯に見えて、居るのだと思へる、小河内岳の名も多分正しいもので、赤石岳も赤石山に相違なく、小河内岳とそれとの間のは惡澤岳、魚無河

內岳、西河內岳等の面々であらうと思はれるのである、六―七頁の圖に就て考へると、これも實際の處は知らないが、推斷した處駒ヶ岳まではいゝが、鳳凰山とあるのはどうも誤らしく思へる、然し何物だかは一寸判じ兼ねる、仙丈岳はいゝが三峯川岳とあるのは、多分前岳から鹽平の方へ分派して居る尾根の一角らしく思はれる、白峯農鳥とあるのも誤りで、三峯川の間へ前岳から突出た中山の一角ではあるまいか、荒川岳及び小河內岳とあるのも同じく中山の脈であるらしい、で赤石岳とあるのが確かに荒川岳であつて、その左手の後ろに見えるのが東俣山と荒川岳を續ける脈の一峯で荒川の北澤の頭位に當りはしないかと思ふ、で中山と荒川岳とは脈が續いては居らないのだが、そこは寫し違へたのだらうと思へる、左樣でないとすれば、小河內岳とある脈が、東俣山と荒川岳を繋ぐ脈であつて、荒川岳の左後にあるのは、荒川岳から井川の東俣、西俣の間へ突出て居る所謂間ノ山山脈が一寸見えるのであるのかも知れない、後說の方が面白さうだ、で荒川岳の右下に見えるのは三峯川のカザマキ澤の上かその少し南位かに當る處にある、二子山と呼ぶものに相違ない、荒川岳の右に離れてあるのは小河內岳なのであらうと思ふが判然しない、別に結末もつかぬが此スケッチを借りて、題ばかり大きくて內容は空な、この愚にもつかぬ長言を終りとする次第である。（梅澤親光、山川默）

◎雜錄　甲斐駒山脈の鞍掛烏帽子鋸及其他二三の峰に就て

甲斐駒山脈の鞍掛、烏帽子、鋸及其他二三の峯に就て

甲斐駒山脈中、鞍掛方面の登山記は星忠芳氏に依りて始めて世に紹介せられたり（『山岳』第六年第三號）、余は氏と同道して右の登山を行ひしものなれば、自然鑑察も同一範圍に限られ、且つ氏の記事の詳細なる、敢て駄筆を添ふる必要を認めざれども、從來此方面は頗る閑却されたる區域なれば、氏の文中に漏れたりと思はるゝ事柄を、一つ二つ此處に記し置くも、全く無用ならじ。

日向山　千六百六十米（陸地測量部に據る、以下同じ）、此山の頂上の西北部、即ち濁川に面したる處に、花崗岩の著しき崩壞あり、雁ヶ原（或は巖ヶ原）と云ひ名高し、小淵澤停車場附近より駒ヶ岳直下に當りて能く望み得。

駒岩　岩と云へど一つの峰なり、此峰の東面、頂上間近に岩の露はれたる處あり、其形馬に似たる故に、此名ありと云ふ（日野春驛方面より望み得、馬の全形と云はんよりも寧ろ馬の首に似たるやう思ふ）、山頂は鞍掛より少しく低く、登りて見れば平凡なり、岩質は花崗岩なり。

鞍掛山　農商務及陸地測量部（輯製）二十萬分一圖は共に甚だしく此山の位置を誤れり、此山は星氏の紀行に記されある如く尾白の谿谷（左岸）に突出したる峰にて「北方僅かに一山脊を以て駒岩方面に連れり」（原文、駒岳とあるは駒岩の誤植なり）、前記地圖に現はれたる山と本物の山とは圖上で直徑一里餘りも隔れり、標高千四百八十三米とあるも誤にて、眞の鞍掛は余の臆測を以てするに千九百米以上、二千米に近き高さあり、又た『日本風景論』に此山（同書には鞍懸山と記せり）の登路を、「敬來石村より流レ川を西に沿ひ登る」と記せる此文章の出所不分明なれども、何人の惡戲か、間違つた地圖を土臺として、居ながらに登路を揑造したるものかと覺し。

山頂は二つの隆起に分れ鞍狀を成す、南の峰（臺ヶ原より見て左）の南角、岩（花崗）の露はれたる處に石祠あり、中なる女神の石像は、いとも柔和の顏色なり、石祠の臺石は、素人目では、花崗岩でなきやう思ひしが、何處からか荷ひ揚げたるものならん、石祠のある處は駒ヶ岳、烏帽子岳等を仰ぎ、尾白の深谷を下瞰して眺望あれども、其他は針葉樹の林にて甚だ眺望惡き山なり。

前記地圖に誤り記されたる鞍掛山は彌平山（千七百九十米）と云ふものに當るもの、如し、彌平山の南々西、流レ川の源に雨乞岳（二千三十七米）と云ふ山あり（以上、彌平山及雨乞岳は山梨縣廳の山林圖に據る）、余の見たる雨乞岳は山頂草原にて尨然たる大山なりしと記憶す、『新編甲斐風土記』に據るに雨乞岳は「本村（鳳來）の西方にあり、

山脈は南方駒ヶ岳、北方釜無及彌平の兩山に連る、樹木疎立、登路三條あり、一は上敎來石組より登る、里程二里半、一は大武川組より登る二里二十丁、一は鳥原組より登る三里、共に嶮路なり、溪水四五條あり、皆釜無川に注ぐ」とあり。

鞍掛より連りて尾白川と其支流カルト澤(?)との間に低下する山脊に前鞍掛の名あれども注目すべき程のものならず。

前後の大岩　ゼンゴ(ピーク)の文字、果して「前後」なるや疑あり、且つ峰の名なるか、岩の名なるか明かならず、陸地測量部の大岩三角點（二千三百十九米）は釜無川の支流、黒川と中ノ川との間にある高峰の頂にあるもの丶如し（余等は登らざりき）。中小屋の野營地より八丁尾根に至る間に於て恐しき二つの岩壁の横を絡らむ處あり（星氏紀行參照）、此岩を前後の大岩と云ふに非るか、後遊人士の御示敎を願ふ。臺ヶ原の或老人の書きたる圖に高岩と云ふものあり、大岩のことを斯く呼ぶこともあるものにや。

濁川の谿谷の上部に輕川の大岩と云ふもあり、前後の大岩とは別物ならん。

烏帽子岳　此山脈中、鋸岳に亞ぐ高峻の峰なり、海抜二千六百米内外あるべし、北は八丁尾根に依りて前後の大岩に連り、南は鋸岳連峰の東端と結びて駒ヶ岳に接續す、烏帽子の名あるは臺ヶ原方面より望みたる山容に基くものならん、山頂は南北に長く東西に狹し、北方、住吉平より望めば山巓鋭く尖立す、此峰より尾白の谿谷に突出せる尾根ありて尾白本谷と金山澤（北澤）とを分つ、此尾根に中尾山の名稱あるもの丶如し。頂上は花崗の大岩累々、偃松之を纏ひ、高山の光景あり、「烏帽子大神」を祀れる石祠「大頭羅神王」と刻せる石碑、外に石造の鏡（?）狀の碑あり、其面に「明治十七年甲申八月日、山路開闢之時建之、前澤組中」と三行に記したり（前澤は臺ヶ原の上手にある小村なり）、山頂の眺望雄大なり。

烏帽子の南に接して同高或はより以上の一峰起あり、烏帽子の一峰と見做して差支なき程近きものなれども、所謂烏帽子狀の山容には與らず、名詮自稱の烏帽子岳は前記石祠等ある山頂なり。

以上日向山より烏帽子岳に至る峰々は孰れも花崗岩より成り立ち、本脊たる駒ヶ岳とは切つても切れぬ、血縁の眷屬なり。

鋸岳　余は最高點を窮めたるに非ず、又た星氏の如く第二最高點に登りたるにもあらねば、此山のことを談る權威なきものなれども、聊か一二の管見を記さんに、先づ第一に氣付かるゝことは、從來發行されたる地圖上の此山の位置が、鞍掛山のそれの如く、甚だ誤り居ることなり、測量部輯製二十萬分一圖に鋸山とあるは即ち鋸岳のことならんも、其位置は余りに西北に隔たり過ぎ且つ全然信州に屬する如く記されたり、此地圖の此區域附近は、手の付けられぬ程、間違だらけなれば、論ずる價値なきものとして省畧し、比較的正確なる農商務の二十萬分一圖を見るに、これには鋸岳と記しあれども、其位置は輯製圖と同一の誤に陷れり、眞の鋸岳殊に最高峰のある處は、此地圖の鋸岳の南々東一里許（地圖上）を隔て、甲信の國界線が諏訪、上伊那郡界線と交りたる處より、猶ほ少し許り東南に於て、同高曲線の著しく集りて、峰を畫けるもの畧ぼそれに當れり、且つ最高點のある處は、少くも甲信國界なるべし（後文參照）。次に必要なるは區域問題なり、或山の區域を定めることの「大に考うべき問題」なることは、本誌前號「机上談山」中にて洋怪生氏の記されし如くなるが、鋸岳の區域も頗る不定なる如し、勿論此山は、其名の示す如く、自ら連峰を意味すべきことは、異議なかるべきも、連峰の何處までを、此名の内に含ますべきかは明瞭ならず、星氏は鋸岳を五峰より成る如く記されしも、氏の記事中、多少疑惑を感ずるは「不動山及び其西方の山は西南方赤河原に面する處一帶の峭壁にして鋸岳の一端をなし、仙丈岳より望めば其猛烈なる皺壁は鋸岳に連り、一しほ凄絶の感を強くす」（三九乃至四〇頁）と云ふ一文にて不動山及其西方の山（余が氏の登山を望見せる峰ならん）は「鋸岳の一端をなし」にて鋸岳中の峰なる如く思はるれども次の「鋸岳に連り」にて除外されたり、實際星氏は前記の峰々を鋸岳中のものとせられ居るや否や、親しく氏の意見を伺ふ機會なかりしも、余自身の所見にては

鋸岳の一部と見做して差支なきものと思はるゝなり、斯くして余の鋸岳なるものは、甲斐駒の山稜、甲信國界を造りて西北に延び、刀利權現を經て程なく、花崗岩絕え、古生層に變化したる處を起點とし、それより西北に連り、釜無上流の谿谷（本流と中ノ川との間）に低下する一帶の連峰を指すこととなる、此連峰の特色は信州黑川に面する處、岩石烈しく露出し、赤赭の峭壁、高く雲際を摩し、凄絕壯絕の感を與ふるにあり、星氏は鋸岳の峰數を五つとせられしも小峰を數ふれば七八にも達すべし、釜無谿谷に向へる西北端なる一峰は圓錐形にして山容穩健なり（山梨縣廳の山林圖に據れば此山に編笠山なる名稱あるものゝ如し）、測量部の三角點（二千六百七米）は此峰に在るに非るか、若し然らずして次なる峰にあるとするも其高さは前の峯と、さして相違なきもの故、結局鋸の最高點は二千七百米に近きものとならん、從來鋸岳は駒ヶ岳に隷屬したる支峰なるが如く思はれし觀あれども、斯く考ふるには其高さ案外に高く、其岩質は余りに相違せり、少くも朝與岳と同じ程度に於て鋸岳も獨立不羈の山と見做すべきものなり。星氏は鋸の峰々に夫々名稱を與へんことを提出せられしが、此の如き亂峰に適當の名を撰ぶことは中々困難なる仕事にして且つ混雜を惹き起す虞もあるべし。

星氏は烏帽子方面より來る山脈と鋸岳連脈との交點に當る山を不動山と記されしが、こは星氏の新に與へられし山名なるらしく、氏は人夫等が該山の下に不動瀧と云ふものあると談りしより斯く命名されたるならん、右の不動瀧は梅澤氏に依れば駒ヶ岳裏山の七丈瀧と同じ物なる如し。

次に甲信國界に關して一言せんに、若し飽迄釜無の本流を以て國界とするとせば、鋸岳の西北の半分近くは全然甲州に屬すること、なるべし、鋸岳の如き著明なる山岳を國界とすることは當然便利なるべく考えらるゝ故、右の國界線は釜無上流の中ノ川のドウ（本流と中ノ川の合點）より鋸岳の全山稜を辿り駒ヶ岳に連るものとする方、適當ならん。

鋸岳は從來全く登攀の記錄なき山なりき、其第

◎雜錄　甲斐駒山脈の鞍掛烏帽子鋸及其他二三の峰に就て

◎雜錄　甲斐駒山脈の鞍掛烏帽子鋸及其他二三の峰に就て

二最高點は昨夏星氏之に登攀せられしも、最高點は未だ登山者ありしを聞かず、尤も星氏は第二最高點より望まれたる處に依り、絕巓に三四個の石牌らしきものを認めたる由を記されしも、そは果して人間の手に成りたる石牌なるや、實地登りて見ねば確定し難く、鋸岳の絕巓、人跡ありと斷言するには早計に失すべく、先登の競爭を挫折せしむべき程の事實とも思はれず、元來此連峰は幅甚だ狹く、頂上の山稜には恐しき隙腐（カップ）あり、且つ西南信州側は例の絕壁なる故、縱走は絕對に不可能、側面よりするも、先づ甲州側に限られ、それすら頗る急斜にて殆んど手も足も出ぬ始末なり、第二最高點に登るには星氏の採られし蹤ぎを登るより他の方針なかるべく、又た最高點に登るには釜無の上流、中ノ川より登路を索めば或は成功することあらん、信州或は甲州の獵夫若くは岩茸採り等は此附近を徘徊すべきも、彼等は通常此の如き絕巓に用事なきものなれば、强て登攀せしものありとも覺えず、要するに鋸岳は其標高こそ絕高と云ふ程には非らねど、日本アルプス中、稀に見る難山にて、登攀者無きは數年前の越中劍ヶ岳に似たり、將來先鞭を着けらるゝ勇士の何人なるかは余の早く知らんと欲する處なり。最後に附言すべき一事は、鋸岳の岩石の風化甚だしく崩壞し易くして極めて危險なることなり、血氣の勇に逸る時は不測の殃を生ずることあるべし、登攀者は充分注意ありたきものなり。

南坊主、北坊主　駒ヶ岳の頂上より西北に向へる山稜（甲信界）より分れたる一山脊、尾白川に向つて突然急斜面を造る、此懸崖の上部、二つに分れたる部分に南坊主、北坊主の名あり、即ち尾白本谷と黃蓮澤（？）との間に夾まれたる山躰の末端にて、駒ヶ岳本山の一角なり、尾白の谿谷を隔てゝ、北方鞍掛山と對峙せり、山梨縣廳の圖には鞍掛方面（尾白の左岸）に北坊主を記しありしが、そは誤りなるものゝ如く、余は竹宇の村民より、あれこそ南坊主、北坊主にて斯樣に並び居ると明かに指し示され、且つ兩坊主の間の窪は登り得ること迄も敎えられたり、只だ、どちらが南坊主か、北坊主なるかは問ふことを忘れたり、會員某氏嘗て

駒ヶ岳に登られ、南北坊主の位置を案内者に尋ねられしに「南坊主でないのが北坊主で、北坊主でないのが南坊主である」と云ふ極めて適切な返事を得られし由を後に傳聞せり、坊主の高さは烏帽子より低く、黒戸より高く、先づ二千四百米位のものなるべし。（辻　本）

甲斐駒の新登路

從來知られたる登路、即ち（一）竹字又は横手より笹の平、黒戸山を經て登る甲州路又は表山路、（二）戸臺より登る信州路又は裏山路、（三）鞍掛方面を迂回して登る路（信州路に合す、『山岳』第六年第三號、星忠芳氏の紀行參照）、（四）池の平又は仙水峠方面より登る路（本號本欄「甲斐駒ヶ岳山脈縱斷記」參照）の外、今一つ甲州方面より登る新しき路あり、其順路は駒城村を發して大武川の溪谷に入り、左大武川本流、右篠澤（黒戸山と宮の頭の間にある大武川の一大支流、表山七丈瀧の下流は此澤となるものならん）の間なる山脊を登り、ツヾミと稱する一峰（三角點ありと云ふ）を經、益々登りて宮の頭の頂に達す、此峰は日野春驛方面より駒ヶ岳を望む時、頂上の左下にありて、黒戸山（右下にあり）に並べる尖峰にて、高さは黒戸より少しく低き樣なれども、二千米以上はあるべし、宮の頭より山脊は次第に下りとなり、著しき一凹部を經て、駒の本山にかゝり、再び登りとなり、ハゲの岩小屋附近にて表山の路に合するなり、此登路は未だ全く記錄なく勿論路と云ふべきもの有る筈なけれど、柳澤の水石孫太郎に依れば確に登り得らるゝとの話なり、宮の頭の背面（南面）には燕岩と云ふ恐しき岩壁ある由なり、余は昨夏朝與岳に登りしも此方面は雲の爲め展望を妨げられしは遺憾なりき、登山の途中、摩利支天の絶壁、地獄谷等を間近く望み得るは此新登路の特色ならん。

甲斐駒の登路は最初記せし四つに此宮の頭の路を加へ、合計五つにて先づ總てを盡したるものと云ふべし。（辻　本）

◎雜　錄　甲斐駒の新登路

仙丈岳のカールに就ての正誤

本誌第六年第三號、辻村太郎氏の「日本アルプスと既往の氷河」一六頁「圖中Bは不完全なれど亦一のカールなる由」とあるBはCの誤、又た「コロタイプはCのカールを示す」るあるCはBの誤、右は校正の時には誤り居らざりしに何故か、本刷となりて見れば、間違ひ居れり。同じ頁の挿圖Cのカールの處に大とあるは其下に仙丈澤を脫したるなり。（辻　本）

白峯及び仙丈岳の登山談

七月十五日、晴

私が龍王に着いたのは、三時十五分であつた、芦安迄荷持ちを頼んだが。無かつたから、途中有野迄、兩手に重い荷物をぶら下げて行つた。有野から、幸ひ歸りの馬があつたので、夫に荷を脊負した、土地の人は、芦安迄三里だと云つて居るが、四里ぐらゐは確かにある、日の暮るゝ少し前、芦安の温泉宿清水舘に着いた、途中の道は、芦安の入口の所の、坂の外、急な所はない、宿は頗る不潔で、蚤も非常に多かつた。

荒川の北澤迄

十六日、晴、曇、雨

私の登山する順路は、茲から夜叉神峠を越え、荒川の北澤を經て、北岳と間の岳との釣り尾根に達し、夫より間の岳と北岳とに登り、藪澤を降り、野呂川の北澤の邊から、奥仙丈に登つて、信州に出づる豫定であつた。

昨夜頼んで置いた案内者、森本作十郎が來たのは八時前であつた、そして私達の出發したのは八時七分であつた。

宿の後を少しく登ると、御勅使川の畔へと出る、八時二十分、河原と別れ、夜叉神峠にかゝる、さのみ急ではないが、登路が長い、八時三十五分大石の車地藏と云ふ所にて、二十分休憩し、夫より

御勅使川の支流を、四度渡つて、十時四十分峠の頂上に達した、白峰の北岳、間の岳、農鳥山は野呂川の深谷を隔てゝ、眞正面に聳えて居るのであるが、あいにく山頂は雲で包まれて見えない、西南の方、白河内岳の左手の肩より、のぞいて居る山は、赤石岳だと作十は云つた。

野呂川の谷は、深く急であつて、木が黒々と茂つて居る、鮎差の邊は、山の急斜の爲めに、見えない、西北の方に荒川や、又北澤の雪渓が見える

「北澤に雨が降り出した」

と作十郎は叫んだ、見ると先きよく見えた北澤の雪が、どんよりとして居る、天候を懸念しながら十一時二十五分峠を降り始めた、登りよりも短いが急である、鮎差に着いたのは十二時二十分であつた、鮎差には製板小屋が三十程あつて、宛然太古の村落と云ふ様な感じがした。

中食をして一時二十分出發した、道は野呂川に沿へる細道、溪流の景色は、俗ばなれをした愛すべき、清き、景色である、五分にして、一升一合油通りと云ふ、深淵を過ぎ、前方鷲の巢を眺め、又對岸の鷹追ひの削壁を見（二時七分）二時半荒川の落合に至る、河原の幅は荒川の方が廣く、野呂川よりも却つて本流の様であるが、而し水はやつぱり野呂川の方が多い、鮎差より茲迄一里ぐらゐである。

巨岩の多い荒川を遡るに從ひて、岩は益々大きくなり、水も激しく流れ、到る所小瀑布をなして居る、三時七分魚止の瀧に至る、二丈許の瀧ではあるが、水が多く、又勢よく落ちて居るから氣持ちがよい、天候は、上流に向ふに從つて段々と惡くなつて來た、瀧より上流しばしの間は、兩岸共に連續したる大岩であつて、毛森の瀧（左岸の飛瀑）附近最も奇である、三時半サワラクボに至りし時、雨が降つて來た故、とある岩影で雨上げをした、四時二十分、雨が小降りとなつた故出發する。

茲より道は峠となり、右側の頗る急なる坂路にかゝる、樹が茂つて居る所へ、天氣が惡いと來て居るから、日沒頃の様に暗く、氣のみ急いても中々足が前へ進まない、登る事約三十分にして、頂

◎雜　錄　白峰及び仙丈岳の登山談

上なる日向サワラに達する、此所より廣河原へ山越えにて、行く道があるさうである、此附近より農鳥山から出て居る南澤が見える、登れない程、急でもなさそうだが、作十は登れないと云つた、夫より約四十分にて荒川の上流北澤に降り、少しく行けば、弘坊の小屋に達する、小屋は、雨露をしのぐに充分であつて、水、薪木を得るにも、充分便利なる地點である、其代り蚤の多い事、お話にならぬ程で、一夜殆どまんじりともしなかつた、若し雨さへ降らなければ、野宿した方が遙かましである。

十七日雨後晴

三時に起きて空を見ると眞暗である、兎に角結束して、五時に出發した、茲迄は時々人も來る故、道はあつたが、是より上流は以前伐材した時に道をつけたのみで、其後殆ど人は來ず、道は皆無と云つても差つかへない程である、少し行くと絶壁に達する、餘義なく河を渡る、又絶壁で、而も下は淵であるからやむをえず山をよぢる、絶壁、岩石、樹木、草、淵など幾多の障害を冒し、八回の徒渉をなして、六時十五分左岸の絶壁の下に達した、直ぐ目の下は一丈許の瀑布で、瀑の上の水は深くて容易に渡れない、對岸には汚い殘雪があつて遙かに北岳（頂上なるや否や知らず）が見える、茲迄來る途中材木流しの鐵砲二ヶ所にあつた、是より二時間弱で北岳と間ノ岳との中間の尾根に達すると昨十は云つた。

怪しの空は忽然雨となつた、而も絲の様な細い雨、見ると北岳の方はもう眞暗である、作十は到底此調子なれば、登れぬ故、引かへさうと云つた、折角茲迄來て引かへすのは如何にも殘念である、もう僅に二時間強で、北岳か間の岳に達するのである、然るに天候の爲めとは云ひ乍ら、引かへさなければならぬとは。

雨はやみさうもない、なまじこんな所でまごまごして居つては、水が增して歸る事も出來なくなる故、退却をし始めた。

弘坊小屋で濡れし衣類を乾かしなどして、二時間許り費した、作十は、今日これ丈け降れば、明日は晴るゝ故、今日一日茲で待つたらどうだと云つ

た、而し私は十九日に松本にて、友人に出逢ふ約束であれば兎に角芦安迄引かへす事に決して十時二十分出發した。

一時二十分鮎差を經、三時夜叉神峠の頂上に達した、白峰の雲は激しく活動を始めて居つた、作十はもう直ちに晴るゝと云つた故、待てたが五時頃に尙晴れなかつた故、下山の途についた、清水屋に着したのは六時十五分であつた、人夫兼案内者なる作十は、山に精しい樣であるが、可成老人で、歩みが遲く、又ホラを吹くのが缺點である、一日食料客持ちで一圓であつた。

廣河原道

十八日快晴

起きて見ると快晴である、宿の主人がもう四五日天氣は大丈夫ですと云つた、折角玆迄來たのであるから、もう一度登つて見る氣になつて、友人に電報を打つて再登山を企てた、今度は、廣河原より登る事として、案内人夫清水幸次郎と云ふ、爺父をつれて出發したのは、八時半であつた。

此廣河原を經て、北岳迄は「山岳」に二度も出て居つた故、成るべくザッと書かう、夜叉神峠を殆ど頂上迄登り夫より右の方へ斜に登つて、十二時十分前、カリヤセと云ふ尾根に達する、白峰三山及び赤石が、野呂川の彼方に高く聳えて居る、又後には、富岳の麗峰が、あく迄も高く屹立して居る。

一時二十分杖立峠の頂上に達した、夫から少し降つて鳳凰山道と別れ、深澤、赤澤、ゴトゝ澤で、六時漸く廣河原に達した、廣河原の對岸に破れ小屋はあるが、夫より却つて美くしい河原で、野宿した方が心地がよい、私のつれた案内者は、廿年も前に北岳と奥仙丈の頂上とへ來たのみで、夫から後一度も來ず、又間の岳へも、奥仙丈から、信州へも行つた事がないさうである、故に思はぬ困難をした、後に行かるゝ諸君はあらかじめ案内者に聞きたゞして見る必要がある、私の登つた時は丁度天氣がよかつた故方向も間違へなかつたが、若し雲でもあつたら大變である。

北岳及び間の岳登山

十九日晴

廣河原より直ちに登りとなる、二回許道を見失なつて困難はしたが、白峯神社の跡や雨乞平を經て、二時間弱、即ち七時五十分に大樺池に達した、池の雪の後に北岳が聳えて居る茲迄は、惡い乍も道はあるが、之より上は道なく豫想以上嶮しかつた、池より一時間と二十五分登ると、木がなくなり、お花畑の樣な所へ出る、夫から北岳の直ぐ前の殘雪の所で休んで十時に出發し、右手の尾根をさして登る、北岳登山中最も嶮しい所である、白山の裏越も、こんなに嶮しくなかつた樣に記憶する。

喘ぎ々々二十分を費して、尾根上に達する、直ぐ目前に奥仙丈が聳えて居る、夫から飯を喰つて一休みして出かける、茲からは赤裸々たる岩石のみではあるが、岩が大きいから、却つて登りよい、十二時十分前漸く北岳の頂上に達した、內地に於て富士に次ぐ高嶺と云ふのであるから愉快でたまらない、又折よく快晴であつたから方々の山がよく見える、奥仙丈の右の遠くに見えるは穗高、槍、其右の白い目立つのは、立山である、又白馬も見える、左の方には御岳や木曾駒が峙つて居る、北から東にかけて駒（甲州）鳳凰、地藏、八ヶ岳金峰、國司、淺間、榛名、赤城、なぞが見え、富士山も美くしいコバルト色をして、聳えて居る、南には同じ位の高さの、間の岳の左に農鳥、右に荒川岳、後に赤石山（？）が見える。

野呂川は間の岳の西北より流れ、北岳をぐるりと廻つて南の方へ流れて居る、野呂川は農鳥より源を發して居ると云はれた人がある樣に記憶するが、決してさうではなく、間の岳より發して居るので「山岳」附錄の白峰山脈實測圖は殆んど信用するに足るのである、十二時十分間の岳に向ふ、北岳より間の岳に至る、最も低い所までは、急で歩きにくい、夫れより間の岳への登りは、長いが樂である、此の二山の間、一里ぐらゐあるだらう。

二時半、間の岳の頂上に達した、北岳と眺望に



濱名泰次郎氏撮影

北岳の絶巓と甲州駒ヶ岳



濱名泰次郎氏撮影

北岳より望みし間の岳、農鳥山及び赤石山系

於て、殆差はない、併し赤石山系の方はよく見える。北岳の山脊の狹いに反して、頗る廣い。

三時出發する、間の岳より西に奥仙丈につゞいて居る尾根、即ち田代川と野呂川との分水嶺を、十五分降り、夫より右手の澤、右股に向つて降る、頗る急で、富士の砂走の様に、小石がゴロ〳〵云つて滑つて行く。

野呂川の上流

三時四十分水のある所に至り、飯を喰つて、四時出發し、尙降る事三十分で殘雪に達する、五時十五分前、小家あつて漸く道に出る、尙十五分降ると、材木流しの鐵砲があつて、伐材人夫七八人に逢ふ、今しも鐵砲のセキを引こうとする所であつたから、休んで見る事とした。

此鐵砲と云ふのは、谷にセキを造つて、水を溜め充分に溜つた頃、其セキを引くと、水は恐ろしい勢で以て、洪水の如く岩の上や淺瀨に乘り上げて居る材木を流してしまふ、セキを引いた後は、水が濁つて、大雨の後の様である。

◎雜錄　白峰及び仙丈岳の登山談

夫から半里餘り、降ると、左股が右の方から來る、其出合の所の左岸に、小林氏伐材組合事務所がある、立派なる小家で、風呂さへもある、茲に着たのは、五時四十五分、此事務所で厄介になる、當今にては、伐材人夫が二百人も入り居り小家も所々にあり、又茲から北澤（野呂川の）を經て信州戸臺迄は、可成立派なる道もあるが、茲一二年の內には、製紙用材も伐り盡す故、人夫は皆居なくなるとの事、併し小家は殘して置くさうである。

廿日晴

七時五分事務所を出發する、野呂川の景色は降るに從ひて、段々とよくなつて來る、兩岸の高い削壁には黑くなる迄、樹木が茂り、其下に白く水が流れ、朝日が山の半面を照して、實に美くしい景色である、私の知つて居る野呂川や、荒川の景色中で、最もよい所である、併し惜い事には、景色が小規模である。

一里半餘り降ると、大仙丈澤が左より來る、野呂川と別れ、澤に沿ふて、奥仙丈岳に登る、時八時二十五分。

奥仙丈

道はないが、澤に沿ふて行けば、草木の障害はなく、又水も少なく、傾斜が餘り急でないから、白峰から見ればずつと樂である。

九時五分殘雪を經、尙二十五分登れば、北岳が見える、夫より三十分程登ると、澤が急になつて來る、そこで中食をして、十時四十五分澤と別れ、右方の最も樂さうな尾根に向つて登り始めた、之より上が奥仙丈登山路中、最も嶮しかつた所である、鳶色をしたウツボカヅラや、黃金色のミヤマキンポウゲの咲いて居る所を、蟻のはふ樣にして、漸く十二時十三分前、尾根上に達し、夫から左へ少しく登つて、十二時奥仙丈岳の頂上に達した。

北日本アルプスの眺望は、昨日よりもよかつた、穗高と御岳との間に、笠岳、燒岳、乘鞍、白山、さへも見えた、赤石山系の方は、割合に雲が多かつたが、夫でも山頂は、こと〴〵く見えた、白峰は直ぐ谷の向ふに聳えて居る、鳳凰山、駒ヶ岳も、近くに見え、西の木曾駒も、伊那の平原の彼方に、屛風の樣に屹立して居つた、下を見ると三峰川が、北に向つて流れ、高遠町の所で、西に折れ、帶の樣な天龍川につゞいて居る。

十二時二十分頂上を發し、國境を東北に向つて降り始めた、尾根づたひで、北澤より戸臺に至る道に出るつもりであつたが、小仙丈を越えなければならない故、小仙丈の下から、左手の澤へと降つた、『山岳』附錄の地圖に、此澤に道が書いてあつた故、よし道はない迄も、降れない事はないと思つた故。

一時五分前殘雪の側で休憩する、夫より以下澤は段々と急になつて行き、又殘雪が多くなる、果ては兩岸絕壁で、澤も一面滑かなる岩のみとなる、併し水が少ないのが、何よりの幸である、一時間降ると澤は急に瀑となつて居る、瀑の形は見えないが、谷の深さから察すると二十丈許もあるだらう、到底此瀑は降れないから、左方の絕壁を攀ぢて、密林へと分け入つた、併し到る所、絕壁づくめで、とても降れないから、再び瀑の上に出で、今度は右手の山へと分け入つた、嶮しい事は嶮し

いが、木につかまつて降れば、降れない事はない故、ひた降りに降つた、やがて平な所に達した、尚も密林中北東の方へ、北澤のひつ越道に出んと勉めた、三時五分前漸く道に出た、今私達の來た道は、降る事は出來るが、登るには餘程山に精しい案內者を得なければ、登れないであらう、茲より道は馬の通るくらゐであるから、大に樂である、遙か南方の山腹を見ると、先きの瀑が三段となつて落ちて居る。

しばらく降ると黑川の畔へ出る、壯大なる川で、水は少ないが、河原の幅は廣く、四圍の山は青々として居つて、見るから心地よき景色である、私は變化の多い野呂川の上流の景色よりも却つて變化の少ない雄大なる、黑川の景色の方が好きである、殊に此川より山又山の上に、白く崩れた駒ヶ岳(白崩)を仰いだ景色は、よかつた、荒漠たる河原を、約二里半降ると、對岸に戶臺村の人家、七八軒見える、橋を渡らないで尚五分程坂を登ると、戶臺村の小林氏取次所に達した、五時十五分であつた。

◎雜錄　北アルプス瑣談

殘りの飯を平げて、出發せしは六時であつた。戶臺で泊ればよいが、今日中に是非高遠迄出で、友達に電報を打たなければならない故、四里の道を夜行する事と決した、一里餘り降ると、三峯川の流域に達し、黑河內にて、市ノ瀨道と合し、溝口に至りし頃、全く日暮れ、非持(ヒヂ)を經て九時半高遠町の木曾屋に着した。

翌日馬車にて、四里の道を走つて、木下に至り、夫より電車で辰野に至り、下り列車に乘つた。

(濱谷泰次郎)

北アルプス瑣談

一、山岳新命名のこと

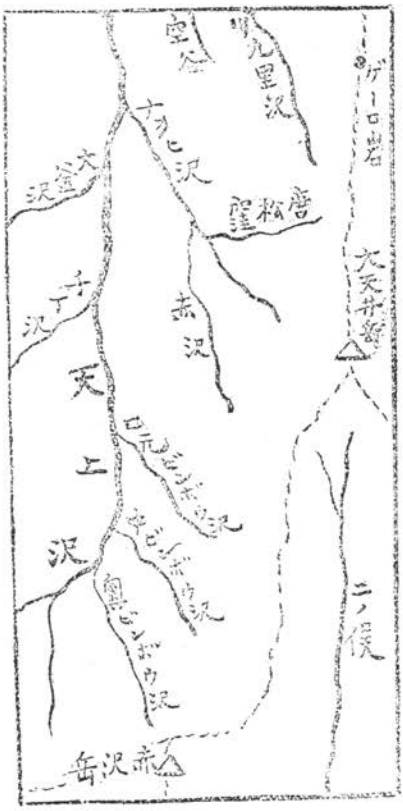
今回の旅行中、是非とも名稱がなくてはならぬと思つたピークや、從來のでは如何にも不適當と思はれる名稱などに就いて自分の新たに命名し度いと思ふものを提供する。

東澤の頭　不動澤の支流、東澤の源頭に當る海つべらな

峻嶮な峯で、標高は僅に二、二一五米に過ぎないが、地貌の上からも、調査の上からも、重要な地位を占めて居ることは事實である。

三の澤岳　黑部東澤に合する三の澤の源、三つ岳の西微南に在る、破片岩に掩はれた一峯であつて、南の方から望むと左程目立たないが、北方からでは、三つ岳と並んで、美事に兀座して居ることが解る。ピークの部分丈けでは、烏帽子東南の無名のより少し小さいやうだが、海拔高距は無論あれよりづつと高い。

割物岳　鷲羽岳の北に並んだ、嶺の黝つぽい立派な一峻峯である。最高點は烏帽子や黑岳などに能く似た、巨い巖だらけで、ぎざ〳〵してゐるもんだから、座る程の場所すら無い、丁度わりもの澤の頭に當るから、こんな名を附けたらどうかと思ふ。この山は色調の關係上、その全容を曝露して居ても槍岳の絕巓からは、餘程熟視しないと見え難くい。



不動堀澤岳　從來は「不動堀澤の頭」としたものであるが、「頭」位では甚だ物足らなく思はれることは、針木岳の頂上から望視した丈けでも既に首肯かれるだらう。大町から七倉岳の南方の奥に當つて、恐ろしく頭の大い峯の見えるのも即ちこれで、實際に登つて見ると、極めて幅の狹い巓が、南北に長く十町以上も延びてゐる。兎に角形躰に著しい特徴を有つた尨大な山である。

舟窪岳　これも「舟窪の頭」として居たものだ。七倉や不動澤あたりから、その綠濃やかな圓顱の偉容を望むと、矢張り「頭」では不適當のやうに思はれる。

丸山赤澤岳　火打（シノハチ）岳から東南に曳いた尾根の突端が赭

く発げて、高瀬大澤と、湯俣一の澤との間に聳抜の貌をして居るものである。從來の「丸山赤澤」に「岳」を附けて、立派に一山岳として取扱ひ度いものである。

二、澤の名稱のこと

「山岳」六年一號附錄地圖の價値に就いては、今更言ふ迄もないが、自分はあれへ尚少し補つて見度く思ふ。僭越の罪は許され度い。

八澤（やざは）　祖父岳から發して、鹿島村の南方、いら澤の少し上流で、鹿島川に合する。

源汲澤（げんようざは）　八澤の南方に在つて、源汲村で鹿島川に合する。

小澤（こざは）　三つ岳から發する高瀬の西澤に落ち込む細溪で、大みつ澤の南方に、殆ど是れと並行の位置を採る地圖には無い。

空谷（からだに）　三つ岳、野口五郎岳の中間から發し、野口五郎の腹を斜に突切つて、ごうろう澤に合する。

前川九里澤（めいかはくりざは）　燕岳の南方、中川屏風岳の肯梁から發して、西流、川九里澤に合する。地圖には無い。

右の外、高瀬の不動澤、濁澤、及び天上澤に會する四五の澤名に就いては、一部の臆測圖を拵へて見たから御覽あり度い。そのうちびんぼう澤附近には、あの附錄地圖に少々間違ひがあるやうだから、兎に角改めて置いた。然し私の調べ方が違つて居るのかも知れん。

◎雜錄　北アルプス瑣談

三、名稱の變化及び異名のこと

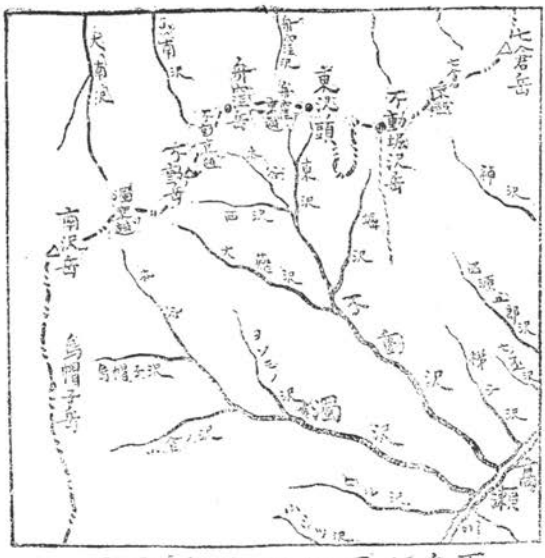
古い頃――と云つても十年位前迄――に稱へて居つたといふ名稱が、いつの程にか變つて了つたのや、私の頭が貧弱な爲めか從來聞いたことの無い異名などを擧げて見る。但し今回の旅行地域内丈けで。

赤手岳　獵夫仲間でも、測量當時に使はれた人夫共でも、皆怎う呼んで居たんださうだ。「赤牛たあ何處のこんすらいと」といふ疑問が、彼等の頭に起つたのは、つい數年前だといふ。

鷲岳　言ふ迄も無く今の鷲羽岳である。この呼び方は、四十年の夏、槍へ登つた時にも、類藏から指顧して敎へて貰つたことがあるやうに覺えてゐる。

ごうろう岳　五郎岳のことで山稼ぎの連中は、今でも矢張り斯う呼んでゐる。

三叉岳（當字みつまたいけ）　三國境上に在る蓮華岳の異名である。私の考へでは、この脈中に蓮華が澤山あるからこの稱呼を用ゐる方が便利ではなからうかと思ふ。



池の平　雲の平の異名である。

四、標高のこと

例の地圖や他の書物などに載つてない、重要地點の標高を列擧する。自分が測つたのだから、頼りないやうな結果ではあるが、あれに記るされた夫れ〳〵の示度數字に一々合はしてから、更算したのだから、餘りな誤差は無からうかと信じる。

布引ノ頭	二、六九三米	七倉乘越	二、二二六米
槍組間鞍部	二、四一二	不動堀澤岳最高點	二、四〇八
種池	二、四八八	東澤ノ頭最高點	二、二一五
棒小屋乘越	二、四四八	舟窪乘越	二、一三九
新越乘越	二、四六三	舟窪岳最高點	二、三六六
鳴澤岳最高點	二、六四七	不動乘越	二、一五四
鳴赤間鞍部	二、六〇二	濁乘越	二、三五一
赤澤スバリ間鞍部	二、五一一	烏帽子岳最高點	二、六一八
スバリ乘越	二、五五六	割物岳最高點	二、九一四
大スバリ最高點	二、七三八	鷲羽乘越	二、五八〇
小スバリ岳最高點	二、七三〇	双六池	二、五五七
マヤクボのベース	二、五七九	縦澤岳最高點	二、七三九
北葛乘越	二、二一一	前縦澤岳最高點	二、七二四

五、山語のこと

「山岳」六年一號三十一、二頁に掲載せられた語彙の外、尚少しく今回聞いて來た言葉を列べて見る。併しこれ等は餘り知れ切つたものばかりなのであれにはわざと省いてあるのかも知れぬ。



辻村伊助氏撮影

鳥帽子岳

うね　（蜿蜒の意の轉か）　脊梁を指す語で、尾根と全く同じ場所に用ゐられる。併し餘り多く使はないやうだ。

かまをね　（鎌尾根）（一）鎌の刄の如うに薄つべらな脊梁のことを指す、普通名詞として取扱ふ。「あすこは、なんせ恐れえ――になつてるもんだで」（二）前條の意で固有名詞としたもの。「西――」「東――」等

ごうとう　（一）巖石磊々の場所。「此處の――は、へえ歩き苦くつて」（二）固有名詞になつたものもある。「――の野陣場」等

ざく　がら〳〵石のざく付く場所で、ごうとうよりは石の小さい所を云ふ。

ざら　ざくよりは石の小さい、粗目の砂の所を云ふ。

たな　（棚）谷底の段落が絶壁となつてゐる所のことで、流れに臨んだのではなく、流れを截斷してゐるのだ。それ故水のある谷の棚は、必ず瀑布を懸けてゐる。「北葛は――が煩せえで」

なぎ　（薙）薙ぎ落としたやうな崖。「あの通りのでつけえ――だに。登れずかい。」

なせ　（一）雪頽のこと＝「山岳」該記事參照　（二）一般に、山の崩壞することをいふ。「この降りぢや――が來れえと宜いだに」（三）（準への轉か）緩い傾斜面のこと。「此處は――だで、捗が行かず。」

のぢんば　（野陣場）（一）露宿に適當な場所。「針木の本谷のあすこは好い――だつた喃い。」（二）前條の意味で、或る山岳又は溪谷に在るが故に、その名を冠して固有名詞としたもの。「烏帽子の――」「蓮華の――」等。（三）適不適は別問題として、或る人若くば人々が露宿した跡。此の場合には、其處で慘死したとか、又は命から〴〵な目に遇つたとかいふ人の名を冠して、餓鬼谷の九兵衞岩や、高瀬川の嘉源次淵、五郎作斫などのやうな流儀に、その地點の固有名詞にすることがある。「俳之丞の――」等。

はみ　（一）食むの意――これの説明や例などは、既に度々「山岳」誌上に出た。（二）山梁附近の草地のことで、廣い大きいのを「大―」といふ。「あすこの――迄突つ切れや、へえ樂だに。」「その立木の尾根の向方にや、綺麗な大――があらず。」

へつる　（斫）（一）「へづる」の誤りだらう。絶壁を横斷する動作をいふ。「この胴つ腹――つて行ずか。」（二）前條の意で Gerund にして、固有名詞になつたものがある＝例は擧げるの限りでない。

わぼ　積年の堅く固り着いた雪の上へ、軟く積つた新しい雪が、雨とか溶解作用とかの爲めに、雪頽となつて辷り下ること。是れは普通の雪頽と違つて、硬い雪の滑かな表面を辷るのだから、恐ろしく猛烈な勢で、危險中の更に危險なものだといふ。

をねくりがへし　（尾根覆返し）　或る溪谷の源頭に當る脊梁の一部を云ふ。（普通名詞）併し尾根とは全然同意義と云へない。又字義だけは乘越に似てゐるが、本當の意味は少々違ふ。乘越せても乘越せなくても關はぬ。つまり溪谷の名

◎雜　錄　山の名稱に就て

を冠して、初めて完全名詞になる譯である。「硫黄澤の――」等。この流で、乘越と名の付けられない所に、是れを持つて來れば便利なことがありさうだ。鹿島槍の南方有梁に「冷の――」とか又もつと細かく分けて「西俣の――」「北俣の――」とか云へば、都合が好いかも知れん。（榎谷徹藏）

山の名稱に就て

山の名稱には、種々の異名や、又種々の當字などある爲めに、屢々混雜を起すことがある。是れ多くは初めて其山に登る者が、其地方の案内者より呼び來りの名を聞いて、其儘の名稱を用ひ、又は其發音のまゝの當字を用ふるより起るを常とせり。其案内者なる者は、何れ其地方の山稼ぎを業とする者や、獵師の輩に外ならねば、是等は正確なる名稱、又は其文字等を知り居らざるは、殆んど當然の事で、殊に山村僻地の事とて、訛音の多き事は怪むに足らざる事である。是れは山地旅行者の山名等を發表するに際し豫め十分の注意を要する事と思ふ。今一二氣の付きたる事共を左に述べん。

一、毛勝岳の文字

我越中下新川郡の南方なる、ケカツ岳（即ち瀧倉岳）の名稱に就て、曾て南日氏の論には、毛勝は木勝にて木多き意味より來たるならんと樣の御說を本誌上にて承りたる事あり。毛勝の音より聞けば、一應聞こゆる樣なれども、之れは饑渴より來たれる名である。キカツを、ケカツと云ふは當地方一帶の訛音であるのみならず、キとケとは同じき加行で、互に轉じて用ふる例は他にも尠くあるまい。

實は此山の北面に當りて、殆んど終歲雪の消ゆる事なき一大深谷がある。夫れを地方の人はケカツ谷と云ふて居る、夫れは此谷に入れば誰れでもケカツ（饑渴）となつて死ぬ、古來生還した者が無いと云ふ傳說がある。又當地の山地方にては人を罵る場合などに、屢々「此ケカツめ」とか「ケカツが來た」などと云ふのは通例である。

案するに初めて毛勝と書きたるは、測量隊員の

初めて此山に入りしものが、三ヶ山（片貝谷村大字東藏、山女、平澤の三ヶ村を合はせて普通三ヶ山と稱す）の人夫よりケカッと聞て、直ちに發音のまゝ毛勝の當字を用ひしによるべし、毛勝の文字によりて強て意味を附會せんとするは、早計なるべし。

尙他の山名には赤鬼岳、餓鬼嶽、夜叉嶽、等のあるを見れば、饑渴岳と稱するも、怪むに足らざるべし。

尙茲に同樣に誤れる例として思ひ浮ぶは

二、園家を眺之景

と書ける事である。是れは我下新川郡飯野村の海岸にある三十米許の白砂青松より成れる小丘の名で、黑部川の河口右岸にあり、一等三角標の所在地である。

大阪大林區署（黑部國有林は大阪に屬す）の手に成れる某地圖には瀧倉には毛勝の文字を用ひ、此地には眺之景の文字を用ひてあるが、實際此地名は園家である（往昔園家千軒と稱せられたる一大市街地なりし由傳說あり）今尙生地町の某寺院に園家の姓あり、是又發音のまゝ、直ちに當字を用ひし誤りである。

三、瀧倉岳の名の由來

瀧倉の名稱に就て、愚案するに、此山の北面には一大深谷（即ちケカッ谷）ありて殆んど頂上まで達す、是れが片貝川の一支流、日又川の本源を爲すなり。其北面せる故と、深きことにより終歲雪の消ゆる事が無い。魚津方面より之を望むと、恰も一大瀑布の景觀あり、瀧倉の名これより起りたるものとすれば、名詮自稱、最も適當と思はる、暫く愚考を存するのみ。

四、清水平

大蓮華山彙の西北の一稜（旭岳の續き）にセウヅと稱せらるゝ地あり、鹽頭（高野氏）と云ひ、鐘釣（川島氏）と云ふ。余は矢張り地質調査所の富山圖幅に從ひ清水を用ふべしと思ふ。此地は下新川郡音澤、內山村方面獵師の黑部谷しゝ狩（カ

◎雜錄　四國山嶽表

モシカを云ふ）の好獵場で、此地は八千尺以上の高地で、而かも平坦で、特に清水（セヅ）の湧出するあるより、是等の者が偶然に清水の平と呼び來りしより起れるなるべし。所謂信州人の「鹽ずらい」の語ありしと雖も、食鹽に何の縁りもなかるべし、又川島氏の鐘釣（カネヅリ）の文字は偶々地圖中、鐘釣山のあるを、此地と思ひ誤まられたるまでなるべし。

又富山圖幅に清水畝（セヅヅネ）とあるは、尾根の誤りならんとの高野氏の御説、御尤もなるべし、併し普通畑地の高き處を、畝と稱ふれば、山の高き稜部を、うねと稱するも、あながち通ぜざることなかるべし。

因に當地方の山地にては、山の尾根とは云はで、山の「ヲボチ」と云ふ、或は大骨の意か、それとも尾穗根の意か。（吉澤庄作）

四國山嶽表

陸地測量部發行五万分一地圖は、昨年十二月を以て、四國の殆、全部を出版した、こゝに初めて四國の諸山岳の位置標高が、可成り精確になつた。で余はこれと地質調査所二十萬一地圖とを比較して、一千米突以上の山岳悉皆を取りて、表を作つて見た。これに因ると、先第一に目につくのは。

一、最高峰

である、即ち四國第一の高峰は、近來信頼せられし如く劍山にあらずして、矢張り古來より言ひならはせし「伊豫の高根」即ち、石槌山であつた事である、而して、其の高度の差を見ると、石槌山（一、九八一）が僅かに、從來の高度より四米高くなりしに反し、劍山（一、九五五米）が四十二年十月發行日和佐圖幅にある二、〇七三米に比しても一一八米を減じ、況んや舊來の二、二四二米に比せば二八七米、即ち十五パーセントの誤差を生じて居る事である、隨分大間違と言はねばならぬ、要するに臺灣及び朝鮮を除き、本州自山火山群以西第一の高峰は石槌山で、而も尚二千米に達して居らぬ事がわかる。

次にこれ等山岳が屬する。

二、山脈の分類

をしやう、諸の地理書に、四國には四國山脈東西に走りとある如く、一寸見ると實に單純なる山脈の樣だが、深く地圖を探索すると、中々構造複雜にて殊に、伊豫土佐の南部に至つては、群巒繚結麻の亂るゝが如く、分類するのに、手の着け樣もない始末である、で最信用せらるゝ分類法は「大日本地誌」にある通り地質構造でわけるので、略左の如くである、北から言ふと。

中國山系（花崗岩）

これは伊豫高縄半島の山塊と、讃岐の中央部にある丘陵とを含むもので、元來連絡して、東西の走向を取り、中國の諸山脈と同樣に並行して居る山脈なりしが、瀬戸内海陷沒生成の際、本國の山脈と斷り放されて、獨り四國に取殘され、而も燧灘が深く四國の北部に灣入陷落したゝめ、高縄山塊と讃岐丘陵との連絡も絶えて、言はゞ、向側の家の小供が二人居候に來て居る樣なものだ、それで。

一、高縄山塊（最高一二三三米）　は千米以上の峰が四ツ五ツあり、山塊の走向は山系の走向と反對に、稍南北に連り、伊豫國温泉、越智、周桑郡境に亘つて居る、蓋東燧灘と西伊豫灘とを境する斷層山脈の一部を構造せるもので、北來島海峽を隔て、大島、大三島より備後、安藝の國境に連るものらしい、但し、この山塊の名を冠らした本元の高縄山（九八六米）は一時、消火山と誤解せられた山で、或は其れが爲め、即ち四國第一の高い火山として有名になつたのかも知れぬ、今や本山塊中でも、第二列の凡山になつてしまつたが、一時博した盧名は引いて高縄半島の名稱にまで及ぼし、永久に傳へらる事になつた、誠に僥倖兒といつて可なりである。

二、讃岐丘陵　は讃岐國の大部を蔽ひ、南境の讃岐山脈に迫つて相錯雜して居る群丘である、この丘陵上には、地溝帶の窮處を求め、澤多の小火山が噴出して、到る處にピラミッドを築いて居る、中にも飯野山、屋島山（これはピラミッドではない）五劍山、小豆島が有名である、これと同理にて高縄山塊中にも、興居島が珍しく鈍圓錐の菅笠をふせて居る、屋島山に至つては、日本のテーブル山として、專賣特許を取つて可なりであらう、次は愈〻

四國山系

で、便宜上讃岐山脈は後廻しにして

石槌山脈（晶質剝岩）

より始めやう、余は之を分類して三ツにする、即ち

一、石槌山脈（一九八一米）　伊豫西宇和郡佐田岬より、起り喜多、西宇和郡界の出石山を起し、肱川を越えて喜多郡北の山地となり、其より周桑、澁泉と、上浮穴郡界を東走して、主峰石槌山に連り、筒城山にて、伊豫土佐の國界に達し、之より二國境を東走す、西部に於ては瓶ヶ森山、伊豫富士、笹ヶ峰等の千七百乃至千九百米の高峰に富めども、東するに從ひ、漸次平爽して、伊、土、阿、の三國境の三椏示山に至りては、僅に千百餘米を算し、吉野川横谷にて切斷せらる。

これにも支脈多く重なるもの

イ、筒城山より主脈と反對に、伊、土國界を西南走し、劍山脈の雞形山脈に接して、仁淀川の北岸久萬盆地の東邊に終るもの。椿山（一、五八五米）　最も高し。

ロ、筒城山より土佐手箇山を連れ、土佐郡北部に東走し、主脈と吉野川上流を夾み、本山盆地の西端に終るもの、これを稻村山地

◎雜　錄　四國山嶽表

といふ、稻村山（一、五〇六米）を主とす。

二、祖谷山脈（最高一、八四九米）石槌山脈の連脈、吉野川横谷の東に起り、阿波美馬、三好二郡内に盤延し、著しく高度を增し來りて、國見山、中津山等の峻岳を始め、盟峰矢筈山及黑笠山を起し、吉野川巨流の南に沿ふて、麻植、名西の二部をすぎ、德島の眉山に終る、この山脈の南には、劍山脈最も高峻を極め、兩々相並走するを以て、支脈互に相錯雜し、境界甚だ不分明なれど先祖谷川上流の大鳥峠（小鳥又は雄鳥一、三八〇米）及一宇川上流と鮎喰川上流の分水嶺上の保賀山峠（一、一二六米）附近を以て、南北に分割すべきか、要するにこの山脈は祖谷川を爽みて、劍山脈と共に有名なる祖谷山中を形成し、遙かに石槌山一派の高峰に對し、屹然として相下らざる勢あり、連嶺元より同岩質より成ると雖、充分一山塊として分離獨立すべき物と思はるゝを以て、余は假に祖谷山脈と稱せり、蓋、祖谷山村の北半大部、この山脈の占むる處なればなり。第三を

三、別子山脈（「大日本地誌」に言ふ法皇山脈一、七〇七米）といふ、伊土國境を東走せる石槌山脈の高峰笹ヶ峰（一、八六〇米）より北に分岐し、吉野川第一の支流なる銅山川の縱谷を夾みて、主脈と並走し、千六七百米の數峰を崛起して、東するに從ひ、次第に低夷し、伊豫宇摩郡を經て、阿波三好郡吉野川横谷の西邊、銅山川の注口の北に終る、脈中に有名なる別子銅山を包容し最も利用せらるゝ山脈なるを以て、別子山脈と唱ふべし、「大日本地誌」には銅山の東北にある最高峰法皇山を取りて山脈に冠すれど、陸地測量部地圖には、この山名の記入絕えて無く、其山塊に東西赤石山、上下兜山等の屹立せるを示せり、由て思ふに法皇とは普遍的名稱ならざるべく、法皇山脈と言へば、誰しも一寸頭をひねらるゝ位か、さなくとも甲州の鳳凰山塊と誤解せらるゝ丈に止るならん、それよりはすぐ四國の山脈と合點の行く、別子山脈の方が、わかりよい樣に思はれる、殊に銅山川と終始運命を共にせる山脈の事にてもあり、本州に同類の足尾山脈ある以上、決して不適當の名稱であるまいと考へて、改めたのである。

で、この三ッの石槌山脈は、元來同一褶曲山脈を形成せしものなるが、今の處、吉野川横谷と、銅山川縱谷とにて、三分せられたものと言つて可なりである、岩質は三波川層の晶質劍岩より成り、山骨露出稜々として屹立し、四國第一の高峻なる峰嶺を形成して居るのである、但し石槌山群附近には、褶曲の結果、著しく第三紀層の隆起せる（瓶ヶ森の平頂の如き）と、之を貫ける火山岩（石槌山頂の如き）と繡錯して、實に復雜である。これに比すれば次の

劍山脈（秩父古生層）

は溫和なる臥牛式の、峰巒のみにて、山骨峭立の奇趣なく、半熱帶の濃綠林、又は萠黃蒲團の草薄にて蔽はれ、太平の眠をむさぼつて居る連中である、先大約二分して。

一、雞形山脈（「大日本地誌」中の不入山脈をも含む、最高一、五六二米）伊豫北宇和、東宇和郡界附近の群山に起り、肱川と渡川との分水嶺をなして、上浮穴郡に入り、仁淀川上流久万盆地の西邊にありて、最も高く、伊豫土佐國界の有名なる大野ヶ原石灰層

を作り、土佐高岡郡仁淀川の南を東走す、雞形山この脈中に聳え、最も偉大なるを以て、取つて山脈に冠す、吾川郡仁淀川の西岸高知平野の西端に終る、この山脈と石槌山脈の支脈(イ)と紛糾せる點を、仁淀川久万盆地の東岸、中津明神山(一、五四一米)附近とし、又劍山脈の起點たり、三脈こゝに輻湊し、中津明神は實に其の焦點に位す、又久万盆地の西部は、石槌本脈との交界亦不分明なれど、肱川支流小田川と、仁淀川上流とを連ぬる眞弓峠(七三二米)の著しく低下せるを以て兩斷せらる。本脈の南渡川の支流越知面(チヂメ)川を隔てゝ、「大日本地誌」に言ふ不入山脈並走し、更に又支流上山川の間に一脈並走するあれども、紛然として交界定かならず、且皆古生層紀の生成なれば、便宜上(山岳分類として)皆この山脈中に一括せり、この山脈の特徴は、雞形山より大野ヶ原附近に至る數峰が、石灰岩の厚層を冠りて、平頂にして斷崖、一大高原連嶺をなし、至る處石灰洞(迷脫)を構成せる事にして、絕えず地盤の變動を起せる爲め、今尙伊土國境が未確定なる地域なりとす。次に連るは

二、劍山脈(最高一、九五五米)にしてかの中津明神山を起點として、仁淀川と吉野川上流との間を東走し、石槌支脈稻村山地と交雜し、而かも石槌山脈の伊土國境を走れるものよりも、遙に低き連山を作りて、吉野川上流を夾み、所謂土佐本山鄉の長方盆地を形成す、國見山雪光山等、有名なれども、皆一千米內外に抽づるのみ、然れども山脈長岡香美二郡界を東北するに當り、漸次急峻となり、遂に阿波との國界に及びて、天狗塚(一、八一三米)

◎雜錄　四國山嶽表

八九四米)を起し、遂に盟主劍山に及ぶ、劍山よりは那賀川上流を夾みて二脈東走し、北なるは、雲早山(一、四九六米)を起して正東走し、遂に名東、勝浦郡界の海岸に終り、南なるは支流北川の北岸に沿ひ樞田山(一、六〇九米)を起し、木頭山中の北半を形つくりて那賀、勝浦郡界の連丘に終る。

以上石槌、劍兩山脈は相並びて四國の中軸をなし、其南北兩條に中生層の山脈を率ゐたるを分ちて。

一、讃岐山脈(最高一〇五七米)

二、海部山脈(最高一四三六米)

となす、一は礫岩、砂岩、泥板岩より成る白堊層の褶曲山脈に屬し、阿讃の國界に連り、古く祖谷山脈の北岸に横はりし淺海の沈積物たるものなり、南は吉野の巨浸にて劃然と分れ、北は花崗岩の讃岐丘稜に接し、一連の小屏風を形つくり、四國中最も單純なる山脈とす、山勢低く、最高峰龍王岳及大川岳の一千米に達せるのみ。

二はこれに反し、四國式に紛糾せる山地を形作れるものにして土佐安藝郡の中央より東北走して、阿土國界に達し甚吉森、槇小屋山(陸地測量部圖には湯桶丸と記す)の深山を起し、那賀川の南岸に沿ひ、海部郡の全部に延ぶ、走向元より東西を取るも雖、海部川、奈波利川等の横谷のために細斷せられ、爲めに、比較的高峻なる峰々は、南北の方向に連り、阿土國界を南下し、延いて室戸岬に及ぶ、恰も紀伊山脈が東西に走れども、北山川、熊野川横谷に夾まれたる高峰が大峰山脈を外觀上構成するに似たり、該山脈と北の劍山脈との交界亦紛糾して、判然せざれど那賀川支流北川と土佐物部

◎雜　錄　四國山嶽表

川支流槇山川とを以て界し其分水嶺榜示峠（一、一二七米）を接點とすべし、この最高峰赤城尾山に就ては、後に述ぶる所あるべし、要するに本山脈は支脈最も多く、東に亘るは海部山地にして、西に蔓延せるは安藝山地なり、四國第一の幽境なる那賀上流の木頭山中は、人跡罕なる事、遙に祖谷山中に勝り、滿目鬱蒼たる深林のみにて、太古以來斧鉞の入らざる山多し。

讃岐山脈は亦伊豫宇摩、新居兩郡の海岸に、一帶の丘陵を作り、更に、高縄、石槌兩山塊を連絡する丘陵地を作り、東西に連ると等しく、四國山系南緣の海部山脈は、土佐大灣の西部に一帶の群山を起し、渡川の東西兩岸を夾む、東岸には火打山脈やゝ著はれたれ共、九百米に達する山岳なく、西岸には此等山地を土臺として、噴出せし花崗岩の隆起屹立して所謂

三、幡多宇和山塊（最高一、二二九米）を形成す、支脈盤結して到る處に山峰を起し。豐後水道に迫つて犬牙峭立し、リアス式の海岸を作る、然れ共、稍高き峰は土佐幡多、伊豫北宇和郡界に南北に連り、鬼ヶ城山、高月山（最高）等の名山多し。

以上記する如く、四國には二條の主軸東西に走り、蝙蝠の兩翼骨格は讃岐、海部と高縄、幡多宇和の山塊より成れるを見る。

三、山岳高度表

次に掲ぐる表に就き、二三の注意を書かん。

一、ゝゝ山（ゝゝ山）とあるは上の〃が陸地測量部地圖の山名、括弧内の〃が農商務省地圖の山名なり。

二、（ゝゝ山）とあるは、陸、圖に無記名にして、農、圖にのみ記名ある山岳なり。

三、農、高なきものは殆全部、農、圖に無記名なるものなり、但、大洞山のみは、陸、の標高と、農、の記名を取れり。

四、山名に黒點を附したるは著名なる山岳なり。

五、「四万川峰（シマカハ）」は農、陸兩圖共無記名なりし故「大日本地名辭書」より取れり、大野ヶ原南の大山なり。

列次	山岳	參高	農高	差	山脈	位置（郡）
一	石槌山	一九八一、	一九七七	四（高）	石、一	（伊）新居、周桑、上浮穴
二	劍山	一九五五、〇	二〇七三	一一八（低）	劍、一	（阿）美馬、麻植、那賀
三	二ノ森	一九二九、二	一九〇六	二三（高）	石、二	（伊）周桑、上浮穴
四	シロギュー	一九二五、	—	—	劍、二	（阿）美馬、海部、那賀
五	瓶ヶ森	一八九六、七	一九五四	五七（低）	石、三	（伊）新居、（土）土佐
六	三嶺（黒笹山）	一八九三、七	一九四七	五三（低）	劍、三	（阿）美馬、（土）香美
七	一ノ森	一八七九、五	—	—	劍、四	（阿）麻植、那賀

八	笹ヶ峰	一八五九、九	一八二〇	四〇(高)	石、四	(伊)新居(土)土佐		
九	筒城山	一八五九、四	—	—	石、五	(伊)上浮穴(土)土佐、吾川		
一〇	矢筈山	一八四八、八	一八〇七	四二(高)	祖、一	(阿)美馬の中部		
一一	(雙耸)	一八一六、二	一八一二	四(高)	剣、五	(阿)美馬(土)香美		
一二	天狗塚(天狗岳)	一八一三、	一八二五	一二(低)	剣、六	(阿)美馬、雙耸の西		
一三	手箇山	一八〇六、五	一八一六	九(低)	石、六	(土)土佐、筒城の東		
一四	白髪山	一七六九、九	—	—	剣、七	(土)香美、三嶺の南		
一五	寒風山	一七六五、	一六二八	一三七(高)	石、七	(伊)新居(土)土佐		
一六	伊予富士(伊豫峰)	一七五六、三	一八一〇	五四(低)	石、八	(伊)新居(土)土佐		
一七	冠山(足谷山)	一七三二、	一八二〇	八八(低)	石、九	(伊)新居(土)土佐		
一八	塔丸	一七一三、三	—	—	剣、八	(阿)美馬、丸笹の西		
一九	丸笹山	一七一二、〇	—	—	剣、九	(阿)美馬、廠植、剣の北		
二〇	石立山	一七〇八、〇	一五三七	一七一(高)	剣、一〇	(阿)海部(土)香美		
二一	五代ヶ森	一七〇七、一	—	—	石、一〇	(伊)上浮穴、石槌の南		
二二	東赤石山(法皇山)	一七〇六、九	一八三二	一二五(低)	別、一	(伊)宇摩の西部		
二三	黒笠山	一七〇三、	一五一三	一九〇(高)	祖、二	(阿)美馬、矢筈の東		
二四	黒笠森山	一七〇〇、	—	—	別、二	(伊)新居の東部		
二五	平家ヶ森	一六九二、七	—	—	石、一一	(伊)新居(土)土佐		
二六	平家ヶ森	一六八九、五	一五九九	九一(高)	石、一二	(伊)周桑、上浮穴		
二七	丸石山	一六八四、一	—	—	剣、一一	(阿)美馬、海部		
二八	(登龍山)	一六八三、三	一六八〇	三(高)	祖、三	(阿)美馬、矢筈の西		
二九	烏帽子山	一六七〇、二	一六三〇	四〇(高)	祖、四	(阿)美馬、登龍の北		
三〇	西山	一六五三、二	—	—	剣、一二	(阿)那賀、海部		
三一	綱附森	一六四八、四	一六九〇	四二(低)	剣、一三	(阿)美馬(土)香美		

◎雑錄　四國山嶽表

◎雜錄　四國山嶽表

列次	山岳	參高	農高	高差	山脈	位置(郡)
三二	二ツ岳(二ツケ森)	一六四七、六	一七三八	九〇(低)	別、三	(伊)宇摩、東赤石の東
三三	天神丸	一六三一、九	—	—	劍、一四	(阿)麻植、那賀、劍の東
三四	高城山	一六二八、三	—	—	劍、一五	(阿)仝上、天神丸の東
三五	西赤石山	一六二六、四	—	—	別、四	(伊)宇摩、新居
三六	赤帽子山	一六一一、八	—	—	劍、一六	(阿)美馬、麻植、丸笹の北
三七	權田山	一六〇九、	—	—	劍、一七	(阿)那賀、海部
三八	寒峰(カンボー)	一六〇四、九	一五三八	六七(高)	祖、五	(阿)美馬、登龍の西
三九	平家平	一六〇三、八	—	—	劍、一八	(阿)那賀、海部
四〇	(コゼキ山)	一五九六、六	一五四三	五四(高)	石、一三	(土)土佐、寒風の南
四一	大座禮山	一五八七、六	—	—	石、一四	(土)土佐、東西三森間
四二	(椿山(ツバヤマ))	一五八四、八	一四九四	九一(高)	石、一五	(伊)上浮穴(土)吾川
四三	上兜山	一五六三、	—	—	別、五	(伊)新居、宇摩
四四	笠取山	一五六二、四	—	—	雞、一	(伊)上浮穴、中津の西
四五	中津明神山	一五四〇、五	一二三九	三〇二(高)	雞、二	(伊)上浮穴(土)吾川
四六	面河(ヲモコー)山	一五三二、	—	—	石、一六	(伊)上浮穴、石槌の南
四七	大川嶺	一五二五、五	—	—	雞、三	(伊)上浮穴、笠取の北
四八	(京柱山)	一五二五、〇	一四三七	八八(高)	劍、一九	(阿)美馬(土)香美、長岡
四九	工石(クイシ)山	一五一六、一	一四六四	五二(高)	石、一七	(土)長岡の北部
五〇	稻村山	一五〇六、四	一四五六	五〇(高)	石、一八	(土)土佐の中部
五一	雲早(クモソー)山	一四九六、三	一六二一	一二五(低)	劍、二〇	(阿)名西、勝浦、那賀
五二	(櫛ケ岳)	一四九三、八	一四二六	六八(高)	祖、六	(阿)美馬、黑笠の東
五三	東三ツ森山	一四八六、五	一五〇三	一七(低)	石、一九	(伊)宇摩(土)土佐
五四	(牛ケ城)	一四八五、二	一四四七	三八(高)	雞、四	(伊)上浮穴(土)高岡

五五　白髪山　一四六九、六　一四七〇　〇　石、二〇　（土）長岡の西部
五六　（庵澤山）　一四六四、〇　一一九〇　三七四（高）　石、二一　（伊）上浮穴（土）吾川
五七　雞形山　一四五九、七　一四八六　二六（低）　雞、五　（土）高岡西北部
五八　石墨山　一四五六、五　一二八〇　一七七（高）　石、二二　（伊）上浮穴北部
五九　（劔ノ峰）　一四五五、八　一五八〇　一二四（低）　雞、六　（伊）上浮穴（土）高岡
六〇　赤星山　一四五三、六　｜　｜　別、六　（伊）宇摩、ハチダルの北
六一　（旭丸山）　一四五〇、　一四三八　一二（高）　劍、二一　（阿）麻植、名西、那賀
六二　中津山　一四四六、九　一四七〇　二三（低）　祖、七　（阿）美馬、祖谷、松尾川間
六三　（天洞山）　一四四三、三　｜　｜　劍、二二　美、長岡　（土）香
六四　高丸山　一四三八、九　｜　｜　劍、二三　浦、那賀　（阿）勝
六五　赤城尾山　一四三六、三　｜　｜　海、一　（阿）海部（土）香美
六六　（大越山）　一四三二、　一三九九　三三（高）　劍、二四　美、長岡　（土）香
六七　西三ツ森山　一四二九、八　｜　｜　石、二三　（伊）宇摩（土）土佐
六八　別子銅山　一四二九、　｜　｜　別、七　（伊）宇摩、新居
六九　高板山　一四二七、六　｜　｜　劍、二五　美、大洞の東　（土）香
七〇　甚吉森　一四二三、二　一四〇八　一五（高）　海、二　（阿）海部（土）安藝
七一　大森山　一四一六、　｜　｜　石、二四　（伊）宇摩（土）長岡
七二　國見山　一四〇九、三　一四一八　九（低）　祖、八　（阿）美馬、吉野、祖谷川間
七三　佐々連尾山（黑藏）　一四〇四、五　一五九〇　一八六（低）　石、二五　（伊）宇摩（土）長岡
七四　久々瀧山　一四〇四、　｜　｜　海、三　美、安藝　（土）香
七五　「四万川峰」　一四〇二、八　｜　｜　雞、七　（伊）上浮穴（土）高岡
七六　風呂ノ塔　一四〇一、九　｜　｜　祖、九　（阿）三好、美馬
七七　梶ヶ森（小笠森）　一四〇〇、〇　一三三〇　七〇（高）　劍、二六　（土）長岡、鉢森の北
七八　雨ヶ森　一三九〇、一　｜　｜　石、二六　（土）吾川

◎雜錄　四國山嶽表

◎雜錄　四國山嶽表　一六二

列次	山岳	參高	農高	高差	山脈	位置(郡)
七九	(黑森山)	一三八二、二	一四三三	五一(低)	石、二七	(伊)新居の西部
八〇	狼ヶ城	一三八〇、一	—	—	雞、八	(伊)上浮穴、大川の北
八一	三ヶ森	一三七八、一	一四四二	五四(低)	石、二八	(伊)周桑瓶森の北
八二	湯桶丸(槇小屋山)	一三七二、四	一四一八	四六(低)	海、四	(阿)海部西部
八三	能谷山	一三六九、	—	—	石、二九	(土)土佐、稻村の東
八四	(三ツ森)	一三五九、八	一四三九	七九(低)	石、三〇	(伊)新居、瓶ヶ森の北
八五	行者山	一三五一、	一三八〇	二九(低)	海、五	(阿)海部、(土)香美
八六	カヾマシ山(藤長山)	一三四二、九	一三四六	三(低)	石、三一	(伊)宇摩(土)長岡
八七	井野河山	一三四二、〇	—	—	石、三二	(土)土佐、大坐禮の南
八八	(赤禿森)	一三四〇、	一三三〇	一〇(高)	石、三三	(土)長岡、白髮の北
八九	不入山	一三三六、四	一三一四	二二(高)	雞、九九	(土)高岡、雞形の南
九〇	腕(カヒナ)山	一三三三、二	—	—	祖、一〇	(阿)美馬、日ノ丸の南
九一	玉取山	一三三〇、五	—	—	石、三四	(伊)宇摩(土)長岡
九二	烏帽子(ヤツラ)森	一三二〇、三	—	—	海、六	(土)安藝の北部
九三	八面山	一三一二、六	一二六三	五〇(高)	祖、一一	(阿)美馬、網付の西
九四	青瀧山	一三〇三、八	—	—	石、三五	(伊)周桑、上浮穴
九五	天狗森	一二九五、八	一二六二	三四(高)	海、七	(土)安藝の北部
九六	野鹿池山	一二九四、六	一一八二	二三(高)	石、三六	(阿)三好(土)長岡
九七	池野河山	一二八三、六	—	—	海、八	(阿)海部の西部
九八	ハ子ヅル山	一二八二、四	—	—	石、三七	(伊)宇摩
九九	皿(サラ)嶺(ムネ)	一二七一、〇	—	—	石、三八	(伊)溫泉、上浮穴
一〇〇	鉢ヶ森	一二七〇、六	一二九五	二四(低)	劍、二七	(土)香美、長岡
一〇一	大己屋(オーコヤ)山	一二六二、五	—	—	石、三九	(土)長岡、白髮の西

一〇二	綱付山	一二五六、一	—	—	祖、一二	(阿)美馬、麻植
一〇三	寶蔵山	一二四九、四	—	—	海、九	(土)安藝
一〇四	豐受山	一二四七、八	一二九八	五〇(低)	別、八	(伊)宇摩、赤星の東
一〇五	雨霧山	一二四五、八	—	—	雞、一〇	(伊)上浮穴、笠取の西
一〇六	日ノ丸山	一二四〇、五	—	—	祖、一三	(阿)美馬、三好
一〇七	下兜山(兜櫃現)	一二三四、〇	一一〇五	一二九(高)	別、九	(伊)宇摩、新居
一〇八	東三方森山	一二三三、一	—	—	高、一	(伊)越智、周桑、温泉
一〇九	(高根)山	一二三二、三	—	—	劍、二八	(阿)名西、勝浦
一一〇	高月山	一二二九、一	一〇八一	一四八(高)	幡、一	(伊)北宇和南部
一一一	稗己屋山	一二二八、六	—	—	海、一〇	(土)安藝、寶藏の南
一一二	(滑床)山	一二二五、八	一三一五	八九(低)	幡、二	(伊)北宇和(土)幡多
一一三	八ツ早山	一二二五、二	—	—	劍、二九	(阿)海部、橘田の南
一一四	桂ヶ森	一二二四、四	—	—	石、四〇	(伊)上浮穴の西部
一一五	明神岳	一二二三、	—	—	祖、一四	(阿)美馬、麻植
一一六	綠尾山	一二二二、三	—	—	石、四一	(伊)宇摩(土)長岡
一一七	明神森	一二一七、三	—	—	高、二	(伊)温泉、東部
一一八	黑瀧山	一二一〇、二	—	—	石、四二	(阿)三好(土)長岡
一一九	陣ヶ森	一二一〇、	—	—	石、四三	(伊)温泉、上浮穴
一二〇	(オザレ)山	一二〇六、	一二五九	五三(低)	石、四四	(伊)周桑、二ノ森の北
一二一	(鉾)石山	一一九九、	一〇五三	一四七(高)	石、四五	(伊)新居の西部
一二二	(イシ)工石山	一一七六、八	一二七三	九六(低)	劍、三〇	(土)土佐の西部
一二三	奥野山	一一六四、	—	—	祖、一五	(阿)麻植、美馬
一二四	(龍山)	一一五九、七	一一三二	二八(高)	劍、三一	(阿)勝浦、那賀
一二五	雨岡山	一一五八、八	—	—	海、一一	(土)香美、久々場の北

◎雜錄　四國山嶽表

◎雑録　四國山嶽表

列次	山岳	參高	農高	高差	山脈	位置(郡)
一一六	三●傍●示●山●	一一五八、〇	一一一六	四二(高)	石、四六	(阿波)(伊豫)(土佐)
一一七	神戸丸	一一四八、〇	—	—	海、一二	(阿)海部、西部
一一八	天●堤●山●	一一四六、八	—	—	石、四七	(伊)宇摩、東部
一一九	鬼●ケ城●山●	一一四二、	一〇八〇	六二(高)	幡、三	(伊)北宇和、南部
一三〇	綾木森	一一四〇、七	—	—	海、一三	(土)安藝、稗已屋の南
一三一	杖立山	一一三三、三	一一四〇	七(低)	剣、三二	(土)長岡、梶森の西
一三二	熊窓山	一一三三、	—	—	別、一〇	(伊)宇摩、二ッ岳の北
一三三	笹ケ峰(根來森)	一一三二、〇	一〇六七	六五(高)	剣、三三	(土)長岡、土佐
一三四	汗(カヂ)谷山	一一二七、	—	—	海、一四	(土)安藝の東部
一三五	鐘(リウ)ケ龍森(モリ)	一一二五、六	一一八八	六四(低)	海、一五	(土)安藝、天狗の南
一三六	雁●巻●山●	一一二四、八	—	—	海、一六	(土)安藝、汗谷の東
一三七	高●越●山●	一一二二、六	一〇八四	三九(高)	礪、一六	(阿)麻植の西部
一三八	吉野丸	一一一六、七	一一〇八	九(高)	海、一七	(阿)海部、神戸丸の東
一三九	籙瀧	一一一六、〇	—	—	石、四八	(土)長岡、白髪の西南
一四〇	(岸)川山(一)	一一一三、四	一一二八	一五(低)	雞、一〇	(土)高岡の西部
一四一	(櫨)現(出)山●	一一一二、五	一〇五二	六一(高)	別、一一	(伊)新居の中部
一四二	雨●包●山●	一一一一、七	—	—	雞、一二	(伊)東宇和(土)高岡
一四三	三●瀧●山●	一一一〇、九	一六二一	五一〇(低)	石、四九	(土)土佐、井の川の南
一四四	三辻山	一一〇八、七	—	—	剣、三四	(土)土佐、樫山の西
一四五	剣(メノ)ノ山	一一〇六、〇	—	—	石、五〇	(阿)三好、(伊)宇摩
一四六	大(オー)黒山	一一〇五、九	一〇四三	六三(高)	幡、四	(伊)北宇和(土)幡多
一四七	三ツ足山	一一〇五、	一〇七八	二七(高)	石、五一	(伊)宇摩、カヾマシの北
一四八	岩躑躅山	一一〇三、二	—	—	石、五二	(土)土佐の東部

一四九	鶴松ヶ森（クワクシヨー）	一一〇〇、三	—	—	雞、一三	(土)高岡、不入の東
一五〇	(樫山)	一〇九六、	一一五二	五六(低)	劍、三五	(土)土佐、笹峰の西
一五一	大森山	一〇九四、二	—	—	劍、三六	(阿)海部、八早の南
一五二	東宮山	一〇九〇、九	—	—	祖、一七	(阿)名西、麻植
一五三	國見山	一〇八九、三	一一二〇	三一(高)	劍、三七	(土)長岡、笹峰の東
一五四	(黒森)	一〇八七、八	一一一三	二五(低)	石、五二	(土)長岡、白髪の南
一五五	八町山	一〇八五、七	—	—	石、五四	(土)長岡、白髪の東
一五六	千本山	一〇八四、六	—	—	海、一八	(土)安藝北部
一五七	(裝束森)	一〇八三、一	一〇九〇	七(低)	海、一九	(土)安藝、南部
一五八	龜谷山	一〇八二、七	—	—	海、二〇	(土)安藝、東部
一五九	五在所山	一〇七九、五	一一三七	五七(低)	劍、三八	(土)香美、大越の南
一六〇	(工法石山)	一〇七八、六	—	—	劍、三九	(土)土佐、吾川
一六一	友内（ユーウチ）山	一〇七三、四	—	—	祖、一八	(阿)美馬の中部
一六二	(横倉山)	一〇七三、〇	一一四八	七五(低)	雞、一四	(土)高岡の北部
一六三	神賀山	一〇七一、三	—	—	劍、四〇	(土)香美、大越の東
一六四	讓ヶ葉森	一〇六五、八	—	—	幡、五	(伊)北宇和(土)幡多
一六五	篠山	一〇六四、七	一一二〇	五五(低)	幡、六	(伊)北宇和、南宇和(土)幡多
一六六	高研山	一〇五八、	—	—	幡、七	(伊)北宇和(土)高岡
一六七	龍王岳	一〇五七、〇	九四六	一一一(高)	讃、一	(讃)香川(阿)美馬
一六八	鈴ヶ森	一〇五四、三	一〇五一	三(高)	雞、一五	(土)高岡、不入の南
一六九	福見山	一〇五四	—	—	高、三	(伊)温泉、東部
一七〇	鹽塚山	一〇四三、六	—	—	石、五五	(阿)三好、(伊)宇摩
一七一	大川（ダイセン）山	一〇四三、二	九四八	九五(高)	讃、二	(讃)綾歌(阿)三好
一七二	楢原山	一〇四二、	—	—	高、四	(伊)越智、西南部

◎雜錄　四國山嶽表

列次	山岳	參高	農高	高差	山脈	位置(郡)
一七三	饅頭山	一〇三四、	—	—	海、二一	(阿)海部、西部
一七四	(天神山)	一〇三二、八	一一二八	九五(低)	祖、一九	(阿)美馬、中津の南
一七五	高善森	一〇二九、一	—	—	海、二二	(土)安藝、鏡龍の南
一七六	八杉森	一〇二九、〇	—	—	海、二三	(土)安藝、天狗の南
一七七	(大篠山)	一〇一九、九	一〇二八	八(低)	剣、四一	(阿)名東、名西、勝浦
一七八	貧田丸	一〇一八、八	—	—	海、二四	(阿)海部(土)安藝
一七九	黒森	一〇一七、六	一一一五	九七(低)	剣、四二	(土)吾川の南部
一八〇	半平山	一〇一六、二	—	—	祖、二〇	(阿)美馬、八早の東
一八一	笹ヶ峰	一〇一五	一〇三二	七(低)	石、五六	(伊)宇摩(土)長岡
一八二	陣ヶ森	一〇一三、七	—	—	石、五七	(土)土佐、吾川
一八三	請ヶ峰	一〇〇九、五	九五〇	六〇(高)	海、二五	(阿)海部、饅頭の南

即ち、中國山系……高縄山塊　四座

四國山系
- 一　石槌山脈　五七座
- 二　別子山脈　一一座
- 二　祖谷山脈　二〇座
- 二　雞形山脈　一五座
- 二　剣山脈　四二座
- 三　讃岐山脈　二座
- 四　海部山脈　二五座
- 五　幡多宇和山地　七座

上表によれば、陸、農兩圖に現はれたる標高が偶然一致せるものは、「五五」白髪山唯一ありしのみにて、大抵百米内外の相違あり、最大誤差は「五六」庵澤山及び「四五」中津明神山にして、三百米を越えたり、この附近雞形山脈中に誤差多きは、不思議なり、又三瀧山は五百餘米も低下し居れど、兩圖を比較するに、農、の三瀧山は、陸、の大座禮山か井野河山に相當して、記入せられあるを以て、實際の比較は百乃至二百米を出でざる也、但し余は、妄りに大座禮又は井野河山の別名として、三瀧山を獨斷し雛きを以て、誤と知りつゝ表し置けり、蓋、農、圖の三瀧山は誤りなるべし。

以上の表を作つて、一寸氣がついた二三をいふと

一、四國には何々森なる山名甚だ多い事

である、即ち一ノ森、二ノ森、瓶ヶ森、五代ヶ森、黒森、堂ヶ森、

綱附森、三ツ森、甚吉森、天狗森、烏帽子森、等殆枚挙に遑ない程である、之によつて見ても、いかに四國には近畿中國などゝ異り、禿山が少く、鬱蒼たる樹林の山が多いかゞわかる、山名に森をつくるのは四國以外には、東北地方であらう、即ち岩代の大白森、小白森、七ツ森、陸中に土手森、大森、陸前の七ツ森、大高森等の例が割合にある。

二、何々丸なる山岳多き事

即ち、塔丸、丸笹、丸石。天神丸、吉野丸、旭丸、高丸、湯桶丸、日ノ丸、等で之は阿波國に限り、多く剣山脈に屬するのである、即此方面に古生層の圓滑臥牛式の山が多いのを證して居る。

三、何々岳なる山命殆皆無なる事

本州中部、東北、北海道、九州に於ては、岳を著くる山名が甚多いが、中國と四國には甚だ少い、岳といふと何となく崇高にひゞくが、山とか山とかいふと餘り崇高に聞えないものである、由て四國には崇高な山がないかといふのに、中々石槌、別子山脈等には、嶄然たる峻峰が多いのである、夫で一千米以上では僅かに四ツある、即ち二ツ岳、櫛ヶ岳、明神岳、龍王岳で、この中でも二ツ岳は農、地圖に二ツが森と記し、又櫛ヶ岳は前號「筑ヶ峰、石堂山登攀記」にある津司瀧山に當る山なので、農、圖のクシガタケとはツシタキの聞誤りであるまいかと思ふ、そうすると、純粋の岳をつくる山はたつた、二ツしかない事になる。

四、同名異山甚だ多い事

四ヶ國よりなる此の狹い土地に、百八十三も千米以上の山がある丈、隨分の山國といはねばならぬ、其故一國内でも、諸處に小盆地が隔離獨立し、交通不便のため、同名異山を甚だ多く出して居る。即ち

黒森山（一二四、七九）「一五四」「一七九」其他二ツあり）笹ヶ峰（八、一三三、一八一）三森山（五三）「六七」「八四」）綱付山（三一、一〇二」其他一ツあり）中津山（六二）「四五」）國見山（七二、一五三」其他一ツあり）白髪山（一四、五五）工石山（四九」「一二二」）陣ヶ森（一一九、一八二）五在所山（一五九」の外二ツあり）。

等にて、工石（山岳志には喰石）及び綱付なる山名は、四國獨特の山名であるが、一寸何の意味かわからない。

五、山名の讀方六かしき事

四國殊に阿波、伊豫、土佐の地名は、九州の肥後、日向、大隅、薩摩の地名と同樣に、本州各地と非常に異つて、只字のコンビネーションにすぎない、無意味なる地名が多い、例へば一宇、幡多、別役、木頭、祖谷、等の如く聞いても外國語の樣で甚だ無趣味である、故に可成り高い山でも、緣もない樣な呼稱では、誠に聞いて崇高の念を惹起さない、北海道のアイヌ語以外に、假名でかく山名が割合に多いのは、四國の高山に取つて、甚だ氣の毒である、

◎雜錄　四國の山名の一研究

例へば、ジローギューといふ、一、九二五米の高山を始め、カヾマシ山、ハ子ヅル山、コゼキ山、オザレ山等、僅に宛字で胡魔化して居るのが、久々場山（クヽバ）、佐々連尾山（サヾレオ）、黒館山（クロダチ）、工石山（クイシ）等で、一寸聞いても日本内地の山とは迚も思はれない、其外假名がなくては、迚も讀めないのは雲早山（クモサウ）、寒峰（カンボー）、友内山（ユーウチ）、高根山（コーチ）等である、で其假字がついてないため、次の諸山の讀み方は僕に分らない、即ち

筒城山（陸、地圖に筒上山とす、故にツヽジヨーとよむかもしれぬ）璧禿（イザリハゲか）平家平（ヘイケダヒラか）大座禮山（オーザレか）京柱山（キヨーハシラか）赤城尾山（アカキビか）天堤山（アマツヽミか即ち雞形山脈中の雨包と同音か）工法石山（クボイシか）高研山（タカトギか）貧田丸（ヒンダマルか）で鰻蟲山に至つては讀方がとてもわからぬ、ウナギトヾロキ山では餘り長すぎて嘘らしい、以上の正しき讀方、御承知の方は本誌にて御示教を乞ふ。

右の内赤城尾をアカキチと讀まず、アカキビと呼んだわけは、下の如くである、

この山は前にも言ふ如く、海部山脈の主峰であるが、一體、海部山脈は土地僻遠のため、今迄の地圖に山名極く少く、たとひあつても諸書種々で、試に普通なのを擧げると、赤首山（アカクビ）、龜甲山（キツコー）、魚梁瀨山（ヤナセ）、槇小屋山（マキゴヤ）、家峰（イヘミ子）、請山（ウケ）、天狗森、野根山（ノ子）位であつた、この内陸、五萬分一圖にあるのは最後の三ツ丈で、あとのは一ツもない、農、日和佐圖幅には、以上の三ツと槇小屋山を加へて四ツを記するのみである、それで古き農二十萬分一圖には、この赤首山なるものを、丁度、陸、五萬分一圖の赤城尾山の所に、書入れてある、由て、これは、アカクビでなく、アカキビなる發音をうつして、宛字に赤城尾としたのではないかと思ふのである、又龜甲山とは「一五八」龜谷山の誤でないかと思ふ、魚梁瀨山とは魚梁瀨村附近の山の意味らしい、槇小屋は陸、圖の湯桶丸に當り、其東麓の谷を槇小屋谷と書いて居るのでもわかる、家峰なる山の存在は、未だ不明である、

どうも折角正確なる新地圖が出來ても、宛字に假字をふらないため、讀方のわからない山名が多いのは、實に遺憾である、又宛字も隨分杜撰のが多いのと、從來使用し來りし文字と、全く異る文字を使つたりして、甚だよくない所もある。又四國では峯をムネと發音し、又峠をタウゲ即ちトーゲとよます、タウ即トーとよむ事が多い、池峠（イケドー）、矢筈峠（ヤハヅドウ）、白猪峠（シラヰガトー）、等で殆總てトーとよむらしい。（永田）

一六八

四國の山名の一研究

四國島の山名には、何々山と稱するやうに、何々嶽、峯（ムネ）、森（モリ）、丸（マル）、塔（トウ）、富士等の語が使はれてゐる。廿萬分の一地形圖――一部分は輯製廿萬分一、廿萬帝國圖、日本山岳志目次等に據る――に記載せられてゐる山名は、四國全體で、三百卅二

ばかりであるが、此等の山名の數及び割合は次の通である。

何々山	二四六	全數に對する割合	○、七四　強
何々森	三八		○、一一　強
何々峯	一九		○、○五　強
何々嶽	一六		○、○五　弱
何々塔	六		○、○一八
何々丸	二		○、○○六
何々富士	二		○、○○六
山の意味の語の付き居らざるもの	三		○、○○九
計	三三二		

次に之等の語の意義、使用法及び分布等に就て說明して置く。

山　讀み方にヤマとサンとゼンとの三樣がある。土俗が單に山の名を附けてある時は、ヤマが用ゐられてゐる。例、高城山（タカシロヤマ）（阿波）、飯野山（イヒノヤマ）（讃岐）。サンは神佛等尊敬すべき物がある時に、用ゐられる。そして多くは、其社寺を敬稱して何々サン（樣の意）と言ふのが、其社寺の所在地である山をも、含むやうになつたのである。で何々サンと言つただけでは、其社寺を指して居るのか、又は其山を呼んでゐるのか不明である、例、石槌山（イシヅチサン）（伊豫、石槌神社あり）、劍山（ツルギサン）（阿波、劍神社あり）。ザンは漢音であるから、山名を音讀する時に用ゐられる。で詩人や學者等の附けた山名は殆ど之に屬する。例、五劍山（ゴケンザン）（讃岐）、劍山（ケンザン）（阿波、音讀）。但し音便上サンとザンとが轉換する場合もある。例、劍山（ツルギザン）（阿波、劍山（ツルギサン）と同意）。

森　日本山岳志などを見ても何々森といふ山名は四國以外には見當らない。四國內でも南部及び南西部のみで用ゐられてある。この森は現今では使用せぬ言葉であるから。如何なる意味で用ゐられたのか、予は未だ聞き得ないのであるが、予が調査の成績では、もりの第一義——單に木の叢生した處（森）——でなく、其第二義——神社ある地の木立の處（杜）——で使用せられたものと思はれる。即ち山中で神社——多くは無名の小祠——のある處を、何々森と言つたものであらう。そして最初は、單に比較的狹い部分を指して居たものが、弘まつて、遂に其山の名となつて居るのである。で予は最初の狹い時代を前期とし、後の山全體に用ゐられたものを後期として置く。で、地圖

に記載せられてある何々森の中にも、此前期と後期とを含んでゐる。前期のものは、嚴密な意味では、一つの山とは認められない。猶何々森山と言ふのが、土佐には澤山ある。

峯　峯の意は峙立した山の頂部を指すものと考へられる。山の頂は山の焦點であるから、頂部だけの名が、全體の山の名ともなつてゐるのであらう。四國では海岸地方に多く用ゐられてある。

嶽　廿萬分の一地形圖には、嶽の署字である岳の字を用ゐてある。余は、四國の山名に嶽を用ゐてあるものは、恐らく無いであらうとの臆測をしてゐる。然らば、多くの地圖に何々嶽と記されてあるのは、如何した理かと言ふに、余の調査し得た範圍内では、何々タキ（岩崖の意、「山岳」六の三「四國の山岳語彙」參照）と、土俗が稱してゐる處を、何々岳と記してある。之は此タキの意味を、充分知らなつたから、岳と誤聞したものであらう。一例を擧げて見ると、石槌山頂上、東部の一大岩崖は、土俗は天狗の居所と信じて、天狗の崖（ダキ）と稱してゐるに拘はらず、五萬分の一地形圖には、天狗嶽と記してある。

塔　又嶺の字を用ゐる。余は「山岳」六の三「四國の山岳語彙」中で、峠の頂又は山頂の一部を、トーと稱する事を說いて置いたが、それが一つの山名となつてゐるものである。土佐と伊豫とにある。

丸　阿波の南部である海部郡と、同郡に接してゐる土佐の安藝郡との地方に用ゐられてある。空線（スカイライン）の丸い山を、何々丸といつたものと考へられる。洋語のDomeと符合する。現今は用ゐない語である。

富士　言ふ迄もなく、富士形の山を指すのである。

附記　本稿を草するに當つて、阿波の笠井文夫、竹井豐藏、土佐の吉永虎馬、山本一の諸兄から、各頗る有益な材料を寄與せられた事を深く感謝する。

正誤　「山岳」六年三號「四國の山岳語彙」の末文に「最も開化した土地程」とあるは「最も開化せぬ土地程」の誤記に付訂正す。（笠井藍水）

アルプス自動車の旅

此一篇はF. Honoré 氏が佛國雜誌に投じたるもの、其大意を玆に譯せり。

アルプス山の自動車通路は、古來屢々企てられたるものなるも、其着手されたるは、最近の事なり、今日にては、旅行者は其止まらんとする所に止り、其見んとする所を見、不愉快なる「アルプス」鐵道に乘らずして、Nice より Evian に到るを得るに至れり。余は P. L. M. 會社の發起にて、數人の同僚と共に「アルプス」登山を試みたり、其出立に際しては余は思へり、「アルプス」の他の諸山に異る所、果して幾何と、且つ其長き旅行の單調なるを怖れたり、然れども事實全く之に相違し、其道路は變化多く、歐洲に見難き程のものたるに驚けり、これ決して形容の言にあらず。

La Riviera に親める人は、Var の谷を知らん、斯る時候に於て尙荒寥たる大山派を飾る、蛇木路の美しさ……

Corfon の岸は殊に壯麗を極め、南部植物の入り混る自然の果樹園に沿へる道は左に右に交る、Genêt du Midi は柘榴の花の金色に光る紅の花の下に、金の穗末の如く輝き、一方の岸には乾けるる岩の突兀として、城櫓の如き村落と共に、橄欖樹に取圍まれ、頑として近よる可くもあらず、是ぞ Provence の勝地における「アルプス」の光景なり。

道の一方に憲兵屯所あり、汚點にも似たる數家の村は、前面に横はる、瑞西鐵道によれば Nice より三時にして、此處に達す可く、官吏等の賞讃する Puget-Théniers なり。

更に進めば Entrevaux の奇異なる町は、古き城櫓より下る、浪なす岩壁の下に望まる、又Claus, Tonet-de-Deuil の溪谷も亦此に近く、又此地方の奇勝なる Daluis の谷を逼過する Var 河が急轉する Gueydan の橋も亦遺がらず。

「アルプス」、「ヒレネー」の山中には、特殊なる溪谷多く、Daluis 一の谷の如き、他に求む可らず、太陽の赫々たる光が、其奥深く射し入る時、濃厚なる色彩は、名狀す可らざる獨特の絶景——Gondo の絶壁、又は l'Estérel の方面に散在する岩の、如何に優美幽邃なる、又蒼白なるTorn の斷崖が、如何に神々しき、太陽の光に會ひて、赤く〳〵輝き渡る傾斜は、天鵞絨の「マント」の如く遠く廣がり、凸凹多き岩石の「ピラミッド」は、不規則なる線と色彩をなして、天空高く聳ゆ、此景を見たる人は、落日がエトナ火山の灰の小丘を照せるを見たる時の感——恐しき地獄の感を生ず、洞窟の門口とも云ふべき隧道の間は、光は淡く、溶解せる「ラバ」の如く赤きが上に、草の簇は春の綠を表す、色彩なき Var 河は赤き斜面に流れて虹とも見ゆ。

吾等は輝く太陽の下に Daluis の谷を過ぎ、又月下の旅行は、之を好事家に勵めん、卓越せる憎繪を有する彼等は Pompei, Palmyre に於て眺ぜられたる夜に關する詩集以外に特殊なる詩を得ん。

Var の谷より l'Ubaye, la Durance に達するために Verdon の峽路を過ぎざる可らず、此邊の col は大凡高さに於て同じく col d'Allos (2,250m) col de Vars (2,115m) col d'Izard (2,400m)

清爽なる溪谷の地——人跡なき廣き圓地——寂しき村の婉孌た

◎雜錄　アルプス自動車の旅

◎雜　錄　机上談山

る道路、坂は急峻なるも登るに苦なし、水を取るに雪を以てし、又小さき溜に之を得、景色は絶えず展開して飽くを知らず、活動寫眞を見る心地す。

le col d'Izoard を越ゆる人は、其足下に「横ぎること、迴轉すること難き狹き道」と書ける標柱を見ん、陛章せん許りの絶壁には、處々に網を張れり、古代の技師は超自然なる遊歷者の爲に、道を造りたるかの如く、中腹を下る人は、轉がる材木に異ならず、斯く云はゞ人は恐怖の念を起さん、然れども危險の點より云へば巴里の町にあると同じ。

激しき變化は移り行く光景の美を增す、Izoard の峽路を走る二百メートルに及べば、植物は急に其姿を見せず、所謂不毛の地に入ること可し、縱又は珍しき地衣類の僅か小谷の間に見らるゝのみ、此部分には岩石より成る三角塔が「サハラ」色に輝ける黃く滑かなる土地の上に立つ、又 Durance の溪谷を去りて有名なる Lueyras の谷に入れば、道は「モザイック」式の調和をなす石灰質の岩石の間を通ず、而て其古代的なる峽路の白き大理石の上には、清き水美しく流る、其峽路を閉さんとする岩石の三角塔の盡る所、即 Château Queyros の古櫓あり、「オペラ」劇場の裝飾の如く見ゆる Aiguilles にある別莊は、綠濃き勝地にありて、三角塔は此勝地に於て開けたる深き谷に起伏し亂る。

道は Briançon, le Lantaret, le Galibier (鐵道の起點たる) Saint-Jeau-de-Murienne に連る、le Fayet に行かんとするものは、瀘車の便あり Chamonix を過ぐれば la Durance の谷あり。

Lemaud の岸に達せんとするには、踰ゆべき谷尙他に二三あり、此珍しき行程を終れば La Grave は徒らに吾心を引く。

吾人は此旅行の大略を記すに止めたり、併し、自動車が斯く長く、斯く陰惡なる車道の極點を極めたるは、之を以て嚆矢とすべし。(鵜田九淵投)

机上談山

前號の信濃山岳研究會の記事の內、西村理學士の講演の要領中に「……山岳を研究する者は先づ地質學の素要なかるべからずと說破し……」と云ふ句がある、素より同氏が如何なる見地に立て、如何なる前提の下に、この論斷をされたのかは分らぬ故、それに就て云ふ事ではないのだが、往々これと同樣の意味を一二の人が唱へられるのを耳にする事がある、もし現在の地質學が、その域境內に於ては萬能であるのなら、山岳の地質を研究するのには、地質學の素養がないのは無鐵砲のやり方であるが、實際は現在の地質學が說明し得る範圍は甚狹いので、とてもそれを唯一の頼みにするには足りないから、地質學の素養もあつた方が

いゝと云ふ程度以上には到り得ないのである、山岳の地質學的方面を研究する爲にして既に然りなので、山岳研究の方面は頗廣いものであるから、山を研究する上に於て、地質學の價値はあまり大なるものだとは思はれないのである。

○山の成因、川の成因等に就て、多くの説明が與へられて居る、然しそれは然く説明し得ると云ふだけで、然くあるべき幾多の材料はあるかも知れないが、まだ人間に知れない外の方法で、山川が成立つたのでは無いと云ふ、明確なる説明をなし得ないのである以上、直にその證明を信じ、理由なしにその請賣りをやり、盲從的にその提灯を持つよりは、しばらくその論をかりて、あらゆる問題にそれを應用し、その價値を正當に認め様とするのが、人間としての任務ではあるまいか、科學者として普通の人間と變る事はない、如何なる事に向つても正しき言を吐くとは限られない、素人の觀察往々にして、天地創造の眞を覗つたものがありはしまいか。

○舶來物がすべて優秀であつたのは昔になつたが、西洋心酔は益勢力を得ると稱へる人がある、科學者に於て殊に甚だしいものがありはすまいか、雨量が多くして、傾斜地の多い我國に於ける、様々の地形に、西歐の研究を直に應用せんとする如き、素人の自分等にも甚危險を思はしめる、又「吊り懸け谷」を説明するのに水河か萬年雪を要するが故に、萬年雪の存在を承知させ様とする等の方法よりは、實際に氷雪がないが故を以て、吊り懸け谷がそれらのもの〻爲に非ずしても生じ得るのであると云ひ切る事が、多く快い様に思ふのである、而して本谷が水量や地質やらの關係上支谷に比して、著しく削られる事が普通の水の作用ではないとは、どうも思へないのである、但これはたゞ一例であつて、實際の事に就て云爲したのでも、地質學者の説明に反對説を提出したわけでもない、たゞかくの如く感するものが在る事を書くのみだ、責任を以て云ふ事ではない。

○四國の山々を「四國アルプス」と呼ぶ事に就て、前號に吉永虎馬氏より提案があつたが、甚不賛成だと思ふ、地質學的に云へば四國の山は歐州の「ア

◎雜錄　机上談山

ルプス」に似て居るとか聞いた事もあるが、二千米にも足りぬ四國の山々に、「高き處」の意義を持た「アルプス」の字を冠せるのは、餘りに惡戲がひどい樣に思はれる、「アルプス」と云へばそれだけで如何にも崇高に思はれる字に、歐洲とか日本とか云ふ限られた、小細工の函を添へる事は、甚不快至極である、それを四國と云ふ更に小さな函に入れ樣とするのは、尙更甚だしいと思ふ、尙他に理由もあるが、この「四國アルプス」と云ふ亂暴な名が永久に再現せざらん事を切望に耐へない、殊に同氏が「當世流の言葉にて」然く呼びたいと云はれたが、殊更面白くない、流行が惡いと云ふ意味ではないが、當世流と云へば何か「臺灣アルプス」とか「支那アルプス」とか云ふ樣な名が新高山や「ヒマラヤ」などに附せられる事が、行はれて居る樣に聞えるではないか、そんな事は決して聞かぬ事である、たゞ本州の中部を横斷する、幾つかの山脈に「日本アルプス」なる名を附して、これを呼ぶ事が、數年前から慣用されて居るだけである、その名は感じの惡い小細工な屈從的な名ではあるが、然し字義に於て缺けた處が無く、高山的の色を帶た山々である事に於て、「アルプス」の稱をはづかしめて居ない、これを四國の山々に比してその適否一目瞭然である。當世流の字義は全く認められないと思ふのである。

○五龍山の字に後立山をあてる說に就て、前々號に小島烏水氏の考證がある、同氏は結局後立說の方値ありと斷じて、但これに就て責任は持たぬと書かれた、今以下同氏の說と別に此事を扱ひたい、「ゴリウ」なる名は「山岳」には三枝威之介氏が最初に紹介されたので、その名は人夫松澤から聞かれたので、當時鹿島槍岳を「ミナミゴリウ」と呼んだとかの事である、で尙その三角標の處を「ワリビシアタマ」と呼で「ゴリウ」の一部の名であるとか云た由である（これは嘗て三枝氏に聞た事を記憶に從て書いたので、もし誤があれば責任は當方にある）、で五龍の字は當時三枝氏が假りに宛てられたの故、しばらくおいて、以下少し「ゴリウ」非「後立」說を述べて見たい。

○立山で「ウシロタテヤマ」と呼ぶものは針木以

南の峰であつて、その北はかへつて「ガキ」と稱ばれて居る、而して立山の後ろに當るべきものには、如何に廣く數へても、「ゴリウ」邊までを入れる事は、仲々おぼつかないものであると、實地を踏だ人は云ふから、「ゴリウ」に後立山の字をあてるのは、甚以て不當千萬の事と云はねばならぬ、尙且たとへその「ウシロタテヤマ」中に「ゴリウ」までを含むものとして、後立山を音讀して「ゴリウ」と云ふ事が流行したとしても、越中の人ならいざ知らず、北城邊のものが、その名を稱へる理由は少しも見出し得ない、立山の名が有名であればある程、土地の人がその名を知らぬ筈なく、知つて居れば、北城邊よりは「ゴリウ」は立山の前にこそあれ決して後ろにあると感ずる理由がない、あの邊のものが、それほど山に登つた事がなく、それほど馬鹿であると信じるのは無法千萬ではあるまいか。更に「ゴリウ」の名のもとは、多くの山がその澤の名に依て起る事から推して、その岳から出る澤の名「ゴリウ」より出るのだとも考へられる、然りとすれば澤に後立の義はとても

◎雜　錄　机上談山

ない筈であらうと思ふ、而して澤は獵師には大に關係の深いもの故、その名が今昔に依て變る事は比較的に少ないものである、故に岳にはもと名がない故に、かりに越中の人等の呼ぶに從て後立山としたのだと附會した處で、その爲に澤の名まで變つたと云ふ、事を信じるよりは、澤の名から山の名に行たのだと考へた方がまだもつともらしく思へるのである。大黑鑛山の高橋氏が語られたとかの說は、徃時と云ふ時代が分らぬ以上、何とも價をつけるわけには行かない、名がついて後に理由が出る事は往々ある事故、附近で立山の後ろだと思つて居ると云ふ證據がなくては信じかねるので、あの山を立山の後ろと信じる事は前に記した如く、あり得べき事とは考へられないからだ。尙又漢學者云々の事は、山地と平地とは同じ論では行くものでないと思ふ、糸魚川への街道に近いとは云へ、山の中までいくら漢學の影響が大きかつたとて、入り込んで居る事を信じる事は、どうも出來兼ねるのである。「ゴリウ」に「後立」をあてる事は、此上言をならべずとも、否定して差支へ

◎雜　錄　机上談山

ない事であらう、で新に字を與へるなら、最初の人に從て「五龍」が最いゝと思ふ、然し近頃はこれに割菱岳の字をあてゝ居る樣である、この名は前に書た「ワリビシノアタマ」から來たのではあるまいか知ら、もし左樣ならば（左樣でなく、別にその名を呼ぶ處があるのかも知れないが、その事は一寸考へ外において）これも一寸考へものだと思ふ、何々の頭と云ふ事は、多くの場合にある山の一角を指すので、これを以て直に岳の名とは一寸しがたい處が多い、且又何々の頭と云ふ名それで立派な地名と見ていゝではないか、それを殊更に「の頭」の代りに岳とか山とかを置換して、土地の人にも據らず、新名でもない鵺的の名稱を作りあげるのは、甚賛成しがたい事と思ふのである。○風越山と錫杖岳に就て前號に永田盛三氏の考證がある、かくの如く廣い意味に於ける史的の研究は、「山岳」には新らしい提供であつて、甚多く同氏に多としたい、然し同氏が第六年五六〇頁に「……其他何々澤岳などゝ、長々しい有難い名を、各自頂戴して……」と書かれたのは、甚不滿に思ふ、何も小さな事をとがめ立てせずともの事であるが、頂戴と云ふと新名であるらしいが、左樣ではないので土地のものゝ呼稱に據つたわけであると思ふ、有難い名などゝ、どうやら冷評的の態度は同氏の眞面目な調査の價値を甚損ずるものだ、歷史に忠實である如く、廣い意味の地理にも忠實であつてほしいと思ふ、其錫杖ケ岳に就てのでも、古瀨氏の紀行に於ける錫杖ケ岳と中村氏の記事とは位置に於て少し不一致の處があり、且一方は鎗ケ岳（これを槍岳なりと見て）と並べるほどのもので、一方は「餘り高からざるべし」と云ふ註付きのものとであるのに、輕々に中村氏の記事に決して誤りなき事を證明された如き、如何にも輕浮な態度の樣に思はれるのである、謹でこの新方面の開拓者なる同氏の反省を煩はしたい、失言はあくまでも謝する處である。○山の研究は一方面に限らず、廣く而して深く、各自好む方面から突込んでほしいと思ふ、例に依て要領のない言を以て此度はこゝで終る事とする。（蜘蛛生、蝸牛生）

危險なる登山

山岳趣味の普及は、危險なる登山者を生ずるに至れり、否な登山趣味の涵養は、吾人をして斯る厄介なる登山者に留意するに至らしめしなり、頃者、力行會員某氏單身一塊の握飯さへ携へずして、冬期富士山に登り、遂に死神の大いなる鎌に、貴重なる生靈を刈りとられたり、吾人をして云はしむれば、斯る無暴なる登山は、最初より自殺の目的を以てするにあらざれば、誰かなすものあらんや、冬期富士山に登らば、寒さの平地より甚しかるべしと云ふ想像は、未だ山岳を知らざる者も、少しく日常の新聞記事を讀むものは必ず想到し得べし、然るに某氏は數回の富士登山、時に寒中に登り、現に足指凍傷に痛みつゝありしと云ふに非ずや、斯る經驗ある登山者が、一片の食料を携へずして、單身登り得るものならんや、吾人は、自殺の目的を以て登山せりと云ふを躊躇せざるなり。假に自殺の目的に非らざりし登山なりとせんか、吾人は斯る登山を稱して危險なる登山、厄介なる山登りと云はんと欲す、個人としても、家庭としても、國家としても、徒らに山野に横死する事は、決して、正當なる事なりと云ふを得ざるべし、相當の準備と注意とを費して尚ほ且つ起る危險は、人力の想達し得ざる事にして、又爲すべきなしと雖も、必ず豫想し得べき危險に對して準備と注意を怠りたる登山は、實に危險なるものなりと謂ふべし、登山には相當に危險の伴ふものにして、絶對に危險分子を含まずと云ふべからず、然れども、此れは日常動作既に然り、汽車に乘るは衝突の恐れあり、汽船は沈沒の憂あり、自働車は快速力なるを以て危險なりと云ふを得べし斯る筆法を以てせば、登山必ず危險なりと謂ふべしと雖も、此等は千に一つ萬に一つの場合にて、相當の注意と、熟慮とを以てせば、決して危險なりと云ふべからず、即ち、登山に於ては、危險の程度少なりと云ふべきなり、吾人は山岳趣味の普及と同時に、登山熱の勃興を來し、徒らに好奇心に走せて、何等の考へなしに、準備なしに登山するもの增加せ

◎雜錄　危險なる登山

るは、甚だ悲しむべき事にて、斯る無用意の登山者即ち危險なる厄介なる登山者の增加は、山岳趣味を普及する者にあらずして、此れを阻害するものなりと云ふべし、極言すれば、斯る登山者は、吾人の主義と趣味とに反對なるものなりと云ふべし、吾人は斯る厄介なる登山者に由りて、山岳趣味の普及を毒する事の稀ならざるを悲しむものなり、吾人は、斯る危險なる登山者の實例の多くを知れり、幸にして、出來事は少しと雖も、吾人は其行動を聞いてさへ肩に粟を生せざるを得ざるなり、現に信州某中學校の生徒は、去歲白馬山に於て、一枚の小倉の夏洋服と、網シャツにて、雨中に震へて、尙ほ且つ「吾人は數度の登山に於て經驗あれば寒くはなし」と壯語せり、登山の經驗あり、然れども或程度以上は、同じき人間なり、寒さは、如何に經驗に由ればとて暖くはならざるべし、此等は、青年血氣の言なるべしと雖も、斯る不用意の登山は吾人は決して賛成するを得ず、斯の如き事決して稀ならず山に登る人心して可なり、吾が同好者は必ずや眞面目なる登山家なるを信ず厄介なる登山者危險なる登攀者たらざるを祈る。

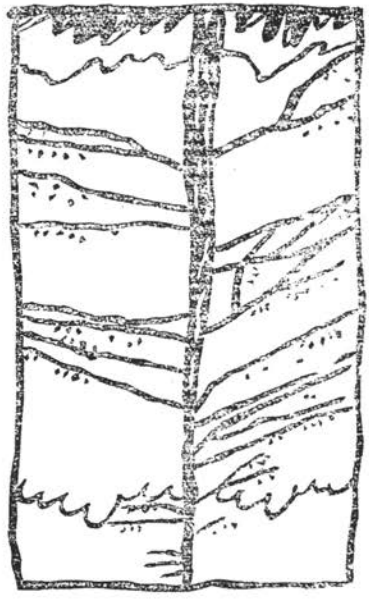
（蝶　郎）



特に雑報の寄贈を乞、新聞の切抜にあれ、其土地の出來事の通信にあれ、廣く山岳に關聯せる事ならば可なり、雑報は、將來山岳史の材料を作るにあり、されば多方面なるを要す、新聞の切抜きにせよ何れも日附と其原書名を記入ありたし、後に至りて時日の不明は全く無用となる憂あればなり……編者

大島三原山の噴火　三原山の噴火を踏査せし小池大島々司の報告に依れば一行は去月三十一日午前六時元村を發し七時外輪山に達したるに濃霧咫尺を辨ぜざりしが三原山に達するも尚ほ散ぜず只噴火の音響を聞くのみ其の狀嚴然として岩石を震動し大砲小銃を連發するが如く午前十時霧晴れ初めて火孔を見ることを得たり火孔は目下休止せる舊火孔に臨める中村山の背後に當り大小二個を生じ其の大なるは直徑約四十米突小なるは約十五米突にして共に赤熱の熔岩及び火山礫を噴騰し高きは百米突に達して四方に散亂せり其の狀怒濤の岩石に激して飛沫の空に沖するが如く實に壯觀を呈せり孔底は岩石の燃灼として溶解し波を起して流れ火孔外にも各所に露出し夜間は火氣山上の雲に映じて或は火柱の如く或は火炎を遠望する如し島民は今回の噴火に當り四十三年來噴火の休止を以て異狀なりとし大に憂慮し居りたる所なれば御神火の噴出は三原山の常態に復したるものと信じ却つて安意の狀ありしも三月下旬より益々激烈になりたれば昨今何となく危險の念を懐くも人畜は勿論山野共些の損害なきを以て此の模樣にては何等の影響なからんとあり四月二日の便船にて俄かに三十餘名の上陸者あり何れも知人を見舞に出掛けたるものならんも別に被害もなきことなれば安心したる由（四五、四、七國民）

◎雑　報　大島三原山噴火　淺間山模型



淺間山摸型　好著淺間山を編纂し山岳思想の普及に努めたる小諸小學校淺間山研究會がかれて幾多の苦心と勞力の結

雑報

◎雜　報　火山觀測所　御嶽輕便鐵道　淺間御嶽兩局の郵便　燒岳降灰と蠶繭　一八〇

果極めて精細にして的確なる淺間山模型を作りこを本縣共進會に出陳して一般の注意を惹きしは既に人の熟知する所なるが今回更に此の原型を縮少し淺岳主要岩石數種をも加へ錦上更に花を添へて廣く世に出せり模型の範圍は淺間山を中心として東は碓氷口より西小諸町北方群馬を包有し說明書を添へたり縣下小學校にては既に地理教材として採用せる所鈴なからずと云ふ記者は此の好模型を一般地學研究に志あるの士に薦む製作販賣所は東京弘文書院にして正價十圓なり。

火山觀測所　淺間山に設置せられたる火山觀測所は來二十日限り一時閉鎖する由なり氣候寒冷に向ひ積雪多き土地とて糧食の運搬困難に陷るがためにして毎年五月より十月まで開設することに決せりと云へり尤も淺間山の活動にして激甚なる時は山麓人民の安全を計るため冬季と雖も芦の平に臨時に設置する筈なりと(四四、十、七)

御嶽輕便鐵道　御嶽輕便鐵道の目論見のありと謂ふ事は噂さのみと獨り合點をし別にこれに就て精探もせざりしに十二月十九日午前中西筑摩郡役所へ記事の採取に出かけて見ると丸山土木課長が君斯樣なものが出來るそうなと示された小册子は則ち御嶽輕便鐵道の設計書である愈々出來るのかと口の中で謂つて片端から讀んで見ると御嶽輕便鐵道株式會社創立出願人總代は山村欽一、池田永吉、風間禮助、立川雲平の四氏で目下事務所を東京芝區愛宕下町四丁目一番地に置くが同會社は長野縣木曾福島町に設置する筈で該社の線路は木曾福島町字兒野を起點として木曾川に沿ふて南行し字川合に停留場を設け夫れより王瀧川に沿ふて西に上り御嶽村字大平場に停留場を設け猶西行して同村字下殿に至り停留場を設け王瀧川を渡る河の南側に沿ひ王瀧村字田島に至つて終り延長十二哩二十五鎖である而して此會社の資本金は三十五萬圓で一株は金五十圓七千株之れが出資の方法は御嶽神社の信者に於て凡三千株以上を引受け又發起人に於て二千株を引受け其殘餘を公募するもの也と云ふ同會社の假定款は既に成り總ての計畫も設計も完成し居れば遲からず之れが工事に着手するならんが工事竣工を告げ愈々營業開始するに至らば御嶽登山者の爲めには非常頗るの便利(?)と云ふべきである。

淺間御嶽兩局の郵便　四十四年七月開局より九月閉局に至る淺間、御嶽兩郵便局にて通常郵便引受及び窓口交附數は在の如し淺間は燒發の爲め非常に減少し御嶽は增加したり。

淺間局	引受	八二二通	窓口交附　二二一
御嶽局	同	一三、五三七	同　四〇一

燒岳降灰と蠶繭　燒岳降灰と蠶繭との關係に就き本縣蠶糸課にては小縣蠶業學校に委囑し試驗研究せしめたるに調査の結果大略左の如き結論を得たり。

(一)降灰桑給與蠶種飼育試驗　(東筑摩郡本鄉村保刈治次郎氏製造の二化性大白龍を試驗用とす)掃立より五齡桑付迄は普通の飼桑により飼育せられたるものなりしが七月十二日燒岳噴出して降灰ありしにより十二日午前六時五齡桑付をなし十四日朝より灰桑を給與せしに十六日夕方より上蔟繭は頗る小形となり一升の粒數五百七粒を算するに至れり而して七月廿九日發蛾せしも數頗る僅少にして一蛾の產卵數大きも三百粒に達せず卵形亦

小也八月八日少しく發蛾八月九日掃立廿八蛾に付漸く蟻量五分を收めたるに過ぎず飼育法は本縣の飼育標準により普通育をなしたり（飼育表略す）以上の成績表に示す如く蠶兒は概して輕く病蠶續出し蟻量五分に對し僅に收繭約四百匁を收めたるに過ぎず而して繭は粗惡小形なり然れども眠起は齊一なりし。

（二）火山灰給與試驗　此試驗の目的は噴火灰の附着せる桑葉を蠶兒に給與せば蠶兒繭期に如何なる關係を及ぼすかを見る（成績表略）成繭表により見れば噴灰の附着せる桑葉を四齡桑付より上簇迄給與せば蠶體の發育甚だ惡しく體虛弱となり病蠶となるもの多く其繭形も小にして繭層は薄く頗る粗惡のものとなる次に成繭のあしきは五齡桑付より上簇迄灰付着桑給與のものなり四齡中のみ給與せしものゝ五齡給與に優るは四齡中の蠶兒は灰を食入する事五齡蠶兒に比して幾分少きと五齡期に普通桑を食し恢復せるによるなるべし。

病蠶は軟化性のものにして中毒作用により斃死せるものとは思はれず蓋し灰の如き不消化物を多量に食用せる爲め胃の作用を害し病に感染し易き狀態に陷りし結果ならん。

（參考）淺間噴火灰給與と燒岳噴火灰給與とを比較するに淺間山噴火灰は砂狀にして蠶兒の食する事少なく燒岳燒火灰は能く桑葉に附着する故に蠶兒に食入せられ易し然れども何れも其食入量少なければ害を認めずと雖も其分量多きか又は屢なれば多少の害を來すものなり。

以上の結論は本年の試驗に於て食入量の多きと食入期の長きとを特に五齡に於ての食入とは蠶兒に害を與ふる事大なるを一層明瞭ならしめたり（四五、十、二二）

戸隱北街道開通

上水內郡戸隱村にては戸隱神社附近を避暑地となし避暑客を引くに最も便利なる道路を開かんとて柏原停車場より中社に通ずる戸隱北街道を起工したるは當時所報の如くなるが此程竣工十四日其開通式を擧行せんと準備中なるが該道路開通の結果柏原停車場は今迄の如く野尻湖遊客の乘降場たるに止まらず新に戸隱の靈地に遊ぶ客も多數通過す可く夏季は定めし繁昌する事ならん（四四、十、四）

山に關する傳說

賛助諸君の寄せらるゝ材料の山の如く多からんことを山々に希望して、先づ山に關する傳說より發表す、山に關する傳說と云ふも、其中に種々の種類あり、同種類の中にも種々の形式あり茲に發表するものは凡て山の形態に關する說明說話にして、デーンハルト氏の所謂民間天然科學的說明說話或は天然傳說の一種にして山と山との爭ひを說くを其骨子とす、此形式の傳說の最古く記錄に現れたるものは、近江國の竹生島の傳說にして「帝王編年記」養老七年の條に風土記の文なりとして「昇寃服岳與二淺井岳一相二競長高一、淺井岳一夜增高、寃服岳怒拔二刀劍一、殺二淺井比賣頭一墮二江中一、而成二竹生島一、其頭乎、」と出でたり、大和の三山傳說及び常陸の筑波山の傳說の如きは此形式に屬するものにあらずして、寧ろ或形式の童話が山に就て物語らるゝに至りたるものと見るを正當とす今右の形式に屬する屍後國の三箇の傳說を採錄して、他の地方に於ける同種の傳說及び一般に山に關する傳說の材料の供給を請ふ。

其一

◎雜報　戸隱北街道開通　山に關する傳說

◎雜　報　諸高山の初雪　瑞西國ダボース高山療養所

阿蘇山の東に接近して鋸の齒のやうな頂を空に突立てゝゐるのは、根子岳と云つて五岳の一としてあるけれども、土地の者は阿蘇山と根子岳を區別してゐる。むかし阿蘇山と根子岳と競爭をして、阿蘇山の方が負けさうに成つたから、阿蘇山が怒つて「ばさら竹」（枝の澤山ある竹）を振上げて根子岳の頭を叩いた。叩かれた頭は毀れて、其痕は今見るやうに裂けてゐる、そして根子岳の高さは阿蘇山よりも低くなつた。

根子岳を遠くから望めば、山頂より中腹まで悉く禿げ、岩石の露出せる狀白く幾條の縱線を描く、里俗之を說明して、天狗の小便したる痕なりと云ふ、此もまた山の形態に關する一個の說明說話なり。

其二

熊本市の西の金峯山と其東の飯田山と高さのことから喧嘩をして、何時まで議論をして見ても勝負がつかぬから、兩方の山の頭から頭へ懸樋を渡して水を流して見ようと、飯田山の方で云ひ出した。そこで五六里もある長い懸樋を作つて、金峯山の頭から飯田山の頭へ渡して、水を流して見ると、其の水が飯田山の方へ流れて、飯田山の方が負けた。今でも飯田山の頂に池があるのは、其時の水の溜つた跡である。飯田山は喧嘩に負て降參して了つて、「今からそんな事は云ひ出さん。」

其三

元の山鹿郡の陵岳と蒲生山と力競べをした。兩方の山の首から首へ綱を掛けて首引をして、雙方負けず劣らず引つ張つてゐる中に、蒲生山の首が拔けて、到頭陵嶽の勝と成つた。其拔けた首は首石と云つて、今でも蒲生山の前に轉がつてゐる。首と身體と別別に突立つてゐるので、小さい方を前不動と云つて、大きい方を後不動とも不動岩とも云つてゐる。首引をした綱の痕は、今でも陵岩の上に二條ありくと見える。（四四、十二、十九、東京朝日）

諸高山の初雪　十月十一日には四阿山に同十七日には淺間山及び三尾根山に同二十三日には右三山の他籠の塔山烏帽子岳に十二月二日には武石嶽に夫々降雪したり是れ何れも本年夏季以來の初降雪とす而して淺間山は昨年より五日間早く四阿山は二十七日間早し。（四四年）

瑞要國ダボース高山療養所　「ダボース」の地たる瑞西の東部レッチッシェ、アルプ山彙の高燥なる谿谷に位し海面を抜くこと實に五千百五十尺なり此地は元と僅に牧童獵夫の彷徨する一寒村なりしも凡そ五十年前同地在住の醫師スペングラー氏の高山の氣象の殊に肺結核治療の上に效果些からざるを發見し之を世に紹介してより漸次其發達を來し以て現時の盛況に達し年々の來客數實に二萬有餘に達するに至れり。

ダボースの谿谷たる環らすに八千九百尺乃至九千九百尺に及べる山脈を以てし而も其平地の面積頗る廣く南に面し十分の日光を受くるに足れり凡そダボスの高山氣象の特質とも云ふべきものを擧ぐれば。

一　氣壓少きこと
二　四季常に低溫なること
三　日光の照射强度なること
四　絕對濕度小且つ夏季と雖も比較濕度小なること

五　氣流少く谷風微弱なること

即ちダボースに於ける氣壓は晴雨計の平均示度六三一、八「ミリメートル」(最大六四六、四最小六〇五、八「ミリメートル」)氣温の一年平均攝氏二六度にして實に聖彼得堡の其れに當る而して年平均青空の四九%は雲にて被はるゝも而も霧は甚だ稀にして日光照射の度實に四二乃至六三度にして海面上の其れより強きこと一七%に及び雨量は平均八九八「ミリメートル」を示し比較濕度は平均七九%冬季は殊に風少し。

ダボースの肺療養地として世に知らるゝに至りしもの前記スペングラー氏が今より凡そ四十五年前創て同地に保養舘を設立せしに始まる但し當時病者は旅宿又は下宿に寄寓せしが今より二十年前鐵道の開通と共に初て療養所設けられ爾來幾多の變遷を經て公私の設備愈々全きを致し現時に於ては數多公私設の療養所を有するに至れり始め千八百六十八年茲に貧窮なる肺患者のために補助を與ふるの組合設立せらるゝや其資を定期の醵金慈善會音樂會等に仰ぎ各國籍の貧患者を等しく一箇所に纏めて之を治療したり然るに其後此組合を解き各國各自に之を行ふに至り今はバーゼル民國和蘭人、獨逸人等各國民の療養所相尋て起り一昨年に至り英國民は此地に「クヰンアレキサンドラ」療養所を設くるに至れり而して土着の住民及勞働者等に對しては既に千八百八十七年一の病院を設立し千八百九十六年更に急性傳染病の隔離舍を設けたり以上の外幼年の患者に對しては特に療養學校あり其内「フレデリック」療養學校は二十年前の創立に係り今は五十の患兒を收容敎育し四十の別課生を有し醫師之を監査す此他女兒に對する同樣の療養所二箇所あり。

當地私設療養所中シャッツ、アルプの療養所は最も完備せるものなりシャッツ、アルプはダボースより上ぼること更に九百九十尺(海拔六千百四十尺)シャッツ、アルプ山の中腹に在りて北に山を負ひ南面日光を受け所謂安臥療法を行ふに適せり(予は同所に就き一々病室安臥療養室、研究室、手術室、X光線室、浴療室、浴室等を巡覽せるも其詳細は之を省く)

上述の如く此地には肺結核病者來集するが故に啻に其療養上便益を圖るを要するのみならず一般の衞生に顧慮して住民の健康を保持するを力め殊に冬季此地に來集すべき健全なる遊興の客に對しても十分結核の傳染を豫防すべきは固より其所なるを以て之がために療養組合の設あり千九百年以來主として左記の任に當れり。

一　街道及山林道路の整理、歩道の建設及維持道路の改良、冬季には雪道の管理
二　市街電燈の經營
三　總ての宿泊所客室の消毒
四　塵埃の撤去
五　氣象觀測の維持
六　上下水道の管理
七　惡水路の管理
八　宿泊客の監査

而して一度結核患者の居住せる室は何れを問はず之を消毒すること必要なるが故に千九百年以來法令を以て消毒規則を定め肺患

◎雜　報　瑞西國ダボース高山療養所

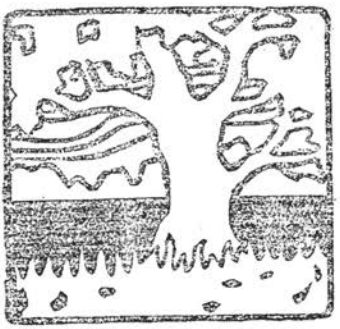
◎雜報　瑞西國ダボース高山療養所

者の居室及其内部の器具臥床等は醫師の指圖に從ひて之を消毒せる後にあらずんば再び之を他人に供用するを禁じ又凡そ何人と雖も床上街上及雪上に喀痰するを禁じ犯す者は五十法以下の罰金に處す而して肺患者には各自常に痰壺を携行せしめ猥に他に喀痰せざらしむ。

又此地に於ては冬日風なきを以て各家より立昇る煤煙は中空に一層を形成して散せず日出後始めて漸く消失す是れ固より空氣を汚染すること大にして其害甚しかりしが之を除去するには各家燃料として瓦斯を專用するの外策なきを以て千九百五年以來ダボースを距ること一里半餘の地に瓦斯製造所を起し廉價に瓦斯を給配するに至り既に此害を除かんとしつゝあり其他療養地區内に於て猥に煤煙を作るを嚴禁し何人と雖も人家に近接して毛氈の清掃等塵埃を擧ぐるは同じく法令の禁ずる所なり千九百七年以來共立牛乳搾取所を起し研究所を置き獸醫をして一般乳牛の檢査のみならず牛乳をも檢査せしむるに至れり。

以上の外療養組合に附屬して氣象觀測所あり毎月一回日々觀測せる所の氣壓、温度、日光の照射度、雨量、濕度、風位、風力、天候の性質を着色の圖版を以て表示せり氣象圖を發行し且つ年一回年報を發行し各地醫師の乞に應じて之を無代配布し以て參考に資す。（官報）





會報

ウエストン氏日本アルプス講演會

明治四十五年三月九日、神田區一ツ橋帝國教育會にて開會、來會者無慮六百餘名、中に知名の科學者藝術家の多くを含み、遲れて入場し得ざりしもの少なからざりき。開會は豫定の開講時午後六時より三十分許遲れたるは謝するところなり、先づ本會幹事小島烏水氏はウエストン氏を紹介し、同氏の登山經歷を述べ、且つ本邦にても古くより登山の行はれしことに就き富士山頂の石碑を引證して、西洋及本邦の登山小史に及ばる。次にウエストン氏は小島氏及會員岡野金次郎氏の通譯にて、先づ英國山岳會より本會に對する好誼の囑辭を述べ、自己の日本アルプス登山の輪廓、及び詳細なる白峰及鳳凰登山談をなし、最後に日本アルプスと歐洲アルプスとの比較に就て講演せられたり、內容は大體『山岳』第五年第二號所載、同氏の紀文(英文)に出でたるものもあれど、更に同氏自身の口より幻燈の助けを借りて、聽取し得られたるは、一層の印象を深くしたり、講演中、主として同氏が親しく撮影せられたる寫眞幻燈を看覽に供せり、

就中、鳳凰山のオベリスク狀岩石登りの冒險談は大喝采を博せり、此日別室にはウエストン氏登山用の斧頭氷杖等を陳列し、別に紀念繪ハガキをも發賣したりき、九時過散會、廣き室內に、噴烟するばかり一杯の聽衆が、水を打つたる如く、靜蕭に、最後まで傾聽せられたるは、主催者なる本會の、最も滿足するところなりき。此日快晴。(一記者)

小島生右に附記す、當夜ウエストン氏が用ひたる幻燈の中、岩壁に繩を以て、蝟附する一枚の寫眞は、岩壁登りの實況を、參考までに同氏が揭げたるものにて、鳳凰山の岩壁そのものとして、出だされたるにはあらず、小生通譯の際、一言右の注意を怠たりたるを以て、聽衆諸君を誤またむることをおそれ、こゝに辯ず。

第九回有志晩餐會記事

一月廿一日午後四時より、本會第九回有志晩餐會を京橋區銀座通のカフエー、ライオンで開催した。

午後五時開會、會員諸君が漸く微醺を帶びられたる頃、先輩諸氏のテーブル、スピーチをお願した、小島氏先づ立てウエストン氏講演會の豫告及その會に就ての希望を述べられ、次で志賀氏は名勝舊蹟の保存に就て、神保博士は臺灣のどろを噴く山と云ふ面白い御話しをなされた、其外田中子、酒井子、二階堂氏の有益多趣味なる演說を拜聽して、談は益々佳境に入り、いとゞ鼻いきの荒い會員諸君の高談雄辯は、益々其度を高め身は全く塵寰にあることを忘れて、窓外の雨聲も、電車の響も、谷川の音樂の樣な感じがした、中々盡きさうもない話をのこして散會したのは午後十時半であつた。

此處には常雇の餘興が、我々の會場にした室で毎日ある、丁度今日は落語の日だつたそうだが、幹事は此會の爲に餘興の取止を命じた、月並の餘興はいつでも聞けるが、年に二三回の同趣味者の談合は中々得難い機會だからである。

喧噪な風塵の巷で、一萬尺の山巓の話、此對照が既に痛快の感を與へる、加ふるに先輩大家の御臨席を得て、一家團欒の如き快心の集會を爲し得

たことを、私は山と云ふ偉大な人格に向つて感謝する。

出席人名

中村清太郎　酒井忠一　小高秀一　高野鷹藏
梅澤親光　小島久太　辻村伊助　豐田金之助
星野爲太郎　岡野德之助　濱名增雄　庄司研治
山內淳一　木村鑛吉　峯岸俊二　田中阿歌麿
神保小虎　志賀重昂　川島祿朗　二階堂保則
Hermann Baumfeld（以上出席順）
加山龍之助　服部鎭太郎　冠松次郎（以上當番幹事）

次會の當番幹事は川島祿朗、豐田金之助、濱名增雄の三君と定まる（一當番）

會員增田吾助君逝く

病氣の爲め、到々、山登りも斷念だと云つて、明け暮れ平塚の海岸で富士や箱根の山を眺めては、寂しき心を慰め、東京に歸られてからは、病床の憂を山の寫眞に忘れられて居た、會員增田吾助君も遂に、去る一月十七日に逝去された。享年僅に二十三、前途遠大の志を抱いて、中道にして挫折せらる、惜しみても尙ほ餘りあるのである。

君は性恬淡にして快活、人に接して温厚、友誼に厚かつた。旅行や會の時等は、何時も元氣に盛に談笑された。病氣となられてからも、さうであつた。流石に、去年の秋頃から衰弱されたと云へ、君の元氣は、病に抵抗して體を持ち堪へられたのである。尙ほ君の勝氣な性質は、山に登ると何時も一層よく表はされたのであつた、自分等と先年、針ノ木峠を越えて立山の裏に出た時など、黒部の小屋から佐良峠に出ずに、中ノ澤を越して、直接お山澤から室堂に出る道を盛に主張されたのは增田君であつた。暑い眞夏の太陽でキラ〳〵と光つた花崗石の切り割つた様な大きな片（カケ）が、搖ぎ落ちて來る急な斜面を汗水流して登ると、白樺や檜が鹿砦の様になつて重り合つたり、大蛇の様に幹がのたくつてる上を跨いだり、潜つたり、針ノ木峠の溪流以上の大困難をした、君は窪みに殘つて居る雪を噛り乍ら、枯葉の中から咲き出たオホバキスミレやシラネアフヒの優しい姿を見ては、今迄

◎會報　會員增田吾助君逝く

の苦しみを忘れて、聲を擧げて、喜んで居られたのである。

君と僕とは、幼稚園以來、お茶ノ水の中學校を卒へる迄同窓の友であつた。顧みれば、小學一年の頃の道灌山、飛鳥山の遠足を初めとして、最後には、立山登山迄大低山登りと云へば君と苦樂を共にしたのである。旅行して山野を跋渉する事は、君の最も好む所であつた。本會の母會である博物同志會の旅行遠足には、缺かさず出かけられ、天城山、塔ヶ岳、三峯山、武甲山、淺間山に登られたのも中學二、三年の頃であつた。其の後、君は淺間山、富士、信州駒ヶ嶽、八ヶ嶽、赤城山等に登られ、機あらば穗高附近と針ノ木峠附近の高山には、是非登り度いとの望を抱いて、空しく長逝されてしまつた。登山旅行の外、寫眞、スケッチ、音樂には深い趣味を持つて居られたが、是等の對照物は何時も、大低「山」であつたのである。君が山登りの時には、常に寫眞機を肩に掛け、雜囊の中には必ず、スケッチブックとハモニカが收められたのであつた。本誌の上には一度も登山記を公にされなかつたが、第二回の有志晩餐會には幹事として、大に斡旋された。

身を商業界に投じて、僅に四年にして逝かれたが、君の短き生涯を通じて、君は終始山岳の愛好者であつた。今や君の靈も悠々たる蒼穹を戴き、潔き高根の雪絕ゆる事無き雲界に昇つて、永へに山の守護者となつたのであらう。これからは、君は、駒鳥と聲を合せて自然の美を謠ひ、得意の畫筆を振つて、御花畑を更に美しく、彩られる事であらう。（田中健太郎）

會員通信

▲拜啓益々御淸安奉賀候偖小生事去る一日發中津明神に登山致候間狀況左に畧報致候。

中津明神山は高知縣吾川郡名野川村と伊豫國上浮各郡中津村との間に聳立し中腹以上は小笹を生じ高さ一五四〇、米五なるも山容頗る美にして遠く四方より望むことを得べし。

一日高知市發吾川郡各野川村猿橋に泊す（行程約十三里）

二日同地發各野川の深溪に入り奥各野川より同山に登る不幸にして此の日天候不良、中腹以上烈風の雪雨を交へたるに逢ひ四方深霧の鎖す所となりたるも幸にして單獨途を誤らずして目的を達したり、然れども頂上附近は寒さ強くして笹原の露に濡れたる兩脚は眞に切り去らるゝ如き感ありし絶頂には三個の小祠と石燈籠あるのみにして確僅に小灌木の點々笹原に在るのみ、全く眺望し得ざりし事遺憾の極みなりし。降路は頂を越えて中津村に取りしが極めて險惡幾度か危險に瀕したるも降るに從ひて天露れ漸く縣道に出づるを得たり、猿橋より奥名野川迄二時間、同地より山頂迄二時山頂より降路一時半を要せり、時季早かりし故植物未だ發芽せず一も得る所なかりし、同夜土佐川口に泊し四日歸宅せり。（吉永虎馬）

▲拜啓秋晴の候同志諸君益々御健勝奉賀候扨小生秩父の山へと志し十一月三日秩父檜本を發足致し雁坂峠を越へて笛吹川を下り同夜甲州川浦温泉山縣屋に宿し翌日黒山へ出で候幽邃なる秩父の山水と美妙なる紅葉に又た再遊を期し候草々（荒井恵）

會員名簿

本號には會員名簿を添付せり（但し會員外には頒布せず）若し誤謬脫漏等御發見あらば御一報を賜はりたし。

御詫び

本號は挿繪の印刷に種々手違ひを生じ、甚しく發行遲延せり、會員諸君の寛恕を乞ふ。

新入會者



山岳第六年總目錄　明治四十四年

表紙　……　茨木猪之吉　各號
巻頭畵　やいろつゞみ〔三色網版〕　横山慶次郎　第一號
タイトルページ　……　茨木猪之吉　各號

挿繪

寫眞

○岩小屋澤岳絶頂より北々東を望む○大スバリ岳より針木岳を望む○高瀬の渓谷〔以上コロタイプ刷〕○祖父ヶ岳より西南の展望○「後立山連峰縦斷記」「越中アルプス縦斷記」○高瀬上流のナラ林○葛の湯○溥化粧せる駒ヶ岳連峯○雲取山頂より甲武信及國司岳を望む○「歐洲アルプス越へ」○ベルクリの小舍よりシュレックホルンを望む○コンコルデイア、プラッツよりアレッシュ、グレツチア並にエッギスホルンを望む○メンヒより見たるユングフラウ○故山川戈登君〔以上寫眞銅版刷〕　第一號

○赤城山大沼○德本峠より望める穗高山○島海山ブナの天然林〔以上コロタイプ刷〕○名譽會員志賀重昂氏○尻別河岸より見たるマクカリ岳○倶知安村より望めるマクカリ岳○川尻浦より開聞岳を望む○櫻島御岳火口壁○劍岳○第四回大會〔以上寫眞銅版刷〕　第二號

○白馬岳の展望○仙丈岳のカール○春の穗高山〔以上コロタイプ刷〕○鋸岳絶頂○烏帽子岳より鋸岳を望む○冬枯の霞岳○德本峠雪の穗高山○歐洲アルプス山サアカスの群衆○「氷河截斷面」「氷河の層理」「氷河の擦痕ある岩石」二〇故　大下藤次郎氏〔以上寫眞銅版刷〕　第三號

スケッチ

雨後の白水瀧○湯の谷の殘雪〔以上コロタイプ刷〕○小スバリ岳より越中アルプスを望む〔寫眞銅版刷〕○鹿島槍ヶ岳頂上の南望〔石版刷〕　第一號

○Die Hafnergruppe vom Hochalmkees gesehen ○信州方面より見たる立山連峯○各地の登山報〔以上寫眞銅版刷〕　第三號

地圖

○日本北アルプス一部臆測圖〔着色石版刷〕　第一號

○飛驒山系に於ける氷河地形分布圖〔石版刷〕　第三號

外に木版圖數十

本欄

火山の地形	大橋良一	三	一
稀有の高山鳥やいろつゞみ	獸醫學士	九一	一四四
日本アルプスと萬年雪の關係	内田清之助	四八九	一四四
日本アルプスと既往の氷河	小島烏水	三	一一六
マクカリ岳	辻村太郎	三	一三九
雨の早池峯山	大平晟	二	一二三五
栗山の秋	千葉悦彌	二	一五二四九
十文字峠を越え信州梓山より甲武信、三寶、金峯の三山	須田正雄	二	二三二五七

		號	頁	通シ頁
に登る記	文學士 南日重治	一	一一〇	一一〇
淺間山	小林房太郎	一	一〇一	一〇一
四阿山に躋る記	鵜殿正雄 山邊好一	二	四〇	二七四
鞍掛山、烏帽子岳、鋸岳を經て駒ヶ岳に登る記	星忠芳	三	三一	四二九
白馬岳より祖母谷溫泉へ	高野鷹藏	三	二一	四一九
後立山連峰縱斷記	中村清太郎 三枝威之介 辻本滿丸	一	一	一
越中アルプス縱斷記(上)	三枝威之介 中村清太郎	一	三二	三二
高瀨入り	辻村伊助	一	五五	五五
春の白山	石崎光瑤	一	七九	七九
石堂山筑ヶ峯縱走記	笠井高三郎	二	六一	二九五
祖谷山入	吉永虎馬	三	四四	四四二
南九州の三名山	岩佐定一	二	七四	三〇八
歐州アルプス越へ(一)	加賀正太郎	一	一二四	一二四
第一回アルプス橫斷飛行	福尾昇(譯)	一	一一六	一一六
祖國山川森林の荒廢	南方熊楠	三	五八	四五六

雜錄

○野呂、田代兩川の分水嶺につきて（河田默、梅澤親光）○初雪後の木曾駒ヶ岳登山（岩村圓）○赤石板岩（烏水生）○澁峠（須田正雄）○津輕富士岩木山の話（山本德太郎）○山人の物語（中村）○新發見の高山蝶其他に就て（中村）○本誌五年の第一號所載劍岳登山の記事に就て。（柴崎芳太郎）○岩石の保護（烏水生）○「高山深谷」第一輯を祭す（梅澤親光）○クック博士のマッキンレイ登山詐僞露顯（さんわう）○世界の山岳會及山岳雜誌（二）（苦瓠生）

第一號 自一四九頁 至一九二頁 通シ頁 …… ……

○山岳の位置名稱のことより（鵜殿）○各地の標高のことより（鵜殿）○寒暖計測量法（鵜殿）○白峯山脈臆測圖に就きて（鵜殿）○穗高岳につきて（鵜殿）○錫杖ヶ岳に就て（鵜殿）○赤城登山記（沼尻好）○山岳林と掬と松（山本德三郎）○山岳村民の生活（小島）○越中劍岳最初の登山者に就きて（キンポウゲ生）○鯉鯖山、五龍山及び後立山（烏水生）○机上談山（木毎生）○富士山の昔の圖畫及び書籍（さんわう）

第二號 自 八五 至一二〇 三一九 三五四

○野呂、田代分水嶺問題（高頭式）○山岳語彙編纂に就て（笠井藍水）○四國の山岳語彙（笠井藍水）○雨飾山、燒山、赤倉山に關する資料（たかの）○木曾山脈の鳳越山に就ての疑問（永田盛三）○「錫杖ヶ岳に就て」を讀みて（永田）○白馬岳の名（蝶郎）○本年白馬岳の登山人數（T生）○滑稽なる山名の轉化（永田）○長野縣の高山植物保護（蝶郎）○雲のアルプス（笠井藍水）○墨西哥火山の傳說（由水生）○アルプスの最高峯モンブラン高熱のために低うせらる（一記者）○昨年の歐州アルプス登山者死亡數（イヴニング、メイル）○登攀山岳最高點の競爭紛議（紐育トリビューン）○全世界最高の停車場（紐育タイムス）○山物語り（山内淳一）○机上談山（洋怪生）○本號挿圖「白馬岳の展望」に就て（たかの）○日本北アルプス一部臆測圖正誤（中村）○旅

日記より（辻村伊助）　第三號　自一四六　至一八一　五四四　五七九
◎圖版說明　第一號　自一九五　至一九六　……
◎山岳圖畫批評
○南極と北極（小島）　第一號　自一九三　至一九四　……
○日本アルプス第一卷（檀香生）　第二號　自一二一　至一二七　三五五　三六一
○富士植物帶論（島水生）○高山植物圖譜（笹魚生）○水彩寫生旅行（島水生）　第三號　自一八一　至一八六　五七九　五八三

雜報

○諸高山の初雪○信州燒岳の噴煙○飛越輕便鐵道の計畫○悲境に陷れる高根銅山○大島の三原山鳴動す○メン博士來朝○外人の富士雪中登山四組○諏訪湖の解氷○比律賓の噴火○有珠噴火の結果○淺間神社登錄申請○淺間山噴煙衰退○大森博士の觀たる淺間山　第一號　自一九七　至二二六　……
○各地の雪と霜○淺間山鳴動錄○燒岳大噴煙○全國鑛泉調查方針○大山春祭○富士身延輕鐵の計畫○御岳街道の改修○伊吹山の毒草○阪谷男大に名勝古蹟の保存を論ず　第二號　自一二八　至一四三　三六二　三七七
○淺間山噴火大慘事○燒岳噴煙記○淺間會組織○淺間御岳の郵便○赤石登山は危險○土用中に降雪○愛山會員御岳登山○武石嶺に雪降る○諸高山の晩雪と融雪○日本アルプス研究○諸高山の初雪　第三號　自一八七　至一九七　五八五　五九五

會報

○第六回有志晩餐會○會員訃報○山川戈登君を憶ふ○魚住影雄君逝く○會員登山報○はがき便り○表紙畫說明○日本山岳會第四大會開會○會員名簿○新入會員○寄贈雜誌及び書籍　第一號　自二二七　至二三四　……
○名譽會員推薦○名譽會員志賀重昂氏○本會第四大會の記○山岳寫眞展覽會開催○第七回有志晩餐會○會員登山報○海洋展覽會を觀る○新入會者○轉居改姓○受領圖書報告　第二號　自一四四　至一六四　三七八　三九八
○名譽會員ウオルタア、ウエストン氏來る○名譽會員ウオルタア、ウエストン氏講演會豫告○來年開會のオリムピア競技會よりの招待○大下藤次氏郎逝く○日本山岳會山岳寫眞展覽會○高山深谷第三輯發行の計畫○會員諸君に御通知○會員登山報○第八回有志晩餐會記事○大阪有志晩餐會○信濃山岳研究會の記○名古屋の愛山會○新入會者氏名○退會及び改名○寄贈書目　第三號　自一九八　至二一三　五九六　六一一

附錄

○會員名簿

以上

明治四十五年五月廿一日印刷
明治四十五年五月廿四日發行

著作權所有

定價五拾錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　橫濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行者　橫濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話最長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

小島烏水新作

日本アルプス 第三卷

六月下旬發行
定價金貳圓

裝釘繪畫

橋本邦助氏表紙畫（木版四度刷）武井眞澄氏見返し（石版三度刷）故大下藤次郎氏の（未だ世に現はれざる）遺作穗高山の新綠（三色版）日本水彩畫會の赤城泰舒氏寫生畫梓川の急流（三色版）瀧澤氏寫生降灰の燒岳（三色版）を始めとして日本山岳會員中村清太郎氏茨木猪之吉氏のペン畫鉛筆畫原色版等を掲ぐべし

寫眞

は高野鷹藏、辻村伊助、武井眞澄、岩村圓（諸氏の親しく撮影されたる）日本アルプスの高山深谷（をコロタイプ版又は網版として挿入す）

豫定內容

▲日本アルプス探檢地理（殆んど全部新作）
▲日本アルプスと氷雪（改訂舊稿及び新作）
▲山岳と山岳畫家（新作）
▲穗高岳より槍ヶ岳に至る縱斷記（新作）
▲山岳雜篇（改訂舊稿及び新作）

の五篇に別たれ日本アルプスに關する新らしき記述新らしき評論及び新らしき創作を集めたり著者自身より言へば是れ過去一年の勞作なり或は半生の自叙傳なり

日本アルプス第一卷（全部品切れのところ）再版印刷中（にして本卷の高頭式氏作）白峰山脈圖（は全部改稿の上更に）新版（に附せり）

發兌元 東京中橋京橋廣小區路 前川文榮閣